

つくば市

下河原崎谷中台遺跡3 下河原崎高山遺跡 下河原崎高山古墳群3

上河原崎・中西特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書8

下巻

令和7年 1月

茨城県
公益財団法人茨城県教育財団

第
478
集

つくば市

下河原崎谷中台遺跡3
下河原崎高山遺跡
下河原崎高山古墳群3

下
巻

公益財団法人茨城県教育財団

つくば市

しも か わら ざき や なか だい
下河原崎谷中台遺跡3
しも か わら ざき たか やま
下河原崎高山遺跡
しも か わら ざき たか やま こ ふん ぐん
下河原崎高山古墳群3

上河原崎・中西特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書8

下 巻

令和7年1月

茨 城 県
公益財団法人茨城県教育財団

目 次

- 下 巻 -

3 古墳時代の遺構と遺物	299
(1) 竪穴建物跡	299
(2) 土 坑	336
(3) 遺物集中地点	339
4 平安時代の遺構と遺物	349
(1) 竪穴建物跡	349
5 江戸時代の遺構と遺物	352
(1) 炭焼窯跡	352
(2) 土 坑	359
(3) 溝 跡	360
6 その他の遺構と遺物	364
(1) 土 坑	364
(2) 溝 跡	430
(3) 遺構外出土遺物	431
第4章 下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群	435
第1節 調査の概要	435
第2節 基本層序	435
第3節 遺構と遺物	440
1 縄文時代の遺構と遺物	440
(1) 竪穴建物跡	440
(2) 炉 穴	441
(3) 土 坑	441
2 古墳時代の遺構と遺物	442
(1) 竪穴建物跡	442
(2) 土 坑	458
(3) 古 墳	463
3 平安時代の遺構と遺物	464
(1) 竪穴建物跡	464
(2) 火葬墓	466
4 その他の遺構と遺物	468
(1) 土 坑	468
(2) 遺構外出土遺物	482
第5章 総 括	484
付 章	505
写真図版	PL 1～70
抄 録	
付 図	

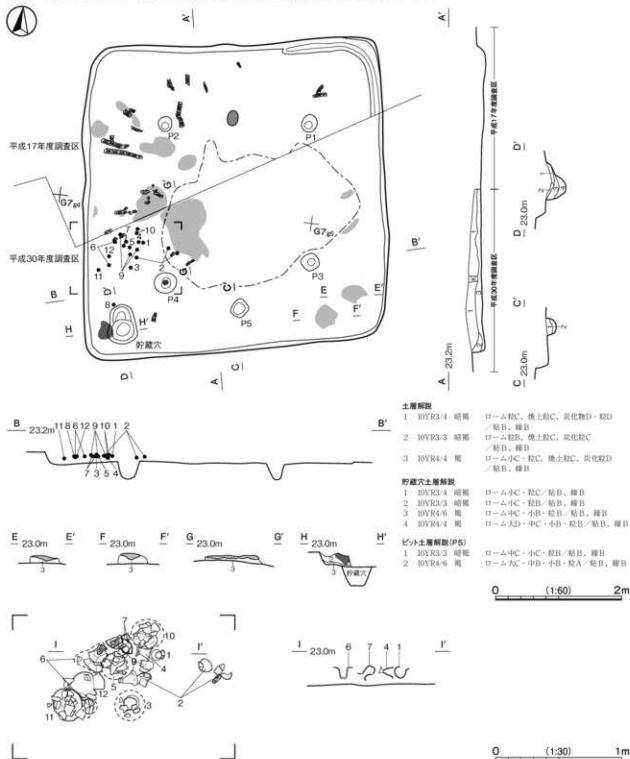
3 古墳時代の遺構と遺物

竪穴建物跡 13 棟、土坑 4 基、遺物集中地点 1 か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第 1 号竪穴建物跡 (第 251 ~ 253 図 第 103 表 PL13・51)

位置 調査区南部の G 7 g4 区、標高 23 m ほどの台地縁部に位置している。



第 251 図 第 1 号竪穴建物跡実測図

調査年度 北部は、平成 17 年度に調査し、当財団調査報告『第 282 集』で報告している。

規模と形状 長軸 4.86m、短軸 4.84m の方形で、主軸方向は N-8°-W である。壁は高さ 20cm で、外傾している。

床 は平坦で、中央部が硬化している。

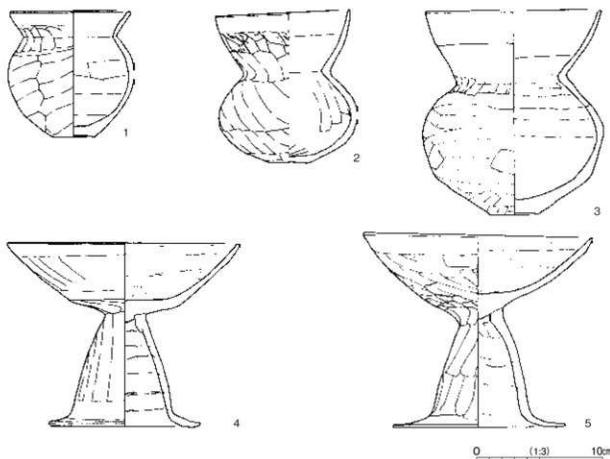
ピット 5 か所。P 3・P 4 は深さ 25・28cm で、配置から支柱穴である。P 5 は深さ 15cm で、配置から出入口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径 64cm、短径 46cm の楕円形で、深さは 30cm である。底面は皿状で、壁は段を有する北部を除いて外傾している。覆土は、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第 3・4 層は比較的大きなロームブロックを含むことから、壁などの崩落土と推測される。

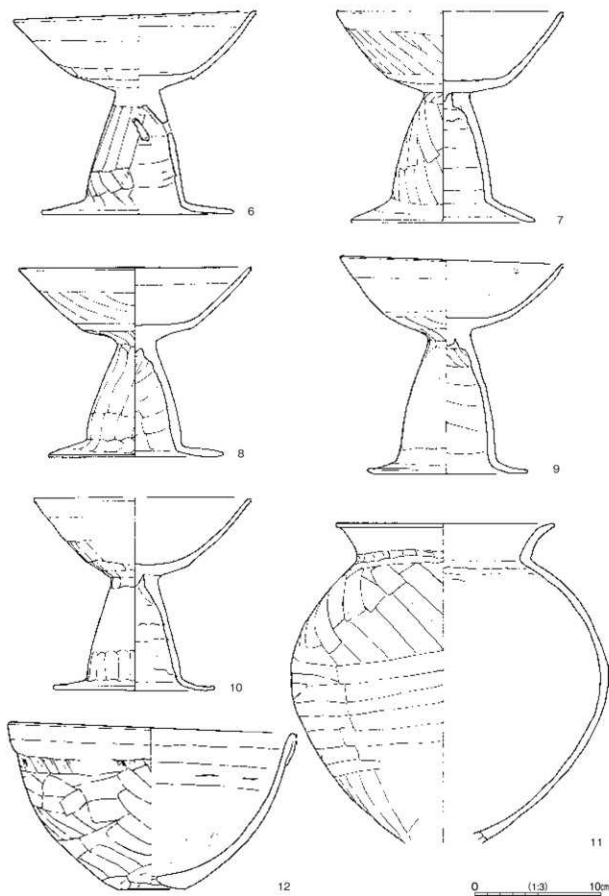
覆土 3 層に分層できる。周囲からの流入したを示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 44 点（埴 4、高坏 30、鉢 1、甕 7、瓶 1）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 1 点が出土している。1～12 は西壁際の覆土下層からまとまって出土しており、被熱痕のあるものが多い。1・3～5・8・9・12 は横位で、6・7・10 は逆位で、11 は正位で、それぞれ出土しており、第 3 層の堆積後、まとめて廃棄されたものと考えられる。2 は胴部や口縁部が散在した状態で出土した破片が接合したものである。また、前報告と同様に覆土下層から焼土と炭化材を確認した。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀前葉と考えられる。遺物や焼土と炭化材の出土状況から、廃絶後ある程度覆土が堆積した後に遺物を廃棄し、同時に焼失または上屋などの部材の焼却が行われたものと推測される。



第 252 図 第 1 号堅穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 253 図 第 1 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第103表 第1号竪穴建物跡出土遺物一覧(第252・253図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕 [13・17]	9.5	10.0	3.3	長石・石英・黒色 粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 胴部外面ヘラナデ 体部内外面 ヘラナデ	覆土下層	90% PL51
2	土師器	埴	106	12.2	3.0	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ 胴部・体部内外面 ヘラナデ 下端ヘラナデ 被熱痕	覆土下層	80% PL51
3	土師器	埴	[13.7]	16.1	3.8	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部ナデ 胴部外面ハケ目調整 体部内外面 ヘラナデ 外面上端ヘラナデ 被熱痕	覆土下層	70% PL51
4	土師器	高杯	18.3	14.6	12.0	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	杯部外面横ナデ・ヘラナデ 内面ヘラナデ 杯 部外面縦・横位のヘラナデ 内面ナデ・輪積痕 被熱痕	覆土下層	70% PL51
5	土師器	高杯	18.0	15.3	[13.4]	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	杯部外面横ナデ・ヘラナデ 外面ハケ目調整 内面横ナ デ・ヘラナデ 杯部外面ハケ目調整 内面ヘラ ナデ 輪積痕 被熱痕	覆土下層	70% PL51
6	土師器	高杯	19.0	16.1	15.0	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	明黄褐	普通	杯部外面横ナデ・ヘラナデ 内面ヘラナデ磨き 杯部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ 輪積痕 杯部外面から他成後の穿孔一つ所 被熱痕	覆土下層	90% PL51
7	土師器	高杯	17.8	16.8	14.6	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	杯部外面ヘラナデ 内面調整により調整不明 杯部ハケ目調整後ヘラナデ 内面ヘラナデ・輪 積痕 被熱痕	覆土下層	95% PL51
8	土師器	高杯	18.4	15.0	13.5	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄橙	普通	杯部外面ヘラナデ 内面横ナデ 杯部内外面ヘ ラナデ	覆土下層	80% PL51
9	土師器	高杯	17.6	17.2	11.6	長石・石英・赤色 粒子・組織	橙	普通	杯部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ磨き 杯部外面ヘ ラナデ 被熱痕	覆土下層	80% PL51
10	土師器	高杯	[17.0]	15.2	12.7	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	杯部外面ヘラナデ 内面調整により調整不明 杯部外面ヘラナデ磨き 下下部ヘラナデ 内面ヘラナ デ 輪積痕 被熱痕	覆土下層	80% PL51
11	土師器	甕	17.0 (25.5)	-	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部ナデ 体部外面上中部ハケ目 下中部ヘ ラナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土下層	60% PL51
12	土師器	甕	22.3	13.2	5.4	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後折り返し 体部外面ヘ ラナデ 下端ヘラナデ 内面ヘラナデ・ヘラ磨 き 輪積痕	覆土下層	70% PL51

第2号竪穴建物跡(第254図 PL13・52)

位置 調査区南部のG 7 d9区、標高23 mほどの台地縁辺部に位置している。

調査年度 北部は、平成17年度に調査し、当財団調査報告『第282集』で報告している。

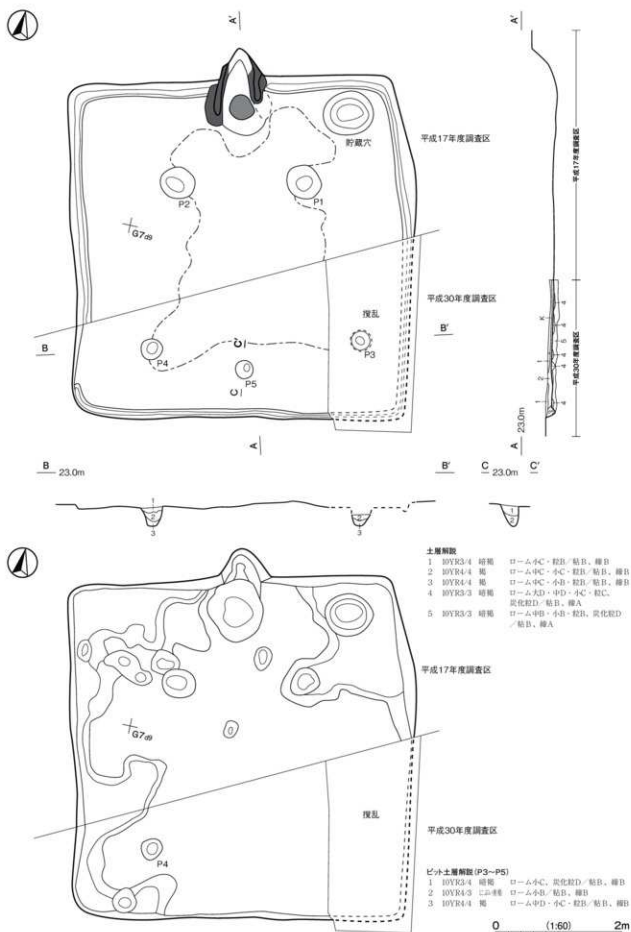
規模と形状 確認できた規模は、長軸5.40 m、短軸5.20 mで、方形と推定できる。主軸方向はN-15°-Wである。壁は高さ8 cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦で、底前方からP 5付近の南部まで硬化している。確認できた範囲の壁溝は、ほぼ全周している。床面は、特にコーナー部を40 cmほど深く掘り込み、ロームブロックを含む暗褐色土の第4・5層を全面に埋土して構築されている。

ピット 5か所。確認できたP 3・P 4は、深さ28 cm・30 cmで、配置から主柱穴である。P 5は深さ30 cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。

覆土 3層に分層できる。第1～3層の層厚は薄いのが、前報告の覆土の堆積状況と類似していることから、自然堆積である。

所見 平成30年度の調査では遺物は出土しなかったが、時期は、前報告から7世紀前葉と考えられる。



第 254 图 第 2 号竖穴建物跡实测图

第10号竪穴建物跡 (第255・256図 第104表 PL13・52)

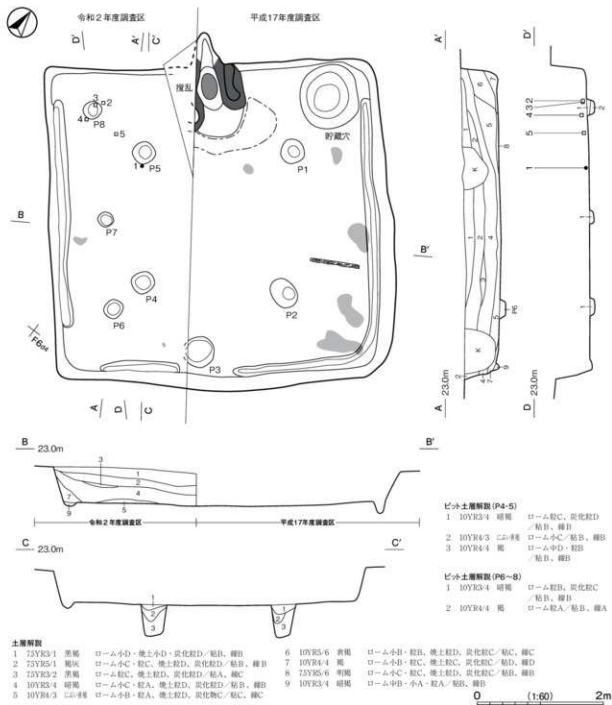
位置 調査区中央部のF6c3区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

調査年度 東側の半分は、平成17年度に調査し、当財団調査報告『第282集』で報告している。

規模と形状 長軸5.47m、短軸5.28mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁は高さ55cmで、東壁は外傾し、その他は直立している。

床 はほぼ平坦で、竈の前方が硬化している。壁溝は、北西壁際を除き、ほぼ全周している。

竈 北西壁の中央部に位置している。令和2年度の調査では、攪乱のため、左袖の一部は確認できなかった。



第255図 第10号竪穴建物跡実測図

ピット 8か所。P 4・P 5は深さ50cmで、P 1・P 2を含めた配置から主柱穴である。P 6～P 8は深さ7～12cmで、性格は不明であるが、南西壁に沿って並んでいる。

覆土 9層に分層できる。第1～4層は黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第5～9層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片35点（坏12、高坏3、甕20）、石製品4点（滑石製白玉）、滑石片1点が出土している。ほかに混入した縄文土器片10点が出土している。遺物は、広範囲の覆土下層から多く出土している。2～5はP 8周辺の覆土下層からまとまって出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第256図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図

第104表 第10号竪穴建物跡出土遺物一覧（第256図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	[160]	(45)	-	灰石・石英・雲母	灰褐色	普通	坏部内外面ナア	覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2	白玉	1.3	1.3	0.7	202	滑石	全面研磨 孔径0.3mm	覆土下層	PL52
3	白玉	1.2	1.2	0.7	144	滑石	全面研磨 孔径0.3mm	覆土下層	PL52
4	白玉	1.2	1.2	0.5	121	滑石	全面研磨 孔径0.3mm	覆土下層	PL52
5	白玉	1.3	1.1	0.8	239	滑石	全面研磨 孔径0.3mm	覆土下層	PL52

第37号竪穴建物跡（第257・258図 第105表 PL13・52）

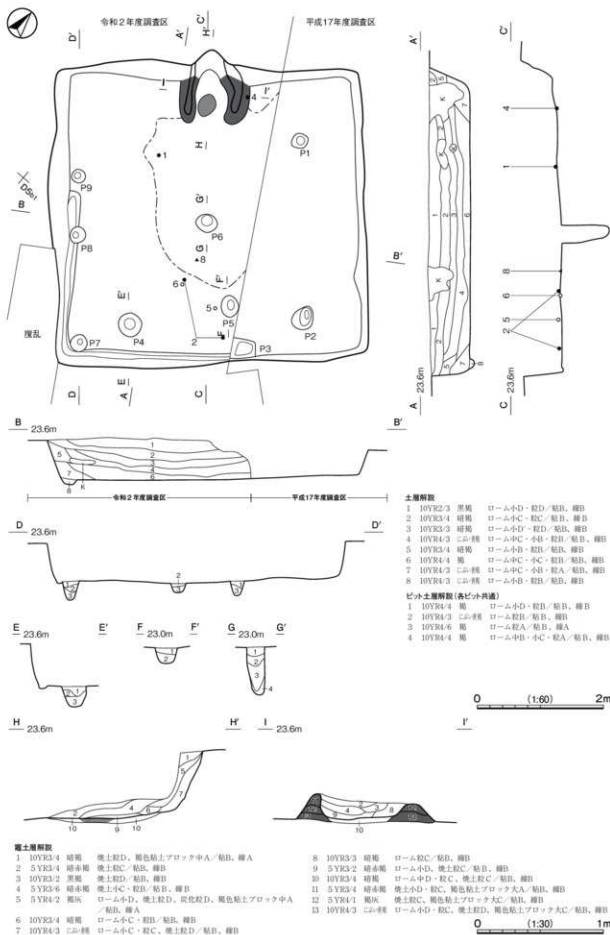
位置 調査区中央部のD 5a1区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

調査年度 東側の半分は、平成17年度に調査し、当財団調査報告『第282集』で報告している。

規模と形状 長軸5.06m、短軸4.88mの方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁は高さ46～65cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦で、竈前方部から中央部が硬化しているが、中央部から東側は若干硬化が弱い。壁溝は、南西壁際から南東壁際にかけて巡っている。

竈 北西壁の中央部に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで116cmで、燃烧部幅は50cmである。地山を3cmほど掘りくぼめ、第10層を埋土している。袖は、褐色の粘土ブロックを含む第11～13層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面は被熱により若干赤変硬化している。煙道部は25cmほど張り出し、外傾している。



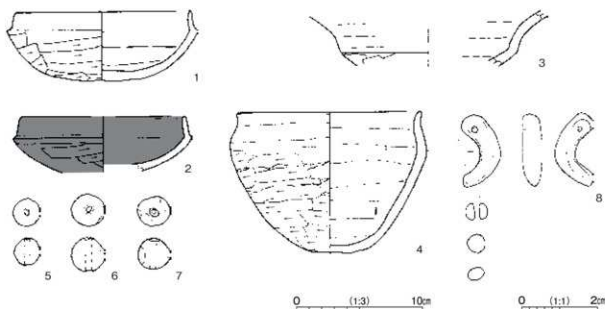
第257図 第37号堅穴建物跡実測図

ピット 9か所。P 4は深さ32cmで、配置から主柱穴である。P 5は深さ24cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。P 6は中央に位置し、深さ75cmで、規模から主柱穴の可能性がある。P 7～9は深さ15cm～32cmで、性格は不明であるが、南西壁際に沿って並んでいる。

覆土 8層に分層できる。第1～4層は暗褐色・黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第5～8層は、上層よりもロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片74点(坏17、高坏3、鉢2、甕52)、土製品2点(土玉)、ガラス製品1点(勾玉)のほか、混入した縄文土器片9点、石器1点が出土している。遺物は、広範囲に散在した状態で出土している。1は中央部北西寄りの床面から正位の状態、4は、竈右袖脇の床面から正位の状態それぞれ出土している。2は南東部の床面から出土した破片が接合している。5・6は南東部の床面から、8は中央部南東寄りの床面から、それぞれ出土している。いずれも、埋戻しの際に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。8は分析の結果、製作方法は不明であった。(付章参照)



第258図 第37号竈穴建物跡出土遺物実測図

第105表 第37号竈穴建物跡出土遺物一覧(第258図)

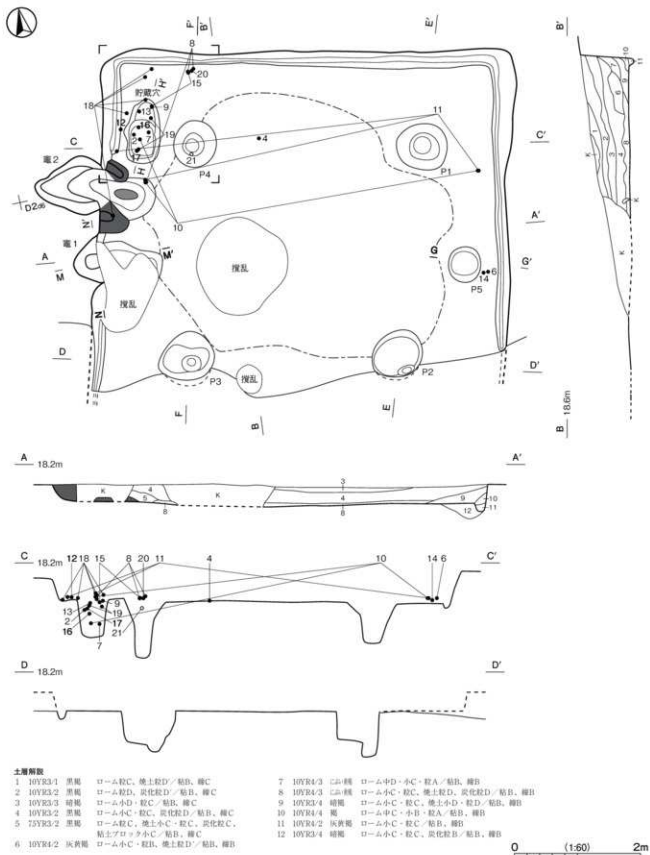
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	137	5.5	-	長石・石英・黒色 粘土・赤色	灰黄褐色	普通	体部外面へラ削り 内面横ナデ	床面	95% PL52
2	土師器	坏	[130]	(4.4)	-	長石・石英・赤色 粘土	灰黄褐色	普通	体部外面へラ削り・ナデ 内面ナデ 内外面黒	床面	30%
3	土師器	高坏	-	(4.5)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	坏部ヘラナデ・ナデ	床面	5%
4	土師器	鉢	144	11.1	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面ヘラナ デ	床面	95% PL52

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
5	土玉	21	2.2	0.4 0.45	14.73	長石・石英・雲母	にぶい橙	全面ナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL52
6	土玉	21 2.5	2.7	0.4 0.5	9.57	長石・石英・雲母	にぶい橙	全面ナデ 一方からの穿孔	床面	PL52
7	土玉	23 2.6	2.4	0.4 0.45	12.22	長石・石英	にぶい橙	全面ナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL52

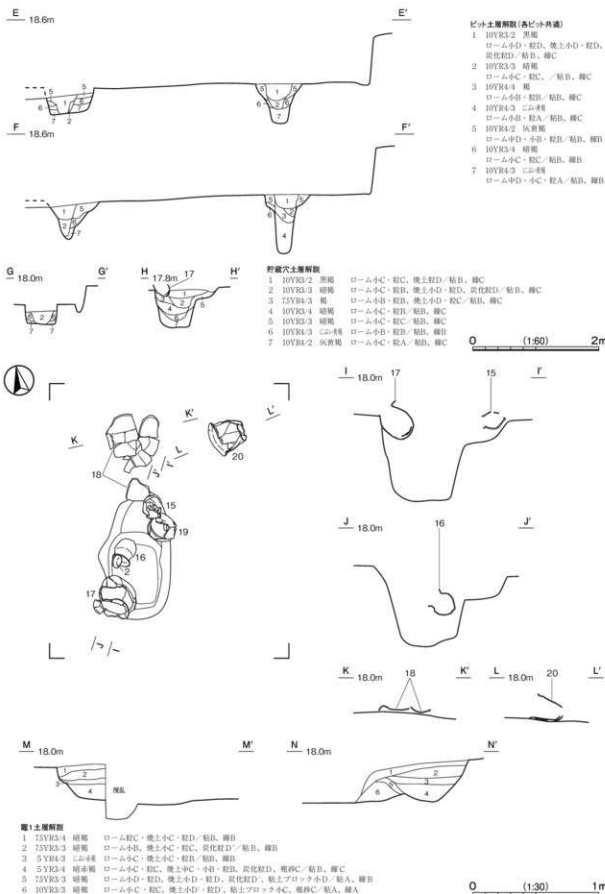
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	勾玉	1.95	1.0	0.5	1.11	ガラス	緑色 孔径1.5mm	床面	PL52

第 83 号竪穴建物跡 (第 259 ~ 263 図 第 106 表 PL14・52・53)

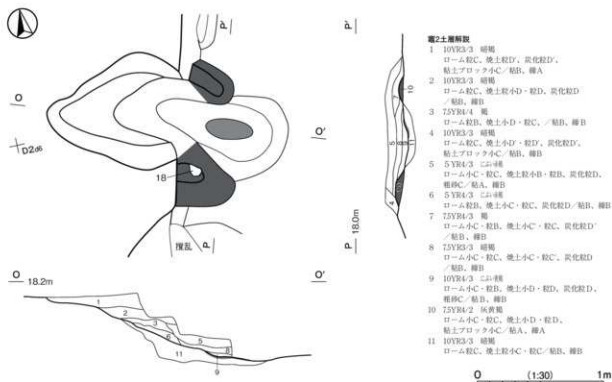
位置 調査区中央部の D 2 d6 区、標高 18 m ほどの斜面部に位置している。



第 259 図 第 83 号竪穴建物跡実測図 (1)



第260図 第83号堅穴建物跡実測図(2)



第 261 図 第 83 号竈穴建物跡実測図 (3)

規模と形状 南部は斜面部で削平されているため、確認できた規模は、長軸 652 m、短軸 555 m である。方形または長方形と推測でき、主軸方向は $N-78^{\circ}-W$ である。壁は高さ 35～75 cm で、外傾している。

床 は平坦で、中央部が硬化している。壁溝は、確認できた範囲でほぼ全周している。床面は、東壁際の一部のみ掘りくはめられ、ロームブロック・炭化粒子を含む第 12 層を埋土して構築されている。

竈 2 か所。竈 1 は西壁中央部の南寄りに位置しており、煙道部のみが遺存している。煙道部は壁から 38 cm ほど張り出し、外傾している。第 5・6 層は粘土ブロックを含むことから、左袖の痕跡と推測されるが、遺存していない。火床部と推定できる範囲は、大半が攪乱を受けているが、東西 90 cm、南北 58 cm の範囲が埋土されている。竈 2 は、竈 1 の北側に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで 191 cm で、燃焼部幅は 68 cm である。袖は、灰黄褐色の粘土ブロックを含む第 10 層を積み上げて構築されている。火床部は、地山を 4～12 cm ほど掘りくはめ、第 11 層を埋土している。火床面は、第 11 層上面が赤変硬化している。煙道部は、壁から 100 cm ほど張り出し、段を有して立ち上がっている。遺存状態から、竈 1 を壊して埋め戻した後、竈 2 へ作り替えている。

ピット 5 か所。P 1～4 は深さ 41～90 cm で、規模と配置から主柱穴である。P 5 は深さ 32 cm で、配置から出入口施設に伴うピットである。第 1～4 層は抜き取り後の流入土で、第 5～7 層は埋土である。

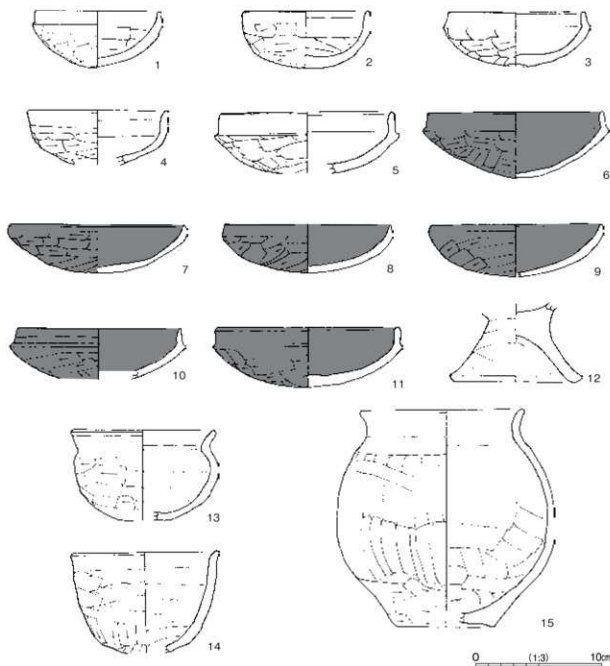
貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径 105 cm、短径 55 cm の不整楕円形である。深さは 63 cm で、底面は皿状である。壁は、北壁を除いて外傾している。北壁は、底面から 42 cm ほどの高さで、平坦部を有している。覆土は、各層にロームブロックを中量程度含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

覆土 11 層に分層できる。第 1～5 層は暗褐色・黒褐色で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第 8～11 層は、ロームブロックを少量含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

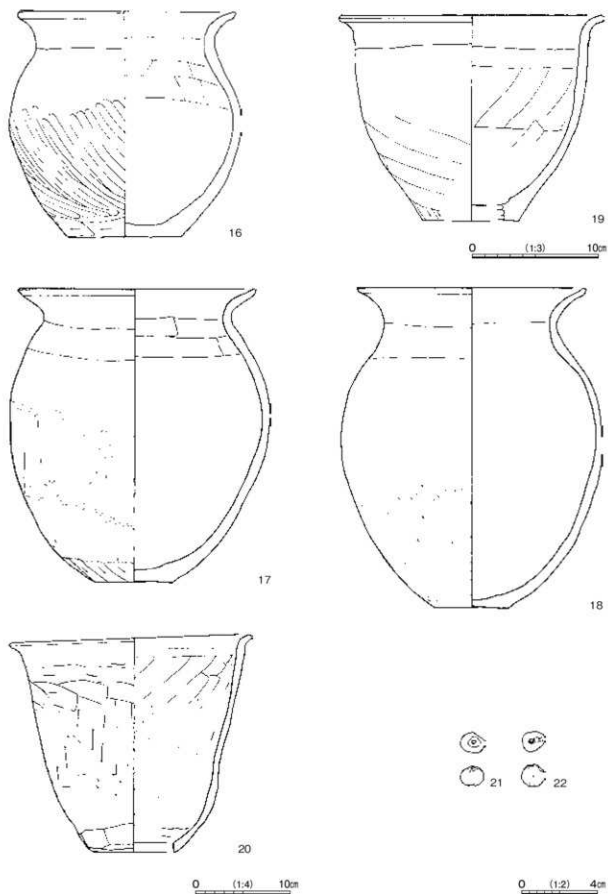
遺物出土状況 土師器片 161 点 (坏 65、高坏 1、鉢 9、甕 76、飯 10)、土製品 2 点 (土玉) が出土している。

ほかに混入した縄文土器片 21 点、石器 2 点が出土している。遺物は、主に貯蔵穴内とその周辺の床面から覆土下層にかけてまともに出て出土している。2・7・9・13・15～17・19 は貯蔵穴内から出土している。斜位の状態の 16 の口縁部に 2 が重なった状態で覆土中層から出土している。15 は横位、17 は斜位の状態で、それぞれ覆土上層から出土している。10・11 は北部の覆土下層や貯蔵穴内に散在していた破片が、18 は貯蔵穴西側の覆土中と竈 2 の左袖上部に散在していた破片が、それぞれ接合したものである。20 は北壁際の西側床面から横位の状態で出土している。これらの遺物は、埋戻しの際に貯蔵穴周辺を中心にまとめて廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。



第 262 図 第 83 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 263 图 第 83 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第106表 第83号竪穴建物跡出土遺物一覧(第262・263図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	便成	特徴	出土位置	備考
1	土器	坏	9.8	4.5	丸底	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面へうナデ	覆土下層	90% PL52
2	土器	坏	9.8	4.6	丸底	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面へうナデ	貯蔵穴 覆土中層	95% PL52
3	土器	坏	[106]	(43)	丸底	長石・石英・雲母・ 赤色粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	覆土上層 (黒色土中)	60% PL52
4	土器	坏	11.0	(43)	-	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	床面	70% PL52
5	土器	坏	[134]	(48)	-	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	灰褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	覆土下層	50%
6	土器	坏	13.7	5.2	丸底	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 内 外面黒色処理	覆土下層	40%
7	土器	坏	[138]	(38)	丸底	長石・石英	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 内 外面黒色処理	貯蔵穴 覆土中層	60%
8	土器	坏	[130]	3.8	丸底	長石・石英・雲母・ 赤色粘土・黒色粒子	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 内 外面黒色処理	覆土下層	60%
9	土器	坏	13.5	4.1	丸底	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 内 外面黒色処理	貯蔵穴 覆土上層	90% PL52
10	土器	坏	12.8	(39)	-	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 内 外面黒色処理	覆土下層・ 貯蔵穴 覆土中層	40%
11	土器	坏	[142]	4.7	丸底	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 内 外面黒色処理	覆土下層	70% PL52
12	土器	高坏	-	(62)	(96)	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	脚部内外面ナデ	床面	40% PL52
13	土器	鉢	11.1	7.1	-	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	貯蔵穴 覆土上層	80% PL52
14	土器	鉢	[116]	(79)	-	長石・石英	灰褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 底 部ナデ	覆土下層	50% PL52
15	土器	甕	12.7	17.3	7.6	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部内外面へう割り 外面下端へ う割り	床面・ 貯蔵穴 覆土上層	60% PL52
16	土器	甕	16.9	18.0	9.0	長石・石英・雲母・ 赤色粘土・黒色粒子	褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 外面下端へう 割り 底面ナデ	貯蔵穴 覆土中層	100% PL52
17	土器	甕	24.4	30.7	8.0	長石・石英・雲母・ 赤色粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 外面下端へう 割り 底面ナデ	貯蔵穴 覆土上層	90% PL53
18	土器	甕	23.6	33.5	7.6	長石・石英・雲母・ 赤色粘土・黒色粒子	灰褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 外面下端へう 割り 底面ナデ	床面・ 覆土上層	80% PL53
19	土器	甕	20.6	16.2	[76]	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	明赤褐色	普通	口縁部ナデ 体部内外面へう割り 外面下端へ う割り	覆土上層	70%
20	土器	甕	24.5	22.8	8.4	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へう割り 外面下端へ う割り 輪縁直	床面	95% PL53

番号	器種	径	厚さ	口径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
21	土玉	11~13	1.1	0.2	1.20	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい褐色	全面ナデ 一方からの穿孔	P4 覆土上層	PL53
22	土玉	11~13	1.1	0.2	1.36	長石・石英・赤色 粘土・黒色粒子	にぶい黄褐色	全面ナデ 一方からの穿孔 穿孔直中の孔1か所	P2 覆土上層	PL53

第86号竪穴建物跡(第264・265図 第107表 PL14・53)

位置 調査区北部のB4g3区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第12号陥し穴を掘り込み、第506号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 規模は、長軸4.82m、短軸4.79mの方形で、主軸方向はN-54°-Eである。壁は高さ16~23cmで、外傾している。

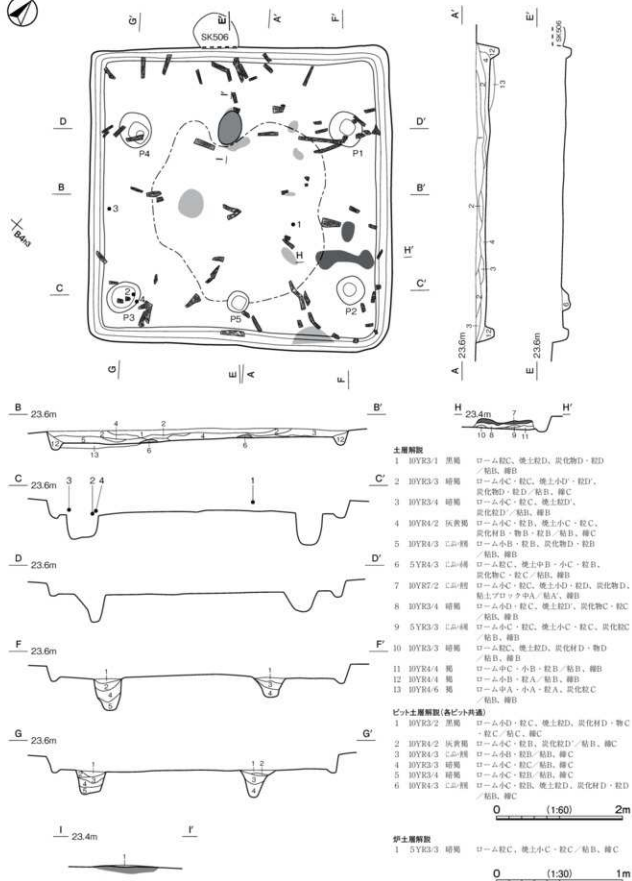
床 ほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝は、全周している。床面は、北西・南西壁際を深さ8cmほどの溝状に掘りくぼめ、ロームブロックを多く含む第13層を埋土して構築されている。

炉 中央部の北西壁寄りに位置している。長径54cm、短径35cmの楕円形で、床面とほぼ同じ高さの地床炉である。炉床面は、赤変しているが、硬化は弱い。

ピット 5か所。P1~P4は深さ34~50cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ14cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。第1~6層は抜き取り後の流入土である。

覆土 12層に分層できる。第1層は黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第2~12層は、ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

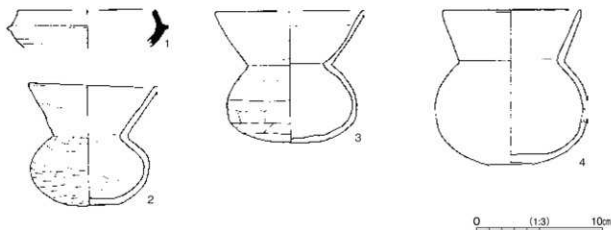
遺物出土状況 土器器片100点(坏6、埴8、高坏20、甕66)、須恵器片1点(坏)、礫1点(軽石)のほか



第264図 第86号竪穴建物跡実測図

混入した縄文土器片 11 点が出土している。遺物は、広範囲に散在した状態で、床面から覆土下層にかけて多く出土している。1 は中央部寄りの覆土上層から出土している。2・4 は南部の覆土下層、3 は南西壁際中央部の覆土下層から、それぞれ横位の状態でも出土している。また、床面から覆土下層にかけて、多量の炭化材や小規模な焼土塊を確認した。炭化材は、長さ 15cm から 70cm ほどの大きさの割材で、その多くが建物の中央部に向かって放射状に出土している。北東壁際からは、粘土ブロックが覆土下層から出土しているが、埋戻しの際に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。柱材が抜き取られていることや、多量の炭化材と焼土が出土していることから、廃絶時の埋戻しに際して上屋などの部材を焼却したものと考えられる。出土した炭化材のうち 20 点を樹種同定した結果、全てコナラ属コナラ亜属クスギ節と同定された（付表参照）。



第 265 図 第 86 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 107 表 第 86 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 265 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[108]	[30]	-	灰石・赤色粒子	灰黄	普通	口縁部内面沈殿 体部内外面ロクロナデ	覆土上層	5% TK208
2	土師器	埴	100	98	4.2	灰石・石黄・赤色粒子・黒粒	にぶい黄	普通	口縁部ナデ 面部・体部上半部ヘラナデ 体部下半部ヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土下層	100% PL53
3	土師器	埴	[117]	104	丸底	灰石・石黄・黒色粒子	にぶい黄	普通	口縁部ナデ 体部内・外面ヘラナデ	覆土下層	80%
4	土師器	埴	108	[123]	3.6	灰石・石黄	黄	普通	風化のため調整不明	覆土下層	70%

第 87 号竪穴建物跡（第 266・267 図 第 108 表 PL14・53）

位置 調査区北部の B 4j2 区、標高 23 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 496 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 規模は、長軸 3.74 m、短軸 3.67 m の方で、主軸方向は N - 29° - W である。壁は高さ 28 ~ 35 cm で、外傾している。

床 はほぼ平坦で、中央部南寄りが硬化している。床面は、壁際を深さ 10 cm ほどの溝状に掘りくぼめ、ローム粒子主体の第 11 層を埋土して構築されている。

ピット 2 か所。P 1・P 2 は、深さ 11 cm・18 cm で、性格は不明である。

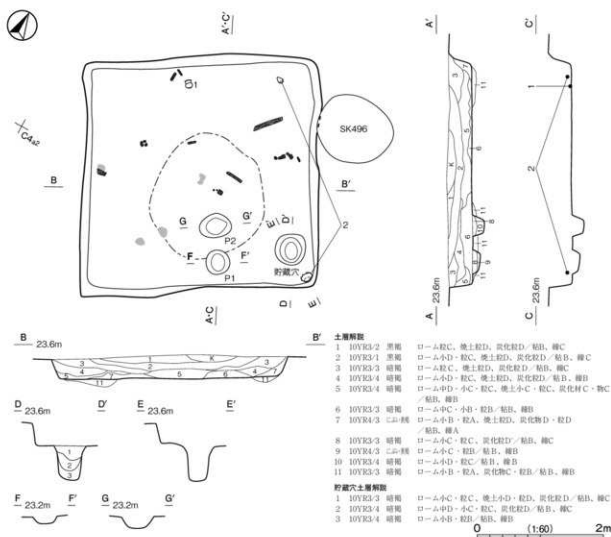
貯蔵穴 東コーナー部に位置している。径 50 cm の円形で、深さは 56 cm である。底面は平坦で、壁は底面から

外傾し、43cmほどの高さから外反している。覆土は、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含むことから、人為堆積である。

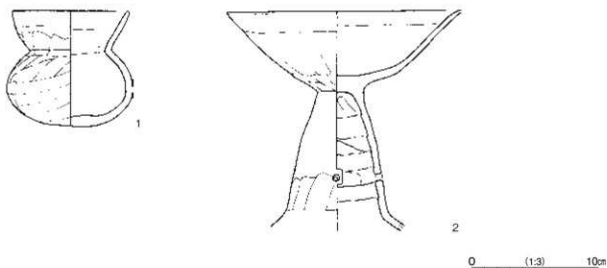
覆土 10層に分層できる。第1～3層は黒褐色土・暗褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第4～10層は、ロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 134点（坏2、埴3、高坏23、甕106）が出土している。ほかに混入した石器1点が出土している。遺物は、広範囲に散在した状態で出土している。1は北西壁際の床面から横位の状態で出土している。2は北コーナー部から出土した脚部と東コーナー部から出土した坏部が接合したものである。また、覆土第下層から少量の炭化材と焼土を確認した。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。覆土下層から炭化材と焼土が出土しているが少量で、土器に被熱痕も認められないことから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。性格は、炉がないことから倉庫などの用途が考えられる。



第 266 図 第 87 号竪穴建物跡実測図



第 267 図 第 87 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 108 表 第 87 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 267 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	92	91	丸底	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部ナデ 体部内外面ヘラナデ	床面	100% PL53
2	土師器	高坏	184	(174)	-	長石・石英・赤色粒子・粗粒	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 坏部内外面ヘラナデ 脚部外面ヘラナデ・ヘラナデ 内面ヘラナデ・ヘラナデ 輪郭部 底部外面からの穿孔1か所	床面	70% PL53

第 88 号竪穴建物跡 (第 268～271 図 第 109 表 PL14・54)

位置 調査区北部の C 3b9 区、標高 23 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 495 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 規模は、長軸 6.20 m、短軸 6.17 m の方形で、主軸方向は N-46°-W である。壁は高さ 23～28 cm で、外傾している。

床 はほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝は、ほぼ全周している。全面が貼床で、特に壁際を深さ 30 cm ほどの溝状に掘りくぼめ、ロームブロックを含む第 7～9 層を埋土して構築されている。

炉 中央部の北西壁寄りに位置している。長径 74 cm、短径 55 cm の楕円形で、深さ 4 cm ほどの皿状を呈した地床炉である。炉床面は、一部赤変硬化している。

ビット 5 か所。P 1～P 4 は深さ 44～70 cm で、規模と配置から主柱穴である。また、いずれの底面にも柱当たりと考えられる硬化部分を確認した。P 5 は深さ 8 cm で、配置から出入口施設に伴うビットである。第 1～4 層は抜き取り後の流入土である。

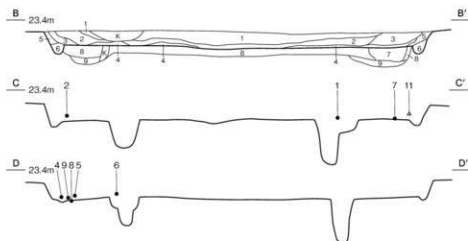
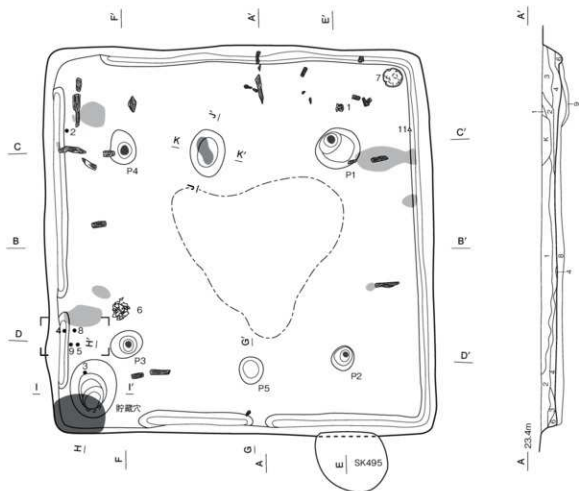
貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長径 92 cm、短径 73 cm の楕円形で、深さは 72 cm である。底面は平坦で、南西壁が外傾している。北東壁と北西壁は底面からほぼ直立し、底面から 40 cm ほどの高さで外傾している。南東壁は内傾して立ち上がり、底面から 36 cm ほどの高さで外傾している。覆土は、ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロックを含むことから、人為堆積である。

覆土 6 層に分層できる。第 1 層は黒褐色で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第 2～6 層は、ロームブロック・焼土ブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 456 点 (埴 86、高坏 86、壺 15、甕 269)、石器 1 点 (砂岩製砥石)、金属製品 4 点 (鉄



× 0.5m



土層解説

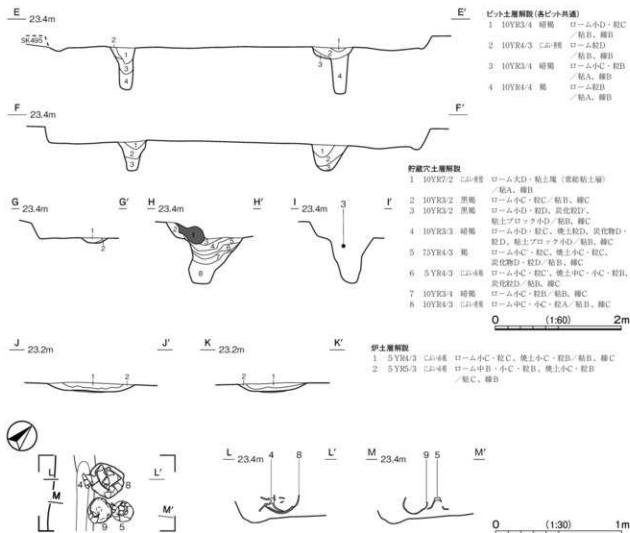
- | | | | |
|-----------------|---------------------------------------|----------------|----------------------------|
| 1 10YR3-2 黒褐色 | ローム小D'・粒D、焼土粒D'、炭化粒D'／粘土、礫B | 6 10YR3/4 暗褐色 | ローム中C'・小C、粒C、炭化物D・粒D／粘土、礫B |
| 2 10YR3-3 暗褐色 | ローム小C・粒C、焼土小D・粒D、炭化物D・粒D／粘土、礫B | 7 10YR3/4 暗褐色 | ローム小C・粒C／粘土、礫B |
| 3 10YR3-3 暗褐色 | ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘土、礫B | 8 10YR5/8 黄褐色 | ローム小C・粒C／粘土、礫B |
| 4 10YR4-3 二色帯褐色 | ローム中C'・小C、粒B、焼土小D・粒D、炭化粒C・物C、粒C／粘土、礫B | 9 10YR6/8 明黄褐色 | ローム小C・粒B／粘土、礫B |
| 5 10YR4-4 褐色 | ローム中C'・小C・粒A、炭化粒D／粘土、礫B | | |

0 (1:60) 2m

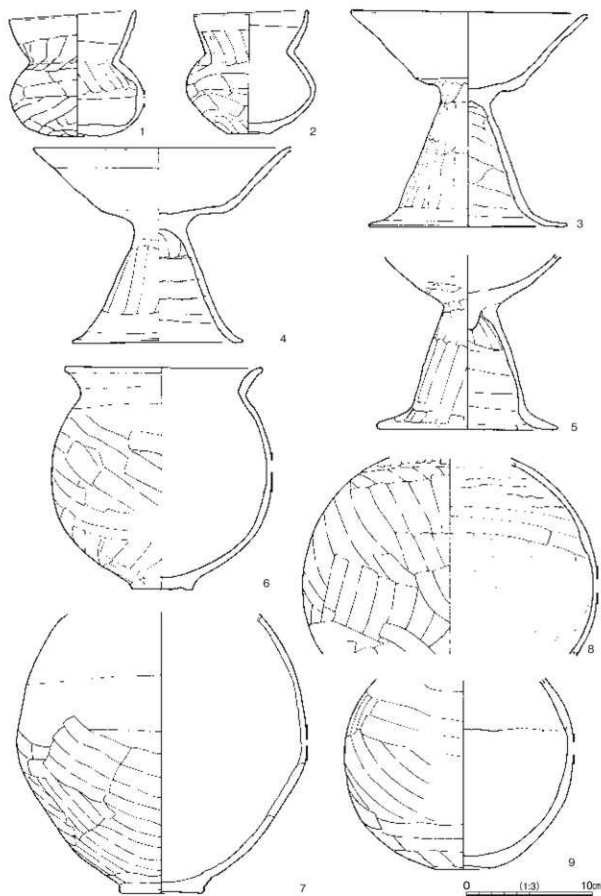
第 268 図 第 88 号竪穴建物跡実測図 (1)

鐵3、釘カ1）が出土している。ほかに混入した石器2点が出土している。遺物は、広範囲に散在した状態で床面から覆土下層にかけて多く出土している。特に、貯蔵穴の周辺から甕や高坏が多く出土している。1は横位、7は正位の状態では北コーナー部の床面から、それぞれ出土している。4・5・8・9は南コーナー部の床面からまとまって出土している。8は体部が縦半分に打ち欠かれた横位の状態、その内側から4が重なった状態で出土している。その南側から5・9が、それぞれ正位の状態で出土している。これらの遺物は、廃絶の際に意図的に置かれた可能性がある。また、壁際の床面から覆土下層にかけて、炭化材・焼土が出土しており、炭化材直下から焼土が出土している状況も数か所確認した。炭化材は、丸材と割材が混在しており、隣接する壁にほぼ直行して出土しているものが多い。南コーナー部の覆土下層からは、粘土ブロックが出土している。

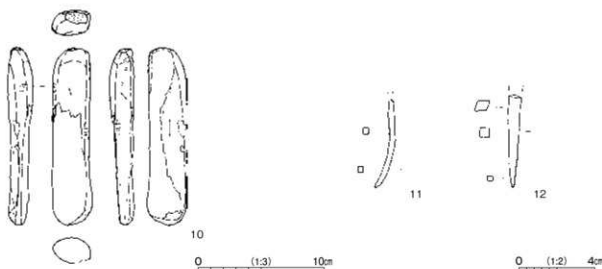
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。炭化材や焼土の出土状況から、廃絶時に上屋などの部材を焼却したものと考えられる。



第269図 第88号貯穴建物跡実測図(2)



第 270 图 第 88 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 271 図 第 88 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 109 表 第 88 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 270・271 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土器	埴	99	99	30	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ・ヘラナデ 体部内外面ヘラナデ	床面	90% PL54
2	土器	埴	89	97	35	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部ハケ目調整後ナデ 体部内外面ヘラナデ	甕土下層	90% PL54
3	土器	高坏	184	171	156	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	坏部内外面ナデ 脚部内外面ヘラナデ 内面輪 縁部	貯蔵穴 甕土下層	60%
4	土器	高坏	202	155	136	長石・石英・赤色 粘土	にぶい赤褐色	普通	坏部内外面ナデ 脚部内外面ヘラナデ 内面輪 縁部	床面	60% PL54
5	土器	高坏	-	(139)	144	長石・石英・赤色 粘土	灰褐色	普通	坏部ハケ目調整後ナデ 脚部内外面ヘラナデ 外面下部ハケ目調整	床面	50%
6	土器	甕	201	232	64	長石・石英・赤色 粘土	にぶい赤褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 底 部ヘラナデ	床面	70% PL54
7	土器	甕	-	(291)	82	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内面割落により調整不明	床面	60%
8	土器	甕	-	(205)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部ハケ目調整 体部内外面ヘラナデ 内面 輪縁部	床面	30%
9	土器	甕	-	(150)	45	長石・石英	褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	砥石	140	32	20	117.59	粘板岩	底面 4 面 側縁部に研ぎ痕 上部に鋭打痕 一部に被熱痕	甕土下層	PL54
11	鉄眼	φ (48)	10	0.3 0.4	1.95	鉄	断面四角形 中央部で屈曲	甕土上層	PL54
12	釘	φ (50)	0.7	0.3 0.7	6.47	鉄	断面四角形	甕土下層	PL54

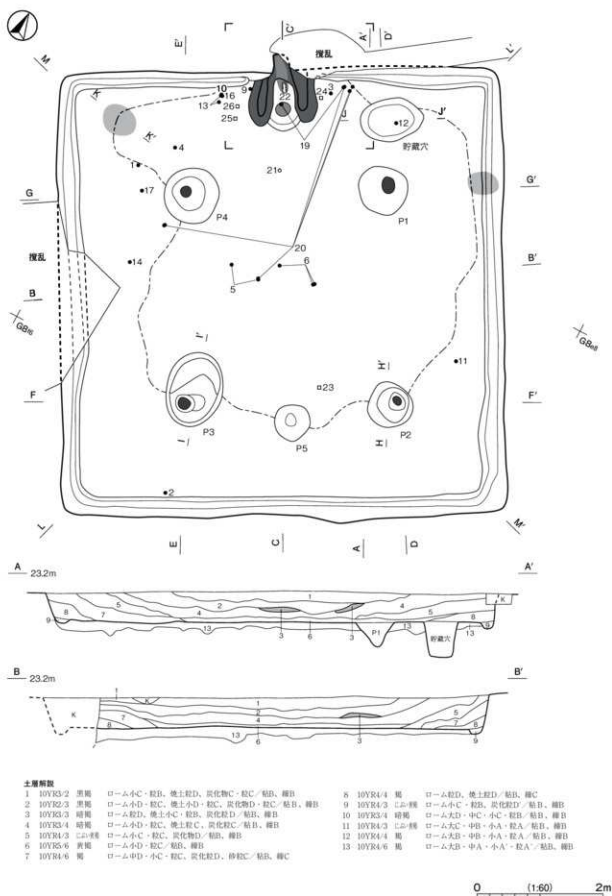
第 91 号竪穴建物跡 (第 272～276 図 第 110 表 PL14・15・54・55)

位置 調査区南部の G 8e6 区、標高 23 m ほどの台地縁辺部に位置している。

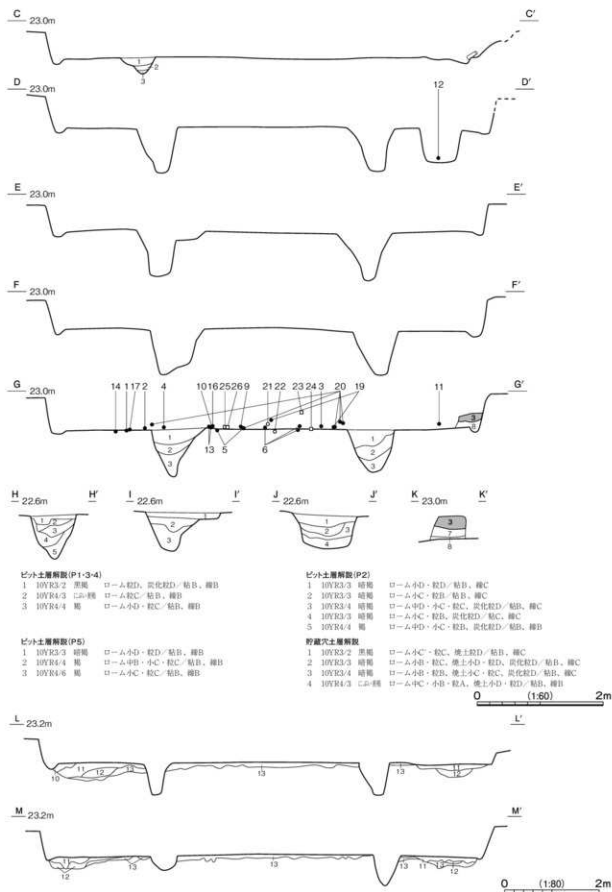
規模と形状 長軸 7.00 m、短軸 6.98 m の方で、主軸方向は N - 30° - W である。壁は高さ 42 ～ 53 cm で、外傾している。

床 はほぼ平坦で、竈前方部から中央部が硬化している。壁溝は、全周している。全面が貼床で、5 ～ 15 cm ほど掘り下げ、ロームブロックを多く含む褐色土の第 10 ～ 13 層を埋土して構築されている。

竈 北壁の中央部に位置している。確認できた規模は、焚口部から煙道部まで 121 cm で、燃焼部幅は 50 cm である。地山を 3 ～ 12 cm ほど掘りくぼめ、第 16 ～ 18 層を埋土し、煙道部に粘土ブロックを含む第 14・15 層を張り付けている。第 14 層は被熱により赤変硬化している。袖は、粘土ブロックを含む第 11 ～ 13 層を積み上げて構築されている。燃焼部の内壁と火床面の第 17 層は、被熱により赤変硬化している。煙道部は、壁から 30



第 272 図 第 91 号竪穴建物跡実測図 (1)



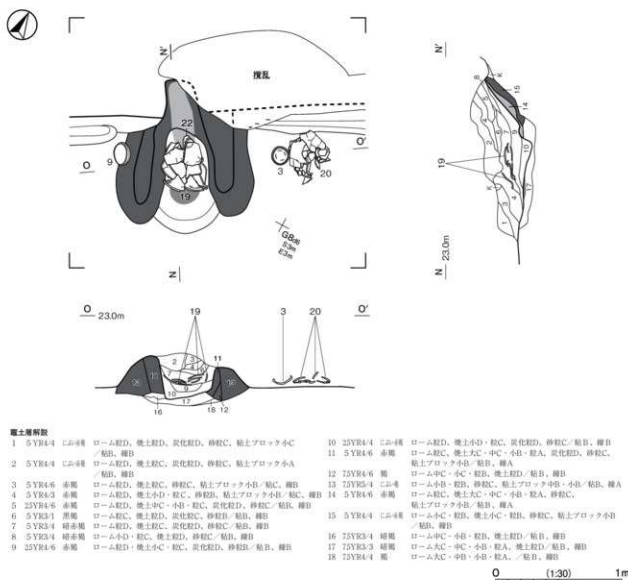
第 273 図 第 91 号堅穴建物跡実測図 (2)

cmほど張り出し、外傾している。支脚の22は煙道部倒へ倒れた状態で、その上に19の甕が焚口側へ落ちて潰れた状態で出土している。第8～10層は内壁の崩落土で、第5～7層は焼土ブロックを含む流入土で、第1～4層は粘土ブロックを含む天井部の崩落土である。

ピット 5か所。P1～4は深さ68～75cmで、規模と配置から支柱穴である。いずれの底面にも柱当たりと考えられる硬化部分を確認した。P5は深さ26cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。第1～5層は抜き取り後の流入土である。

貯蔵穴 北コーナー部に位置している。長径102cm、短径68cmの楕円形で、深さは53cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含むことから、人為堆積である。

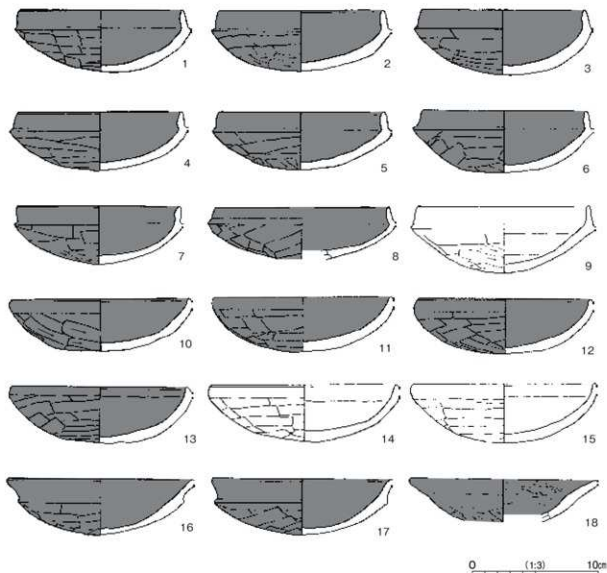
覆土 9層に分類できる。第1・2・4～9層は、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第3層は焼土ブロックを比較的多く含む暗褐色土で、堆積の過程で投げ込まれたものと考えられる。



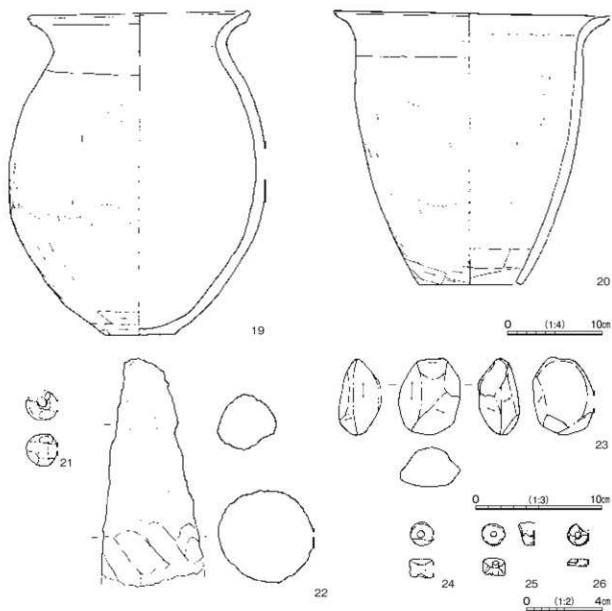
第274図 第91号竪穴建物跡実測図(3)

遺物出土状況 土師器片 250 点（坏 96、碗 2、高坏 3、甕 148、甌 1）、土製品 2 点（土玉、支脚）、石器 1 点（砂岩製砥石）、石製品 3 点（滑石製白玉）、炭化種子 1 点（桃カ）が出土している。遺物は、竈周辺や中央部の床面と覆土下層から多く出土している。1・4・14・17 は P 4 の西側床面から正位の状態出土している。5・6 は中央部の床面に散在した状態の破片が接合したものである。9 は竈左袖脇から斜位で、10・13・16 は竈左袖脇の床面から正位で重なった状態で、11 は東壁際南寄りの覆土下層から逆位で、12 は貯蔵穴覆土下層から正位の状態、それぞれ出土している。20 は竈右袖脇の床面から正位の状態出土した 3 の東側から、横位で潰れた状態で出土し、中央部で散在した状態の破片と接合したものである。24～26 は竈両袖脇の床面から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。19 と 20 は径が合うことから、セットで使用されていたものと考えられる。竈周辺の床面から覆土下層にかけて土器や白玉が集中して出土していることから、廃絶に時に竈周辺で何らかの祭祀を行ったことが想定される。



第 275 図 第 91 号竈穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第276図 第91号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第110表 第91号竪穴建物跡出土遺物一覧(第275・276図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土器	罎	130	49	丸底	灰石・石英	灰黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL54
2	土器	罎	130	48	丸底	灰石・石英	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・下端ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL54
3	土器	罎	128	51	丸底	灰石・石英	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL54
4	土器	罎	130	46	丸底	灰石・石英	灰褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	95% PL54
5	土器	罎	130	46	丸底	灰石・石英	黒褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・下端ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	90% PL54
6	土器	罎	129	49	丸底	灰石・石英	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	70% PL54
7	土器	罎	130	46	丸底	灰石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・下端ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土中層・覆土下層	60% PL55
8	土器	罎	[138]	(41)	丸底	灰石・石英・赤母・赤色粘土	灰黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土下層	20%
9	土器	罎	134	52	丸底	灰石・石英・赤色粘土	浅黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・下端ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL55
10	土器	罎	142	41	丸底	灰石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL55
11	土器	罎	140	43	丸底	灰石・石英	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土下層	100% PL55

番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
12	土師器	坏	136	43	九底	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	黒灰	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	貯蔵穴 覆土下層	100% PL55
13	土師器	坏	139	44	九底	長石・石美	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL55
14	土師器	坏	147	45	九底	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	100% PL55
15	土師器	坏	144	46	九底	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ	覆土	50%
16	土師器	坏	146	44	九底	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい黄緑	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	100% PL55
17	土師器	坏	141	43	九底	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい黄緑	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	95% PL55
18	土師器	高坏	[150]	[34]	-	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	黒	普通	坏部外面横ナデ・ヘラナデ 内面ヘラナデ 内外面黒色処理	覆土下層	10%
19	土師器	甕	226	337	7.0	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい黄緑	普通	口縁部つまみ上げ・横ナデ 体部外面ヘラナデ 下部ヘラナデ 内面黄緑	覆土中層	95%
20	土師器	甕	286	285	10.6	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい橙	普通	口縁部つまみ上げ・横ナデ 体部外面ヘラナデ 下部ヘラナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	90% PL55

番号	器 種	径	厚さ	口径	高さ	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
21	土玉	21 ~ 24	26	07 ~ 09	[1048]	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい橙	全面ナデ 一方からの穿孔 欠損	覆土下層	

番号	器 種	最小径	最大径	高さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
22	支脚	29	80	181	49374	長石・石美・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい橙	全面ナデ 下端指頭状 焼熱により剥落 軽微損	甕大床面	PL55

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
23	砥石	6.1	4.9	3.2	101.28	砂岩	砥面4面	覆土上層	PL55
24	白玉	1.3	1.3	1.0	2.28	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.4cm	床面	PL55
25	白玉	1.2	1.1	1.0	1.67	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.3cm 一部欠損	床面	PL55
26	白玉	1.2	1.2	0.4	0.64	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.3cm 一部欠損	床面	PL55

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
27	炭化種子	(1.82)	1.55	1.17	0.80	-	桃カ	貯蔵穴覆土	PL55

第 92 号竪穴建物跡 (第 277 図 第 111 表 PL15・55)

位置 調査区中央部の D 46b 区、標高 23 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 95 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認できた規模は、長軸 4.59 m、短軸 3.66 m である。長方形と推定でき、主軸方向は N - 90° - W である。壁は高さ 7 cm で、外傾している。

床 ほは平坦である。硬化範囲は確認できなかった。

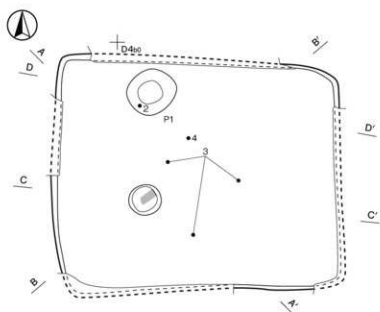
炉 中央部の南西寄りに位置している。径 48 cm の円形で、深さ 4 cm ほどの皿状を呈した地床炉である。炉床面は、一部赤変硬化している。

ピット P 1 は深さ 18 cm で、性格は不明である。第 1・2 層はロームブロックと炭化物を含むことから、人為堆積である。

覆土 5 層に分層できる。層厚が薄いので、堆積状況は不明であるが、比較的大きいロームブロックを含むことから、人為堆積の可能性が高い。第 6・7 層は炉の覆土である。

遺物出土状況 土師器片 283 点 (柄 16、埴 2、高坏 8、鉢 3、壺 1、甕 253)、炭化種子 1 点 (桃カ) が出土している。ほかに混入した縄文土器片 12 点、石器 3 点が出土している。遺物は、広範囲に散在した状態で出土している。2 は P 1 の覆土上層から出土している。3 は中央部の床面と覆土下層から散在した状態で出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。

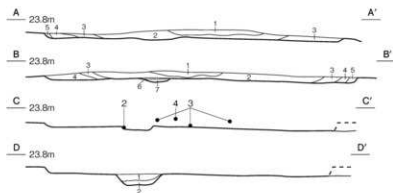


土層解説

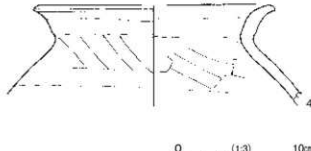
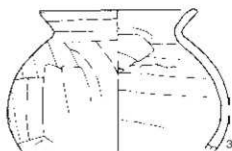
- 1 10YR3-2 黒褐色 ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化物D・粘B、粘B
- 2 10YR3-3 暗褐色 ローム中D・小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D・粘B、粘B
- 3 10YR3-4 暗褐色 ローム中D・小C・粒C・粘B、粘B
- 4 10YR3-4 暗褐色 ローム小D・粒C・粘B、粘B
- 5 10YR3-4 暗褐色 ローム中D・小D・粒D・粘B、粘B
- 6 10YR3-3 暗褐色 ローム粒C、焼土粒D、炭化粒D・粘B、粘B
- 7 10YR4-4 黄褐色 焼土粒C・粘B、粘B

ピット土層解説

- 1 10YR3-3 暗褐色 ローム中D・小C・粒C、炭化物D・粒C・粘B、粘B
- 2 10YR3-4 暗褐色 ローム中D・小C・粒B・粘B、粘B



0 (1:60) 2m



0 (1:3) 10cm

第 277 図 第 92 号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第111表 第92号竪穴建物跡出土遺物一覧(第277図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	[160]	(69)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 体部内外面ヘラナデ 外面下縁ヘクワリ	覆土	20%
2	土師器	壺	167	(70)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 体部内外面ヘラナデ 被熱痕	F1覆土上層	10%
3	土師器	壺	[124]	(112)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 体部内外面ヘラナデ・輪積痕 外面下部ヘクワリ 隆起着	床面・覆土上層	30%
4	土師器	壺	[182]	(81)	-	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	口縁部ナデ 体部内外面ヘラナデ	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	炭化種子	1.62	1.37	0.59	0.35	-	桃*	北東部覆土	PL55

第93号竪穴建物跡(第278～280図 第112表 PL15・16・56)

位置 調査区北部のC 4区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第850号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸9.24m、短軸9.16mの方形で、主軸方向はN-31°-Wである。壁は高さ14～20cmで、外傾している。

床 ほほぼ平坦で、炉の北側、西壁寄り、南壁寄りの一部が硬化している。壁溝は、東側を除いて巡っている。また、長さ80～100cm、深さ20cmほどの間仕切り溝を6条確認した。間仕切り溝の一方は壁溝と接し、もう一方はピットが接続している。

炉 中央部のやや北壁寄りに位置している。長径90cm、短径78cmの不整楕円形で、深さ10cmほどの皿状を呈した地床炉である。炉床面は、赤変硬化している。

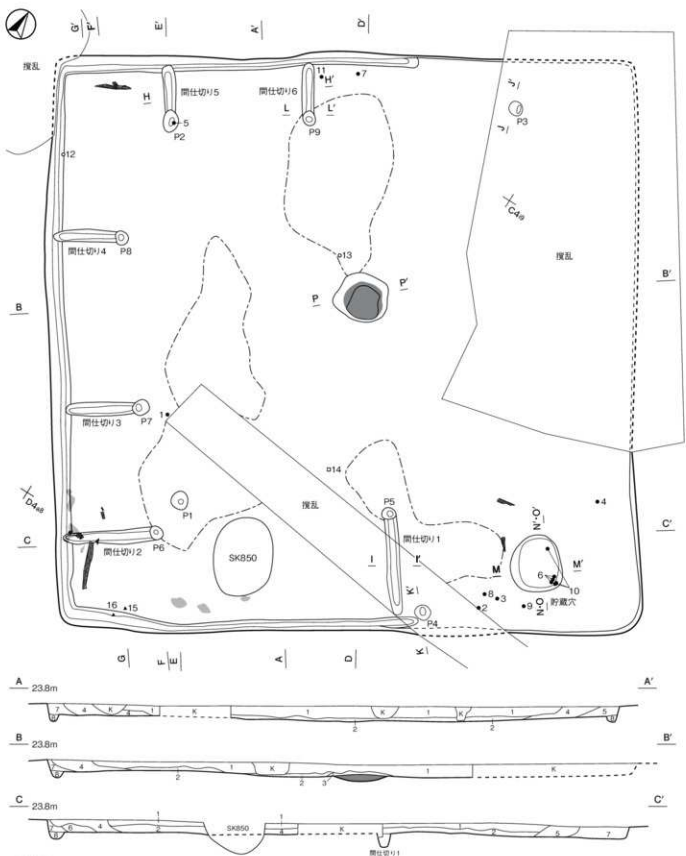
ピット 9か所。P1～P3は、深さ51～80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5～P9は深さ20～25cmほどで、間仕切り溝と接続していることから、間仕切り施設との関連があるものと考えられる。第1～3層は、抜き取り後の流入土である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径90cm、短径80cmの楕円形で、深さは61cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含んでいることから、人為堆積である。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックや焼土を含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片338点(坏17、碗23、埴69、高坏24、甕205)、須恵器1点(坏)、土製品6点(土玉2、焼成粘土塊4)、石製品1点(滑石製勾玉)、炭化種子2点(桃)が出土している。ほかに混入した縄文土器片19点、石器2点が出土している。遺物は、主に南東コーナー部の壁際と北壁際中央部、貯蔵穴内からまをもって出土している。6と10は貯蔵穴東側の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。11は北壁際中央部の床面から正位で潰れた状態で出土している。また、南コーナー部壁際の覆土下層からは、炭化種子が出土している。

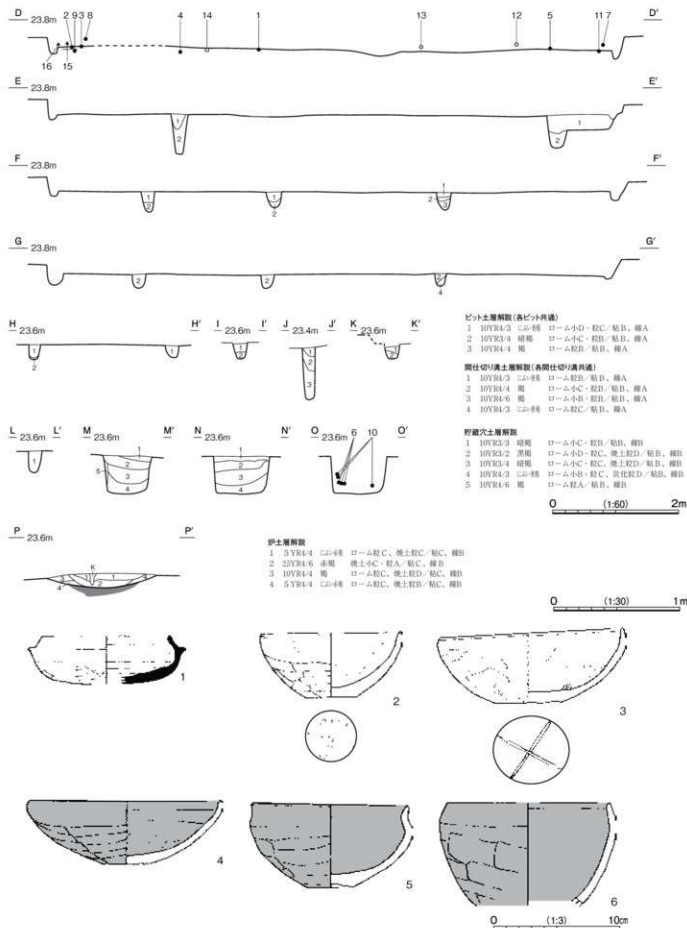
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



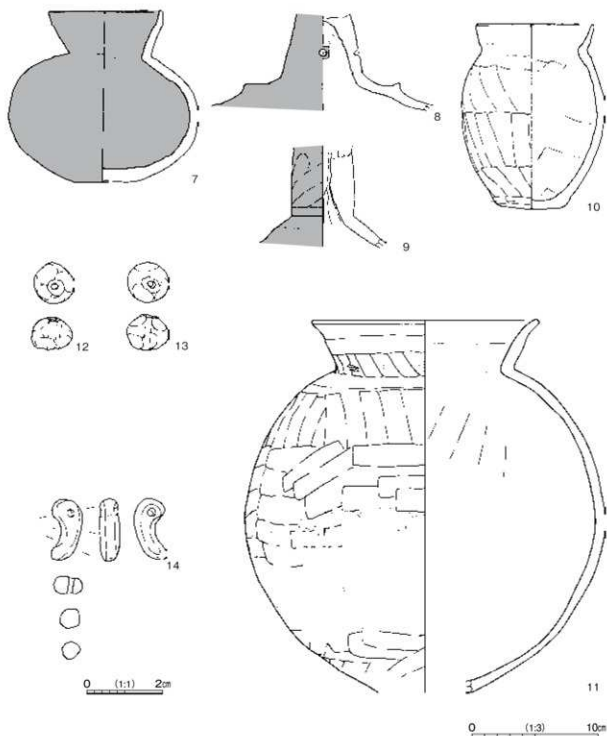
土層解説

- | | | | | | | | |
|---|---------|------|-------------------------|---|---------|-----|----------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒土 | ローム粒C、焼土粒C、炭化粒C / 粘土、細B | 5 | 10YR2/3 | 黒土 | ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘土、細B |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色 | ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘土、細B | 6 | 10YR3/3 | 暗褐色 | ローム粒C、焼土小D・粒C、炭化粒C / 粘土、細B |
| 3 | 5YR3/3 | 暗赤褐色 | ローム粒D、焼土粒B / 粘土、細B | 7 | 10YR4/2 | 灰褐色 | ローム粒B / 粘土、細B |
| 4 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ローム小C・粒C / 粘土、細B | 8 | 10YR4/4 | 褐色 | ローム粒A / 粘土、細B |

第278図 第93号堅穴建物跡実測図



第 279 図 第 93 号竪穴建物跡・出土遺物実測図 (1)



第 280 図 第 93 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 112 表 第 93 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 279・280 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	灰器	杯	[100]	3.7	—	長石・石英	灰	普通	口タロ成形 体部下端ヘラ削り	床面	20% PL56 TK216 カ
2	土陶器	碗	[109]	5.2	4.0	長石・石英・赤色 粘土・磁鉄	橙	普通	体部外面上半部ヘラ磨き 下半部ヘラナデ 内 面ナデ・ヘラ磨き 底部ヘラ削り後ヘラ磨き	床面	50%

番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼 成	特 徴	出土位置	備 考
3	土師器	鉢	144	5.8	5.3	長石・石英・赤色 粒子・粗粒	橙	普通	体部外面上半部へう着き 下半部ヘラナデ 内 面へう着き 底部ヘラナデ(後へう着き×)	床面	80% PL56
4	土師器	鉢	153	5.0	3.5	長石・石英・赤色 粒子・粗粒	にぶい・橙	普通	体部外面上半部へう着き 下半部ヘラナデ 内 面ナデ・ヘラ着き 底部ヘラナデ 内外面赤彩	床面	80% PL56
5	土師器	鉢	123	6.6	3.8	長石・石英・赤色 粒子・粗粒	にぶい・赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面赤彩	床面	90% PL56
6	土師器	鉢 [128]	(81)	—	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい・橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面赤彩	貯蔵穴(覆土 下層・中層)	40%
7	土師器	埴	8.9	13.7	4.8	長石・石英	にぶい・赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部調整不明 内外面赤彩	覆土下層	80% PL56
8	土師器	高杯	—	(7.5)	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい・赤褐	普通	外面赤彩 2か所の貫通しない穿孔 内面へう ナデ	覆土中層	30%
9	土師器	高杯	—	(8.1)	—	長石・石英・赤色 粒子	明赤褐	普通	外面ナデ 内面ヘラナデ 内外面赤彩	床面	30%
10	土師器	甕	9.2	14.6	4.6	長石・石英・赤色 粒子・粗粒	にぶい・褐	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面ヘラナデ 外面下 層へう着き	貯蔵穴(覆土 下層・中層)	70% PL56
11	土師器	甕	17.6	(29.9)	—	長石・石英・赤色 粒子・粗粒	にぶい・黄褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 下半部ヘラ ナデ 体部外面上半部ヘラナデ 下半部ヘラ着 き・ヘラナデ 内面ヘラナデ 外面黒着き	床面	90% PL56

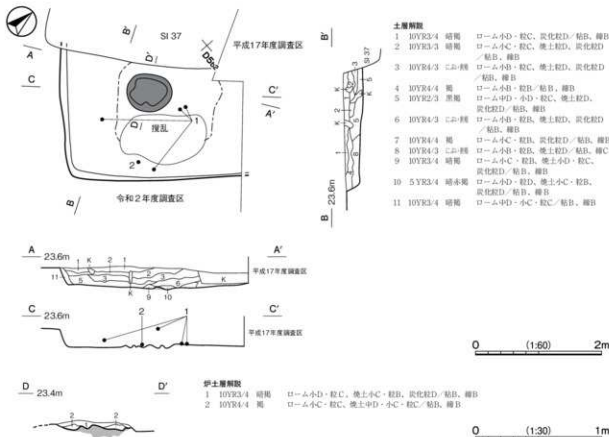
番号	器種	径	厚さ	口径	重さ	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
12	土玉	3.2～ 3.3	2.7	0.6	23.00	長石・石英・赤色 粒子・粗粒	橙	全面ナデ 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土下層	PL56
13	土玉	3.2	2.8	0.6	24.83	長石・石英・赤色 粒子	にぶい・赤褐	全面ナデ 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土下層	PL56

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
14	勾玉	1.6	0.8	0.6	0.98	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔 孔径0.2mm	床面	PL56

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
15	炭化種子	1.98 (1.31)	1.32 (1.12)	—	—	桃カ		覆土下層	
16	炭化種子	1.57 (1.57)	1.30 (1.08)	0.78	—	桃カ		覆土下層	

第94号竪穴建物跡(第281・282図 第113表 PL16)

位置 調査区中央部のD5b2区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。



第281図 第94号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

重複関係 第37号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた規模は、長軸290m、短軸200mである。方形もしくは長方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁は高さ22～28cmで、外傾している。平成17年度調査区へ続いているが、攪乱により、確認できなかったものと考えられる。

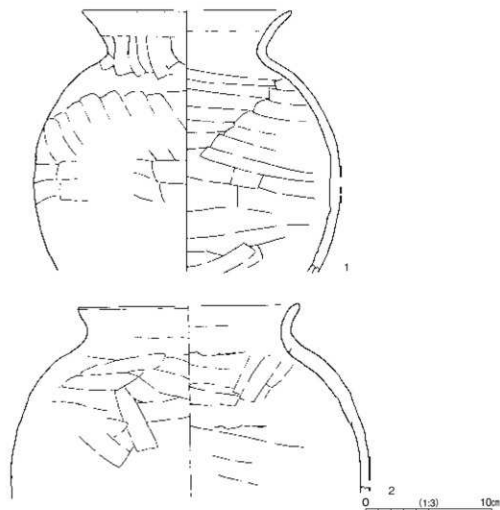
床 はほぼ平坦である。炉の周辺が硬化している。

炉 中央部西寄りに位置している。長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さ4cmほどの地床炉である。炉床面は、凹凸があり、赤変硬化している。

覆土 11層に分層できる。不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片119点（高坏4、甕115）が出土している。ほかに混入した縄文土器片4点が出土している。遺物は、広範囲に散在した状態で出土している。1は床面と覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第282図 第94号竪穴建物跡出土遺物実測図

第113表 第94号竪穴建物跡出土遺物一覧（第282図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[162]	[207]	-	長石・石英・赤色 粘土	灰褐色	普通	口縁部横ナデ 胴部ハケ目調整 体部内外面ヘラナデ	床面・覆土 上層～中層	30%
2	土師器	甕	[174]	[151]	-	長石・石英・赤色 粘土・磁鉄	にぶい黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部内外面ヘラナデ	床面	20%

第96号竪穴建物跡 (第283・284図 第114表)

位置 調査区中央部のD5fl区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 確認できた規模は、長軸3.83m、短軸3.80mである。方形と推定でき、主軸方向はN-68°-Wである。壁は高さ3~8cmで、外傾している。

床 ほほ平坦であるが、南部に向かって下っている。北部が硬化している。

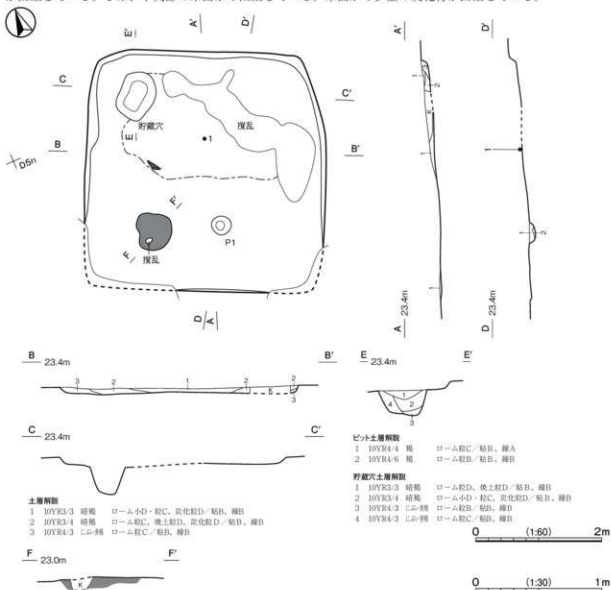
炉 中央部の南西コーナー寄りに位置している。径62cmの不整円形の地床炉である。炉床面は、床面と同じ高さで、赤変硬化している。

ピット P1は、深さ11cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 北コーナー部に位置している。長径75cm、短径55cmの楕円形で、深さは41cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は、不規則な堆積状況を示すことから、人為堆積である。

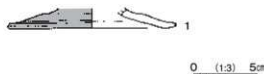
覆土 3層に分層できる。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片21点(高坏2、甕19)が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、石器2点が出土している。1は、中央部の床面から出土している。床面から少量の炭化材が出土している。



第283図 第96号竪穴建物跡実測図

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第284図 第96号竪穴建物跡出土遺物実測図

第114表 第96号竪穴建物跡出土遺物一覧(第284図)

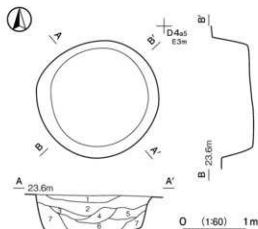
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	-	(1.5)	[13.0]	長石・石英・赤色 粒子	赤褐色	普通	脚部内外面ナデ 外面赤彩	床面	20%

第115表 古墳時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						出土土器	時期	備考
								柱穴	出入口	ピット	竈・竈穴	貯蔵溝	土			
1	G7g	N-8°-W	方形	4.86 × 4.84	20	平坦	一部	4	1	-	1	1	-	自然 人為	土師器	5世紀前半
2	G7d	N-15°-W	[方形]	3.40 × 5.20	8	平坦	ほぼ 全周	4	1	-	北壁	1	-	自然	-	7世紀前半
10	F6c	N-40°-W	方形	5.47 × 5.28	55	平坦	ほぼ 全周	4	1	3	北西壁	1	-	自然 人為	土師器・土製品、 ガラス製品	7世紀前半
37	D5a	N-39°-W	方形	5.06 × 4.88	46~65	平坦	一部	4	1	4	北西壁	-	-	自然 人為	土師器、土製品、 石製品、 ガラス製品	6世紀後半
83	D2b	N-78°-W	[方形、 長方形]	6.52 × (5.55)	35~75	平坦	ほぼ 全周	4	1	-	西壁2	1	-	自然 人為	土師器、土製品、 石製品	6世紀後半
86	B4g	N-54°-E	方形	4.82 × 4.79	16~23	平坦	全周	4	1	-	1	-	-	自然 人為	土師器・灰土器、 土製品	5世紀中葉
87	B4j	N-29°-W	方形	3.74 × 3.67	28~35	平坦	-	-	-	2	-	1	-	自然 人為	土師器	5世紀中葉
88	C3b	N-46°-W	方形	6.20 × 6.17	23~28	平坦	ほぼ 全周	4	1	-	1	1	-	自然 人為	土師器・石器、 土製品、 金属製品	5世紀中葉
91	G8c	N-30°-W	方形	7.00 × 6.98	42~53	平坦	全周	4	1	-	北壁	1	-	自然 人為	土師器・土製品、石器、 土製品、 灰土器	6世紀後半
92	D4b	N-90°-W	[長方形]	4.59 × 3.66	7	平坦	-	-	-	1	1	-	-	人為 土	土師器・炭化種子	5世紀中葉
93	C4k	N-31°-W	方形	9.24 × 9.16	14~20	平坦	一部	3	-	6	1	1	6	自然 人為	土師器・灰土器、土製品、 土製品、 炭化種子	5世紀中葉
94	D5b	N-47°-W	[方形、 長方形]	(2.90 × 2.00)	22~28	平坦	-	-	-	1	-	-	-	人為	土師器	5世紀中葉
96	D5d	N-68°-W	[方形]	3.83 × 3.80	3~8	平坦	-	-	-	1	1	1	-	不明	土師器	5世紀中葉

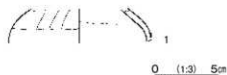
(2) 土坑

第821号土坑(第285図 第116表 PL16)



土層解説

- 10YR4/3 C2a-2b 褐色 ローム小D・粒D、炭化粒D/粘B、雜B
- 10YR3/3 暗褐色 ローム中D・小C・粒C、炭化粒D/粘B、雜B
- 10YR4/4 黄 ローム中C・小B・粒B、粘B、雜B
- 10YR3/2 黒褐色 ローム小D・粒D、炭化粒D/粘B、雜B
- 10YR4/3 C2a-2b 褐色 ローム大D・中B・小C・粒C/粘B、雜B
- 10YR3/3 暗褐色 ローム中C・小C・粒B/粘B、雜B
- 10YR4/3 C2a-2b 褐色 ローム中D・小C・粒B/粘B、雜B



第285図 第821号土坑・出土遺物実測図

位置 調査区北部の D 4 a5 区、標高 23 m ほどの台地縁部に位置している。

重複関係 第 836 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.89 m、短径 1.83 m の円形である。深さは 55 cm で、壁は外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 7 層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 12 点（坏 3、埴 1、高坏 1、甕 7）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 3 点が出土している。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀中葉である。

第 116 表 第 821 号土坑出土遺物一覧（第 285 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	—	(27)	—	長石・石英・黒色 粒子	橙	普通	外部内外面ナテ	覆土下層	5 %

第 823 号土坑（第 286 図 PL16）

位置 調査区北部の C 4 h5 区、標高 23 m ほどの台地縁部に位置している。

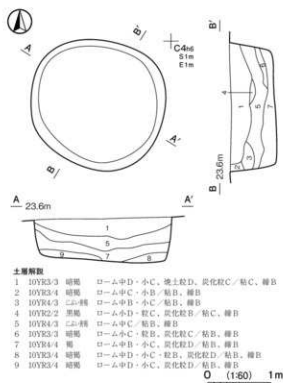
規模と形状 長径 2.20 m、短径 2.05 m の円形である。深さは 77 cm で、壁は外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 9 層に分層できる。ロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 4 点（埴 1、高坏 3）が出土している。ほかに混入した石器 1 点が出土している。

遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器や形状から 5 世紀中葉である。



第 286 図 第 823 号土坑実測図

第 836 号土坑（第 287 図）

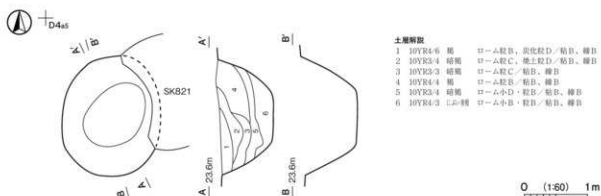
位置 調査区北部の D 4 a5 区、標高 23 m ほどの台地縁部に位置している。

重複関係 第 821 号土坑に掘り込まれている。

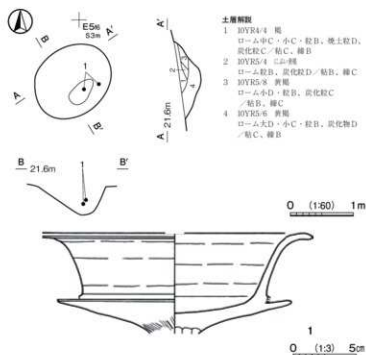
規模と形状 確認できた規模は、長径 1.95 m、短径 1.58 m の円形である。深さは 87 cm で、壁は外傾している。底面は、平坦である。

覆土 6 層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

所見 遺物は出土しなかったが、重複関係と形状から、5 世紀中葉以前である。



第287図 第836号土坑実測図



第288図 第876号土坑・出土遺物実測図

第117表 第876号土坑出土遺物一覧 (第288図)

番号	種別	部材	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	[21.4]	(8.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ハケ目調整 ナデ 内面ナデ	覆土中層	40%

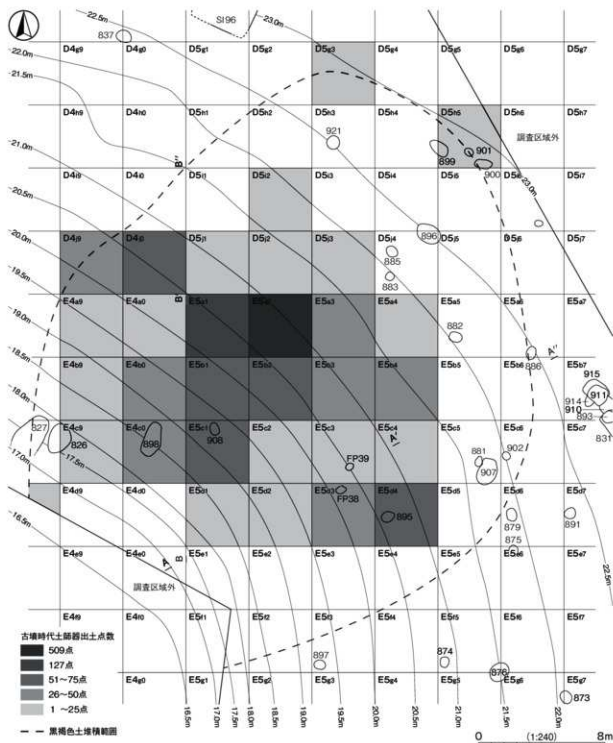
第118表 古墳時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)						
K21	D 4 a5	-	円形	1.89	× 1.83	55	外傾	平坦	人為	土師器	5世紀中葉	SK836 → 本跡
K23	C 4 1a5	-	円形	2.20	× 2.05	77	外傾	平坦	人為	土師器	5世紀中葉	
K36	D 4 a5	-	円形	1.95	× (1.58)	87	外傾	平坦	人為		5世紀中葉 以後	本跡 → SK821
876	E 5 区	N - 50° - E	楕円形	1.30	× 1.06	44	外傾	皿状	人為	土師器	5世紀中葉	

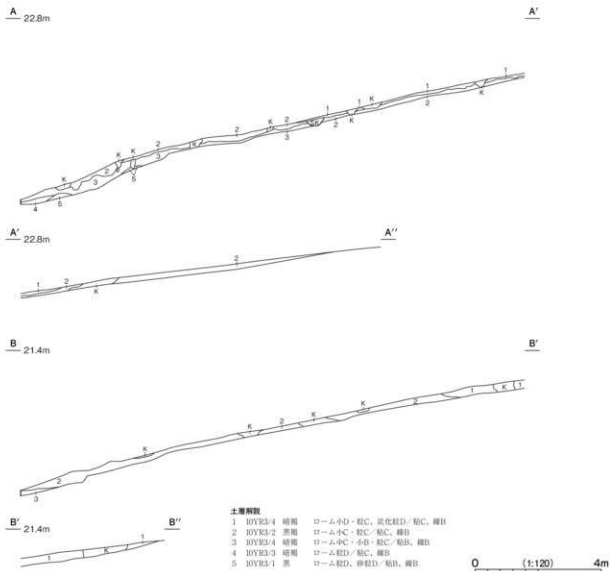
(3) 遺物集中地点

調査区中央部の斜面部から、古墳時代中期の遺物が多く出土する地点を確認した。集中地点の範囲には、層厚5～20cmの黒褐色土が堆積していた。斜面部に位置するため、流入した各時代の遺物も含まれていたが、古墳時代中期の遺物が特筆して多く、集中域も確認できたため、遺物集中地点として報告する。出土遺物については、小調査区の4mグリッド毎で取上げ、特に遺物が集中するE5a2区については出土地点を明示した。また、多量の遺物を含んだE5a2区については黒褐色土を篩にかけて、微細な遺物の回収を行った。以下、出土遺物などについて記述する。

第1号遺物集中地点(第289～296図 第119～121表 P16・56～58)



第289図 第1号集中地点実測図(1)・出土土器分布図



第290図 第1号遺物集中地点実測図(2)

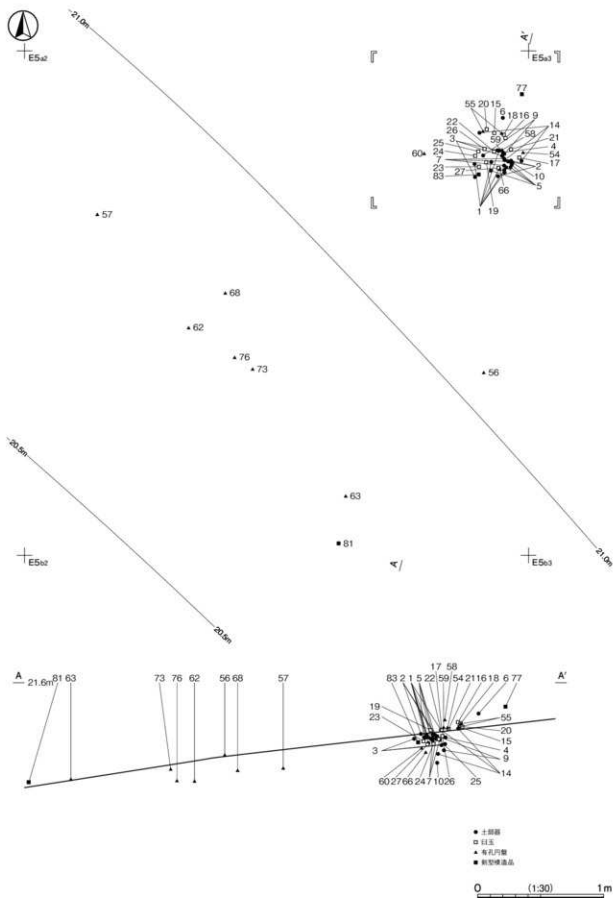
位置 調査区中央部のD 4 g8～E 5 f6～区、標高17.0 m～23.0 mほどの斜面部に位置している。標高差は6.0 mほどである。

重複関係 第826・895・898～900・901・908号土坑に掘り込まれている。

規模 東西31.4 m、南北幅33.2 mの範囲に黒褐色土の堆積と遺物の集中地点を確認した。黒褐色土の堆積範囲は図中に破線で示した。

覆土 5層に分層できる。上方からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器1,395点(坏・碗260、高坏520、高坏状装飾器台2、甕613)、石製品86点(有孔円板23、剣型模造品8、白玉39、加工痕のない破片11、研磨痕のある破片5)が出土している。ほかに流入した縄文土器片78点(深鉢)、弥生土器2点(広口壺)、須恵器1点(壺)、石器163点(ナイフ形石器2、石核8、二次加工のある剥片4、微細剥離痕のある剥片2、剥片65、砕片3、石鏃6、磨石45、スタンプ形石器1、礫16、熱熱礫11)、土製品2点(羽口)、瓦1点(丸瓦)、金属製品1点(煙管)、鉄滓3点が出土している。出土した古墳時代中期中葉の土師器と石製品については、集計表と石材組成表を示した。遺物はE 5 a2区に最も密な遺物の集中域とその周辺にまばらな集中域が認められる。また、D 4 j0区付近とE 5 d4区付近にも



第 291 図 第 1 号遺物集中地点実測図 (3)

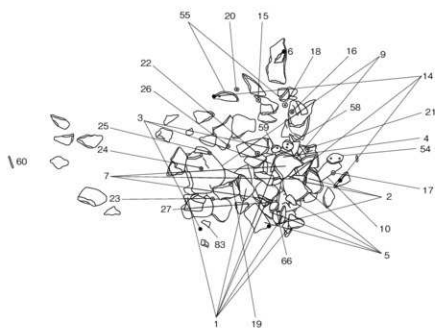


『

⊥ E5a3

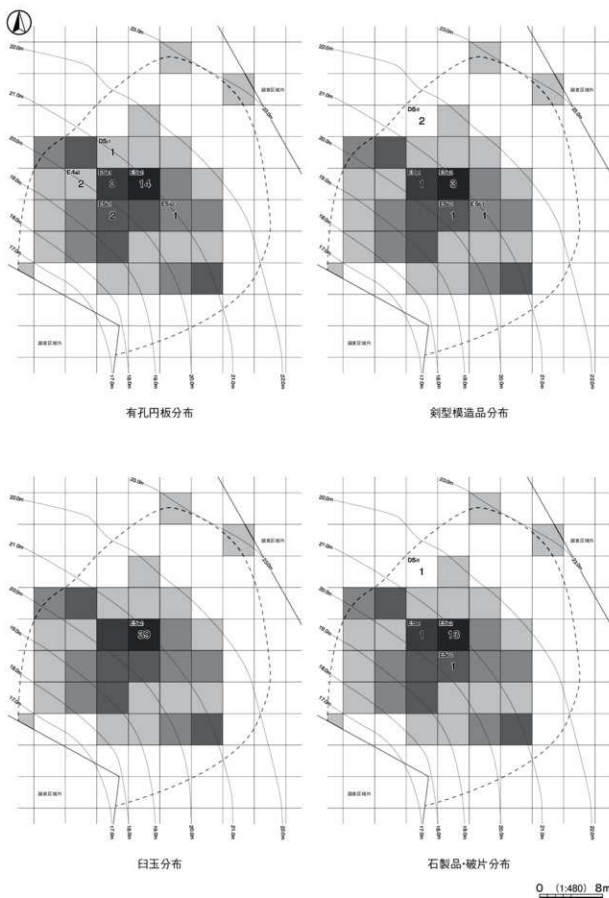
』

77
○



0 (1:10) 20cm

第 292 図 第 1 号遺物集中地点実測図 (4)



第 293 図 第 1 号遺物集中地点出土石製品分布図

小規模な集中域が認められる。特にE 5a2区とその周辺からは赤彩された土師器と共に石製品や滑石・蛇紋岩・粘板岩の破片が集中して出土している。

所見 赤彩された土師器や石製品の出土数が多い、まとまって出土していることから、E 5a2区を中心とする古墳時代中期中葉の斜面祭祀の痕跡と考えられる。

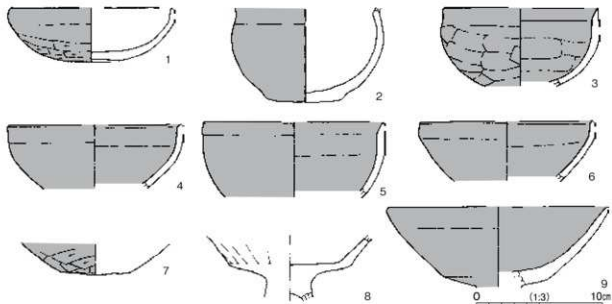
第119表 第1号遺物集中地点グリッド別出土古墳時代遺物集計表

種別	グリッド														小計
	D49	D40	D52	D51	D52	D53	E4a9	E4a0	E5a1	E5a2	E5a3	E5a4	E4b9	E4b0	
土師器	環・甕	7	2	4	2	4		1	1	25	139	5	2		230
	高杯	25	17	14	11	1		1	9	37	191	23	3	1	390
	高杯状片断器台		2												2
	甕	16	33	1	7	21	1	3	12	65	159	17		6	462
石製品	小計	48	54	19	20	26	1	5	22	127	309	45	5	7	1084
	有孔円板				1				2	3	14			2	23
	銅形									1	3				4
	白玉														39
	加工痕のない破片									9					10
	破断痕のある破片								1	4					5
	小計				1			2	5	69				2	83

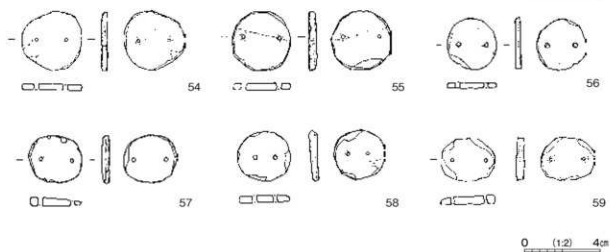
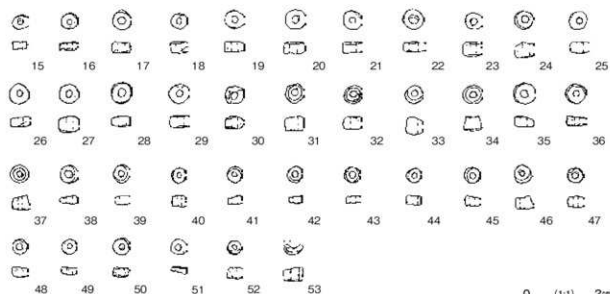
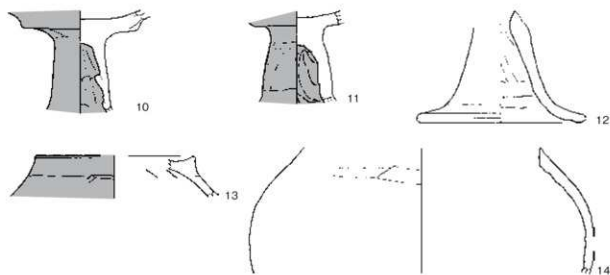
種別	グリッド														小計	合計
	E5b4	E4c9	E4c0	E5c1	E5c2	E5c3	E5c4	E4b0	E5d1	E5d2	E5d3	E5d4	D6g3	D6h5		
土師器	環・甕	4		1	8	3				2		12			30	260
	高杯	20		10	17		9	8		2	6	31	26	1	130	520
	高杯状片断器台														0	2
	甕	15	4	22	31	8	6	16	3		12	4	29		151	613
石製品	小計	39	4	33	56	11	15	24	3	2	20	35	67	1	311	1395
	有孔円板															23
	銅形															3
	白玉														2	2
	加工痕のない破片														1	1
	破断痕のある破片														1	11
	小計														3	3

第120表 第1号遺物集中地点出土石製品石材別組成表

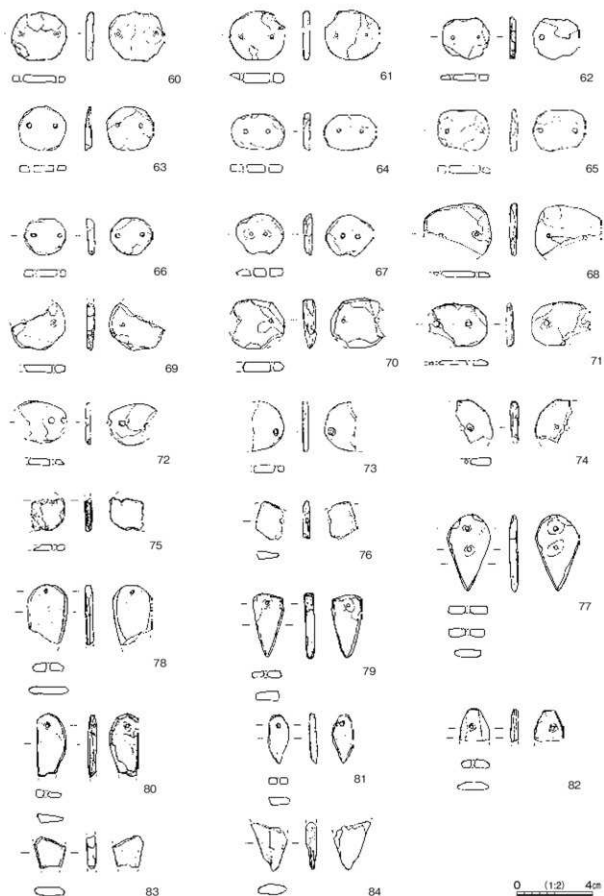
種別	石材	滑石	蛇紋岩	粘板岩	計
有孔円板	15	7	1		23
銅形模造品	6		2		8
白玉	39				39
加工痕のない破片	5	6			11
破断痕のある破片	4		1		5
計	69	13	4		86



第294図 第1号遺物集中地点遺物実測図(1)



第 295 図 第 1 号遺物集中地点遺物実測図 (2)



第 296 图 第 1 号遗址集中地点遗物实图 (3)

第121表 第1号遺物集中地点出土遺物一覧(第294～296図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	便度	特徴	出土位置	備考
1	土器	罎	[128]	4.2	4.2	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面赤彩・上半部ナデ・下半部ヘラナデ 内面割落により調整不明瞭	E 5a2	40%
2	土器	罎	—	(7.5)	6.0	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	明赤褐色	普通	体部外面ナデ・赤彩 内面割落により調整不明瞭	E 5a2	40%
3	土器	罎	[122]	(6.2)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内外面ヘラナデ・赤彩	E 5a2	30% PL56
4	土器	罎	[136]	(5.1)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内外面ナデ・赤彩	E 5a2	20%
5	土器	罎	[142]	(5.9)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内外面ナデ・赤彩	E 5a2	30%
6	土器	罎	[136]	(4.8)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内外面ナデ・赤彩	E 5a2	20%
7	土器	罎	—	(2.4)	5.5	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	明赤褐色	普通	体部外面下縁ヘラナデ・赤彩 内面割落により調整不明瞭 底部ヘラナデ	E 5a2	10%
8	土器	高杯	—	(5.2)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラナデ・ナデ 内面割落により調整不明瞭 底縁部	E 5d4	40%
9	土器	高杯	[174]	(6.4)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	赤褐色	普通	体部内外面赤彩 外面ナデ 内面割落により調整不明瞭	E 5a2	25%
10	土器	高杯	—	(8.1)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	赤褐色	普通	体部内外面ナデ・赤彩 脚部内外面赤彩 外面ナデ 内面ヘラナデ 輪縁部	E 5a2	30% PL56
11	土器	高杯	—	(7.4)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	にぶい赤褐色	普通	体部内外面ナデ 脚部外面ヘラナデ・ナデ・内外面赤彩 内面ヘラナデ 輪縁部	E 5a3	30%
12	土器	高杯	—	(8.9)	[134]	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	褐色	普通	脚部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪縁部	E 5d4	20%
13	土器	高杯 表裏磨光	—	(3.3)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	にぶい赤褐色	普通	脚部外面ナデ・内外面赤彩 内面ヘラナデ	D 4j0	20% PL56
14	土器	罎	—	(10.0)	—	長石・石英・赤色 粘土・黒砂子	褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内・外面磨減	E 5a2	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	白玉	0.4	0.4	0.2	0.06	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
16	白玉	0.5	0.4	0.2	0.04	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
17	白玉	0.5	0.5	0.3	0.09	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2	PL57
18	白玉	0.45	0.45	0.3	0.08	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗青灰色	E 5a2	PL57
19	白玉	0.5	0.5	0.3	0.12	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 浅黄灰色	E 5a2	PL57
20	白玉	0.5	0.6	0.3	0.12	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗青灰色	E 5a2	PL57
21	白玉	0.5	0.5	0.3	0.10	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
22	白玉	0.55	0.6	0.3	0.11	蛇紋岩	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
23	白玉	0.48	0.5	0.4	0.12	滑石	全面研磨 面取り無し 表面一部欠け 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
24	白玉	0.5	0.5	0.4	0.13	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
25	白玉	0.5	0.5	0.3	0.10	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
26	白玉	0.5	0.5	0.25	0.09	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2	PL57
27	白玉	0.5	0.5	0.4	0.16	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2	PL57
28	白玉	0.5	0.5	0.3	0.13	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
29	白玉	0.5	0.5	0.3	0.14	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 灰色	E 5a2 磨	PL57
30	白玉	0.5	0.5	0.3	0.09	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2 磨	PL57
31	白玉	0.5	0.5	0.4	0.17	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm オリーブ黒色	E 5a2 磨	PL57
32	白玉	0.5	0.5	0.4	0.14	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
33	白玉	0.5	0.5	0.5	0.17	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
34	白玉	0.5	0.5	0.4	0.15	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2 磨	PL57
35	白玉	0.5	0.6	0.3	0.15	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2 磨	PL57
36	白玉	0.5	0.5	0.2	0.12	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
37	白玉	0.5	0.5	0.6	0.11	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
38	白玉	0.5	0.5	0.3	0.07	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
39	白玉	0.5	0.4	0.2	0.07	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 緑灰色	E 5a2 磨	PL57
40	白玉	0.4	0.4	0.3	0.09	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
41	白玉	0.4	0.4	0.3	0.05	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
42	白玉	0.4	0.4	0.2	0.06	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
43	白玉	0.4	0.4	0.2	0.07	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 緑灰色	E 5a2 磨	PL57
44	白玉	0.4	0.4	0.3	0.08	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 磨	PL57
45	白玉	0.5	0.4	0.3	0.07	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 緑灰色	E 5a2 磨	PL57

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
46	白玉	0.5	0.5	0.3	0.10	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL57
47	白玉	0.4	0.4	0.3	0.08	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL57
48	白玉	0.4	0.4	0.3	0.06	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.2cm 緑黑色	E 5a2 階	PL57
49	白玉	0.4	0.4	0.2	0.04	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL57
50	白玉	0.45	0.45	0.3	0.07	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 緑黑色	E 5a2 階	PL57
51	白玉	0.4	0.4	0.2	0.03	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.15cm 緑黑色	E 5a2 階	PL57
52	白玉	0.4	0.4	0.3	0.05	滑石	全面研磨 面取り無し 孔径0.1cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL57
53	白玉 (0.5)	(0.3)	0.4	(0.06)	滑石	全面研磨 面取り無し 欠損 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL57	
54	有孔円板	3.1	3.2	0.4	6.58	滑石	円形 全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
55	有孔円板	3.1	3.1	0.4	6.19	滑石	円形 全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.25～0.3cm 2片に分断 灰よりア灰色	E 5a2 階	PL57
56	有孔円板	2.9	2.7	0.3	4.34	滑石	円形 全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.2～0.3cm 緑黑色	E 5a2 階	PL57
57	有孔円板	2.5	2.8	0.4	4.88	滑石	円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2～0.25cm 灰よりア灰色	E 5a2 階	PL57
58	有孔円板	2.7	2.8	0.4	5.15	滑石	円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
59	有孔円板	2.25	2.9	0.45	5.30	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.15～0.2cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL57
60	有孔円板	2.6	3.0	0.4	5.20	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2～0.3cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
61	有孔円板	2.9	2.6	0.5	5.60	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2～0.25cm 灰色	E 5a2 階	PL57
62	有孔円板	2.2	2.5	0.3	3.02	蛇紋岩	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.15～0.2cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
63	有孔円板	2.3	2.5	0.4	3.47	蛇紋岩	円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.25～0.3cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
64	有孔円板	1.9	2.8	0.4	3.85	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.25cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
65	有孔円板	2.1	2.8	0.4	3.80	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2～0.25cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57
66	有孔円板	1.9	2.2	0.4	3.26	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2～0.3cm ア灰色	E 5a2 階	PL57
67	有孔円板	2.3	2.5	0.4	3.37	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm オリーブ灰色	E 5b3 階	PL57
68	有孔円板 (28)	3.6	0.3	(4.90)	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2～0.25cm 緑灰色	E 5a2 階	PL57	
69	有孔円板 (25)	2.9	0.4	(4.16)	滑石	円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm 暗ア灰色	E 5a2 階	PL57	
70	有孔円板	2.6	(28)	0.6	(5.97)	滑石	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.2cm 暗緑灰色	E 5b1 階	PL57
71	有孔円板	2.3	(30)	0.4	(3.35)	蛇紋岩	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3～0.4cm 緑黑色	E 4a0 階	PL57
72	有孔円板 (22)	(2.6)	(0.3)	(2.08)	蛇紋岩	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm 緑黑色	D 5j1 階	PL58	
73	有孔円板	2.7	(1.7)	(0.3)	(2.36)	蛇紋岩	楕円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.25cm 暗緑灰色	E 5a2 階	PL58
74	有孔円板 (23)	(2.0)	0.4	(2.50)	蛇紋岩	円形 全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm 暗緑灰色	E 5a1 階	PL58	
75	有孔円板 (1.8)	(1.8)	0.3	(1.88)	蛇紋岩	全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.4cm 緑黑色	E 5a1 階	PL58	
76	有孔円板 (20)	(1.5)	(0.4)	(1.28)	蛇紋岩	全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm 黒色	E 5a2 階	PL58	
77	有孔 板製品	4.0	3.3	0.4	4.42	蛇紋岩	全面研磨 両方向からの穿孔 穿孔2か所 孔径0.25～0.3cm 黒色	E 5a2 階	PL58
78	有孔 板製品	(3.2)	2.2	0.5	(5.15)	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm 暗緑灰色	E 5b2 階	PL58
79	有孔 板製品	3.4	1.7	0.5	3.84	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 孔径0.3cm 緑灰色	D 5i1 階	PL58
80	有孔 板製品	(3.3)	1.7	0.5	3.47	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.3cm 緑灰色	D 5i1 階	PL58
81	有孔 板製品	2.6	1.1	0.4	1.78	滑石	全面研磨 一方からの穿孔 一部欠損 孔径0.15cm 緑灰色	E 5a2 階	PL58
82	有孔 板製品	(1.7)	(1.7)	(0.4)	(1.49)	蛇紋岩	全面研磨 両方向からの穿孔 一部欠損 孔径0.25cm 黒色	E 5b3 階	PL58
83	有孔 板製品	(1.8)	(1.7)	(0.5)	(2.22)	滑石	全面研磨 一部欠損 暗緑灰色	E 5a2 階	PL58
84	有孔 板製品	(2.5)	(1.7)	(0.6)	(2.74)	滑石	片面磨 全面研磨 一部欠損 暗緑灰色	E 5a1 階	PL58
85	破片	1.5	1.8	0.5	1.37	滑石	暗緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
86	破片	1.8	1.5	0.6	2.17	滑石	緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
87	破片	1.4	0.7	0.2	0.23	滑石	緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
88	破片	3.8	1.5	0.6	4.00	蛇紋岩	暗緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
89	破片	2.8	1.9	0.9	4.29	蛇紋岩	緑黑色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
90	破片	2.3	1.5	0.9	2.74	蛇紋岩	緑黑色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
91	破片	2.2	2.0	1.0	4.68	滑石	暗緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
92	破片	1.3	0.7	0.5	0.35	蛇紋岩	暗緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58
93	破片	1.9	1.8	0.4	1.09	蛇紋岩	暗緑灰色	E 5a2 階	写真のみ掲載 PL58

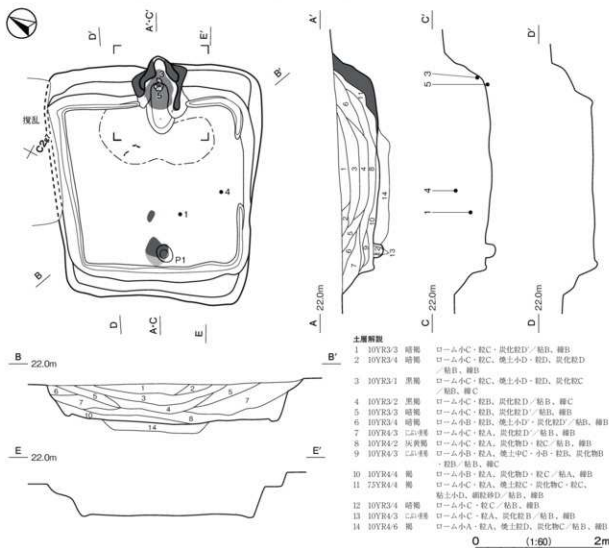
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
94	破片	3.1	2.7	0.7	5.53	滑石	暗緑灰色	E 5 b2	写真のみ掲載 PL58
95	破片	2.4	1.8	0.8	2.51	滑石	暗緑灰色	D 5 ii	写真のみ掲載 PL58
96	研磨面のある破片	3.9	3.1	0.7	10.60	滑石	一部研磨面あり 未製品※ 緑灰色	E 5 a2	写真のみ掲載 PL58
97	研磨面のある破片	1.7	0.9	0.2	0.48	滑石	一部研磨面あり 緑灰色	E 5 a2	写真のみ掲載 PL58
98	研磨面のある破片	2.0	1.2	0.4	1.23	滑石	一部研磨面あり 暗緑灰色	E 5 a2	写真のみ掲載 PL58
99	研磨面のある破片	1.2	0.9	0.2	0.30	滑石	一部研磨面あり 暗緑灰色	E 5 a2	写真のみ掲載 PL58
100	研磨面のある破片	2.3	1.4	0.5	1.62	粘板岩	一部研磨面あり 暗灰色	E 5 a1	写真のみ掲載 PL58

4 平安時代の遺構と遺物

竪穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第84号竪穴建物跡 (第297～299図 第122表 PL17・59)



第297図 第84号竪穴建物跡実測図(1)

位置 調査区北部のC 2g7区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

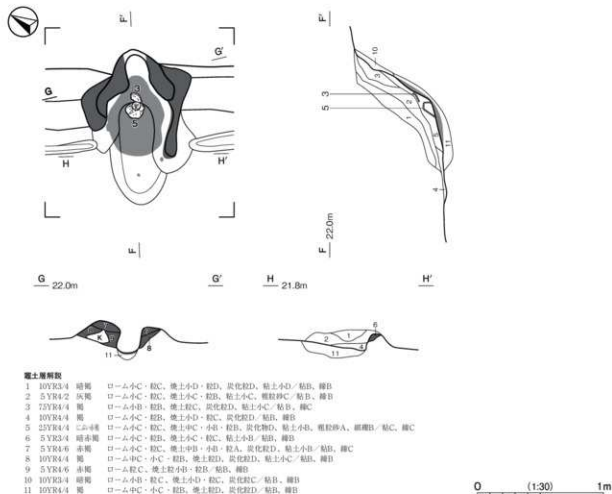
規模と形状 長軸3.83m、短軸3.21mの方形で、主軸方向はN-59°-Eである。壁は高さ44~60cmで、北東壁と南西壁は段を有して外傾し、北西壁と南東壁は外傾している。

床 は平坦で、竈前方が硬化している。壁溝は、南東壁際の一部を除いて全周している。中央部の貼床は、長軸0.58m、短軸0.45mの不整長方形の範囲を15cmほど掘り下げ、ロームブロックを多く含む第14層を埋土して構築されている。

棚状施設 竈の両脇と、南西壁側に地山を掘り残して構築されている。竈の左右壁には、床面から高さ30cmほどで、幅20~30cmの平坦部をそれぞれ有している。また、南西壁側にも、床面から25cmほどの高さで幅20cmの平坦部を有している。

竈 北東壁の中央部に位置している。確認できた規模は、焚口部から煙道部まで124cmで、燃焼部幅は42cmである。地山を8~14cmほど掘りくぼめ、第10・11層を埋土している。袖は、地山を掘り残して基部とし、その上に粘土ブロックを含む第6~9層を積み上げて構築されている。燃焼部の内壁と火床面は、被熱により赤変硬化している。煙道部は、壁から20cmほど張り出し、外傾している。

ピット P1は深さ15cmで、規模と配置から出入口施設に伴うピットである。第12層は抜き取り後の流入土で、第13層はロームブロックを多く含むことから、埋土と考えられる。

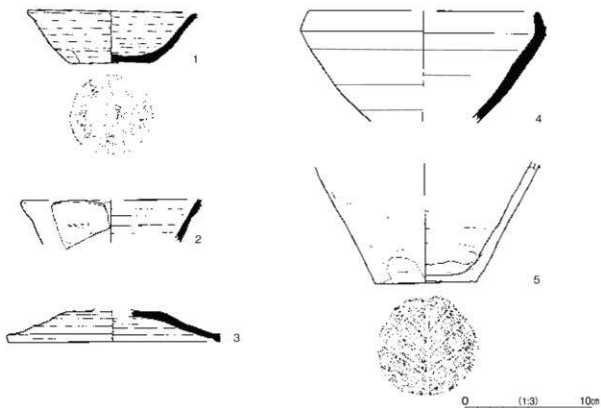


第298図 第84号竈穴建物跡実測図(2)

覆土 11層に分層できる。第1～3層は黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第4～11層はロームブロックや焼土ブロック・炭化材を含むことから、人為堆積である。第12・13層は、P1の覆土である。

遺物出土状況 土師器片124点（坏1、甕123）、須恵器片16点（坏12、蓋2、鉢1、鉄鉢形土器1）が出土している。ほかに混入した縄文土器片12点、石器2点が出土している。1は中央部の覆土中層から正位の状態、4は南東壁際の覆土上層から、それぞれ出土している。5は、竈火床面から逆位に据えられており、支脚に転用されていたものである。5の上部には、5cmほどの大きさの甕の破片が3点積み重ねられており、高さの調整として使用されていたものと考えられる。南東壁寄りと中央部の覆土下層の第10層上面からは、少量の焼土と炭化材が出土しており、埋戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第299図 第84号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第122表 第84号竪穴建物跡出土遺物一覧（第299図）

番号	種別	形状	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	133	43	66	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄緑	普通	体部下端一方向のヘラ刮り	覆土中層	80% PL59
2	須恵器	坏	[140]	(34)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	体部内外面ロクロナデ 墨書「南」□	覆土	5% PL59
3	須恵器	蓋	[166]	(25)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	体部内外面ロクロナデ 繊維付着	竈内	30% PL59
4	須恵器	鉢	[180]	(89)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	体部内外面ロクロナデ 鉄鉢形	覆土上層	10% PL59
5	土師器	甕	-	(85)	80	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	橙	普通	体部外面ヘラ磨き 下層ヘラ刮り 内面ナデ 輪轆痕 底部木重痕	竈火床面	20% PL59

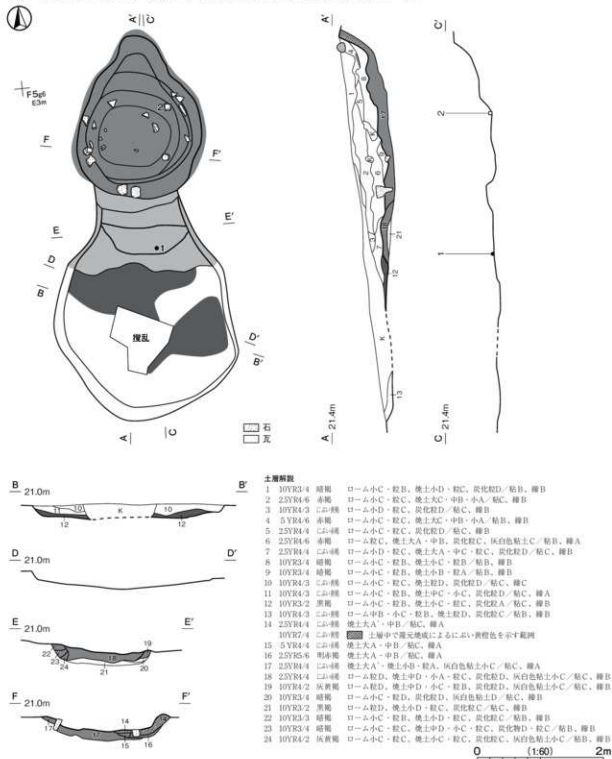
5 江戸時代の遺構と遺物

炭焼窯跡3基、土坑1基、溝跡2条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 炭焼窯跡

第2号炭焼窯跡 (第300・301図 第123表 PL17・59)

位置 調査区中央部のF 5g7区、標高21mほどの斜面部に位置している。



第300図 第2号炭焼窯跡実測図

重複関係 第3号炭焼窯を掘り込んでいる。

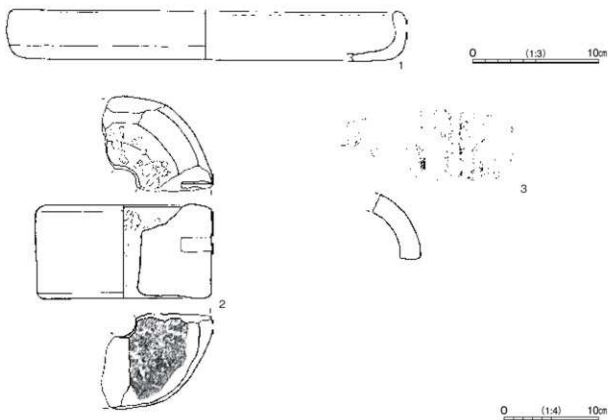
規模と形状 全長6.08 mの瓢箪形で、長軸方向はN-7°-Eである。

前庭部 長径3.53 m、短径2.85 mの不整形で、深さは5～22 cmである。壁は外傾し、底面は皿状で、斜面下方に向かってゆるやかに傾斜している。炭化室との境目である焚口部は、段を有している。焚口部側の底面と壁は、被熱により赤変硬化している。中央部から南部にかけての底面には、炭化物・粒子の広がる範囲が確認できた。

炭化室 長径2.55 m、短径1.96 mの不整楕円形で、壁は高さ30 cmである。壁や底面は、長径20～30 cm大の玉状の粘土を積み上げ、瓦片や礫・石器を補強材にして構築されており、被熱により赤変し、強く硬化している。底面は凹凸で、壁は外傾及び直立している。焚口部側の底面には礫が2点据えられている。煙道部は、奥壁の中央部に位置し、30 cmほど張り出して外傾している。傾斜角は80°である。

覆土 13層に分層できる。第2～7層は焼土ブロックや炭化粒子を多量に含む天井部の崩落土で、第8・9層は天井部崩落前の流入土である。第12層は炭の層である。第14～24層は窯体構築土で、貼り付けられた粘土が被熱により赤変硬化し、煙道部や内壁の一部は還元焼成によりにぶい黄橙色を呈している。

遺物出土状況 土師質土器片6点（焙烙）、瓦片24点（平瓦14点、丸瓦10点 総量3343.93g）、石器3点（安山岩製石臼2、花崗岩製石臼カ1）、石製品3（安山岩製不明石製品1、花崗岩製不明石製品2）、礫36点（安山岩8、花崗岩3、雲母片岩19、砂岩6）が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片6点が出土している。1は前庭部の底面から出土している。2は、炭化室の底面から、3は炭化室の覆土下層から出土し、被熱痕が認められることから炭化室構築時の補強材として転用されたものである。



第301図 第2号炭焼窯跡出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から18世紀中葉～19世紀前葉と考えられる。窯体の構築方法と形状が第3号炭焼窯跡と類似し、隣接し合うことから、第3号炭焼窯跡と同じ生産主体が構築したものと推測される。また、本跡は重複関係から、第3号炭焼窯跡よりも新しい炭焼窯と考えられる。

第123表 第2号炭焼窯跡出土遺物一覧(第301図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師質土器	焙烙	[30.2]	3.9	[28.4]	長石・石英・珪母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 被熱痕	前庭部底面	10%
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
2	石臼	[18.6]	[10.0]	9.7	[108.54]	安山岩	上白 目摩耗	くぼみ部・中心穴工具痕 中心穴（側面口）の孔径推定3.2cm-4.1cm	全面研削 側面挽き木孔 被熱痕	炭化室底面	PL59
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考	
3	瓦	(7.8)	(7.8)	(2.9)	(160.30)	長石・石英	橙	面取り ナデ成形 下面工具痕	被熱痕	炭化室覆土下層	

第3号炭焼窯跡(第302～304図 第124表 PL17・59)

位置 調査区中央部のF5g8区、標高21mほどの斜面部に位置している。

重複関係 第2号炭焼窯跡に掘り込まれている。

規模と形状 全長6.42mの瓢箪形で、長軸方向はN-19°-Eである。

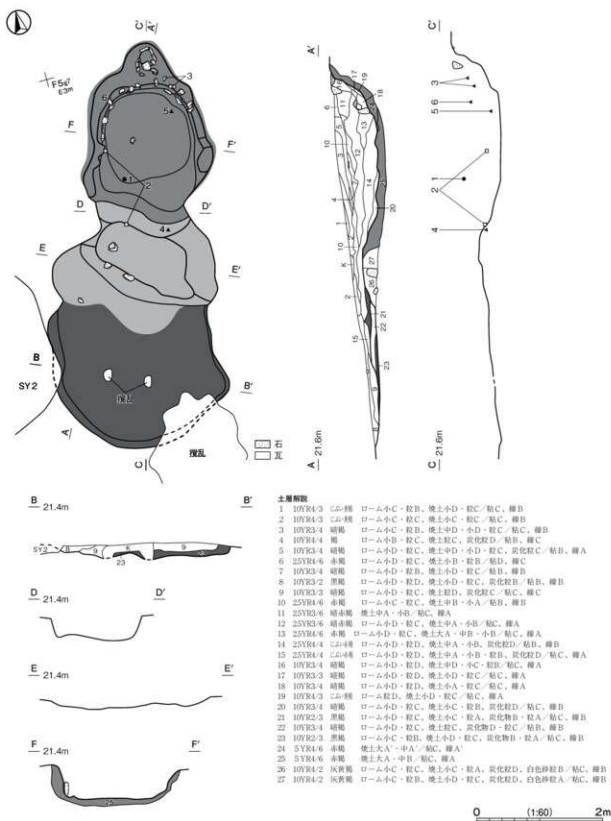
前庭部 長径3.70m、短径2.60mの不整形で、深さは2～20cmである。壁は外傾し、底面は凹凸で、斜面下方に向かって緩やかに傾斜している。炭化室との境目である焚口部付近は、段を有している。焚口部側の底面と壁は、被熱により赤変硬化している。南部の底面と覆土中層からは、炭化物・粒子の広がる範囲が確認できた。

炭化室 長径2.96m、短径1.91mの不整形円形で、壁は高さ47cmである。壁や底面は、長径20～30cm程の大きさの玉状の粘土を積み上げ、瓦片や礫などを補強材にして構築されており、被熱により赤変し、強く硬化している。底面は凹凸で、壁は外傾及び直立している。煙道部は、奥壁の中央部に位置し、40cmほど張り出して外傾している。傾斜角は75°である。煙出し部の上部には、礫を円形に配置している。

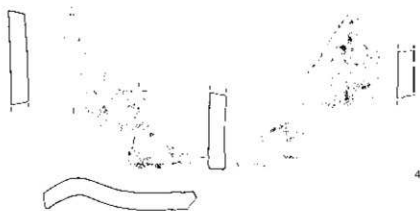
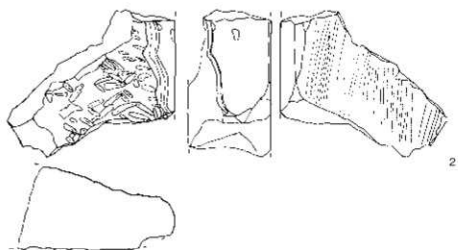
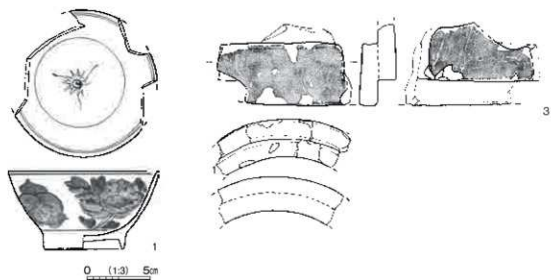
覆土 23層に分層できる。第1～9層はロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、天井部崩落後の人為堆積である。第10～15層は焼土ブロックを多量に含む天井部の崩落土で、第16～19層は煙道部からの、第20層は焚口側からの流入土である。第21・23層は炭の層である。第24・25層は窯体構築土で、貼り付けられた粘土が被熱により赤変硬化している。

遺物出土状況 磁器片1点(碗)、土師質土器片8点(焙烙)、瓦片24点(平瓦8点、丸瓦14点、棧瓦1、角浅瀬振瓦1 総量3359.01g)、石器6点(安山岩製石臼)、石製品1点(安山岩製不明石製品)、礫41点(安山岩7、花崗岩3、雲母片岩25、砂岩4、ハンレイ岩2)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片6点が出土している。1は天井部崩落後の覆土中から出土している。2～6は被熱痕が認められることから、炭化室構築時に補強材として転用されたものである。

所見 時期は、出土土器から18世紀中葉から19世紀前葉と考えられる。前庭部に炭化室から掻き出されたと考えられる炭の層が2層確認できることから、操業停止直前に最低でも2回以上の操業があったものと推測される。窯体構築方法と規模や形状が類似し、隣接し合うことから、第2号炭焼窯と同じ生産主体が構築したものと推測される。また、本跡は重複関係から第2号炭焼窯跡よりも古い炭焼窯跡と考えられる。



第302図 第3号炭焼窯跡実測図



0 (1:4) 10cm

第303图 第3号炭烧庙跡出土遺物実測図(1)



第304図 第3号炭焼窯跡出土遺物実測図(2)

第124表 第3号炭焼窯跡出土遺物一覧(第303・304図)

番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	特 徴	輪 軸	産 地	出土位置	備 考
1	陶器	甕	11.8	6.3	6.2	緻密	明緑灰	広東磚 ロクロナデ 針丹 見込線象文	束付 外面繻子・ 清明 刻銘	肥前	覆土上層	70% PL59
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考	
2	不明 石製品	(15.3)	(17.4)	(8.7)	(337.18)	安山岩	表面ノミ状工具痕 被熱痕	側面・表面の一部研削	表面縦状の工具痕	炭化室壁面 前壁部底面	PL59	
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置			備 考
3	角浅甕板瓦	(8.5)	(14.1)	5.1	(349.13)	長石・赤色粒子・ 黒色粒子	橙	面取り ナデ 上面目板状の重ね目接合 被熱痕	破断面被熱痕	炭化室壁面		PL59
4	枕瓦	(16.5)	(16.1)	3.3	(300.33)	長石・雲母	橙	面取り ナデ 被熱痕	前壁部底面			
5	平瓦	(13.0)	(14.2)	3.1	(344.14)	長石・雲母・黒色 粒子	橙	面取り ナデ 顔見付左側「高」の刷印 被熱痕	炭化室壁土			PL59
6	丸瓦	(12.4)	(8.6)	2.7	(188.39)	長石・赤色粒子・ 黒色粒子	にぶい黄橙	面取り ナデ 下面板目状圧痕 被熱痕	炭化室壁面			

第4号炭焼窯跡(第305・306図 第125表)

位置 調査区中央部のD 2d8区、標高17 mほどの斜面部に位置している。

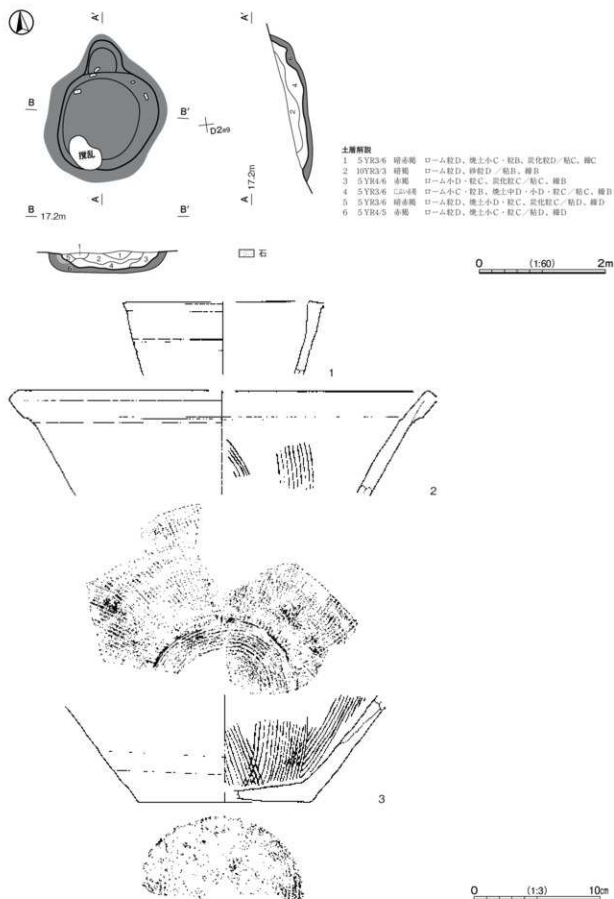
規模と形状 炭化室と煙道部のみを確認した。全長2.32 mの楕円形で、長軸方向はN-35°-Eである。前底部は、削平されている。

炭化室 長径2.32 m、短径1.86 mの楕円形で、壁は高さ32 cmである。壁と底面は、粘土を貼り付けて構築されており、被熱により赤変し、強く硬化している。底面は皿状で、壁は外傾している。煙道部は、奥壁の中央部に位置し、50 cmほど張り出して外傾している。傾斜角は72°である。

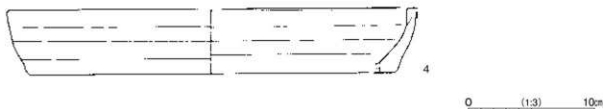
覆土 5層に分層できる。第1・2層は天井部崩落後の流入土で、第3～5層は焼土ブロックを含む壁・天井部の崩落土である。第6層は炭化室の構築土で、貼り付けられた粘土が被熱により赤変硬化している。

遺物出土状況 陶器片5点(鉢1、鉢縁4)、土師質土器片8点(焙烙)、瓦片12点(平瓦 総量1067.47 g)、礫片5点(花崗岩)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片9点が出土している。炭化室北部の底面からは礫と瓦片が出土しており、炭化室構築時の補強材として使用・転用されたものである。

所見 時期は、出土土器から18世紀前葉と考えられる。



第305図 第4号炭焼跡・出土遺物実測図(1)



第306図 第4号炭焼窯跡出土遺物実測図(2)

第125表 第4号炭焼窯跡出土遺物一覧(第305・306図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	特 徴	軸差	産 地	出土位置	備 考	
1	陶器	鉢	[15.2]	(5.9)	—	緻密	灰褐色 に白点	ロクロナデ	胴部外面に2条の沈線	精輪	瀬戸・美濃	覆土	10%
2	陶器	鉢鉢	[32.4]	(8.3)	—	緻密	灰褐色 に白点	ロクロナデ	10条以上1単位のすり目	精輪	瀬戸・美濃	覆土	10%
3	陶器	鉢鉢	—	(8.5)	[13.6]	緻密	灰褐色 に白点	ロクロナデ	胴部16条1単位のすり目 底面13条1単位のすり目	精輪	瀬戸・美濃	覆土	30%

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴		出土位置	備 考
4	土師質 土器	焙烙	[32.3]	5.2	[29.0]	長石・石英・雲母・ 赤色砂子	に白点	普通	ロクロナデ	炭焼痕	覆土	5%

第126表 江戸時代炭焼窯跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	全長	規模								覆土	主な出土遺物	時期	備考
					前庭部				炭化室							
					平面形	長軸 × 短軸	壁高	底面	平面形	長軸 × 短軸	壁高	底面				
2	F 5 g7	N-7°-E	風車形	6.08	不整形	3.53 × 2.85	5~22	底状	2.55 × 1.96	30	凹凸	人為 自然	土師質土器・瓦・石 器・石製品・礎	18世紀中葉・ 19世紀前半	SY 3→本跡	
3	F 5 g8	N-19°-E	風車形	6.42	不整形	3.70 × 2.60	2~30	凹凸	2.96 × 1.91	47	凹凸	人為 自然	土師質土器・瓦・石 器・石製品・礎	18世紀中葉・ 19世紀前半	本跡→SY 2	
4	D 2 d8	N-35°-E	楕円形	2.32	—	— × —	—	楕円形	2.32 × 1.86	32	凹状	人為	陶器・土師質土器・ 瓦・土製品・礎	18世紀前半		

(2) 土坑

第828号土坑(第307図 第127表 PL17)

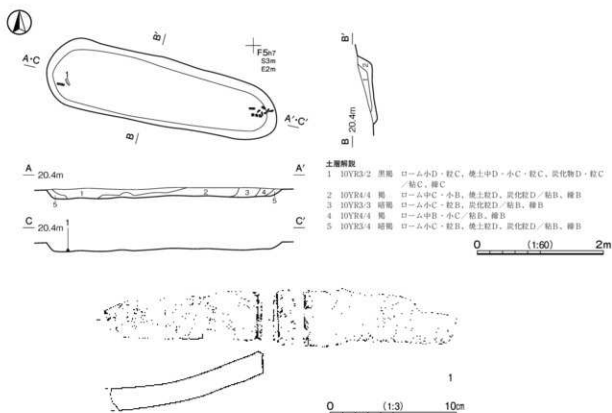
位置 調査区中央部のF 5 h7区、標高20 mほどの斜面部に位置している。

規模と形状 長径3.74m、短径1.07 mの楕円形で、長径方向はN-76°-Wである。深さは20cmで、壁は外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片3点(焙烙)、瓦質土器片2点(不明)、瓦1点(平瓦)、石器1点(安山岩製石臼)、被熱礫(凝灰岩2、石英斑岩1)が出土している。ほかに混入した石器1点が出土している。遺物は主に北西壁寄りの覆土下層から出土している。また、炭化材が東・西壁際の覆土下層から出土している。

所見 第2・3号炭焼窯跡に近接し、炭化材や瓦片・礫が出土していることから、炭焼窯跡と関連した施設と推測される。時期は、第2・3号炭焼窯跡と同じ18世紀中葉～19世紀前葉と考えられる。



第307図 第828土坑・出土遺物実測図

第127表 第828号土坑出土遺物一覧（第307図）

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
1	平瓦	(12.9)	(5.0)	1.7	(111.0)	長石・石英・赤色 粘土	浅黄褐色	面取り ナデ 被熱痕	覆土下層	

(3) 溝跡

第1号溝跡（第309～310図 PL17）

位置 調査区中央部のF6h4～H6d9区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 平成17年度調査区で確認した溝跡の一部である。南北64.75m、東西16.40mを確認した。南端部から北方向（N-8°-W）へ緩やかに東へ屈曲しながら延び、北端部から西へ屈折し、西方向（N-88°-W）へ直線的に延びている。上幅48～120cm、下幅20～73cm、深さ10～24cmである。底面は皿状及び平坦で、壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片50点、土師器片38点、石器1点、礎3点が出土している。

所見 時期は、18世紀中葉～19世紀前葉の第2・3号炭焼窯跡よりも古い第4号溝跡に掘り込まれているため、18世紀代の可能性が高い。斜面部を圍繞するように位置していることは、第4号溝跡と共通し、規模と形状も類似している。

第4号溝跡 (第308図 第128表 PL59)

位置 調査区中央部のF 4e0～H 6d4区、標高17～21mほどの斜面部に位置している。

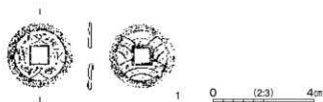
重複関係 第912号土坑、第1号溝跡を掘り込み、第2・3号炭焼窯跡、第816号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北66.95m、東西59.85mを確認した。南端部は斜面部で削平されており、西端部は調査区域外へ延びている。南端部から北方向(N-10°-W)へ東に緩やかに屈曲しながら延び、北端部で弧状を呈しながら屈折し、西方向(N-82°-W)へ直線的に延びている。上幅52～216cm、下幅21～152cm、深さ10～60cmである。底面は皿状及び平坦で、壁は外傾している。

覆土 8層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 銭貨(文久永宝)1点が出土している。ほかに混入した縄文土器片3点、土師器片9点が出土している。1は南部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、18世紀中葉から19世紀前葉の第2・3号炭焼窯に掘り込まれているため、18世紀代の可能性が高く、第1号溝跡よりも新しい。また、出土した銭貨から、19世紀後半にはほぼ埋没していたと考えられる。第1号溝跡が西に屈折した部分を延長するように本跡も同位置で屈折して西へ伸びている。



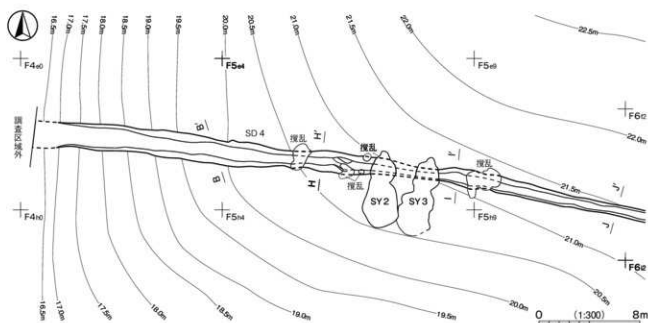
第308図 第4号溝跡出土遺物実測図

第128表 第4号溝跡出土遺物一覧 (第308図)

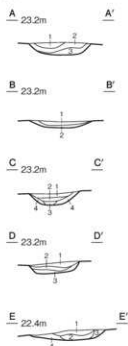
番号	銭貨	径	孔径	厚さ	重量	材質	初周年	特徴	出土位置	備考
1	文久永宝	265	0.55	0.15	4.34	銅	1863	真文	覆土上層	PL59

第129表 江戸時代溝跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	F 6b4～ H 6d9	N-88°-W N-8°-W	L字状	81.15	48～129	20～73	10～24	U字状	外傾	自然	-	本跡→SD 4
4	F 4e0～ H 6d4	N-82°-W N-10°-W	L字状	126.8	52～216	21～152	10～60	U字状	外傾	自然	銭貨	SK912/SD 1→本跡 →SY 2-3, SK916



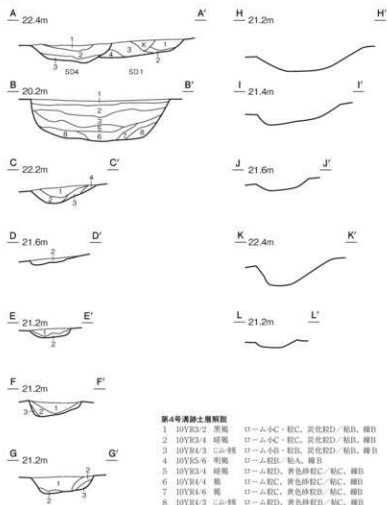
SD 1



第1号溝跡土層解説

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色 | ローム粒D、粘土粒B、炭化粒D |
| 2 10YR3/3 暗褐色 | ローム粒D、粘土粒D |
| 3 10YR4/4 赤褐色 | ローム粒B、粘土A、粘土B |
| 4 10YR5/6 明褐色 | ローム粒B、粘土A、粘土B |

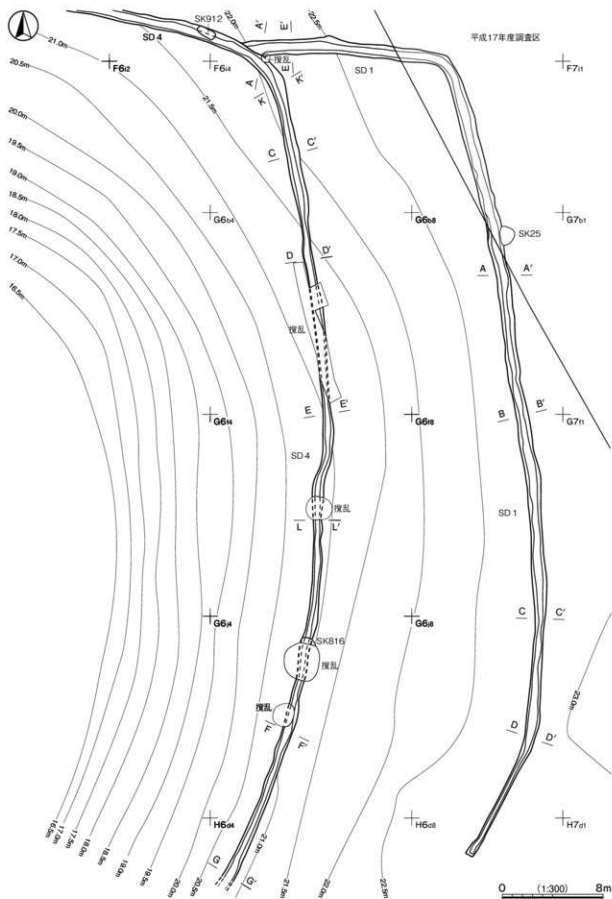
SD 4



第4号溝跡土層解説

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色 | ローム小C・粒C、炭化粒D、粘土B、粘土D |
| 2 10YR3/4 暗褐色 | ローム小C・粒C、炭化粒D、粘土B、粘土D |
| 3 10YR4/3 赤褐色 | ローム小B・粒A、粘土B、粘土D |
| 4 10YR5/6 明褐色 | ローム粒B、黄色砂粒C、粘土C、粘土B |
| 5 10YR3/4 暗褐色 | ローム粒D、黄色砂粒C、粘土C、粘土B |
| 6 10YR4/4 赤褐色 | ローム粒C、黄色砂粒C、粘土C、粘土B |
| 7 10YR4/6 暗褐色 | ローム粒C、黄色砂粒C、粘土C、粘土B |
| 8 10YR4/3 赤褐色 | ローム粒D、黄色砂粒B、粘土C、粘土B |

第309図 第1・4号溝跡実測図(1)

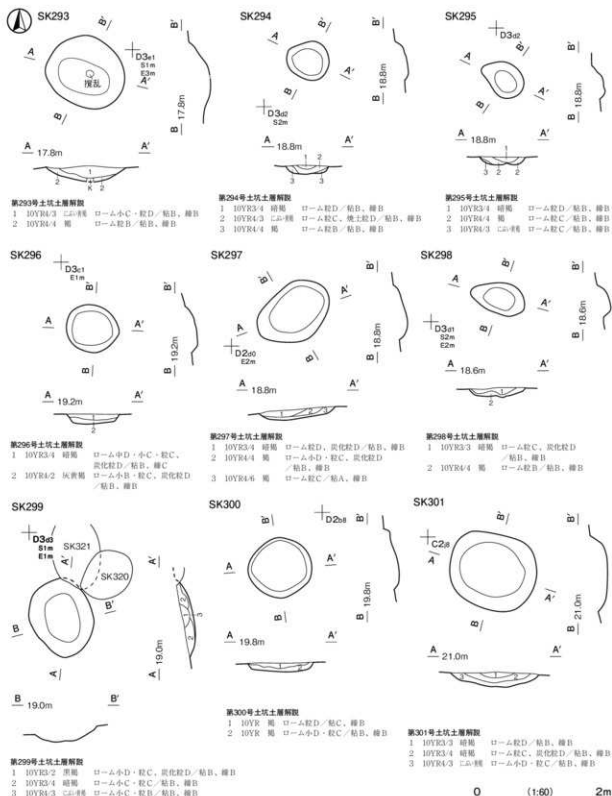


第310図 第1・4号溝跡実測図 (2)

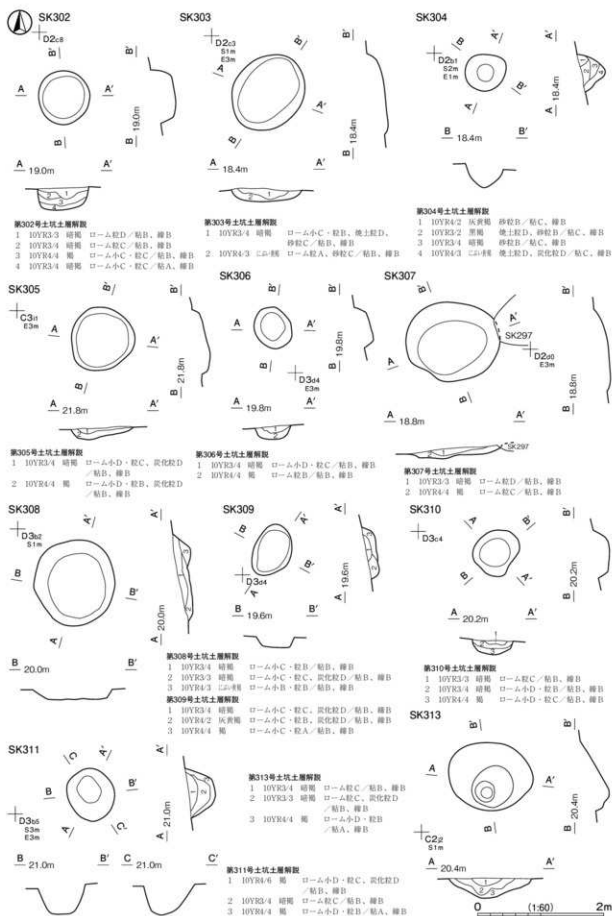
6 その他の遺構と遺物

土坑 566 基、溝跡 2 条を確認した。以下、実測図と一覧表で記載する。

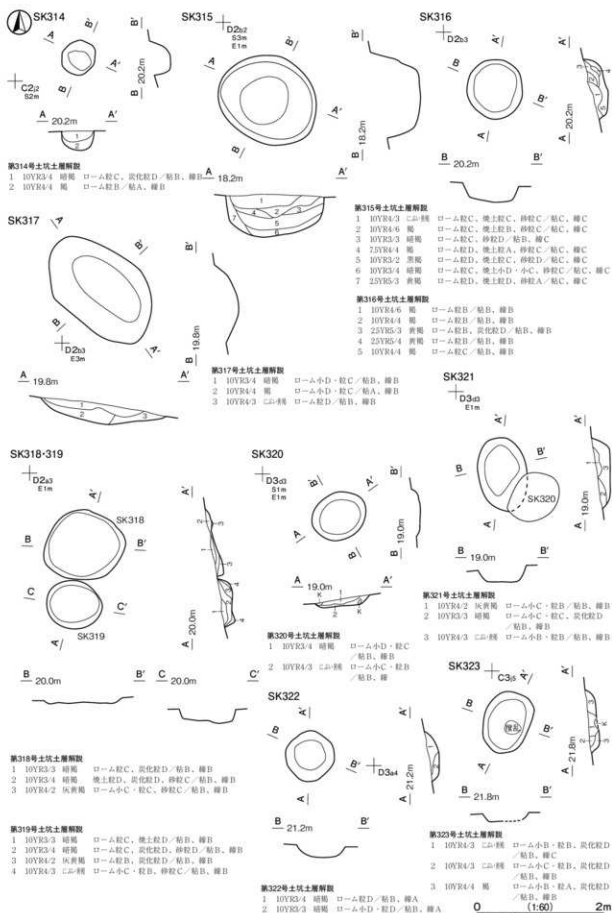
(1) 土坑 (第 311 ~ 366 図 第 130 表)



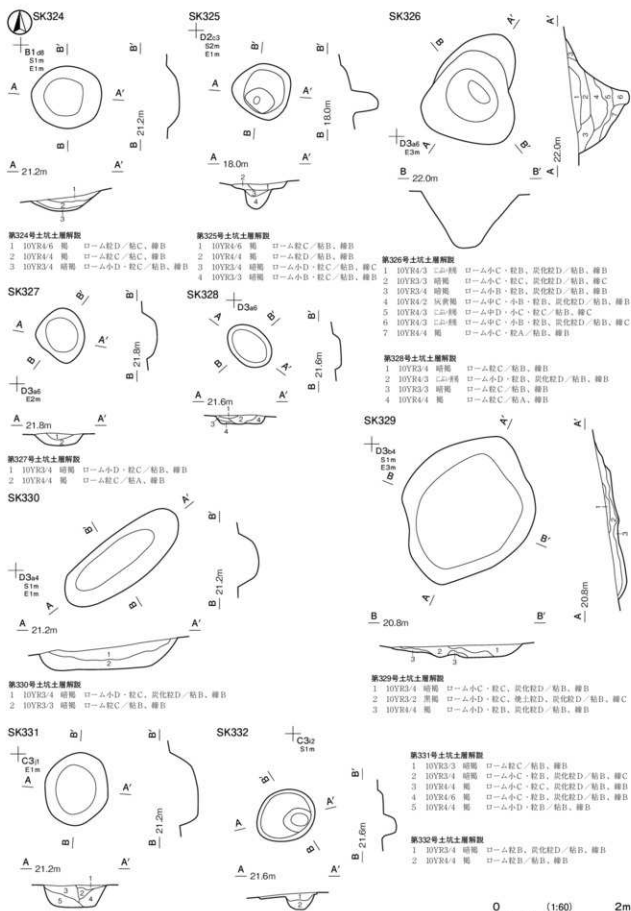
第 311 図 その他の土坑実測図 (1)



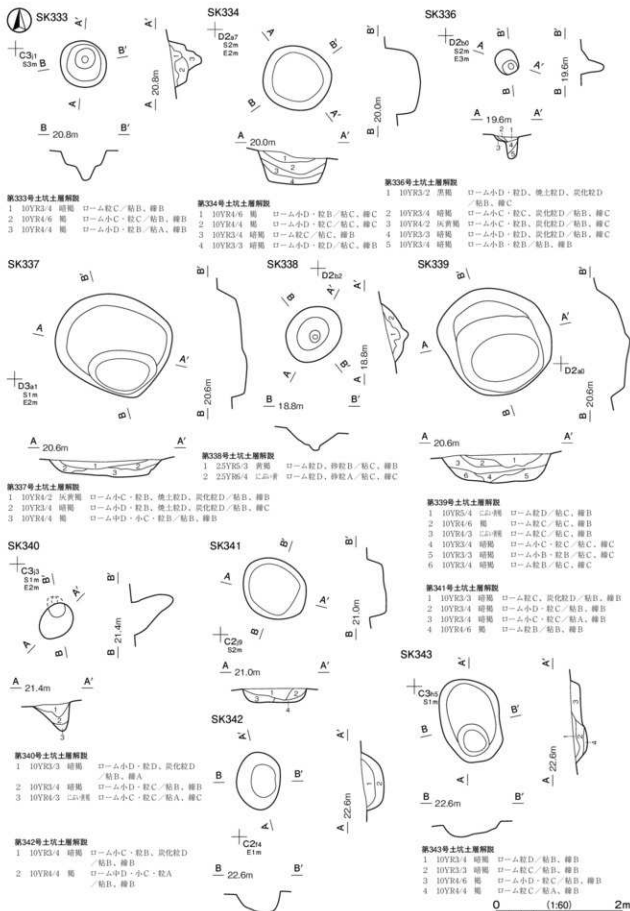
第312図 その他の土坑実測図(2)



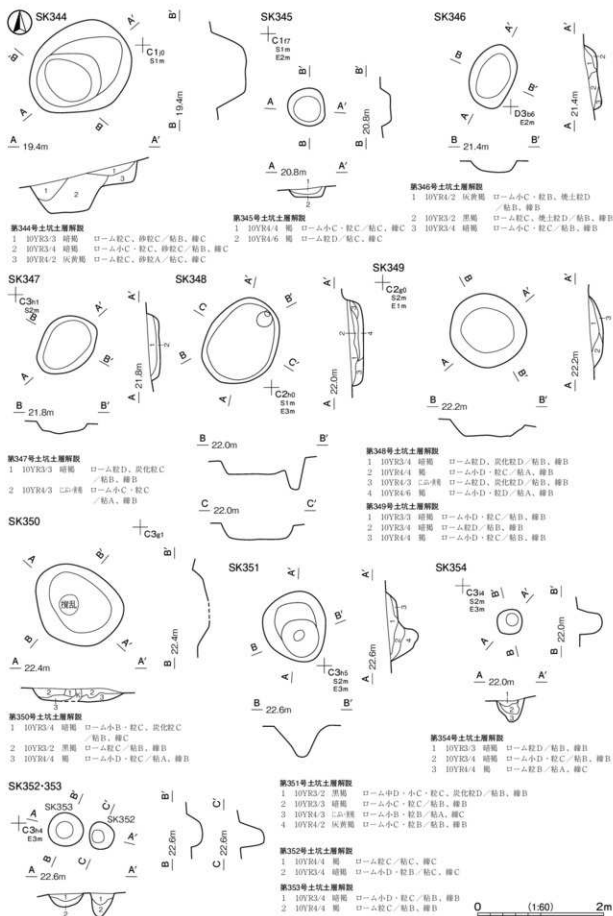
第313図 その他の土坑実測図(3)



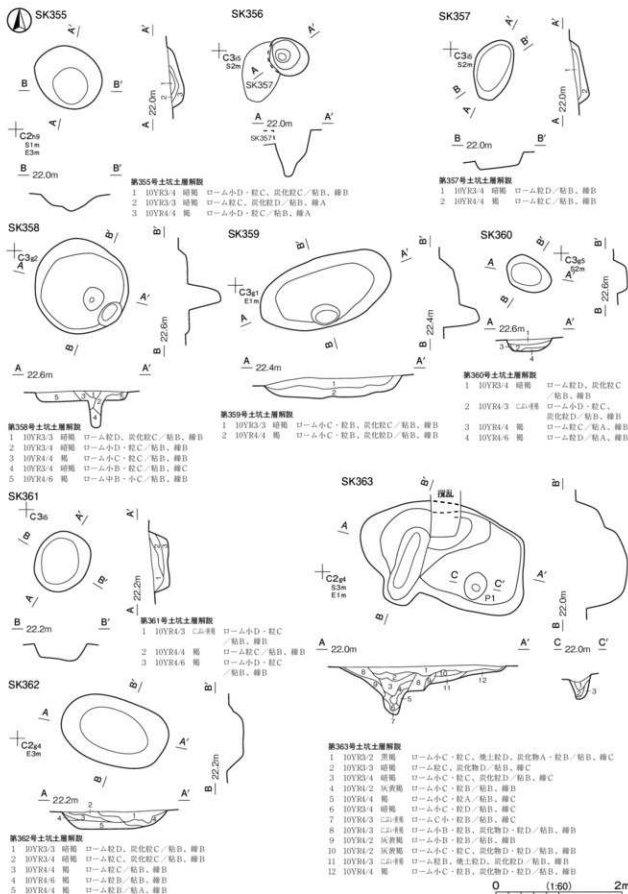
第314図 その他の土坑実測図 (4)



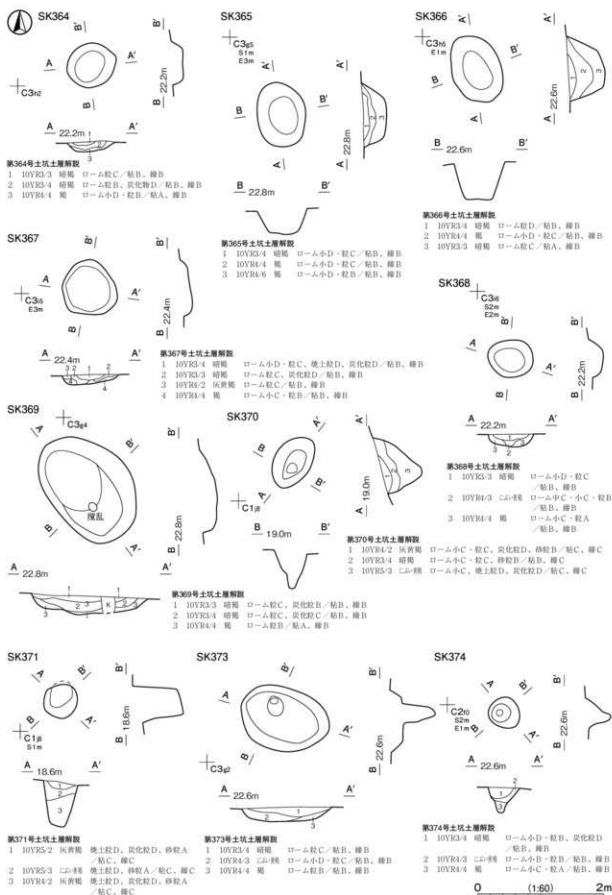
第315図 その他の土坑実測図(5)



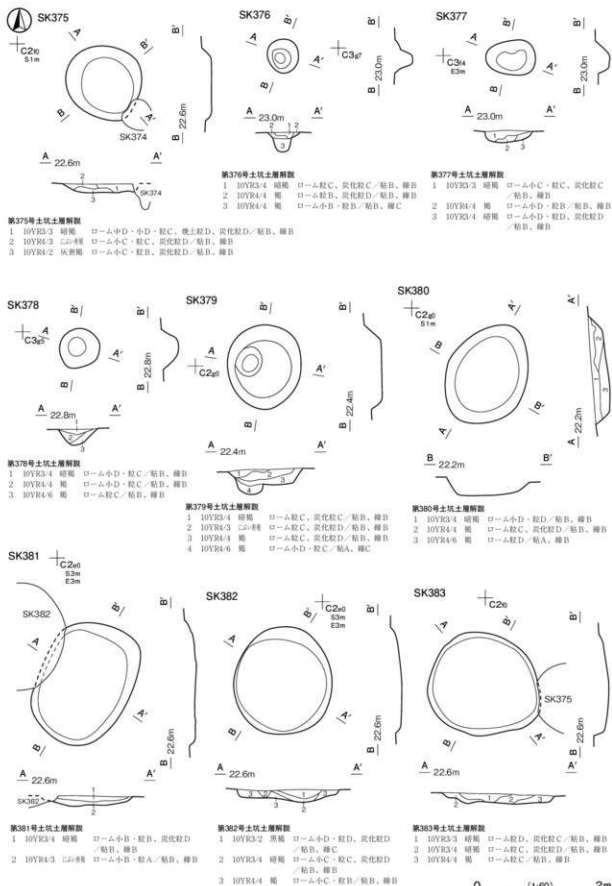
第316図 その他の土坑実測図 (6)



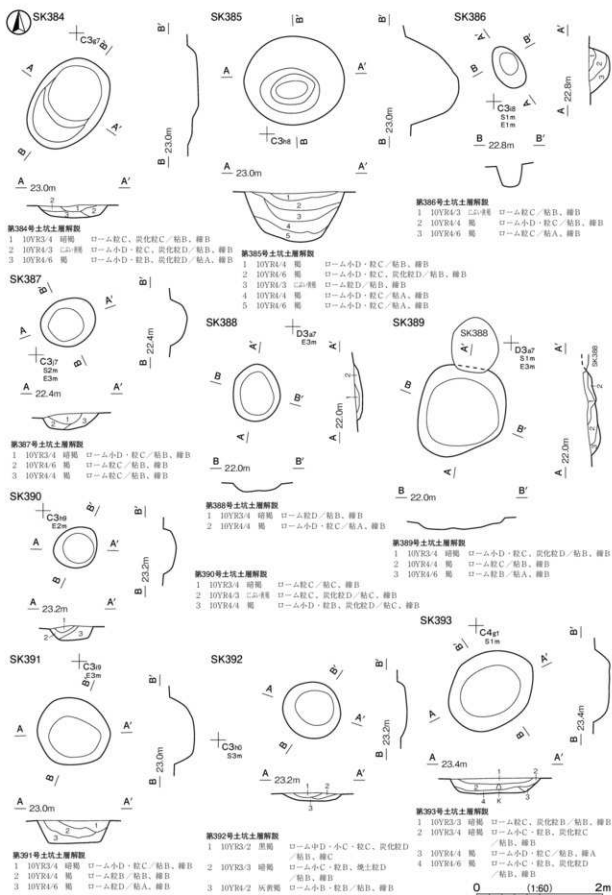
第317図 その他の土坑実測図 (7)



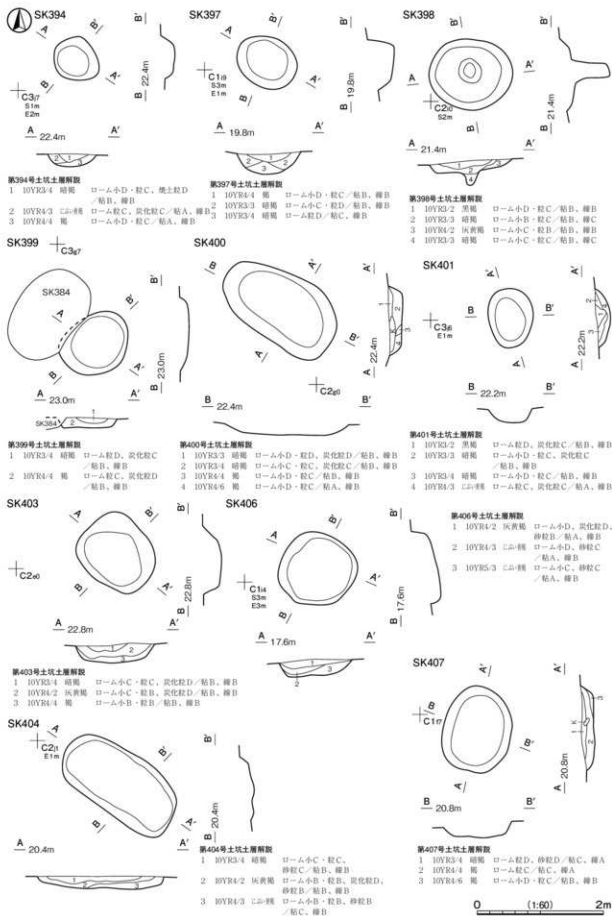
第318図 その他の土坑実測図(8)



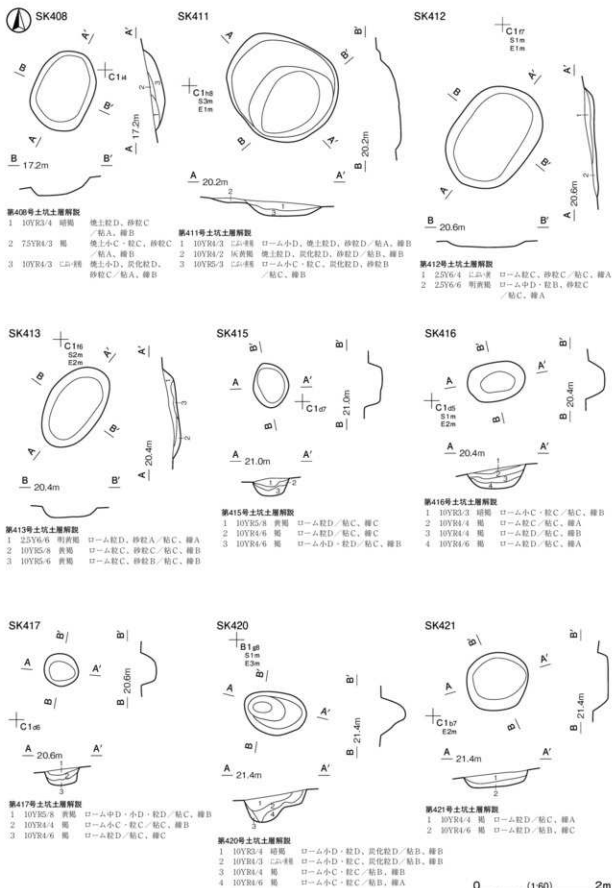
第 319 図 その他の土坑実測図 (9)



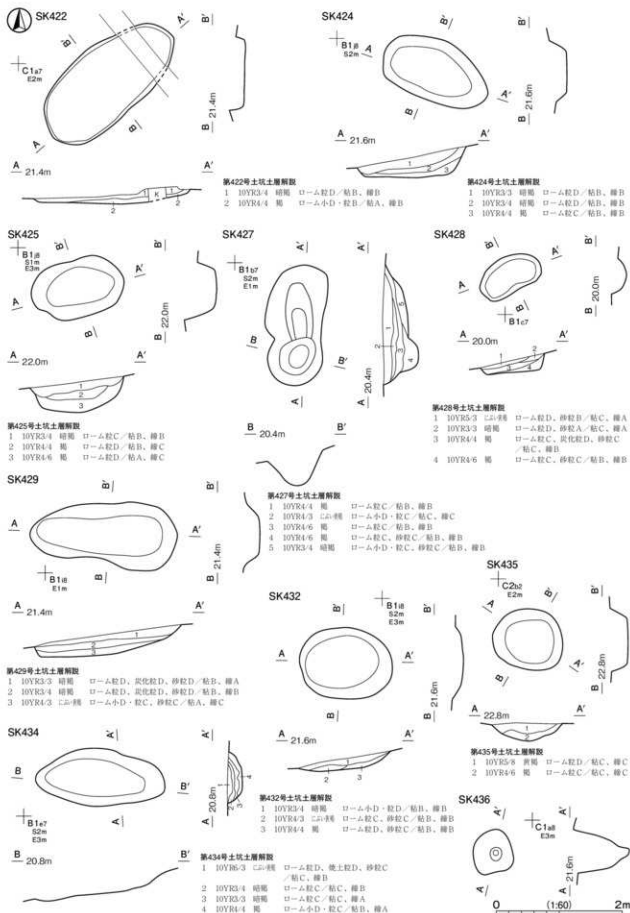
第320図 その他の土坑実測図(10)



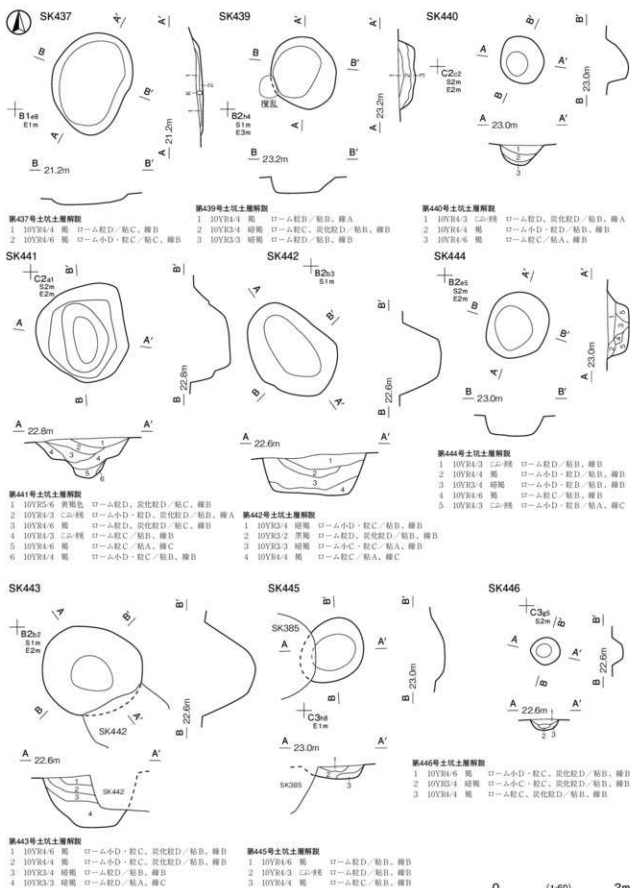
第 321 図 その他の土坑実測図 (11)



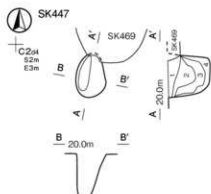
第322図 その他の土坑実測図 (12)



第323図 その他の土坑実測図(13)

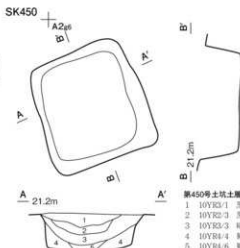


第324図 その他の土坑実測図 (14)



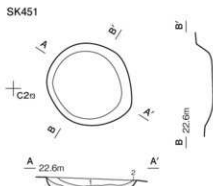
第447号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D / 粘土、礫B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム粒C / 粘土、礫B
- 3 10YR4/6 褐色 ローム小D・粒C / 粘土A、礫B
- 4 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C / 粘土A、礫B



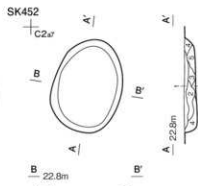
第450号土坑土層解説

- 1 10YR3/1 黒褐色 ローム粒D、炭化粒C / 粘土B、礫B
- 2 10YR2/3 黒褐色 ローム粒D、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 3 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 4 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C / 粘土A、礫B
- 5 10YR4/6 褐色 ローム小D・粒C / 粘土A、礫B



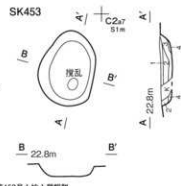
第451号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム粒C / 粘土B、礫B
- 3 10YR4/3 暗褐色 ローム粒C / 粘土B、礫B



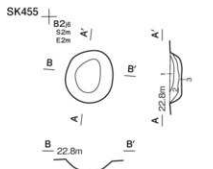
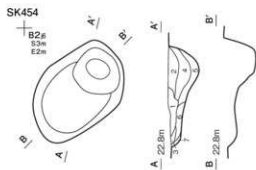
第452号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒D、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C / 粘土B、礫B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D / 粘土A、礫C
- 4 10YR4/3 暗褐色 ローム粒C / 粘土B、礫B
- 5 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D / 粘土A、礫C



第453号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒D、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 2 10YR4/3 暗褐色 ローム粒C、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C / 粘土B、礫B
- 4 10YR4/4 褐色 ローム粒C / 粘土B、礫B

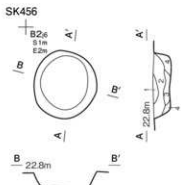


第454号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 3 10YR4/6 褐色 ローム粒D / 粘土B、礫B
- 4 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D / 粘土B、礫B
- 5 10YR3/4 暗褐色 ローム粒C / 粘土B、礫C
- 6 10YR4/6 褐色 ローム粒C / 粘土B、礫B
- 7 10YR4/4 褐色 ローム粒C / 粘土B、礫C

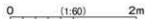
第455号土坑土層解説

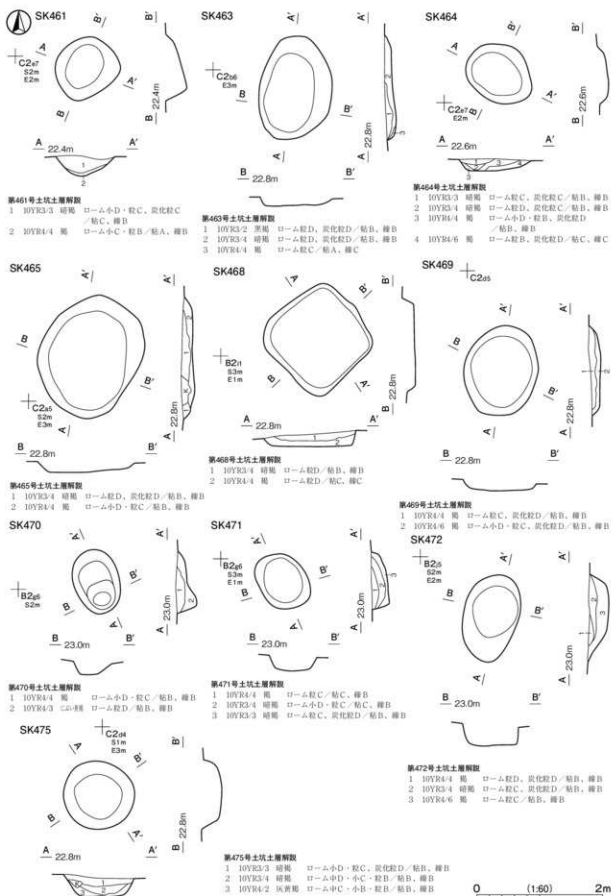
- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒D / 粘土B、礫B
- 3 10YR4/6 褐色 ローム粒C / 粘土B、礫B



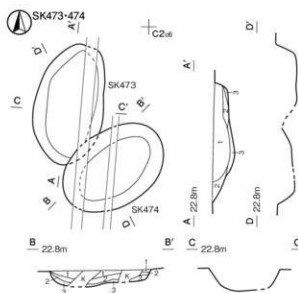
第456号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒C、炭化粒C / 粘土B、礫B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム粒C、炭化粒D / 粘土B、礫B
- 3 10YR4/6 褐色 ローム小D・粒B / 粘土A、礫B
- 4 10YR4/3 暗褐色 ローム小D・粒B / 粘土A、礫B





第326図 その他の土坑実測図(16)

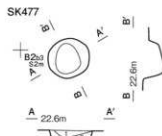


第473号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒D、炭化粒C/粘B、雜B
- 2 10YR4/3 赤褐色 ローム粒C/粘B、雜B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム粒C/粘A、雜B

第474号土坑土層解説

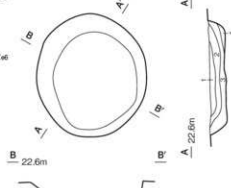
- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒D、炭化粒C/粘B、雜B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒C、炭化粒C/粘B、雜B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C/粘B、雜B



第477号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒C、炭化粒D/粘B、雜B
- 2 10YR4/3 赤褐色 ローム粒C/粘B、雜B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D/粘B、雜B

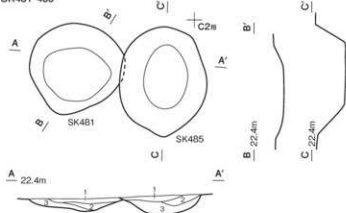
SK479



第479号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒C/粘B、雜B
- 2 10YR4/3 赤褐色 ローム小A・粒B/粘B、雜B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小C・粒C/粘B、雜B
- 4 10YR4/3 赤褐色 ローム小D・粒D/粘A、雜C

SK481-485



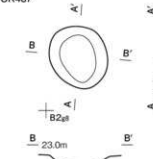
第481号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒C、炭化粒C/粘B、雜B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム粒B/粘A、雜B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C/粘B、雜B

第485号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒C/粘B、雜B
- 2 10YR2/4 暗褐色 ローム粒D/粘B、雜B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C/粘B、雜B

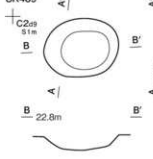
SK487



第487号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D/粘C、雜B
- 2 10YR4/3 赤褐色 ローム小D・粒C/粘C、雜B

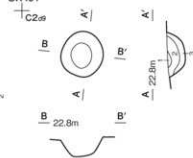
SK489



第489号土坑土層解説

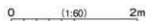
- 1 10YR4/3 赤褐色 ローム小D・粒D/粘A、雜B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C/粘A、雜B

SK491

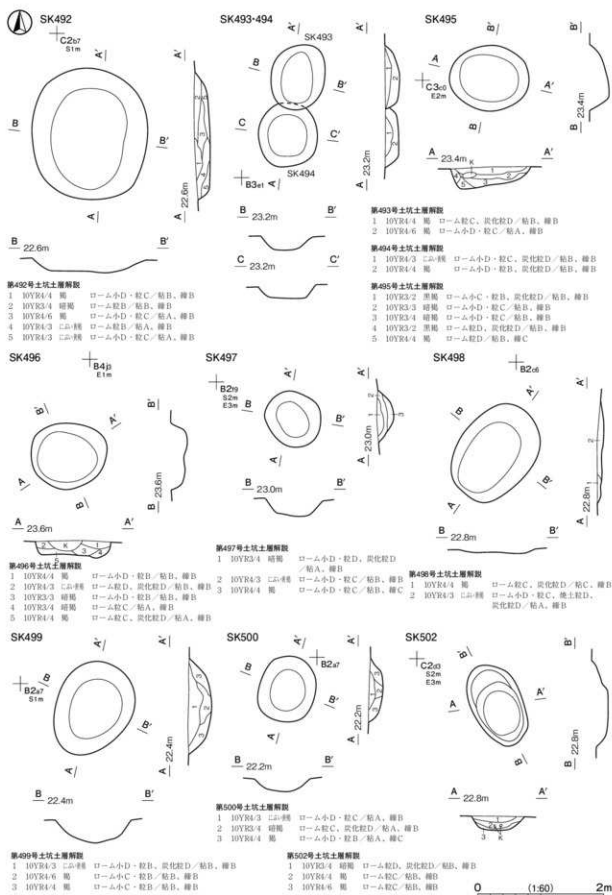


第491号土坑土層解説

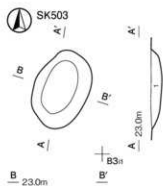
- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒D、炭化粒D/粘B、雜B
- 2 10YR4/3 赤褐色 ローム小D・粒C/粘B、雜B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒B/粘A、雜B



第327図 その他の土坑実測図 (17)

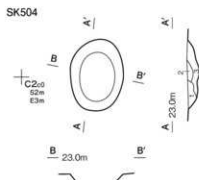


第328図 その他の土坑実測図(18)



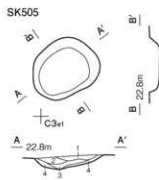
第503号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘A、粘B



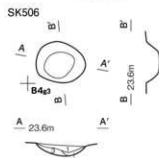
第504号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR3/3 暗褐色 ローム粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小C・粒B、炭化粒D／粘A、粘B



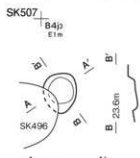
第505号土坑土層解説

- 1 10YR4/3 灰褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒C／粘B、粘B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 4 10YR4/6 褐色 ローム小C・粒B／粘B、粘B



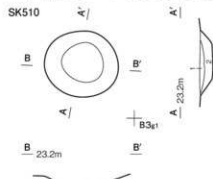
第506号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 ローム小B・粒B、粘B、粘B
- 3 10YR4/3 灰褐色 ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、粘B



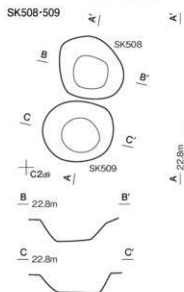
第507号土坑土層解説

- 1 10YR4/6 褐色 ローム粒C／粘B、粘B



第510号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小C・粒B、炭化粒C／粘B、粘B

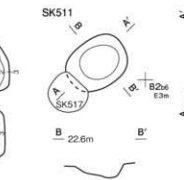


第508号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 3 10YR4/6 褐色 ローム小D・粒C／粘A、粘B

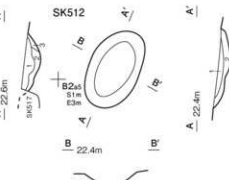
第509号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR4/3 灰褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘A、粘B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘A、粘B



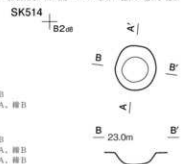
第511号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小C・粒C／粘B、粘B
- 3 10YR4/3 灰褐色 ローム小D・粒D／粘B、粘B



第512号土坑土層解説

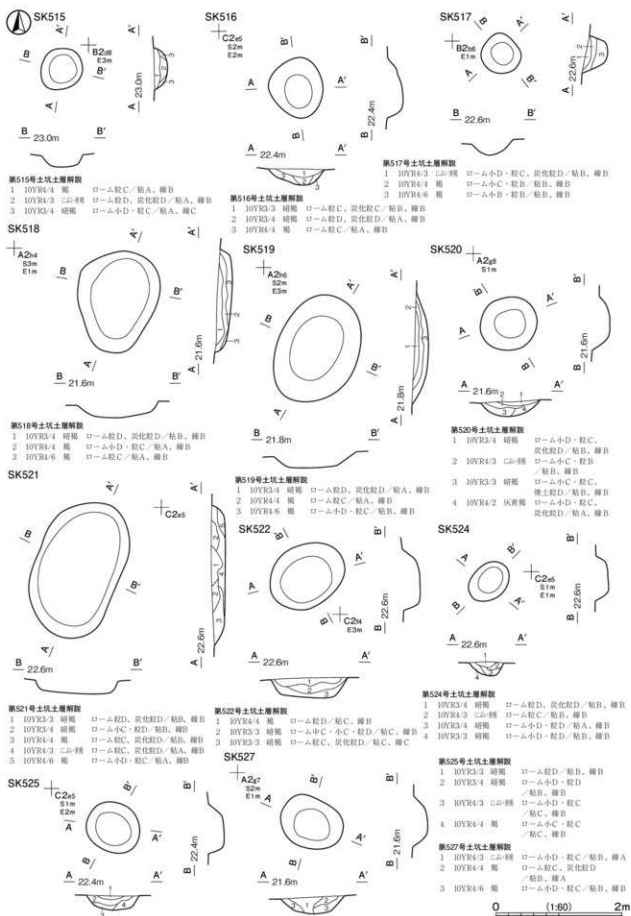
- 1 10YR4/3 灰褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘A、粘B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C／粘A、粘B



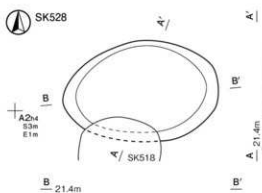
第514号土坑土層解説

- 1 10YR4/3 灰褐色 ローム粒C、炭化粒D／粘B、粘B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C／粘A、粘B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘A、粘B

0 (1.80) 2m



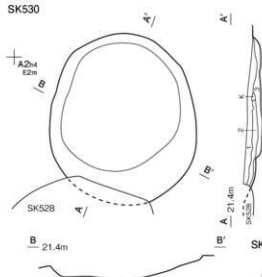
第330図 その他の土坑実測図 (20)



第528号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C／粘土、雑B

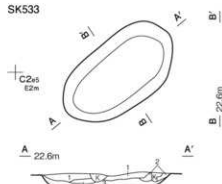
SK530



第530号土坑土層解説

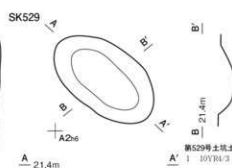
- 1 10YR4/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C／粘土、雑B
- 3 10YR4/6 暗褐色 ローム粒C／粘土、雑B

SK533



第533号土坑土層解説

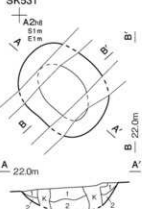
- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒D、炭化粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/3 暗褐色 ローム粒C／粘土、雑C
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C／粘土、雑C



第529号土坑土層解説

- 1 10YR4/2 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘土、雑B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒C／粘土、雑B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム粒B／粘土、雑B
- 4 10YR4/6 暗褐色 ローム粒B／粘土、雑C

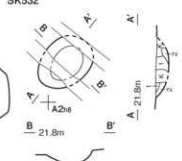
SK531



第531号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/3 暗褐色 ローム小D・粒C／粘土、雑B

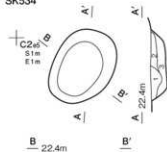
SK532



第532号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/2 暗褐色 ローム小C・粒B、炭化粒D／粘土、雑B

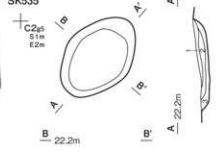
SK534



第534号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒D／粘土、雑B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム小D・粒C、雑B

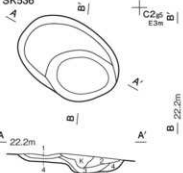
SK535



第535号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム小C・粒D／粘土、雑C
- 2 10YR4/3 暗褐色 ローム粒D／粘土、雑C
- 3 10YR4/4 褐色 ローム小D・粒C、雑B

SK536

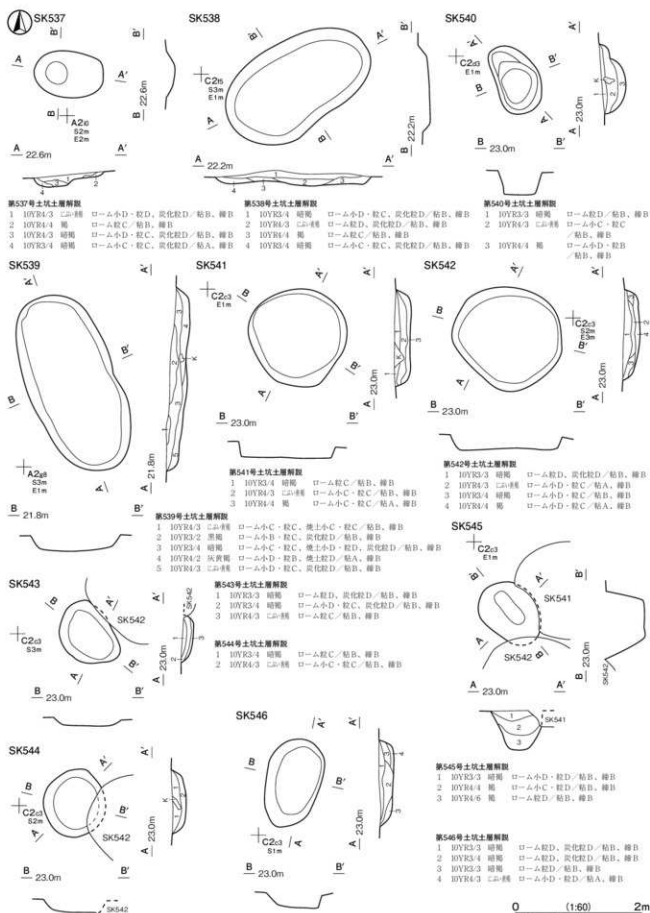


第536号土坑土層解説

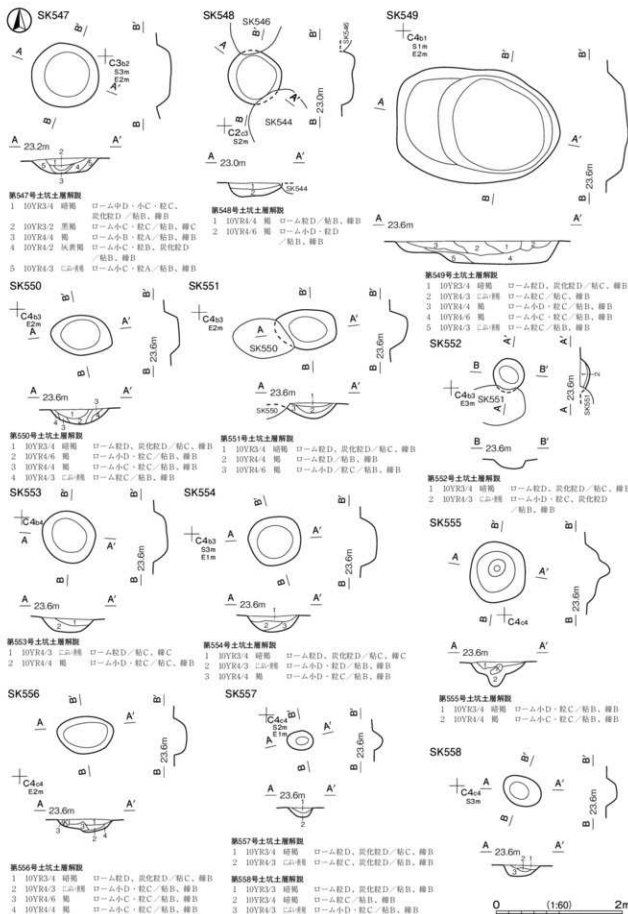
- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D／粘土、雑B
- 2 10YR4/3 暗褐色 ローム粒D／粘土、雑B
- 3 10YR4/4 褐色 ローム粒D／粘土、雑B
- 4 10YR4/6 暗褐色 ローム小D・粒C／粘土、雑B

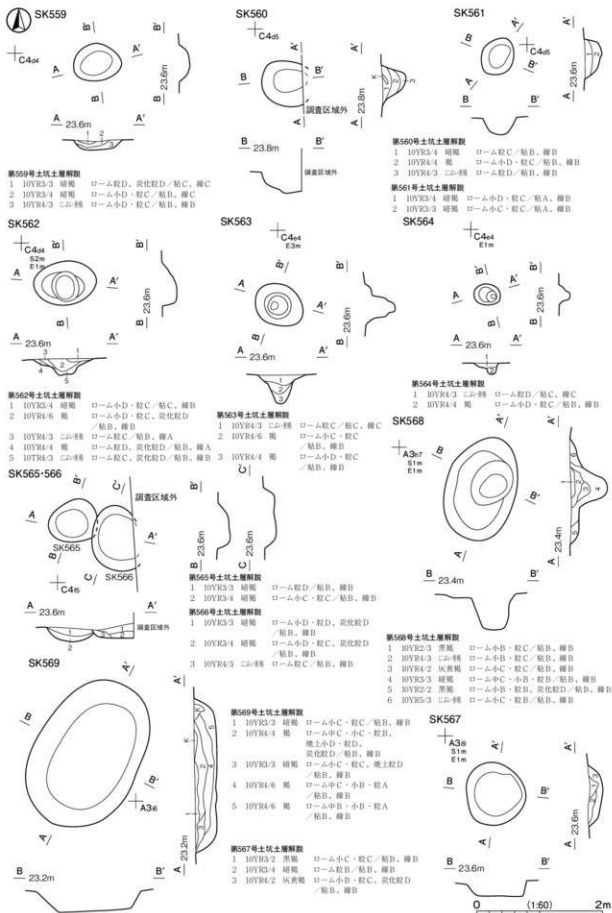


第331図 その他の土坑実測図 (21)

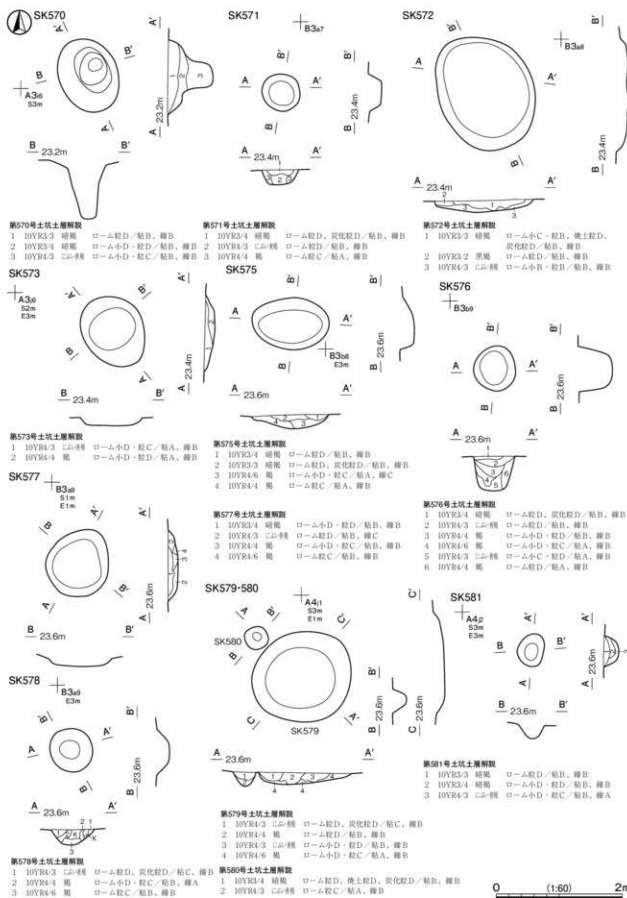


第332図 その他の土坑実測図 (22)

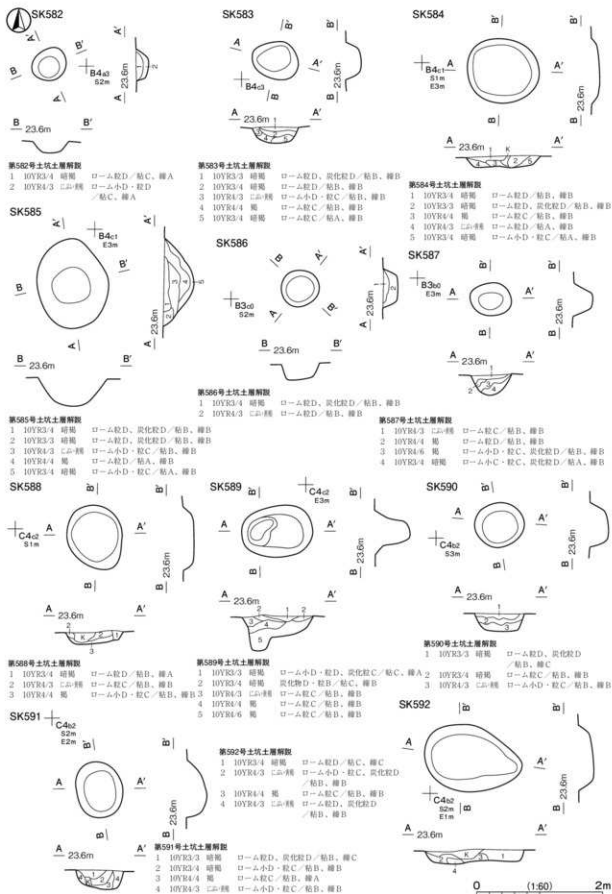




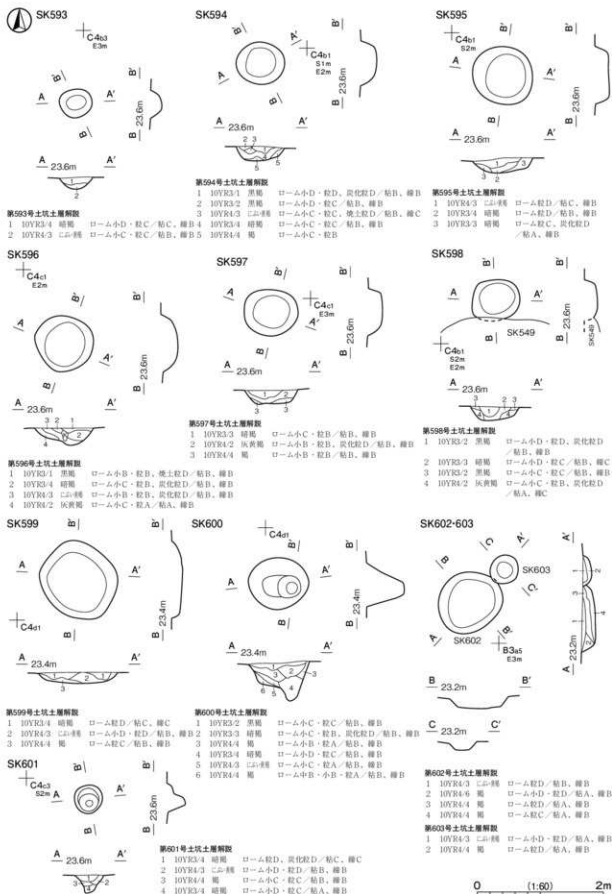
第334図 その他の土坑実測図 (24)



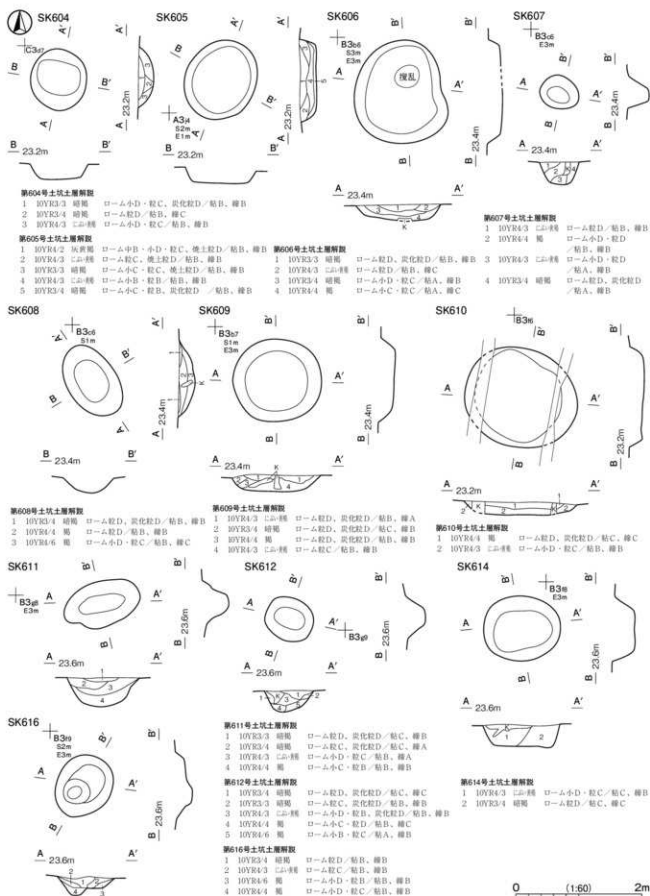
第 335 図 その他の土坑実測図 (25)



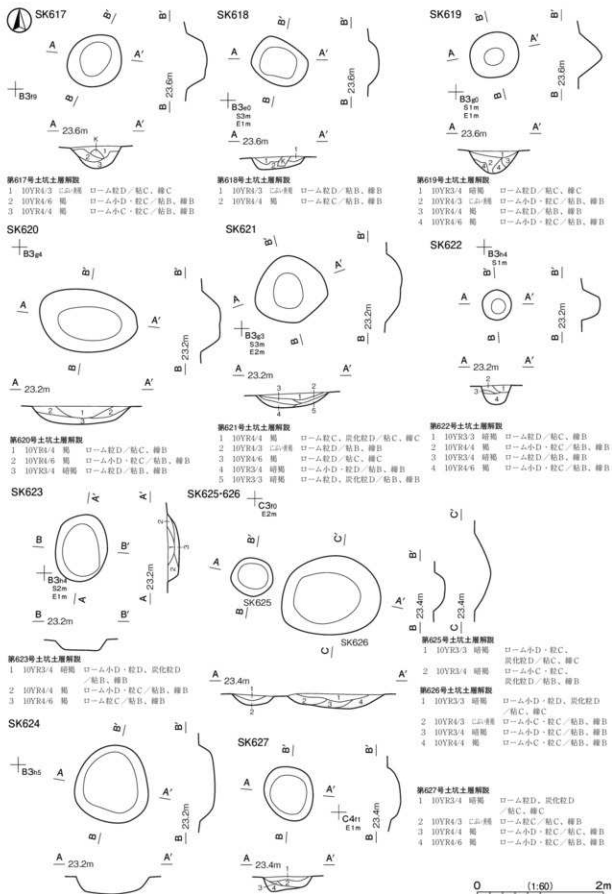
第336図 その他の土坑実測図 (26)



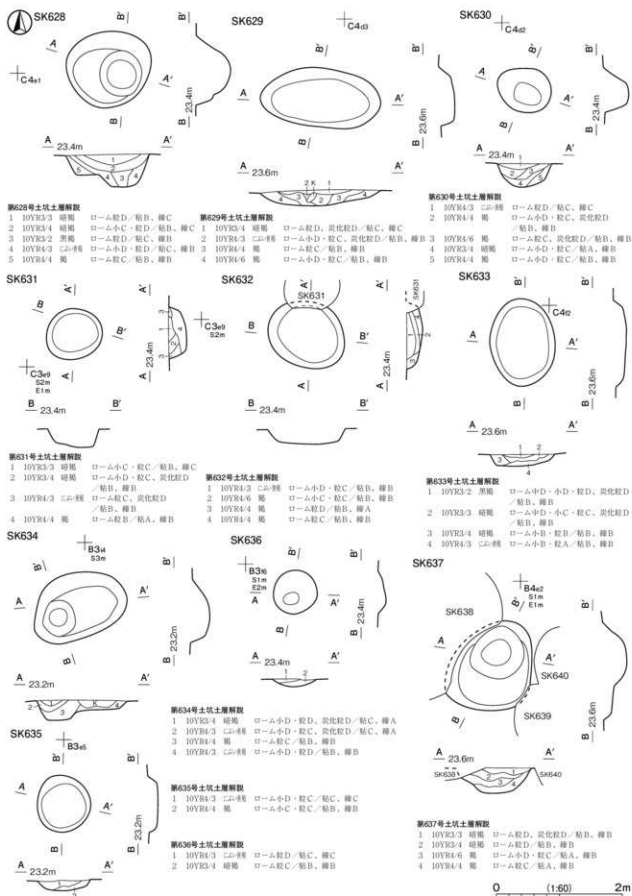
第337図 その他の土坑実測図 (27)



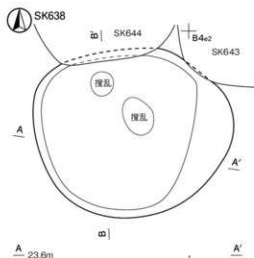
第338図 その他の土坑実測図 (28)



第339図 その他の土坑実測図(29)



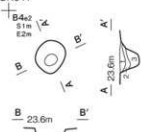
第340図 その他の土坑実測図 (30)



第638号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D/粘土、礫B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム小D、炭化粒D/粘土、礫B
- 4 10YR4/3 赤褐色 ローム粒C/粘土、礫C
- 5 10YR4/4 暗褐色 ローム小D、粒C/粘土、礫C

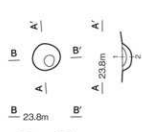
SK641



第641号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B
- 2 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B
- 3 10YR4/3 赤褐色 ローム粒C/粘土、礫B

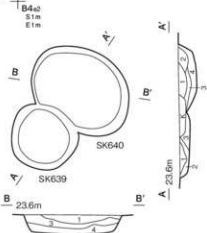
SK642



第642号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム粒C/粘土、礫B

SK639-640



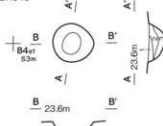
第639号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B
- 2 10YR4/3 赤褐色 ローム粒C/粘土、礫B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B

第640号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム小C、粒C、炭化粒D/粘土、礫B
- 2 10YR3/2 黒褐色 ローム小D、粒D/粘土、礫B
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 ローム小C、粒B/粘土、礫B
- 4 10YR4/4 暗褐色 ローム小C、粒A/粘土、礫B

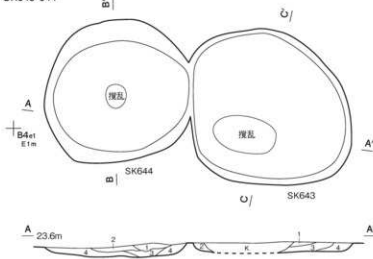
SK645



第645号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫C
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム小D、粒C/粘土、礫B
- 3 10YR4/3 赤褐色 ローム粒C/粘土、礫B

SK643-644



第643号土坑土層解説

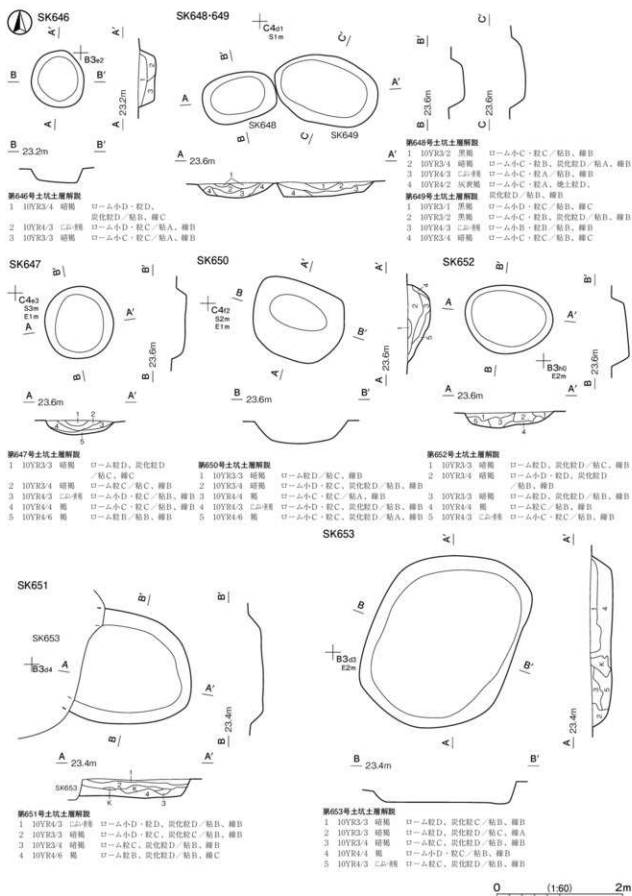
- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D/粘土、礫B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D/粘土、礫B
- 3 10YR4/3 赤褐色 ローム小D、粒D/粘土、礫B
- 4 10YR4/4 暗褐色 ローム粒C/粘土、礫B

第644号土坑土層解説

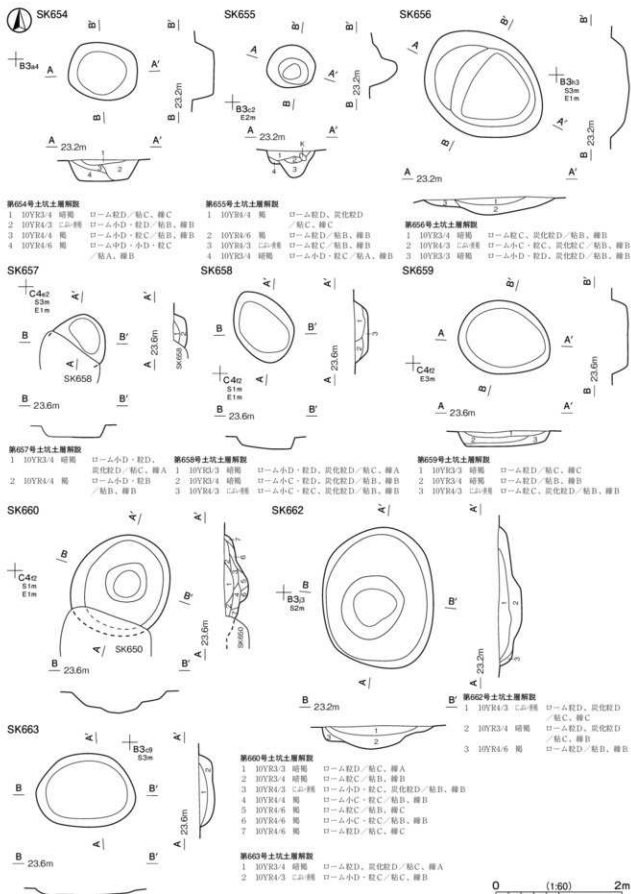
- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒D、炭化粒D/粘土、礫B
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム小D、粒C/粘土、礫B
- 3 10YR3/4 暗褐色 ローム小D、粒C/粘土、礫B
- 4 10YR4/3 赤褐色 ローム粒D/粘土、礫B

0 (1:60) 2m

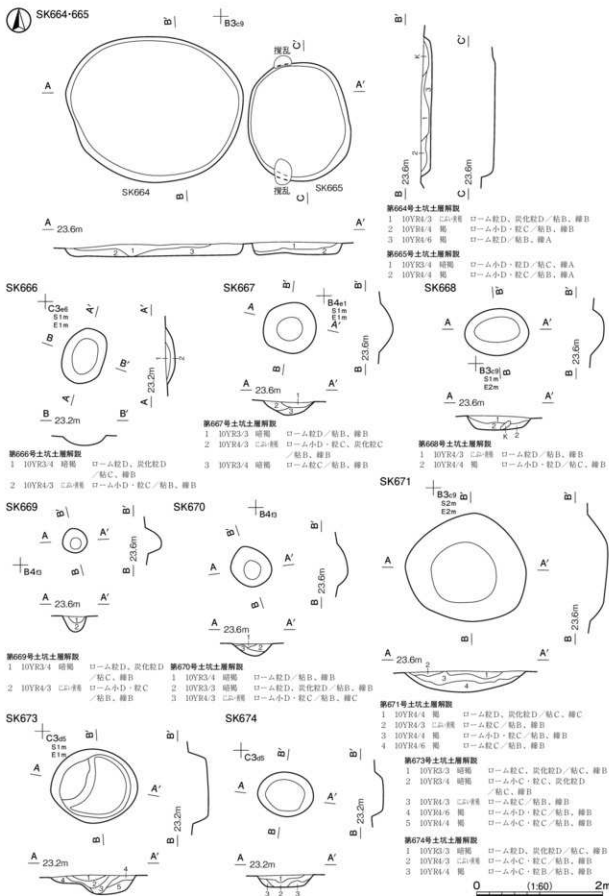
第341図 その他の土坑実測図 (31)



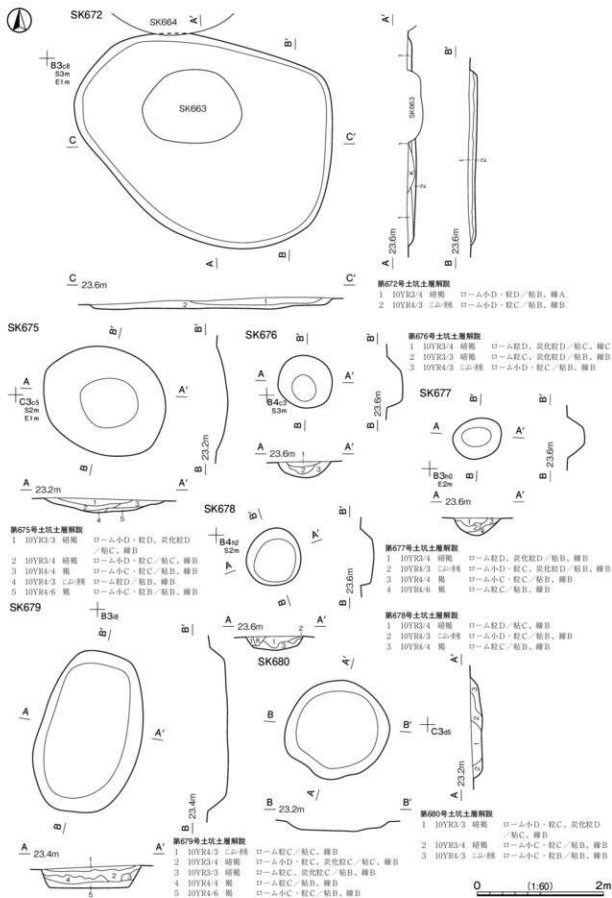
第342図 その他の土坑実測図 (32)



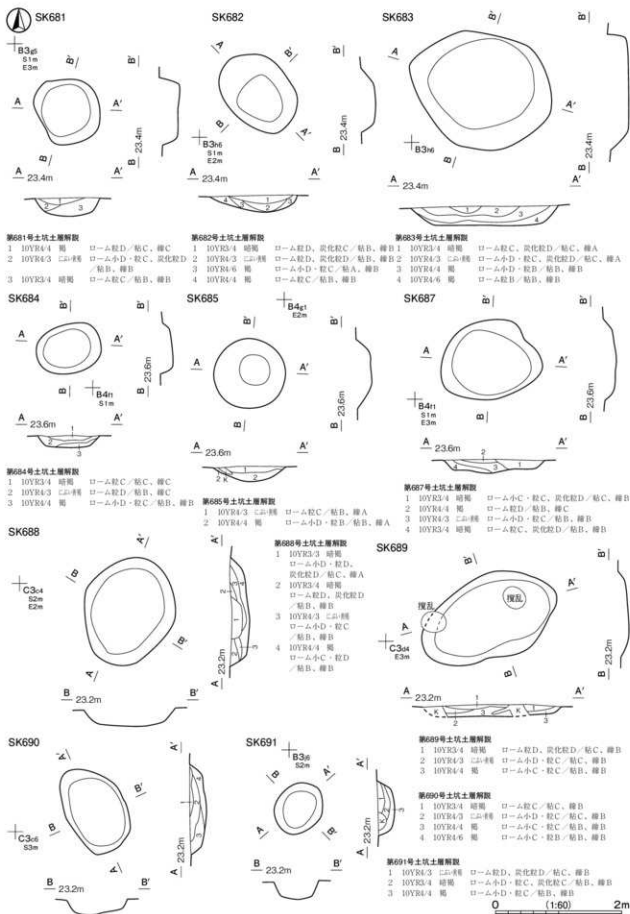
第 343 図 その他の土坑実測図 (33)



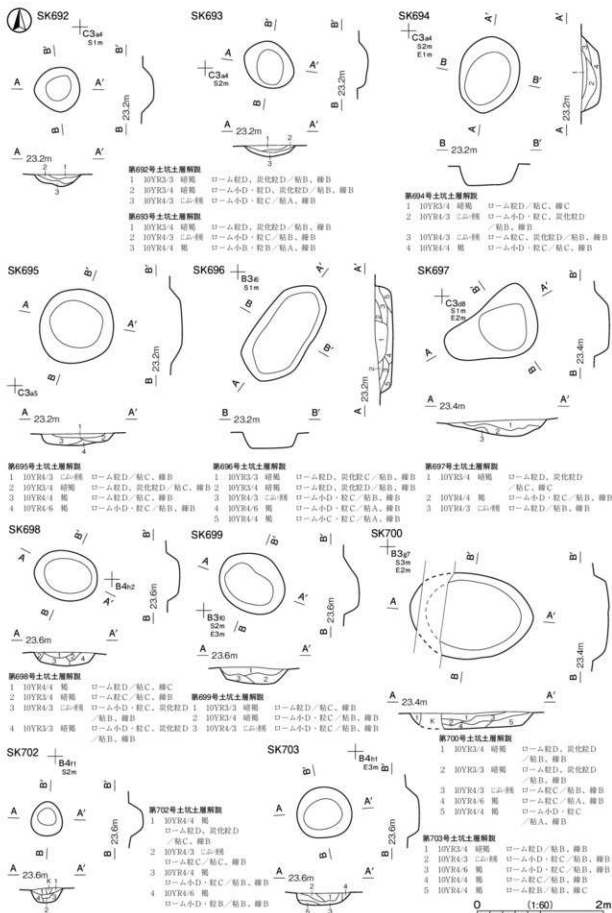
第344図 その他の土坑実測図 (34)



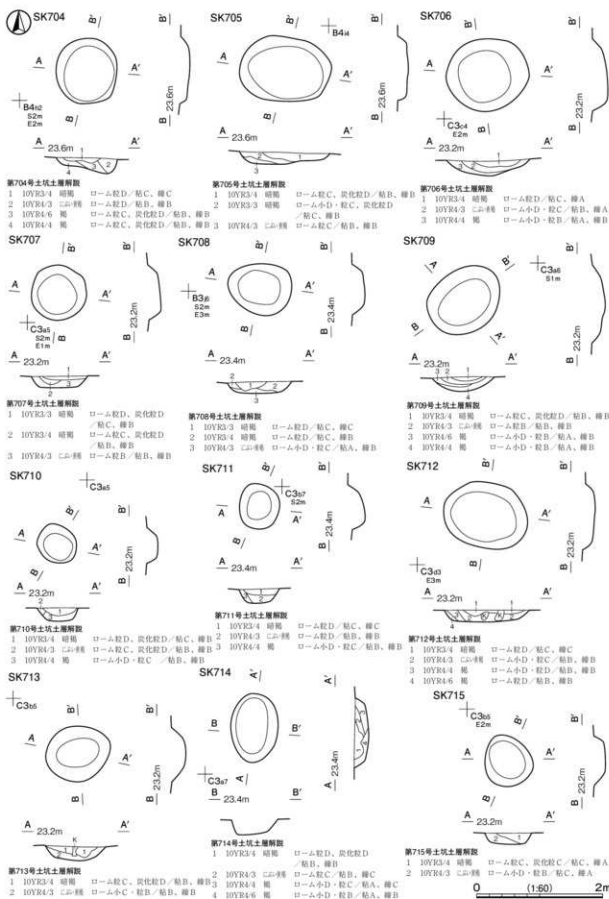
第345図 その他の土坑実測図 (35)



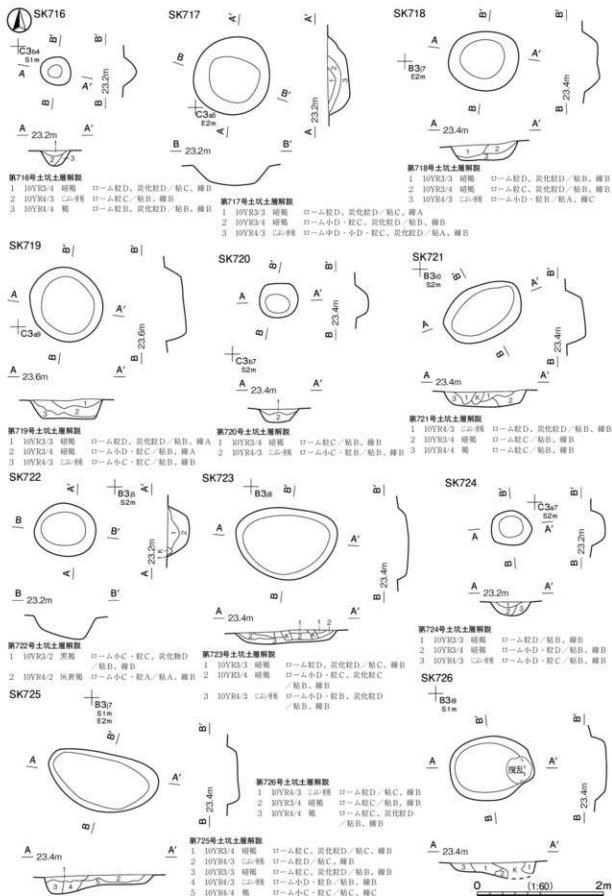
第346図 その他の土坑実測図 (36)



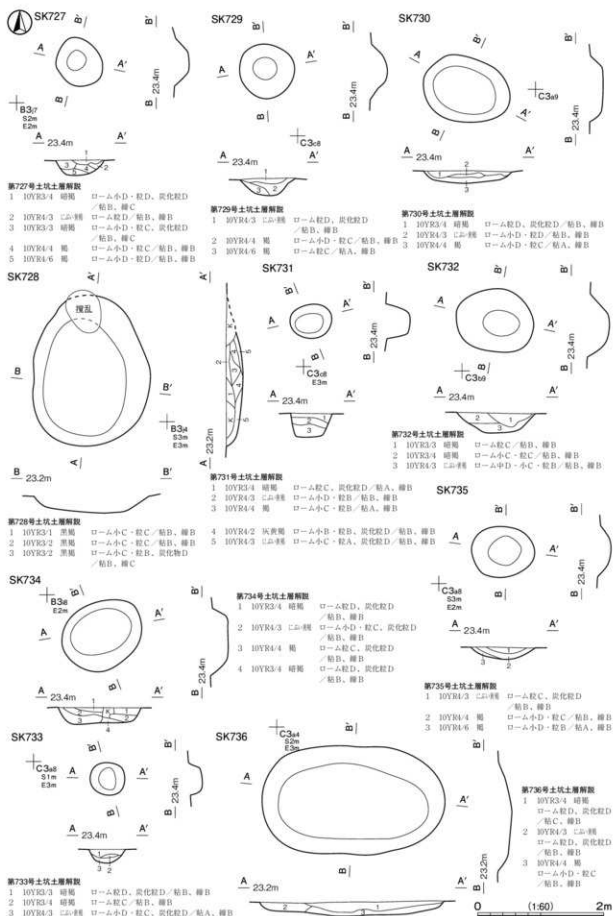
第347図 その他の土坑実測図 (37)

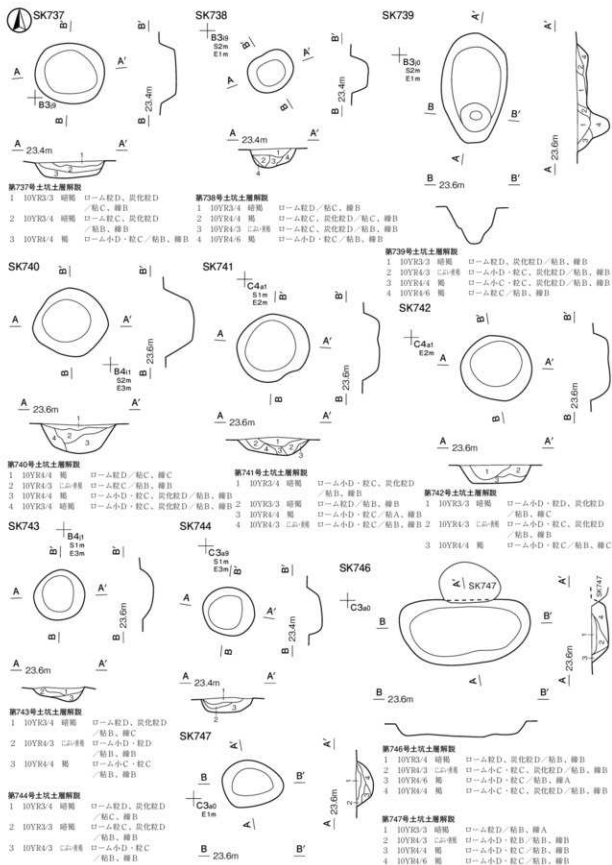


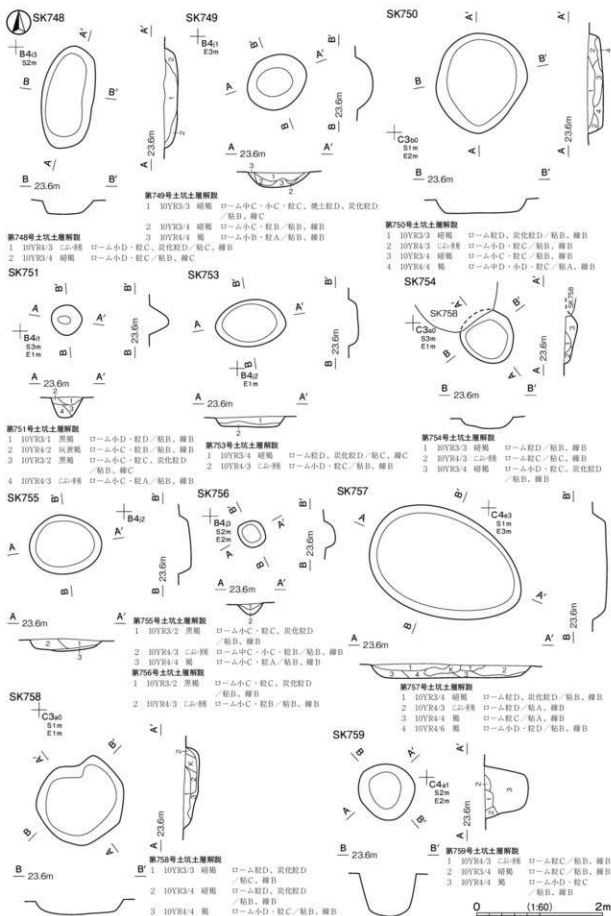
第348図 その他の土坑実測図 (38)



第349図 その他の土坑実測図 (39)

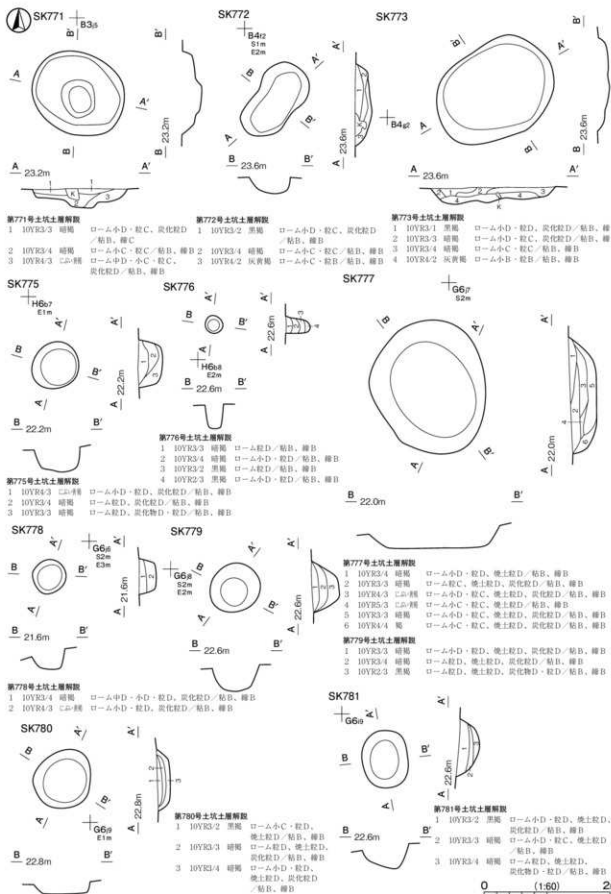




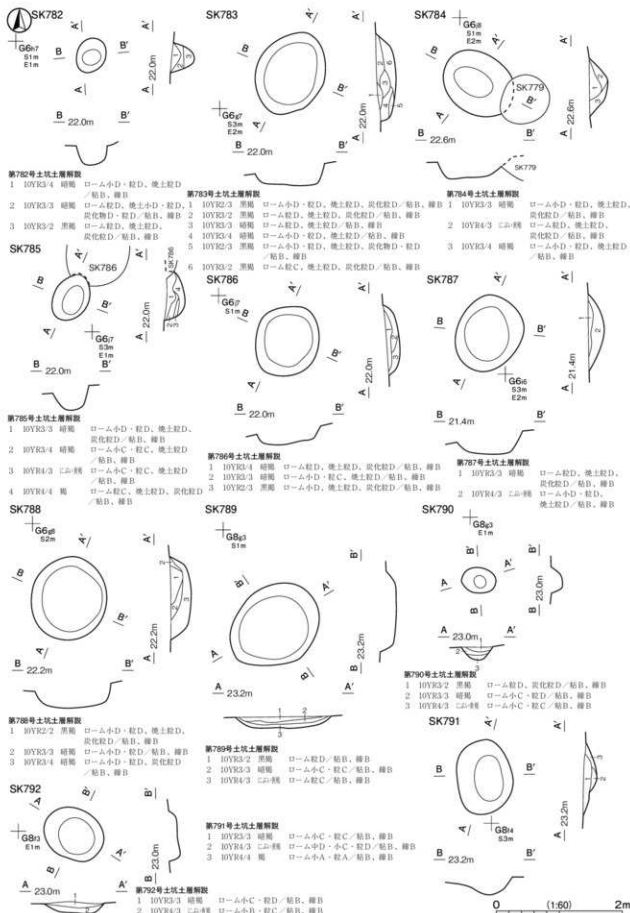


第352図 その他の土坑実測図 (42)

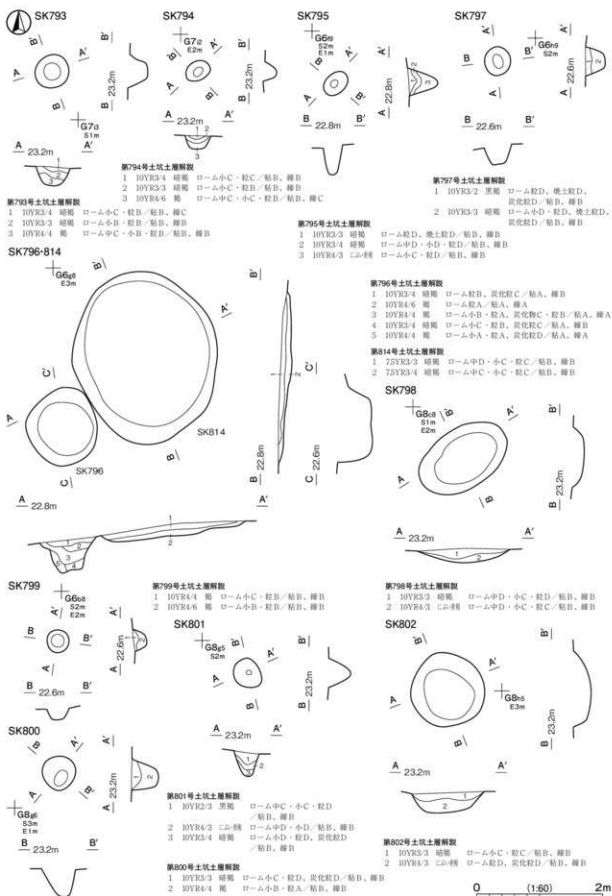




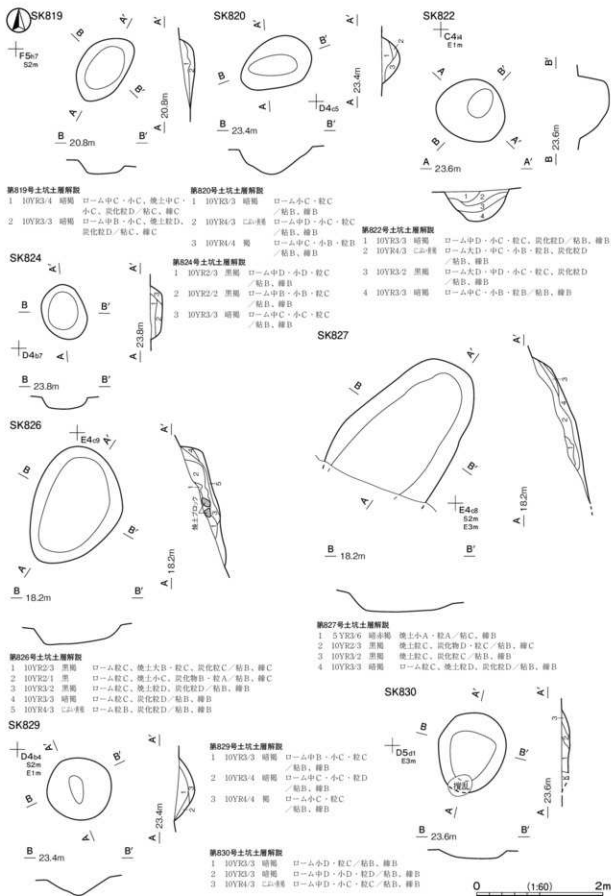
第354図 その他の土坑実測図 (44)



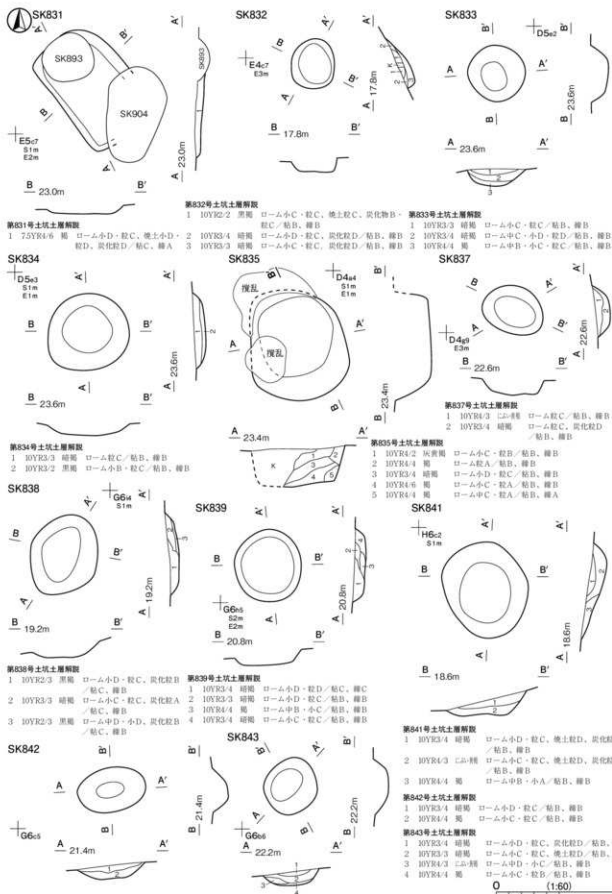
第355図 その他の土坑実測図 (45)



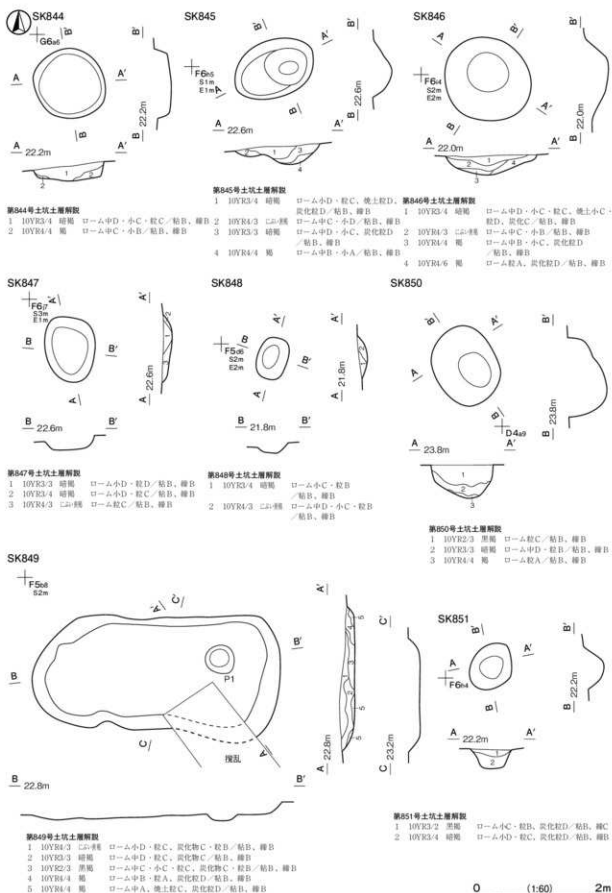
第356図 その他の土坑実測図(46)



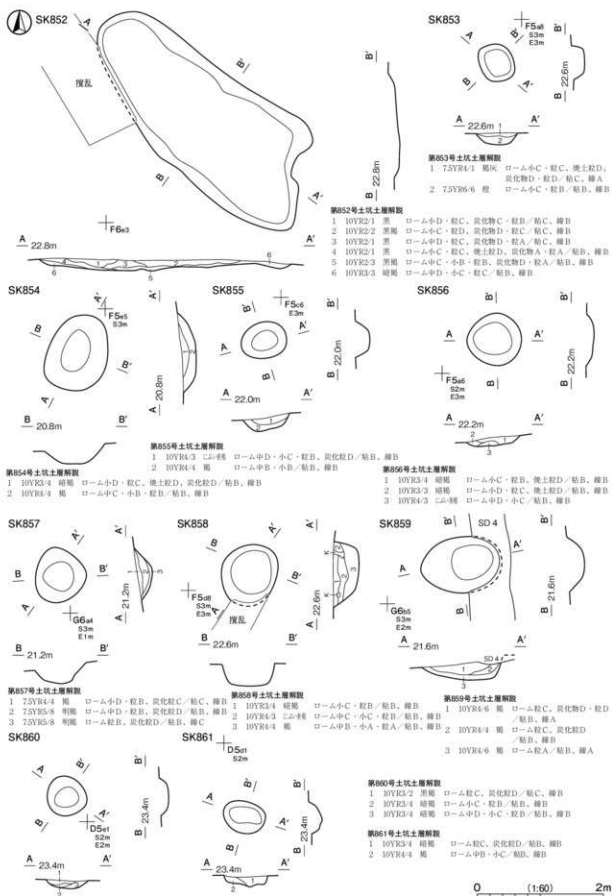
第358図 その他の土坑実測図(48)



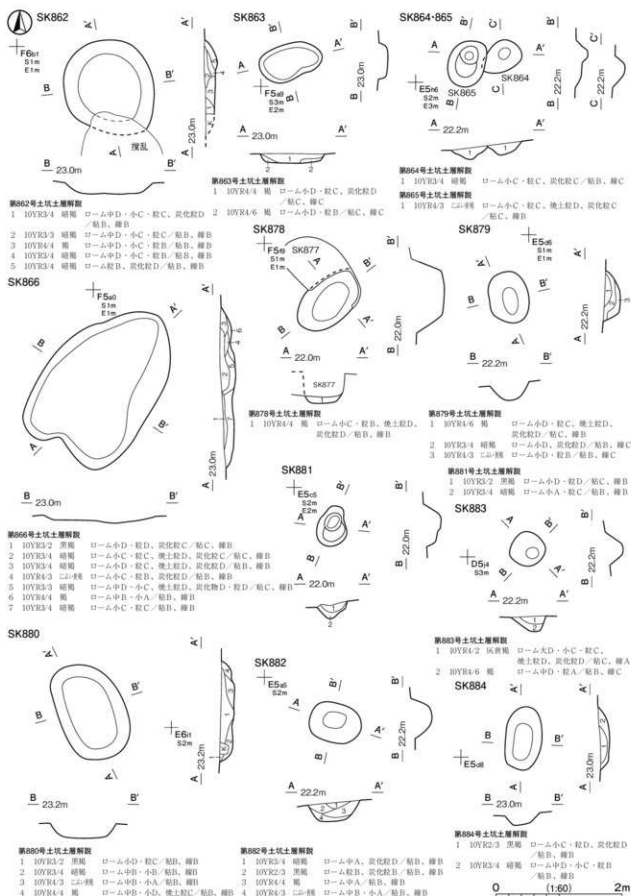
第359図 その他の土坑実測図 (49)



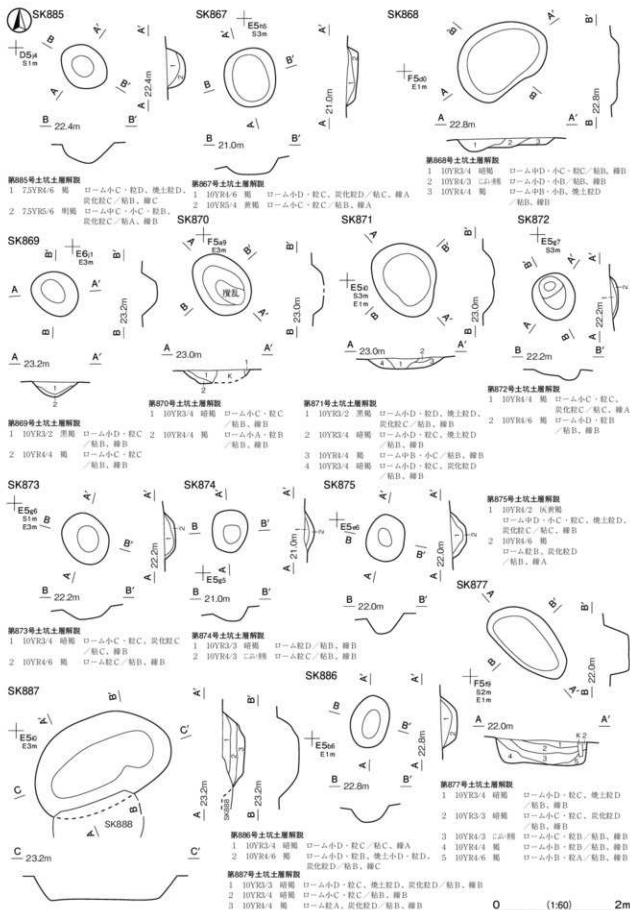
第360図 その他の土坑実測図(50)



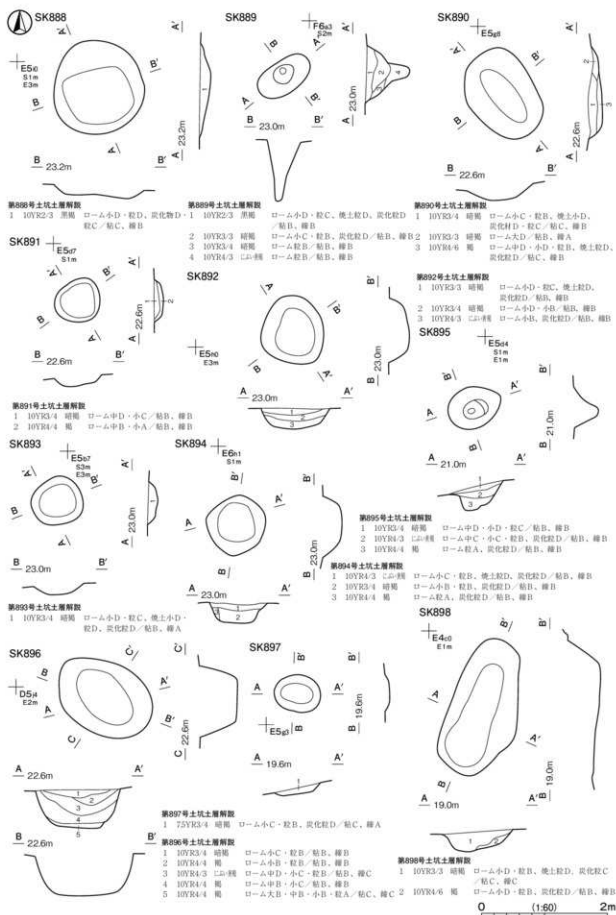
第361図 その他の土坑実測図 (51)



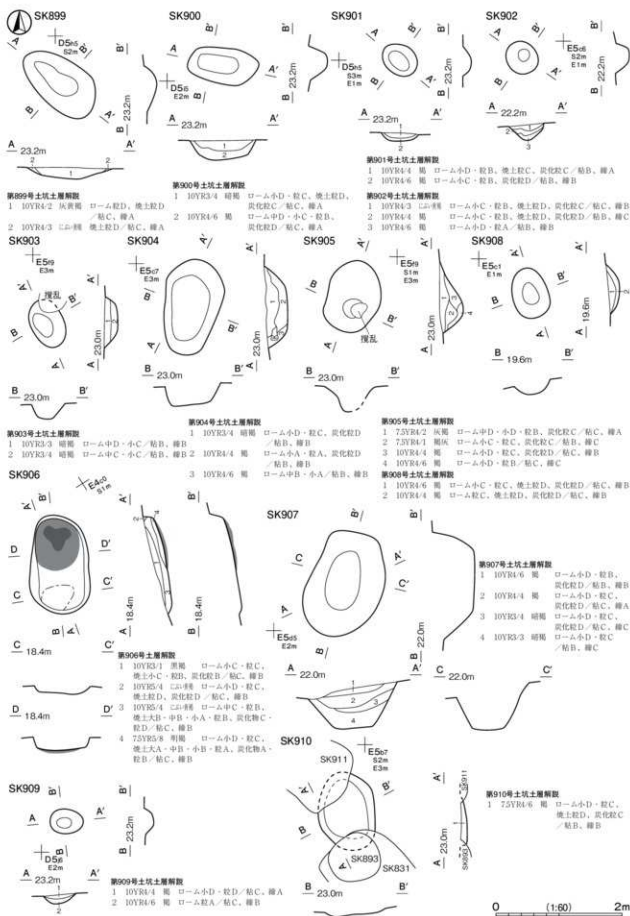
第362図 その他の土坑実測図 (52)



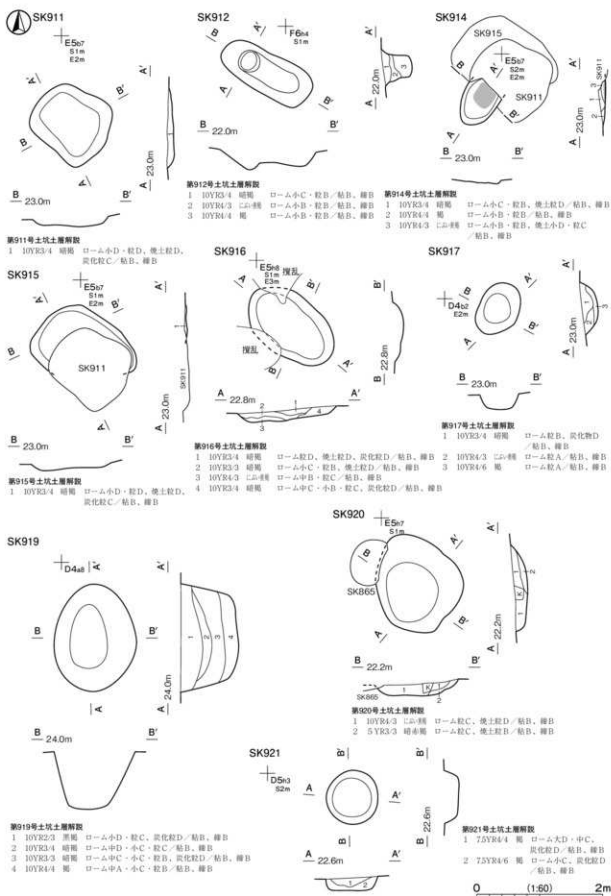
第363図 その他の土坑実測図 (53)



第364図 その他の土坑実測図 (54)



第365図 その他の土坑実測図 (55)



第 366 図 その他の土坑実測図 (56)

第130表 その他の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	掘		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
293	D 3 c1	N-65°-W	楕円形	1.26 × 1.08	21	外傾	平坦	自然		
294	D 3 d2	N-64°-W	楕円形	0.68 × 0.60	11	外傾	平坦	自然		
295	D 3 d2	N-65°-W	楕円形	0.71 × 0.53	13	外傾	平坦	自然		
296	D 3 c1	N-88°-W	楕円形	0.84 × 0.75	14	外傾	平坦	自然		
297	D 2 c0	N-49°-E	楕円形	1.23 × 0.86	16	外傾	平坦	自然	縄文土器	SK307→本路
298	D 3 d1	N-71°-W	楕円形	0.90 × 0.49	16	外傾	平坦	人為	縄文土器	
299	D 3 d3	N-4°-W	楕円形	1.25 × 1.01	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	本路→SK321
300	D 2 b7	-	円形	1.03 × 0.96	14	外傾	平坦	自然	縄文土器	
301	C 2 j8	N-37°-W	楕円形	1.45 × 1.30	23	外傾	平坦	人為	縄文土器	
302	D 2 c8	-	円形	0.85 × 0.81	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	
303	D 2 c3	N-34°-E	楕円形	1.29 × 1.07	18	外傾	平坦	人為		
304	D 2 b1	N-23°-W	楕円形	0.67 × 0.60	34	外傾	凹状	人為		
305	C 3 i2	-	円形	1.00 × 1.00	17	外傾	平坦	自然	縄文土器	
306	D 3 e4	N-30°-W	楕円形	0.66 × 0.55	22	外傾	平坦	自然		
307	D 2 c0	N-79°-W	楕円形	1.47 × 1.26	14	外傾	平坦	自然	縄文土器	本路→SK297
308	D 3 i2	-	円形	1.32 × 1.27	16	外傾	平坦	人為	縄文土器	
309	D 3 c4	N-28°-E	楕円形	0.81 × 0.60	16	外傾	平坦	人為		
310	D 3 c4	N-43°-W	楕円形	0.75 × 0.65	23	外傾	平坦	自然		
311	D 3 b5	N-34°-W	楕円形	0.80 × 0.72	43	外傾	凹状	人為		
313	C 2 j2	N-73°-W	楕円形	1.31 × 1.07	30	外傾	有段	人為		
314	C 2 j2	-	円形	0.54 × 0.51	28	外傾	平坦	人為		
315	D 2 b2	N-46°-W	楕円形	1.60 × 1.35	68	外傾	平坦	自然	縄文土器	
316	D 2 b3	-	円形	0.94 × 0.87	27	外傾	平坦	人為		
317	D 2 a3	N-36°-W	楕円形	2.00 × 1.27	30	外傾	平坦	人為		
318	D 2 a3	N-75°-W	楕円形	1.20 × 1.08	12-14	外傾	凹凸	自然		
319	D 2 a3	N-76°-W	楕円形	0.90 × 0.78	22	外傾	凹凸	自然		
320	D 3 d3	N-57°-E	楕円形	0.89 × 0.73	12	外傾	平坦	自然		SK321→本路
321	D 3 d3	N-8°-W	楕円形	1.17 × 0.78	24	外傾	平坦	人為		SK29→E8→SK30
322	C 3 j3	-	円形	0.80 × 0.78	18	外傾	平坦	自然		
323	C 3 j5	N-25°-E	楕円形	1.00 × 0.73	12	外傾	平坦	人為	縄文土器 石部	
324	B 1 d8	-	円形	1.08 × 1.00	17	外傾	平坦	自然		
325	D 2 c3	-	円形	0.86 × 0.84	8-45	外傾	有段	人為	縄文土器	
326	C 3 j6	N-31°-E	不整形円形	1.83 × 1.45	85	外傾	凹状	人為		
327	C 3 j6	N-8°-W	楕円形	0.89 × 0.76	20	外傾	凹状	自然		
328	D 3 a6	N-42°-W	楕円形	0.77 × 0.56	12	外傾	平坦	人為		
329	D 3 i6	N-22°-E	楕円形	2.50 × 2.05	20	外傾	凹凸	人為		
330	D 3 a4	N-52°-E	楕円形	2.20 × 0.84	32	外傾	平坦	自然		
331	C 3 j1	N-7°-E	楕円形	1.16 × 1.00	35	外傾	平坦	人為		
332	C 3 i1	N-49°-E	楕円形	0.95 × 0.81	7-24	外傾	有段	自然		
333	C 3 j1	-	円形	0.73 × 0.72	46	外傾	有段	人為		
334	D 2 a7	-	円形	1.08 × 1.05	48	外傾・直立	平坦	自然	縄文土器	
336	D 2 i0	N-26°-W	楕円形	0.39 × 0.35	36	外傾	有段	人為		
337	D 3 a1	N-60°-W	楕円形	1.76 × 1.50	29	外傾	平坦	人為	縄文土器	
338	D 2 b1	N-32°-E	楕円形	0.96 × 0.78	32	外傾	凹凸	人為		
339	C 2 j9	-	円形	1.74 × 1.65	42	外傾	凹凸	人為	縄文土器	
340	C 3 j3	N-32°-E	楕円形	0.61 × 0.48	58	外傾・内傾	凹状	自然		
341	C 2 j9	N-44°-W	楕円形	1.10 × 0.93	27	外傾	平坦	人為		
342	C 2 e4	N-9°-W	楕円形	0.91 × 0.71	31	外傾・直立	平坦	自然	縄文土器	
343	C 3 i6	N-15°-W	楕円形	1.33 × 0.93	21	外傾	平坦	自然	縄文土器 石部	
344	C 1 j9	N-60°-E	楕円形	1.70 × 1.39	51	外傾	有段	人為		
345	C 1 f7	-	円形	0.61 × 0.59	16	外傾	平坦	自然		
346	D 3 i6	N-28°-E	楕円形	0.99 × 0.68	18	外傾	平坦	人為		
347	C 3 i1	N-43°-E	楕円形	1.04 × 0.90	18	外傾	平坦	自然		
348	C 2 i0	N-32°-E	楕円形	1.44 × 1.13	22-48	外傾	平坦	人為		
349	C 2 g0	-	円形	1.21 × 1.13	23	外傾	平坦	人為		
350	C 2 g0	N-50°-W	楕円形	1.45 × 1.21	22	外傾	平坦	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
351	C 3h5	N-4°-E	楕円形	1.10 × 0.98	50	外植	有段	人為	縄文土器 石器	
352	C 3h5	-	円形	0.42 × 0.39	40	外植	皿状	自然		
353	C 3h4	-	円形	0.55 × 0.52	22	外植	皿状	自然		
354	C 3i4	-	円形	0.43 × 0.41	36	直立	皿状	人為		
355	C 2i0	N-46°-W	楕円形	1.08 × 0.92	25	外植	凹凸	自然		
356	C 3i5	N-43°-W	[楕円形]	0.66 × (0.57)	(58)	直立	皿状	不明		本跡→SK357
357	C 3i5	N-17°-E	楕円形	0.98 × 0.60	15	外植	平坦	自然		SK356→本跡
358	C 3i2	-	円形	1.49 × 1.48	11~60	外植	有段	人為	縄文土器	ビット2
359	C 3g1	N-68°-E	楕円形	2.18 × 1.10	27~58	外植	有段	自然		ビット1
360	C 3g4	N-57°-W	楕円形	0.74 × 0.50	18	外植	平坦	人為		
361	C 3i5	N-30°-E	楕円形	0.98 × 0.83	26	外植	平坦	自然		
362	C 2i5	N-71°-W	楕円形	1.69 × 1.05	25	外植	平坦	人為	縄文土器 石器	
363	C 2g4	N-77°-W	不整楕円形	2.65 × 1.50	74	外植	有段	人為	縄文土器 石器	ビット1
364	C 3g2	-	円形	0.72 × 0.70	18	外植	平坦	自然	縄文土器	
365	C 3g5	N-16°-W	楕円形	1.03 × 0.77	38	外植	平坦	自然		
366	C 3h5	N-24°-W	楕円形	1.12 × 0.79	58	直立	平坦	自然	石器	
367	C 3h6	-	円形	0.90 × 0.84	15	外植	平坦	人為	縄文土器	
368	C 3i6	N-5°-E	楕円形	0.73 × 0.59	22	外植	平坦	人為	縄文土器 石器	
369	C 3g4	N-46°-W	楕円形	1.87 × 1.30	30	外植	凹凸	自然		
370	C 1i8	N-38°-E	楕円形	0.90 × 0.58	60	外植	皿状	人為		
371	C 1i8	-	円形	0.56 × 0.53	68	外植・直立	平坦	人為		
373	C 3i2	N-62°-W	楕円形	1.35 × 1.01	19~70	外植	有段	自然	縄文土器	
374	C 2i0	-	円形	0.50 × 0.48	37	外植	皿状	人為		SK375→本跡
375	C 2i0	-	円形	1.20 × 1.14	19	外植	平坦	人為	縄文土器	本跡→SK374
376	C 3g6	-	円形	0.52 × 0.51	10~30	外植	皿状	人為		
377	C 3i5	N-75°-W	楕円形	0.76 × 0.54	20	外植	平坦	自然		
378	C 3g5	-	円形	0.65 × 0.64	28	外植	平坦	自然		
379	C 2g0	N-8°-E	楕円形	1.32 × 1.17	24~38	外植	有段	自然		
380	C 2g0	N-31°-E	楕円形	1.70 × 1.30	26	外植	平坦	自然		
381	C 2i0	N-25°-E	楕円形	1.98 × (1.20)	17	外植	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK382
382	C 2i0	-	円形	1.70 × 1.55	11	外植	凹凸	人為		SK381→本跡
383	C 2i9	N-63°-W	楕円形	1.83 × 1.61	16	外植	凹凸	自然	縄文土器 石器	本跡→SK375
384	C 3g7	N-34°-E	楕円形	1.53 × 1.10	7~15	外植	有段	人為		SK390→本跡
385	C 3g8	N-87°-W	楕円形	1.58 × 1.41	80	外植	皿状	自然		SK445→本跡
386	C 3i8	N-34°-W	楕円形	0.73 × 0.45	38	外植	平坦	自然		
387	C 3i7	N-71°-E	楕円形	0.88 × 0.75	26	外植	平坦	自然	縄文土器	
388	D 3a7	N-4°-E	楕円形	0.90 × 0.75	14	外植	平坦	自然		SK389→本跡
389	D 3a7	N-36°-E	楕円形	1.61 × 1.42	14	外植	凹凸	自然		本跡→SK388
390	C 3i9	-	円形	0.70 × 0.65	21	外植	平坦	人為		
391	C 3i9	-	円形	1.14 × 1.06	34	外植	平坦	自然		
392	C 3i0	-	円形	0.93 × 0.88	13	外植	平坦	人為		
393	C 4g1	N-51°-E	楕円形	1.46 × 1.18	23	外植	平坦	人為		
394	C 3i7	N-56°-W	楕円形	0.77 × 0.68	20	外植	平坦	人為		
397	C 1i9	N-60°-W	楕円形	1.00 × 0.80	40	外植	平坦	人為		
398	C 2i0	N-81°-E	楕円形	1.30 × 1.15	15~75	外植	平坦	人為		ビット1
399	C 3g7	N-42°-E	楕円形	1.12 × (0.90)	14	外植	平坦	自然		本跡→SK384
400	C 2i9	N-57°-W	楕円形	1.98 × 1.11	17	外植	平坦	人為	縄文土器	
401	C 3i6	N-6°-W	楕円形	0.92 × 0.68	21	外植	平坦	人為	縄文土器	
403	C 2i0	N-50°-W	楕円形	1.26 × 1.07	30	外植	平坦	人為	縄文土器	
404	C 2i1	N-54°-W	楕円形	2.00 × 1.00	14	外植	凹凸	人為	鉄熱燗	
406	C 1i5	-	円形	1.17 × 1.16	26	外植	平坦	自然	縄文土器	
407	C 1i7	N-12°-E	楕円形	1.34 × 1.07	22	外植	平坦	自然		
408	C 1i3	N-27°-E	楕円形	1.29 × 0.93	24	外植	平坦	人為		
411	C 1i8	-	円形	1.77 × 1.61	6~20	外植	有段	自然	縄文土器	
412	C 1i7	N-38°-E	楕円形	1.76 × 1.25	16	外植	平坦	自然		
413	C 1i6	N-37°-E	楕円形	1.40 × 0.88	18	外植	平坦	人為		
415	C 1i6	N-10°-W	楕円形	0.72 × 0.57	26	外植	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
416	C 1d5	N-80°-E	楕円形	0.93 × 0.60	30	外傾	平坦	自然		
417	C 1c6	-	円形	0.54 × 0.51	26	外傾	平坦	自然		
420	B 1g8	N-76°-W	楕円形	1.00 × 0.70	22~40	外傾	有段	人為		
421	C 1a7	-	円形	1.02 × 0.94	22	外傾	平坦	自然		
422	C 1a7	N-49°-E	楕円形	2.48 × 1.18	22	外傾	平坦	自然		
424	B 1j8	N-68°-W	楕円形	1.77 × 0.97	38	外傾	平坦	自然	縄文土器	
425	B 1j8	N-75°-E	楕円形	1.47 × 0.91	46	直立	皿状	自然		
427	B 1b7	N-7°-E	不整形円形	1.93 × 0.90	47	外傾	有段	自然		
428	B 1b7	N-57°-E	楕円形	1.01 × 0.55	18	外傾	平坦	自然		
429	B 1h8	N-88°-W	楕円形	2.31 × 1.06	19	外傾	皿状	自然	縄文土器	
432	B 1i8	N-87°-W	楕円形	1.48 × 1.12	18	外傾	皿状	自然	縄文土器	
434	B 1e8	N-85°-W	楕円形	2.06 × 0.93	22	外傾	平坦	自然		
435	C 2b2	N-85°-W	楕円形	1.13 × 0.96	27	外傾	平坦	自然		
436	C 1a8	N-4°-W	不整形	0.67 × 0.64	70~86	外傾	有段	不明		TP 5→本跡
437	B 1d8	N-28°-E	楕円形	1.55 × 1.18	12	外傾	平坦	自然		SK433→本跡
439	B 2h5	N-3°-W	円形	1.12 × 1.02	25	外傾	平坦	自然		F78→本跡
440	C 2c2	N-25°-W	楕円形	0.77 × 0.69	33	外傾	皿状	自然		
441	C 2a1	N-5°-W	不整形	1.52 × 1.40	61	外傾	有段	人為	縄文土器	
442	B 2b2	N-31°-W	楕円形	1.65 × 1.25	64	外傾	平坦	人為		SK443→本跡
443	B 2b2	N-87°-W	楕円形	1.58 × 1.40	82	外傾	平坦	自然	縄文土器 石器	本跡→SK442
444	B 2c5	N-18°-E	楕円形	1.08 × 0.94	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	
445	C 3g8	N-61°-E	楕円形	(1.05) × 0.91	16	外傾	平坦	人為		本跡→SK385
446	C 3g5	-	円形	0.47 × 0.43	17	外傾	平坦	人為		
447	C 2d5	N-10°-E	楕円形	0.70 × 0.48	69	直立	皿状	人為		本跡→SK469
450	A 2g6	N-20°-W	方形	1.80 × 1.67	60	外傾・直立	平坦	自然	縄文土器	
451	C 2f3	N-57°-W	楕円形	1.42 × 1.29	22~28	外傾	平坦	自然	縄文土器 石器	
452	C 2a7	N-6°-E	楕円形	1.48 × 1.09	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	
453	C 2a6	N-15°-E	楕円形	1.17 × 0.88	20	外傾	平坦	自然	縄文土器	
454	B 2j6	N-45°-E	楕円形	1.71 × 1.18	16~52	外傾	有段	人為	縄文土器	
455	B 2j6	N-5°-E	楕円形	0.84 × 0.74	18	外傾	平坦	自然		
456	B 2j6	-	円形	1.06 × 1.00	28	外傾	平坦	人為		
461	C 2e7	-	円形	1.04 × 0.95	34	外傾	皿状	自然	縄文土器	
463	C 2b7	N-11°-E	楕円形	1.65 × 1.15	12	外傾	平坦	自然	縄文土器	
464	C 2d7	N-56°-W	楕円形	1.12 × 0.91	15	外傾	平坦	人為	縄文土器	
465	C 2a5	N-29°-E	楕円形	1.89 × 1.53	15	外傾	平坦	自然	縄文土器	
468	B 2i1	N-45°-E	方形	1.46 × 1.45	17	外傾	平坦	自然		
469	C 2d5	N-5°-E	楕円形	1.42 × (1.05)	13	外傾	平坦	自然	縄文土器	SK477・488・478→本跡
470	B 2g6	N-20°-W	楕円形	1.01 × 0.72	19	外傾	有段	自然	縄文土器	
471	B 2g6	N-27°-W	楕円形	0.92 × 0.75	23	外傾	平坦	自然		
472	B 2j5	N-11°-E	楕円形	1.40 × 0.87	32	外傾・直立	平坦	人為	縄文土器	
473	C 2c5	N-10°-E	楕円形	1.93 × 1.13	35	外傾	円凸	人為	縄文土器 石器	S00→本跡→SK471
474	C 2c5	N-48°-E	楕円形	1.74 × 1.24	25	外傾	平坦	自然		S00→SK473→本跡
475	C 2d4	-	円形	1.12 × 1.10	30	外傾	円凸	人為		
477	B 2h3	-	円形	0.67 × 0.62	28	外傾・直立	平坦	自然	縄文土器	
479	C 2c6	N-9°-E	楕円形	1.93 × 1.75	27	外傾	平坦	自然		
481	C 2f7	-	円形	1.41 × 1.41	20	外傾	平坦	自然	縄文土器	SE08→F8E→SK485
485	C 2f7	N-2°-E	楕円形	1.75 × 1.38	48	外傾	平坦	自然	縄文土器 石器	SK480→SK481→本跡
487	B 2i8	-	円形	0.96 × 0.93	16	外傾	平坦	自然		
489	C 2d9	N-28°-E	楕円形	1.18 × 0.93	22	外傾	平坦	自然		
491	C 2d9	N-2°-E	楕円形	0.73 × 0.66	27	外傾	平坦	自然	縄文土器	
492	C 2b7	N-5°-E	楕円形	2.07 × 1.84	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	
493	B 3d1	N-10°-E	楕円形	1.03 × 0.85	21	外傾	平坦	自然	焼成粘土塊	SK494→本跡
494	B 3d1	N-10°-E	楕円形	(0.97) × 0.93	20	外傾	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK493
495	C 3b0	N-75°-W	楕円形	1.26 × 1.05	30	外傾	平坦	人為		S088→本跡
496	B 4j3	N-62°-E	楕円形	1.24 × 1.07	27	外傾	円凸	人為	縄文土器	S07・SK307→本跡
497	B 2d0	N-39°-W	楕円形	0.94 × 0.84	28	外傾	平坦	自然		
498	B 2c5	N-35°-E	楕円形	1.62 × 1.19	7	外傾	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
499	B 2a7	N-26°-E	楕円形	1.56 × 1.19	38	外植	平坦	人為		
500	B 2a6	N-21°-E	楕円形	1.04 × 0.89	22	外植	平坦	人為		
502	C 2d4	N-27°-W	楕円形	1.37 × 0.80	24	外植	有段	自然	縄文土器	SK501 → 本跡
503	B 2b0	N-24°-E	楕円形	1.25 × 0.87	16	外植	皿状	自然		
504	C 3c1	N-11°-E	楕円形	1.14 × 0.85	20	外植	凹凸	人為	縄文土器	
505	C 3d1	N-52°-E	楕円形	1.09 × 0.86	18	外植	平坦	人為		
506	B 4d3	N-17°-W	楕円形	0.78 × 0.64	20	外植	皿状	人為	縄文土器	SI86 → 本跡
507	B 4d3	-	円形	0.58 × 0.53	9	外植	平坦	自然	縄文土器	本跡 → SK496
508	C 2c9	-	円形	1.02 × 0.96	32	外植	平坦	自然	縄文土器	
509	C 2c9	N-76°-E	楕円形	1.09 × 0.96	31	外植	平坦	自然	縄文土器	
510	B 2d0	N-61°-W	楕円形	1.16 × 1.05	20	外植	平坦	自然		
511	B 2a6	N-50°-E	楕円形	0.96 × 0.78	20	外植	平坦	人為		本跡 → SK517
512	B 2a5	N-27°-E	楕円形	1.13 × 0.80	17	外植	凹凸	自然		
514	B 2d8	-	円形	0.70 × 0.64	20	外植	平坦	自然		
515	B 2d8	N-47°-E	楕円形	0.74 × 0.65	22	外植	平坦	自然		
516	C 2c5	N-7°-W	楕円形	0.96 × 0.87	26	外植	皿状	自然	縄文土器 石器	
517	B 2b6	N-40°-W	楕円形	0.63 × 0.57	20	外植	平坦	自然		SK511 → 本跡
518	A 2b4	N-9°-E	楕円形	1.63 × 1.29	22	外植	平坦	自然		SK530 → SK528 → 本跡
519	A 2b6	N-29°-E	楕円形	1.77 × 1.30	21	外植	平坦	自然		
520	A 2g8	-	円形	0.91 × 0.83	23	外植	皿状	自然		
521	C 2e4	N-21°-E	楕円形	2.20 × 1.35	20	外植	平坦	人為	縄文土器 石器	
522	C 2e4	N-63°-E	楕円形	1.25 × 0.97	26	外植	平坦	自然		
524	C 2c5	N-46°-E	楕円形	0.71 × 0.52	20	外植	平坦	人為	縄文土器	
525	C 2c5	N-42°-W	楕円形	0.85 × 0.77	25	外植	平坦	人為	縄文土器	
527	A 2g7	N-67°-W	楕円形	1.04 × 0.78	26	外植	平坦	人為	縄文土器	
528	A 2b4	N-8°-W	[楕円形]	2.46 × 1.60	20	外植	平坦	自然		SK530 → 本跡 → SK538
529	A 2g6	N-47°-W	楕円形	1.80 × 1.04	34	外植	平坦	人為		
530	A 2b4	N-14°-W	[楕円形]	(2.71) × 2.33	30	外植	凹凸	自然		本跡 → SK528
531	A 2b8	N-48°-W	楕円形	1.52 × 1.20	41	外植	皿状	自然		
532	A 2g8	N-45°-E	[楕円形]	(0.96) × 0.72	18	外植	平坦	人為		
533	C 2c5	N-52°-E	楕円形	2.03 × 1.10	17	外植	平坦	人為		
534	C 2c5	N-34°-E	楕円形	1.25 × 0.92	21	外植	平坦	人為		
535	C 2c5	N-40°-E	楕円形	1.47 × 1.04	18	外植	平坦	自然	縄文土器	
536	C 2c5	N-58°-W	楕円形	1.65 × 1.15	23	外植	有段	人為	縄文土器	
537	A 2d0	N-81°-W	楕円形	1.10 × 0.73	18	外植	有段	人為		
538	C 2d5	N-63°-E	楕円形	2.47 × 1.44	16	外植	平坦	自然	石器	
539	A 2g8	N-19°-W	楕円形	2.90 × 1.43	27	外植	平坦	人為	縄文土器	
540	C 2d3	N-25°-W	楕円形	1.13 × 0.71	37	外植	有段	自然		
541	C 2c3	-	円形	1.55 × 1.53	22	外植・直立	平坦	自然		SK545 → 本跡
542	C 2c3	-	円形	1.73 × 1.59	27	外植	平坦	自然	縄文土器 石器	SK543 → 545 → 本跡
543	C 2c3	N-35°-W	楕円形	1.10 × 0.79	20	外植	平坦	自然		本跡 → SK542
544	C 2c3	N-14°-E	楕円形	1.10 × (0.73)	19	外植	平坦	自然	石器	SK548 → 本跡 → SK542
545	C 2c3	N-50°-W	楕円形	1.12 × 0.85	58	外植	平坦	自然		本跡 → SK541・ 542
546	C 2c3	N-20°-E	楕円形	1.45 × 0.90	20	外植	平坦	人為		SK548 → 本跡
547	C 3b2	-	円形	1.06 × 1.00	23	外植	平坦	人為	縄文土器 石器	
548	C 2c3	-	円形	0.83 × 0.80	18	外植	平坦	自然		本跡 → SK544・ 546
549	C 4b1	N-84°-W	楕円形	2.57 × 1.80	34	外植	有段	人為	縄文土器	SK598 → 本跡
550	C 4b3	N-80°-E	楕円形	0.90 × 0.63	19	外植	皿状	人為		SK551 → 本跡
551	C 4b4	N-83°-E	(楕円形)	(0.92) × 0.64	26	外植	皿状	自然		SK552 → 本跡 → SK550
552	C 4a3	-	円形	(0.50) × 0.50	13	外植	平坦	自然		本跡 → SK551
553	C 4b4	N-51°-W	楕円形	0.88 × 0.79	22	外植	平坦	自然		
554	C 4b3	-	円形	0.83 × 0.82	26	外植	平坦	自然		
555	C 4c3	-	円形	0.96 × 0.93	36	外植	有段	自然		
556	C 4b4	N-84°-E	楕円形	0.89 × 0.60	20	外植	平坦	人為		
557	C 4e4	N-86°-E	楕円形	0.41 × 0.32	15	外植	皿状	自然		
558	C 4c4	N-63°-W	楕円形	0.63 × 0.45	18	外植	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
559	C 4 d1	N-85°-E	楕円形	0.75 × 0.60	16	外傾	平坦	自然		
560	C 4 d5	N-86°-W	[円形]	0.70 × (0.65)	62	外傾・直立	凹凸	自然		
561	C 4 e4	N-27°-E	楕円形	0.63 × 0.51	25	外傾	屈状	自然		
562	C 4 d4	N-84°-E	楕円形	1.00 × 0.68	22	外傾	有段	人為		
563	C 4 e4	N-60°-W	楕円形	0.80 × 0.65	47	直立	有段	自然		
564	C 4 e4	N-68°-W	楕円形	0.43 × 0.33	18	外傾	有段	自然		
565	C 4 e5	N-60°-E	楕円形	0.79 × 0.66	20	外傾	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK566
566	C 4 e5	N-13°-W	[楕円形]	1.07 × (0.65)	19	外傾	平坦	人為		SK565→本跡
567	A 3 i9	-	円形	0.98 × 0.95	25	外傾	平坦	人為		
568	A 3 i7	N-16°-E	楕円形	1.66 × 1.11	58	外傾	平坦	人為		ビット1
569	A 3 i5	N-27°-E	楕円形	2.45 × 1.65	32	外傾	平坦	人為		
570	A 3 i6	N-24°-W	楕円形	1.20 × 0.92	93	外傾・直立	屈状	自然		
571	B 3 a6	N-41°-W	楕円形	0.64 × 0.57	23	外傾	平坦	人為		
572	B 3 a7	N-32°-W	楕円形	1.90 × 1.52	30	外傾	屈状	人為	縄文土器	
573	A 3 j7	N-38°-W	楕円形	1.24 × 0.96	16	外傾	屈状	自然	縄文土器 石器	TP 9→本跡
575	B 3 a8	N-85°-W	楕円形	1.22 × 0.82	24	外傾	屈状	人為		
576	B 3 i9	N-3°-E	楕円形	0.73 × 0.66	54	直立	平坦	人為		
577	B 3 a9	N-29°-E	楕円形	1.12 × 1.00	15	外傾	平坦	人為		
578	B 3 a9	N-27°-W	楕円形	0.72 × 0.64	21	外傾	平坦	人為		
579	B 4 a1	N-58°-E	楕円形	1.61 × 1.45	18	外傾	平坦	人為	縄文土器	
580	A 4 j1	-	円形	0.37 × 0.36	24	外傾	屈状	自然		
581	A 4 j3	N-4°-E	楕円形	0.50 × 0.43	22	外傾	平坦	自然		
582	B 4 a2	-	円形	0.54 × 0.54	19	外傾	平坦	自然		
583	B 4 b3	N-75°-W	楕円形	0.77 × 0.61	26	外傾	平坦	人為	縄文土器	
584	B 4 c2	N-89°-W	楕円形	1.15 × 1.03	13-26	外傾	平坦	人為	縄文土器 石器	
585	B 4 c1	N-7°-W	楕円形	1.39 × 1.13	48	外傾	屈状	人為		
586	B 3 c0	-	円形	0.60 × 0.58	26	外傾	平坦	自然		
587	B 4 b1	N-73°-W	楕円形	0.66 × 0.54	32	外傾	平坦	自然		
588	C 4 c2	N-34°-W	楕円形	1.08 × 0.89	19	外傾	平坦	人為		
589	C 4 c2	N-89°-E	楕円形	1.14 × 0.81	32-55	外傾	有段	人為	縄文土器	ビット1
590	C 4 b2	N-86°-E	楕円形	0.77 × 0.70	28	外傾	平坦	自然		
591	C 4 b2	N-9°-W	楕円形	0.88 × 0.74	32	外傾	屈状	人為		
592	C 4 b2	N-79°-W	楕円形	1.35 × 1.07	22	外傾	平坦	人為		
593	C 4 b3	N-65°-E	楕円形	0.51 × 0.44	18	外傾	屈状	自然		
594	C 4 b1	-	円形	0.74 × 0.70	25	外傾	平坦	人為		
595	C 4 b1	-	円形	0.96 × 0.90	22	外傾	平坦	人為		
596	C 4 c1	-	円形	0.91 × 0.86	26	外傾	屈状	人為		
597	C 4 c1	N-26°-W	楕円形	0.87 × 0.74	21	外傾	平坦	自然		
598	C 4 b1	N-88°-E	楕円形	0.66 × (0.60)	21	外傾	平坦	人為		本跡→SK549
599	C 4 c1	N-45°-W	楕円形	1.24 × 1.12	16	外傾	平坦	人為		
600	C 4 d1	N-86°-W	楕円形	0.95 × 0.82	35-62	外傾・直立	平坦	人為		ビット1
601	C 4 c3	-	円形	0.45 × 0.43	10-30	外傾	有段	自然		
602	A 3 j5	N-38°-E	楕円形	1.05 × 0.93	20	外傾	平坦	人為		本跡→SK603
603	A 3 j5	-	円形	0.48 × 0.45	14	外傾	平坦	自然		SK602→本跡
604	C 3 d7	-	円形	0.95 × 0.88	24	外傾	平坦	人為		
605	A 3 j4	N-21°-E	楕円形	1.30 × 1.12	26	外傾	平坦	自然		
606	B 3 i6	N-4°-W	楕円形	1.63 × 1.39	24	外傾	平坦	自然		
607	B 3 c6	N-81°-W	楕円形	0.63 × 0.53	34	外傾	屈状	自然		
608	B 3 c6	N-34°-W	楕円形	1.22 × 0.78	26	外傾	平坦	自然		
609	B 3 i7	-	円形	1.40 × 1.30	23	外傾	平坦	人為	縄文土器 石器	
610	B 3 i6	N-67°-W	楕円形	1.81 × 1.54	23	外傾	平坦	自然	縄文土器	
611	B 3 i9	N-73°-E	楕円形	1.25 × 0.70	37	外傾	平坦	人為	縄文土器	
612	B 3 i8	N-66°-W	楕円形	0.78 × 0.68	30	外傾	平坦	人為	縄文土器	
614	B 3 i8	N-85°-E	楕円形	1.21 × 1.04	37	外傾	平坦	人為		
616	B 3 i9	N-29°-E	楕円形	1.05 × 0.87	15-26	外傾	有段	人為	縄文土器	
617	B 3 i9	-	円形	0.89 × 0.81	32	外傾	平坦	人為		
618	B 3 c0	N-61°-W	楕円形	0.86 × 0.68	15	外傾	平坦	自然	縄文土器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
619	B 3g9	-	円形	0.79 × 0.72	35	外縁	皿状	人為	縄文土器	
620	B 3g4	N - 77° - W	楕円形	1.58 × 1.00	27	外縁	平坦	自然		
621	B 3g3	-	円形	1.14 × 1.05	40	外縁	平坦	自然		
622	B 3b4	-	円形	0.47 × 0.42	30	外縁	平坦	人為		
623	B 3b4	N - 8° - E	楕円形	1.06 × 0.82	20	外縁	平坦	自然		
624	B 3b5	-	円形	1.21 × 1.15	28	外縁	平坦	不明		
625	C 3b0	-	円形	0.65 × 0.60	17	外縁	平坦	自然		
626	C 3b0	N - 86° - E	楕円形	1.53 × 1.20	25	外縁	皿状	自然		
627	C 4e1	N - 25° - W	楕円形	0.90 × 0.76	16	外縁	平坦	人為		
628	C 4d1	N - 59° - E	楕円形	1.25 × 1.21	56	外縁	有段	人為		
629	C 4d2	N - 84° - W	楕円形	1.90 × 0.93	25	外縁	皿状	自然		
630	C 4d2	N - 67° - W	楕円形	0.87 × 0.71	40	外縁	皿状	自然		
631	C 3e9	-	円形	0.87 × 0.83	29	外縁	平坦	人為		SK632 → 本跡
632	C 3e9	N - 57° - W	楕円形	1.28 × 1.03	13	外縁	平坦	自然		本跡 → SK631
633	C 4f1	N - 2° - W	楕円形	1.29 × 1.04	17	外縁	平坦	人為		
634	B 3j3	N - 64° - E	楕円形	1.55 × 1.03	32	外縁	有段	人為	縄文土器	
635	B 3e5	N - 26° - W	楕円形	0.92 × 0.83	15	外縁	平坦	自然		
636	B 3f6	-	円形	0.70 × 0.69	13	外縁	皿状	自然		
637	B 4e2	N - 24° - E	楕円形	1.52 × (1.23)	40	外縁	有段	自然	縄文土器 石器	本跡 → SK638・639
638	B 4e1	N - 82° - E	楕円形	3.15 × (2.80)	21	外縁	平坦	人為	縄文土器	SK637 → 本跡 → SK643・644
639	B 4e2	-	[円形]	1.70 × (1.05)	15	外縁	平坦	人為	縄文土器 土師器	SK637 → 本跡 SK640 ± 重複
640	B 4e2	N - 47° - W	楕円形	1.10 × (1.10)	30	外縁	平坦	人為		SK639 ± 重複
641	B 4e2	N - 35° - E	楕円形	0.50 × 0.44	32	外縁	平坦	自然	縄文土器	
642	B 4d2	-	円形	0.44 × 0.42	21	外縁	皿状	自然		
643	B 4d2	N - 52° - W	楕円形	2.95 × 2.48	15	外縁	平坦	自然	土師器	SK638 → 本跡 SK644 ± 重複
644	B 4d1	-	円形	2.45 × 2.33	19	外縁	平坦	自然	縄文土器 石器	SK638 → 本跡 SK643 ± 重複
645	B 4e1	-	円形	0.65 × 0.60	28	外縁	皿状	自然		
646	B 3e1	-	円形	0.90 × 0.83	22	外縁	平坦	人為		
647	C 4e3	-	円形	1.13 × 1.07	20	外縁	平坦	自然	石器	
648	C 3d0	N - 80° - E	楕円形	1.18 × 0.77	24	外縁	平坦	人為		
649	C 4d1	N - 71° - W	楕円形	1.67 × 1.09	25	外縁	平坦	人為		
650	C 4d2	N - 68° - W	楕円形	1.47 × 1.21	39	外縁	平坦	人為		SK660 → 本跡
651	B 3d4	N - 77° - W	[円形]	1.75 × (1.72)	27	外縁	平坦	人為	石器	本跡 → SK653
652	B 3g0	N - 68° - W	楕円形	1.38 × 1.11	31	外縁	凹凸	人為	縄文土器	
653	B 3c3	N - 44° - E	楕円形	3.02 × 2.25	30	外縁	平坦	人為		SK651 → 本跡
654	B 3a4	N - 78° - W	楕円形	1.10 × 0.90	32	外縁・直立	有段	人為		
655	B 3a2	-	円形	0.73 × 0.70	40	外縁・直立	有段	自然		
656	B 3b2	N - 56° - W	楕円形	2.04 × 1.57	26	外縁	有段	自然	縄文土器 石器	
657	C 4e2	N - 32° - W	[楕円形]	0.73 × (0.52)	17	外縁	平坦	自然	縄文土器	本跡 → SK658
658	C 4d2	N - 35° - W	楕円形	1.20 × 0.85	16	外縁	平坦	自然		SK657 → 本跡
659	C 4e3	N - 67° - W	楕円形	1.49 × 1.17	26	外縁	平坦	自然	石器	
660	C 4d2	N - 19° - E	[楕円形]	(1.40) × 1.48	34	外縁	有段	人為		本跡 → SK650
662	B 3j3	N - 3° - E	楕円形	2.30 × 1.76	36	外縁	有段	自然	土師器	
663	B 3c9	N - 87° - E	楕円形	1.56 × 1.16	7	外縁	平坦	自然	土師器	SK672 → 本跡
664	B 3c8	N - 80° - W	楕円形	2.28 × 2.30	16	外縁	平坦	人為	縄文土器 土師器	SK672 → 本跡
665	B 3c9	N - 5° - W	楕円形	1.87 × 1.60	17	外縁	平坦	自然	縄文土器 土師器	
666	C 3e6	N - 18° - E	楕円形	0.88 × 0.65	15	外縁	皿状	自然		
667	B 4e1	-	円形	0.82 × 0.80	21	外縁	皿状	人為	縄文土器	
668	B 3c9	N - 86° - E	楕円形	1.00 × 0.74	22	外縁	平坦	自然		
669	B 4e3	-	円形	0.40 × 0.38	25	外縁	皿状	自然		
670	B 4d2	N - 59° - W	楕円形	0.65 × 0.58	20	外縁	皿状	人為		
671	B 3c9	N - 84° - W	楕円形	1.91 × 1.70	32	外縁	皿状	人為	縄文土器	
672	B 3c8	N - 64° - W	楕円形	4.16 × 3.09	12	外縁	平坦	自然	縄文土器	本跡 → S563・664
673	C 3d5	N - 81° - W	楕円形	1.36 × 1.18	29	外縁	有段	人為		
674	C 3d5	N - 83° - W	楕円形	0.85 × 0.70	18	外縁	平坦	人為		
675	C 3c5	N - 68° - W	楕円形	2.05 × 1.65	19	外縁	皿状	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
676	B 4 c3	-	円形	0.85 × 0.83	25	外傾	平坦	自然		
677	B 3 g0	N - 67° - E	楕円形	0.77 × 0.63	26	外傾	皿状	人為		
678	B 4 h2	N - 18° - E	楕円形	0.93 × 0.84	21	外傾	平坦	人為		
679	B 3 i7	N - 17° - E	楕円形	2.60 × 1.60	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	土師器
680	C 3 d4	-	円形	1.62 × 1.54	16	外傾	凹凸	自然		
681	B 3 g5	N - 22° - W	円形	1.04 × 0.95	29	外傾	平坦	自然		
682	B 3 b6	N - 42° - W	楕円形	1.37 × 1.02	23	外傾	皿状	自然		
683	B 3 g6	N - 46° - W	楕円形	2.40 × 1.89	32	外傾・直立	平坦	自然		
684	B 3 f0	N - 71° - E	楕円形	1.05 × 0.76	20	外傾	平坦	自然		
685	B 4 g1	-	円形	1.13 × 1.10	23	外傾	皿状	自然		
687	B 4 i2	N - 38° - E	楕円形	1.50 × 1.27	19	外傾	凹凸	人為		
688	C 3 c4	N - 21° - E	楕円形	1.73 × 1.47	29	外傾	皿状	人為	縄文土器	
689	C 3 c5	N - 22° - E	楕円形	2.27 × 1.34	12	外傾	平坦	自然		
690	C 3 c6	N - 30° - W	楕円形	1.41 × 0.93	23	外傾	凹凸	自然	縄文土器	
691	B 3 j6	N - 41° - E	楕円形	0.86 × 0.70	28	外傾	平坦	自然		
692	C 3 a3	-	円形	0.72 × 0.70	17	外傾	皿状	自然	縄文土器	石器
693	C 3 a4	N - 37° - W	楕円形	0.77 × 0.68	15	外傾	平坦	自然		
694	C 3 a4	N - 9° - E	楕円形	1.22 × 0.93	31	外傾	平坦	自然	縄文土器	
695	B 3 j5	-	円形	1.21 × 1.18	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	石器
696	B 3 j6	N - 32° - E	楕円形	1.73 × 0.88	25	外傾	平坦	人為		
697	C 3 d8	N - 64° - E	不整形円形	1.55 × 1.00	25	外傾	平坦	自然		
698	B 4 g1	N - 72° - W	楕円形	1.01 × 0.78	21	外傾	平坦	人為		
699	B 3 i0	N - 50° - W	楕円形	1.10 × 0.90	25	外傾	平坦	自然	土師器	
700	B 3 h7	N - 83° - W	楕円形	1.97 × 1.35	23	外傾	平坦	自然	土師器	
702	B 3 f0	N - 5° - E	楕円形	0.54 × 0.49	22	外傾	平坦	人為		
703	B 4 h1	N - 78° - E	楕円形	0.88 × 0.80	22	外傾	平坦	人為		
704	B 4 h2	N - 10° - E	楕円形	1.05 × 0.95	15 - 23	外傾	平坦	人為		
705	B 4 i3	N - 87° - W	楕円形	1.44 × 1.00	16	外傾	有段	自然	縄文土器	
706	C 3 b4	-	円形	1.26 × 1.15	23	外傾	皿状	自然		
707	C 3 a5	-	円形	0.90 × 0.87	19	外傾	平坦	自然		
708	B 3 j7	N - 72° - W	楕円形	1.00 × 0.82	20	外傾	平坦	人為		
709	C 3 a5	N - 46° - E	楕円形	1.20 × 0.98	20	外傾	凹凸	自然		
710	C 3 a4	N - 37° - W	楕円形	0.65 × 0.56	17	外傾	平坦	人為		
711	C 3 b6	N - 8° - E	楕円形	0.71 × 0.63	21	外傾	平坦	自然		
712	C 3 c3	N - 85° - W	楕円形	1.35 × 1.00	16	外傾	平坦	自然	縄文土器	
713	C 3 b5	N - 65° - E	楕円形	1.03 × 0.88	22	外傾	平坦	自然		
714	B 3 j7	N - 5° - E	楕円形	1.09 × 0.73	23	外傾	平坦	人為		
715	C 3 b5	N - 23° - W	楕円形	0.85 × 0.72	16	外傾	平坦	自然		
716	C 3 b4	-	円形	0.47 × 0.45	20	外傾	平坦	自然		
717	B 3 j5	-	円形	1.25 × 1.18	31	外傾	平坦	自然		
718	B 3 i7	N - 82° - W	楕円形	1.10 × 0.94	22	外傾	平坦	自然	縄文土器	
719	B 3 j9	-	円形	1.18 × 1.12	32	外傾	平坦	自然		
720	C 3 b7	N - 87° - E	楕円形	0.62 × 0.52	22	外傾	平坦	自然		
721	B 3 i0	N - 60° - E	楕円形	1.28 × 0.85	29	外傾	平坦	人為	縄文土器	
722	C 3 j4	N - 82° - W	楕円形	0.95 × 0.81	33	外傾	平坦	自然		
723	B 3 j8	N - 83° - W	楕円形	1.60 × 1.12	16	外傾	平坦	自然		
724	C 3 a6	N - 87° - E	楕円形	0.65 × 0.55	21	外傾	平坦	自然		
725	B 3 j7	N - 67° - W	楕円形	1.78 × 0.94	18	外傾	平坦	人為		
726	B 3 i9	N - 83° - E	楕円形	1.32 × 1.00	21	外傾	平坦	人為		
727	B 3 j7	N - 30° - W	楕円形	0.79 × 0.69	21	外傾	平坦	人為		
728	B 3 j4	N - 4° - E	楕円形	2.37 × 1.85	25	外傾	皿状	人為	縄文土器	
729	C 3 b7	-	円形	0.88 × 0.86	25	外傾	皿状	自然		
730	C 3 a8	N - 66° - E	楕円形	1.40 × 1.03	21	外傾	平坦	自然		
731	C 3 b8	N - 79° - E	楕円形	0.67 × 0.55	36	外傾	平坦	自然		
732	C 3 a9	N - 74° - W	楕円形	1.25 × 1.00	30	外傾	皿状	自然		
733	C 3 a9	N - 81° - W	楕円形	0.56 × 0.50	21	外傾	平坦	自然		
734	B 3 i8	N - 58° - E	楕円形	1.35 × 1.03	25	外傾	平坦	自然	縄文土器	

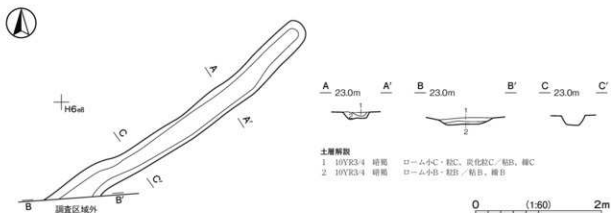
番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
735	C 3a8	N-83°-W	楕円形	1.00 × 0.80	20	外植	皿状	自然		
736	C 3a5	N-89°-W	楕円形	2.90 × 1.70	22	外植	平坦	人為		
737	B 3a9	N-81°-W	楕円形	1.10 × 0.96	25	外植	平坦	自然		
738	B 3a9	N-57°-E	楕円形	0.74 × 0.61	27	外植	平坦	人為		
739	B 3a9	N-7°-E	楕円形	1.74 × 1.02	18~58	外植	平坦	人為		ビット1
740	B 4a1	N-0°	楕円形	1.22 × 1.09	47	外植・直立	皿状	人為		
741	C 4a1	N-56°-E	楕円形	1.16 × 1.00	27	外植	平坦	人為		
742	C 4a1	N-79°-W	楕円形	1.13 × 1.01	28	外植	平坦	人為		
743	B 4a1	-	円形	0.81 × 0.78	20	外植	皿状	自然		
744	C 3a9	N-80°-W	楕円形	0.83 × 0.74	21	外植	平坦	自然		
746	C 3a0	N-88°-E	楕円形	2.05 × 1.03	25	外植	平坦	人為	土師器	本跡→SK747
747	B 3a9	-	円形	0.95 × 0.70	28	外植	皿状	自然		SK746→本跡
748	B 4a3	N-9°-E	楕円形	1.63 × 0.82	21	外植	平坦	自然		
749	B 4a2	N-55°-E	楕円形	0.98 × 0.82	25	外植	平坦	人為		
750	C 3a0	N-8°-E	楕円形	1.58 × 1.40	21	外植	平坦	人為	縄文土器	
751	B 4a1	-	円形	0.48 × 0.47	31	外植	皿状	人為		
753	B 4a2	N-85°-E	楕円形	1.13 × 0.74	16	外植	平坦	自然		
754	C 3a0	-	[円形]	0.82 × (0.75)	18	外植	皿状	人為		本跡→SK758
755	B 4a1	N-81°-E	楕円形	1.14 × 0.93	21	外植	平坦	自然		
756	B 4a3	-	円形	0.43 × 0.40	18	外植	皿状	自然		
757	C 4a3	N-65°-W	楕円形	2.53 × 1.68	21	外植	平坦	人為	縄文土器 石器	SS 4→本跡
758	C 3a0	N-55°-E	楕円形	1.38 × 1.25	22	外植	平坦	人為	縄文土器	SK754→本跡
759	C 4a1	N-89°-E	楕円形	0.97 × 0.80	68	外植	皿状	人為		SK760→本跡
760	C 4a1	-	[円形]	(0.93) × 0.88	64	外植・直立	平坦	人為		本跡→SK759
761	B 4a3	-	円形	0.72 × 0.70	19	外植	皿状	自然		
762	B 4a1	N-61°-E	楕円形	1.09 × 0.79	18	外植	有段	人為		
763	C 4a2	N-41°-W	楕円形	1.08 × 0.86	23	外植	有段	人為	縄文土器	
764	B 3a0	N-35°-W	楕円形	1.11 × 0.96	29	外植	平坦	自然		
765	C 4a2	N-73°-E	楕円形	0.73 × 0.65	43	外植	有段	人為	縄文土器 土師器	
766	C 3a0	N-78°-E	楕円形	1.09 × 0.85	27	外植	平坦	人為		
767	C 4a2	-	円形	0.55 × 0.54	43~66	外植・直立	平坦	人為		ビット1
768	B 3a9	N-13°-W	[楕円形]	[1.14] × 0.86	19	外植	平坦	人為		本跡→SK769
769	B 3a9	N-26°-E	楕円形	1.09 × 0.85	18	外植	平坦	人為		SK768→本跡
770	B 4a3	N-88°-E	楕円形	1.58 × 0.84	20~26	外植	平坦	人為		ビット1
771	B 3a5	N-78°-W	楕円形	1.50 × 1.28	18~30	外植	有段	人為	縄文土器 石器	
772	B 4a2	N-42°-E	楕円形	1.30 × 0.69	27	外植	皿状	自然		
773	B 4a2	N-55°-E	楕円形	1.96 × 1.47	17	外植	凹凸	人為	縄文土器	
775	H 6a7	-	円形	0.74 × 0.73	37	外植・直立	平坦	自然	縄文土器	
776	H 6a8	-	円形	0.28 × 0.27	37	直立	皿状	自然		
777	G 6a6	N-30°-W	楕円形	2.10 × 1.78	31	外植	平坦	人為		
778	G 6a6	-	円形	0.55 × 0.52	26	外植	平坦	自然		
779	G 6a6	-	円形	0.81 × 0.77	41	外植	皿状	自然		SK784→本跡
780	G 6a9	N-29°-E	楕円形	1.00 × 0.88	19	外植	平坦	自然	縄文土器	
781	G 6a9	N-6°-W	楕円形	0.90 × 0.72	36	外植	皿状	自然	縄文土器 石器	
782	G 6a7	N-19°-E	楕円形	0.56 × 0.46	32	外植	皿状	自然		
783	G 6a7	N-26°-E	楕円形	1.37 × 1.08	28	外植	平坦	人為		
784	G 6a8	N-54°-W	[楕円形]	[1.20] × 0.95	25	外植	平坦	人為	縄文土器 石器	本跡→SK779
785	G 6a7	N-28°-E	楕円形	(0.70) × 0.56	35	外植	皿状	人為		本跡→SK786
786	G 6a7	N-24°-E	楕円形	1.17 × 1.01	24	外植	平坦	自然		SK785→本跡
787	G 6a6	N-21°-E	楕円形	1.22 × 1.02	28	外植	皿状	自然		
788	G 6a8	N-15°-E	楕円形	1.33 × 1.20	33	外植	平坦	人為		
789	G 8a3	N-47°-E	楕円形	1.55 × 1.24	21	外植	平坦	自然		
790	G 8a3	N-73°-E	楕円形	0.51 × 0.41	20	外植	皿状	自然		
791	G 8a3	N-1°-W	楕円形	1.17 × 0.88	24	外植	凹凸	人為		
792	G 8a3	N-58°-W	楕円形	0.97 × 0.80	18	外植	平坦	自然		
793	G 7a2	-	円形	0.55 × 0.54	30	外植	平坦	自然		
794	G 7a2	N-42°-E	楕円形	0.40 × 0.30	21	外植	皿状	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
795	G 6 f9	N-42°-E	楕円形	0.44 × 0.31	46	外傾	皿状	自然		
796	G 6 g8	-	円形	1.24 × 1.13	50	外傾	平皿	人為		SK813→本跡
797	G 6 i8	-	円形	0.45 × 0.41	32	外傾	平皿	自然		
798	G 8 c8	N-38°-E	楕円形	1.52 × 0.93	20	外傾	皿状	自然		
799	G 6 i8	-	円形	0.37 × 0.35	21	外傾	平皿	自然		
800	G 8 g6	-	円形	0.53 × 0.52	47	外傾	皿状	自然		
801	G 8 g5	N-24°-W	楕円形	0.49 × 0.40	38	外傾	皿状	自然	縄文土器	
802	G 8 g5	-	円形	1.19 × 1.13	28	外傾	平皿	自然		
803	G 8 g5	-	円形	0.52 × 0.50	20	外傾	皿状	自然		
804	G 8 g5	N-74°-W	楕円形	0.91 × 0.68	19	外傾	平皿	自然	縄文土器	
805	G 8 i5	-	円形	0.41 × 0.40	33	外傾	皿状	自然		
806	G 8 i6	-	円形	0.57 × 0.56	16	外傾	平皿	自然		
807	G 8 g5	N-14°-E	楕円形	1.93 × 1.42	15	外傾	平皿	自然	縄文土器 土師器	
808	G 8 c7	N-66°-E	不整形円形	2.65 × 2.10	56	外傾	凹凸	人為		
812	G 6 i0	-	円形	1.15 × 1.13	42	外傾	皿状	人為	縄文土器 焼成粘土塊	
814	G 6 g9	N-10°-W	楕円形	2.73 × 2.30	19	外傾	皿状	自然		SK813→本跡
815	G 7 c8	N-84°-E [長方形]		1.60 × (0.90)	18	外傾	平皿	自然		
816	G 6 j5	- [円形]		(1.25) × (0.50)	24	外傾	平皿	自然		SD 4→本跡
817	D 4 e1	N-56°-E	楕円形	0.92 × 0.81	36	外傾	平皿	自然		
818	D 4 c6	N-23°-W	楕円形	0.85 × 0.70	22	外傾	平皿	自然	土師器	
819	F 5 i7	N-31°-E	楕円形	1.14 × 0.75	15	外傾	平皿	自然	縄文土器	
820	D 4 b4	N-69°-E	楕円形	1.18 × 0.78	40	外傾	皿状	自然		
822	C 4 i4	N-68°-W	楕円形	1.10 × 0.97	56	外傾	皿状	人為	縄文土器 石器	
824	D 4 a7	N-17°-W	楕円形	0.89 × 0.70	18	外傾	平皿	人為		
826	E 4 c8	N-23°-E	楕円形	1.95 × 1.40	25	外傾	平皿	人為	縄文土器 土師器	
827	E 4 c8	N-34°-E	楕円形	(2.35) × 1.67	20	外傾	平皿	人為		
829	D 4 b4	-	円形	1.03 × 1.00	30	外傾	皿状	人為		
830	D 5 d2	N-13°-E	楕円形	1.25 × 1.05	12	外傾	平皿	自然	縄文土器 土師器	
831	E 5 c7	N-38°-W [長方形]		(1.85) × 1.21	12	外傾	平皿	自然		本跡→SK893・904
832	E 4 c8	N-12°-E	楕円形	0.80 × 0.68	18	外傾	平皿	人為		
833	D 5 e1	-	円形	0.87 × 0.85	27	外傾	平皿	人為	土師器	
834	D 5 c3	-	円形	1.31 × 1.24	18	外傾	平皿	自然	土師器	
835	D 4 a4	N-24°-W	楕円形	(1.83) × 1.58	57	外傾	平皿	人為	縄文土器 土師器 石器	
837	D 4 d0	N-66°-W	楕円形	1.00 × 0.75	25	外傾	平皿	自然		
838	G 6 i3	N-19°-E	楕円形	1.32 × 1.08	16	外傾	平皿	人為		
839	G 6 i5	N-6°-W	楕円形	1.16 × 1.05	18	外傾	平皿	人為		
841	H 6 c2	N-2°-E	楕円形	1.55 × 1.36	31	外傾	平皿	人為		
842	G 6 i5	N-28°-E	楕円形	1.08 × 0.71	26	外傾	平皿	自然		
843	G 6 a6	-	円形	0.93 × 0.85	24	外傾	平皿	人為		
844	G 6 a6	-	円形	1.10 × 1.10	25	外傾・直立	平皿	人為		
845	F 6 i5	N-64°-E	楕円形	1.35 × 0.91	12~31	外傾	有段	人為		
846	F 6 i4	-	円形	1.28 × 1.28	30	外傾	皿状	人為	土師器	
847	F 6 j7	N-3°-W	楕円形	1.01 × 0.80	18	外傾	平皿	自然		
848	F 5 d6	N-19°-E	楕円形	0.68 × 0.46	12	外傾	皿状	自然	土師器	
849	F 5 i6	N-80°-W	楕円形	2.91 × 1.75	18	外傾	平皿	人為	土師器	ビット1
850	C 4 j8	N-32°-W	楕円形	1.23 × 1.00	60	外傾	皿状	自然	縄文土器 土師器 石器	S89→本跡
851	F 6 g4	N-32°-E	楕円形	0.80 × 0.64	28	外傾	平皿	自然	縄文土器	
852	F 6 d3	N-48°-W	楕円形	4.40 × 1.69	15	外傾	凹凸	人為	土師器	
853	F 5 a8	N-22°-W	楕円形	0.68 × 0.50	18	外傾	平皿	自然	縄文土器	
854	F 5 e4	N-22°-E	楕円形	1.22 × 0.95	26	外傾	平皿	自然		
855	F 5 c6	N-73°-E	楕円形	0.72 × 0.56	22	外傾	平皿	人為		
856	F 5 a7	-	円形	0.84 × 0.82	23	外傾	平皿	人為	縄文土器	
857	G 6 a4	-	円形	0.87 × 0.80	19	外傾	皿状	自然		
858	F 5 d8	N-35°-E [楕円形]		(1.02) × 0.88	40	外傾	平皿	人為	縄文土器 環	
859	G 6 i5	N-78°-E [楕円形]		(1.29) × 0.89	26	外傾	皿状	自然		本跡→SD 4
860	D 5 e1	-	円形	0.64 × 0.60	14	外傾	平皿	自然		
861	D 5 d1	N-67°-W	楕円形	0.67 × 0.48	17	外傾	凹凸	自然	縄文土器 土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
862	F 6b1	N-6°-W	楕円形	1.65 × 1.40	17	外縁	平坦	人為	土師貫土器 鏝	
863	F 5a9	N-77°-E	楕円形	1.02 × 0.56	16	外縁	平坦	自然	縄文土器	
864	E 5b7	N-50°-E	楕円形	0.64 × 0.46	18	外縁	皿状	自然	縄文土器	SK80 → 6番 → SK86
865	E 5b6	N-32°-E	楕円形	0.78 × 0.60	10 ~ 18	外縁	有段	自然	縄文土器	SK84・930 → 6番
866	F 5a9	N-34°-E	不整楕円形	2.75 × 1.76	27	外縁	凹凸	人為	縄文土器 土師器	
867	E 5b5	N-16°-W	楕円形	0.93 × 0.81	21	外縁	平坦	自然	縄文土器	
868	F 5c9	N-54°-E	楕円形	1.51 × 1.03	10 ~ 20	外縁	凹凸	人為	縄文土器	
869	E 6j1	N-40°-W	楕円形	0.76 × 0.63	23	外縁	皿状	自然	縄文土器	
870	F 5a9	N-43°-W	楕円形	1.05 × 0.80	19	外縁	平坦	人為	縄文土器	
871	E 5b3	N-41°-W	楕円形	1.21 × 1.00	20	外縁	平坦	人為	縄文土器	
872	E 5g7	N-28°-W	楕円形	0.75 × 0.66	10 ~ 18	外縁	有段	自然	縄文土器	
873	E 5g7	N-24°-W	楕円形	0.84 × 0.69	19	外縁	平坦	自然	土師器	
874	E 5c5	N-3°-W	楕円形	0.68 × 0.55	19	外縁	皿状	自然		
875	E 5c6	N-11°-E	楕円形	0.72 × 0.59	28	外縁	皿状	人為		
877	F 5b9	N-41°-W	楕円形	1.43 × 0.79	38 ~ 48	外縁	有段	人為		SK878 → 本跡
878	F 5b9	N-52°-E	[楕円形]	1.161 × 0.66	49	外縁	平坦	不明		本跡 → SK877
879	E 5d6	N-13°-W	楕円形	0.83 × 0.61	27	外縁	平坦	自然		
880	E 5b3	N-25°-W	楕円形	1.60 × 1.04	24	外縁	平坦	人為	縄文土器	
881	E 5c5	N-16°-E	楕円形	0.66 × 0.47	26	外縁	有段	自然	土師器	
882	E 5a5	N-72°-W	楕円形	0.81 × 0.63	30	外縁	平坦	人為	土師器	
883	D 5j4	-	円形	0.57 × 0.55	25	外縁	皿状	人為		
884	E 5c8	N-3°-E	楕円形	1.00 × 0.57	16	外縁	平坦	自然		
885	D 5j4	N-34°-W	楕円形	0.74 × 0.63	31	外縁	平坦	人為	鏝	
886	E 5a6	N-14°-E	楕円形	0.82 × 0.58	21	外縁	平坦	自然		
887	E 6i1	N-60°-E	楕円形	2.24 × (1.40)	34	外縁	平坦	自然	縄文土器	本跡 → SK888
888	E 6i1	-	円形	1.50 × 1.42	32	外縁	皿状	自然	縄文土器	SK887 → 本跡
889	F 6a2	N-52°-E	楕円形	0.91 × 0.50	93	外縁	皿状	人為		
890	E 5g8	N-37°-W	楕円形	1.46 × 1.02	19	外縁	平坦	自然	縄文土器	
891	E 5d7	N-56°-E	楕円形	0.74 × 0.64	14	外縁	平坦	自然		
892	E 6g2	N-12°-E	円形	1.06 × 1.00	32	外縁	平坦	自然	縄文土器 鉄線罐	
893	E 5b7	-	円形	0.81 × 0.75	20	外縁	平坦	自然		SK831 → 本跡
894	E 6b1	-	[円形]	0.88 × (0.85)	32	外縁	平坦	人為		F735 → 本跡
895	E 5d4	N-70°-E	楕円形	0.86 × 0.66	37	外縁	凹凸	自然	土師器	
896	D 5j4	N-47°-W	楕円形	1.65 × 1.13	62	外縁	平坦	人為	土師器	
897	E 5d3	N-85°-W	楕円形	0.72 × 0.57	6	外縁	平坦	自然		
898	E 4c9	N-19°-E	楕円形	2.20 × 1.10	41	外縁	平坦	自然	縄文土器 土師器 鏝	
899	D 5b5	N-54°-W	楕円形	1.32 × 0.73	18	外縁	皿状	自然	縄文土器 土師器	
900	D 5b5	N-79°-W	楕円形	1.05 × 0.55	27	外縁	平坦	自然	縄文土器	
901	D 5b5	N-50°-W	楕円形	0.60 × 0.45	14	外縁	平坦	自然		
902	E 5c6	N-44°-W	楕円形	0.54 × 0.47	22	外縁	皿状	自然	縄文土器	
903	E 5b9	N-27°-W	楕円形	0.80 × 0.51	24	外縁	平坦	自然	縄文土器	
904	E 5c7	N-10°-E	楕円形	1.52 × 0.85	32	外縁	平坦	人為	縄文土器 土師器 鏝	SK830 → 本跡
905	E 5b9	N-14°-E	楕円形	1.14 × 0.84	40	外縁	皿状	自然	石器	
907	E 5c5	N-20°-E	楕円形	1.70 × 1.16	60	外縁	平坦	自然	縄文土器 土師器	
908	E 5c1	N-16°-W	楕円形	0.80 × 0.55	20	外縁	平坦	自然		
909	D 5b6	N-86°-W	楕円形	0.52 × 0.40	15	外縁	平坦	自然		
910	E 5b7	N-17°-E	[楕円形]	(1.27) × 0.92	8	外縁	平坦	自然		本跡 → SK831・893・911
911	E 5b7	N-50°-W	不整長方形	1.25 × 1.04	17	外縁	凹凸	自然	縄文土器 土師器	SK910・915 → 6番
912	F 6b3	N-61°-W	楕円形	1.54 × 0.62	15 ~ 33	外縁	平坦	人為		本跡 → SD 2 ビット 1
914	E 5b7	N-34°-E	楕円形	(0.70) × 0.56	5	外縁	平坦	人為		本跡 → SK911
915	E 5b7	N-48°-W	長方形	(1.56) × 1.19	14	外縁	平坦	不明	縄文土器	本跡 → SK911
916	E 5b8	N-50°-W	楕円形	1.58 × 0.90	16	外縁	平坦	人為	縄文土器 土師器	
917	D 4b2	N-30°-E	楕円形	0.87 × 0.64	23	外縁	平坦	自然	石器	
919	D 4a8	N-2°-W	楕円形	1.70 × 1.30	92	外縁	平坦	人為		
920	E 5b7	N-23°-W	不整楕円形	1.62 × 1.35	18	外縁	平坦	自然	縄文土器	本跡 → SK861・865
921	D 5b3	-	円形	0.84 × 0.81	22	外縁	平坦	人為		

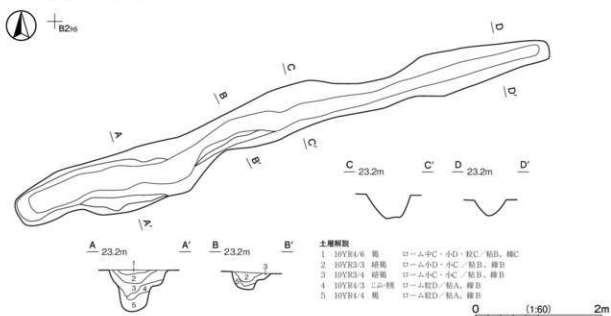
(2) 溝跡 (第 367・368 図)

第2号溝跡 (第 367 図)



第 367 図 第 2 号溝跡実測図

第3号溝跡 (第 368 図)



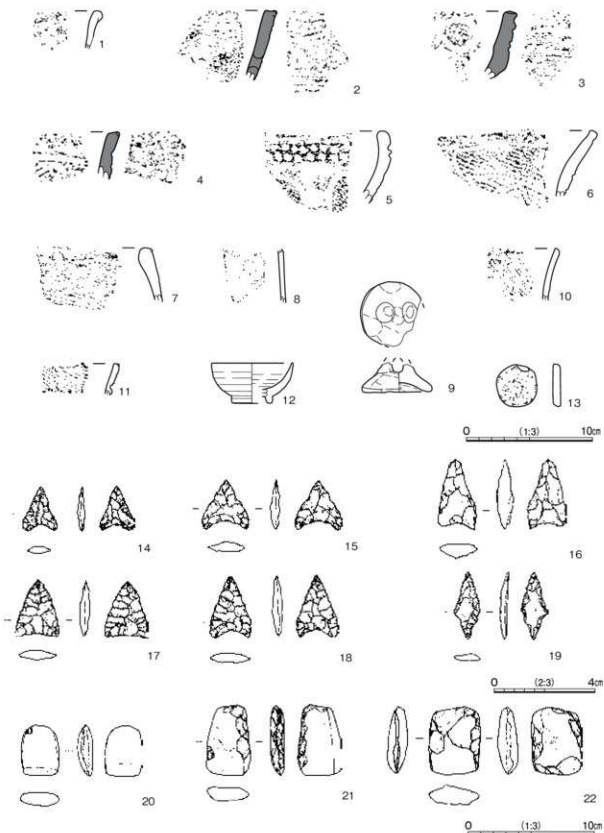
第 368 図 第 3 号溝跡実測図

第 131 表 その他の溝跡一覧

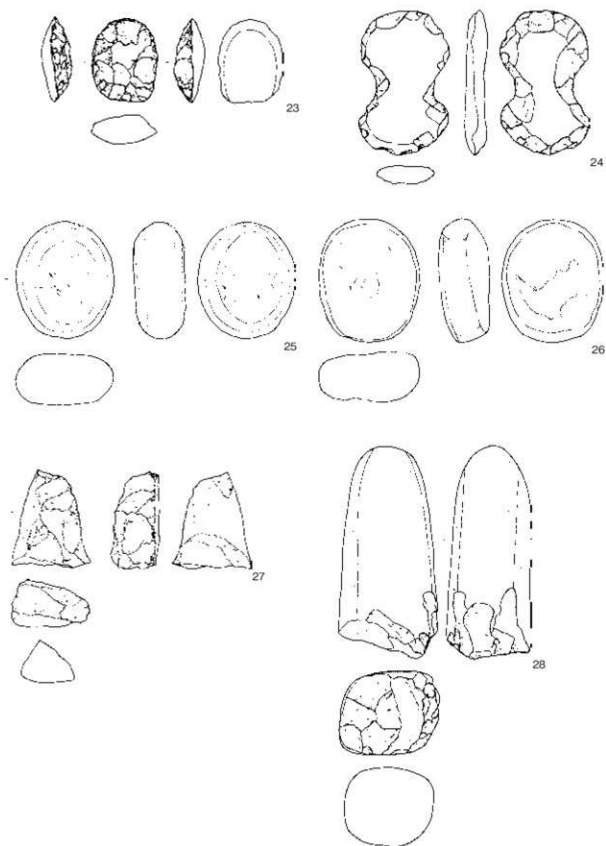
表号	位置	方向	平面形	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
2	H 6 d8 ~ H 6 c8	N ~ 121° ~ W	直線状	4.80	38 ~ 45	16 ~ 34	10	逆台形	外積	自然	-
3	B 2 b4 ~ B 2 b6	N ~ 107° ~ W	直線状	8.83	42 ~ 95	13 ~ 39	11 ~ 66	有段	外積	自然	-

(3) 遺構外出土遺物 (第 369 ~ 371 図 第 132 表 PL60・61)

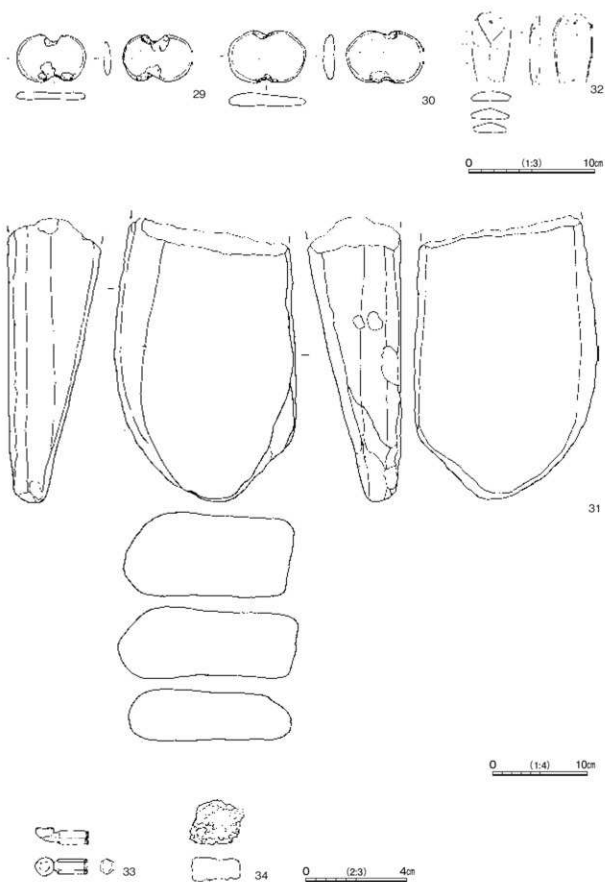
遺構に伴わない遺物や出土層位が不明な遺物のうち、特徴的なものについて、実測図と出土遺物一覽で掲載する。



第 369 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第 370 图 道槽外出土遺物実測図 (2)



第 371 図 遺構外出土遺物実測図 (3)

第132表 遺構外出土遺物一覧 (第369～371図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(30)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部単筋縄文 RL 施文	E 4cの黒褐色土中	5% PL60
2	縄文土器	深鉢	-	(54)	-	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	口唇部工具による刻み 外面沈凹区画内を内彫り竹管の刺突による光焼 内面染灰文 焼成後外面からの穿孔1か所	E 5a3b、E 5d5 表土	5% PL60
3	縄文土器	深鉢	-	(53)	-	長石・石英・繊維	橙	普通	口唇部工具による刻み 外面内彫り沈凹内を角隅状工具による刺突 内面染灰文	調査区中央部 表土	5% 焼+鳥台式
4	縄文土器	深鉢	-	(38)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・繊維	橙	普通	口唇部工具による刻み 外面沈凹1条 内彫り竹管文 手載竹管による刺突文	E 5 9 表土	5% 焼+鳥台式
5	縄文土器	深鉢	-	(57)	-	長石・石英	にぶい・黄	普通	交互刺突文 沈凹による区画内単筋縄文 RL 施文	S92	5% 加磨料E重式
6	縄文土器	深鉢	-	(51)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・黄褐	普通	縄文単筋縄文 LR 施文 沈凹による区画 蛇行する沈凹	調査区中央部 表土	5% 焼之内1式
7	縄文土器	深鉢	-	(42)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部肥厚 口唇部横位の条線後口縁部ナデ	表土	5% 安行3b式
8	縄文土器	深鉢	-	(41)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	区画内細密縄文光焼 内面磨き	表土	5% 安行3b式
9	縄文土器	蓋	-	24	[36]	長石・石英・雲母	にぶい・黄	普通	指頭圧痕 ナデ調整 つまみ部欠損 磨滅	表土	5% PL60
10	弥生土器	広口壺	-	(41)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	附加条一種 (附加2条) 縄文施文	E 5c2 黒褐色土中	5% PL60
11	弥生土器	広口壺	-	(20)	-	長石	にぶい・黄褐	普通	附加条一種 (附加2条) 縄文施文	E 5d4 黒褐色土中	5% PL60

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
12	陶器	酒杯	[64]	32	[31]	緻密 緑褐色土	緑褐色	ロクロ成形 箱高台 高台部無軸	灰緑	瀬戸・美濃	調査区北部 表土	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
13	土師片断	3.4	3.2	0.6	7.90	長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	燕系文(0段1カ・車輪筋系体) 深鉢胴部片 周縁部打ち欠き	S92	PL60

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	色調	特徴	出土位置	備考
14	石皿	1.8	1.4	0.3	0.43	黒曜石	西基無多識	両面押圧剥離	E 5e2 黒褐色土中	PL60
15	石皿	2.0	1.9	0.4	0.88	チャート	西基無多識	両面押圧剥離	E 5b3 黒褐色土中	PL60
16	石皿	2.8	1.6	0.7	2.07	チャート	西基無多識	両面押圧剥離	E 5a1 表土	PL60
17	石皿	2.3	1.7	0.5	1.26	チャート	平基無多識	両面押圧剥離	E 5c1 黒褐色土中	PL60
18	石皿	2.5	1.7	0.5	1.18	黒曜石	西基無多識	両面押圧剥離	表土 B 2e9	PL60
19	石皿	2.7	1.1	0.3	0.60	チャート	凸基無多識	両面押圧剥離	表土 D 4b5	PL60
20	磨製石斧	4.1	3.1	1.2	22.38	ホルンフェルス	小型 全面研磨		表土 E 5a1	PL60
21	磨製石斧	5.6	3.6	1.2	37.44	流紋岩	全面研磨 右側縁部・上部両面からの調整痕		調査区南部 表土	PL60
22	磨製石斧	5.4	4.1	1.6	45.90	ホルンフェルス	全面研磨 周縁部使用による欠け		調査区中央部 表土	PL60
23	片刃石斧	6.7	5.2	2.4	82.35	安山岩	扁平な楕円礫素材 片面側縁部からの加工痕 裏面自然面		調査区北部 表土	PL61
24	打製石斧	11.5	7.1	1.7	184.98	安山岩	分銅形 扁平な自然礫素材 側縁部両面からの加工 両面自然面残す		E 5a1 表土	PL61
25	磨石	9.3	7.8	4.2	433.64	花崗岩	表裏面先刃のある磨面 全面に焼熱痕		C 3 7 表土	PL61
26	磨石	9.8	8.0	4.0	493.14	石英斑岩	表裏面先刃のある磨面 表面凹み1カ所 周縁はざらつきのある磨面 全面に焼熱痕		調査区北部 表土	PL61
27	三角磨石	7.7	6.2	3.7	183.82	石英斑岩	一側縁・上部・底面に調整加工 裏面自然面		S89	PL61
28	スタンプ彫刻品	16.9	8.0	6.3	1382.70	石英斑岩	底面調整加工 棹の横溝は深い		S917	PL61
29	石鉢	3.7	5.5	0.6	16.56	安山岩	扁平な楕円礫素材 長軸方向の対となる両面側からの抉り込み		C 4 6 表土	PL61
30	石鉢	4.1	6.2	1.1	37.40	安山岩	扁平な楕円礫素材 長軸方向の対となる両面側からの抉り込み		調査区北部 表土	PL61
31	台石*	29.7	19.4	9.6	7130	雲母片岩	両面の平坦面に研磨痕		C 3 4 表土	PL61
32	彫刻模造品	5.5	3.1	0.9	21.47	滑石	片面磨 一方からの穿孔 全面研磨 孔徑		調査区中央部 表土	PL61
33	磨盤	4.2	1.5	0.15	11.76	銅	縦首部 断面六角形 小口2本の沈線 縦字部素材		E 5d3 黒褐色土中	PL61
34	鉄片	3.5	4.3	2.0	45.87	鉄	希磁性わずかにあり		調査区北部 表土	PL61

第4章 下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群

第1節 調査の概要

下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群は、つくば市の南西部に位置し、西谷田川左岸の標高約20～24mの台地平坦部から斜面部にかけて立地している。北部には下河原崎谷中台遺跡が所在している。調査面積は2749㎡で、調査前の現況は山林及び荒蕪地である。

調査の結果、竪穴建物跡6棟（縄文時代1・古墳時代4・平安時代1）、土坑139基（縄文時代1・古墳時代4・時期不明134）、古墳1基（古墳時代）、火葬墓1基（平安時代）、炉穴2基（縄文時代）を確認した。調査年度ごとの遺構番号は以下の通りである。

平成30年度 SI 1～4、SK 1～48、50～98、FP 1・2

令和5年度 SI 5・6、SK99～104、106～114、115～119、121～141、146・148、第1号火葬墓、TMI8（周溝の一部）

また、各遺構の位置は、調査年度ごとの調査区内における位置を記載した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に11箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、土師器(坏・碗・高坏・鉢・壺・甕・甗)、須恵器(坏・高坏・鉢・壺・甕・甗)、土製品(支脚)、石器(三角錐形石器・石鏃・剥片・石核)、石製品(臼玉)、金属製品(鉄鏃)、銭貨などである。

第2節 基本層序

平成30年度調査の下河原崎高山遺跡は、台地平坦部(I 6c9区)にテストピットを設定し、令和5年度調査の下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群は、台地斜面部(E 2i3区)にテストピット1を、台地縁辺部(E 1f9区)にテストピット2を設定し、それぞれ基本土層の観察を行った。テストピット設定場所については全体図に位置を記載した。平成30年度調査区のテストピットの土層は10層に分層でき、令和5年度調査のテストピットの土層は8層に分層できた。以下、各層の観察結果について述べる。

第Ⅰ層は黒褐色(10YR3/2)を呈する表土と耕作土である。ローム小ブロック・粒子と炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりは普通である。層厚は20cmである。

第Ⅱ層は褐色(10YR4/6)を呈するソフトローム層である。平成30年度調査区のテストピットでは、クラックが発達しており、炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりは普通である。層厚は14～20cmである。

第Ⅲ層は褐色(10YR4/6)を呈するハードローム層である。炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりは共に普通である。層厚は7～19cmである。

第Ⅳ層は褐色(10YR4/6)を呈するハードローム層である。1～2cmほどの大きさのブロック状の塊を少量含む。また、黒色粒子を微量に含む。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は9～19cmである。

第Ⅴ層は褐色(10YR4/4)を呈するハードローム層である。上部には若干クラックが発達し、Ⅳ層が入り込んでいる。1～2cmほどの大きさのブロックを中量程度含む。黒色粒子が微量に含まれ、粘性は普通で、締まりはやや強い。層厚は7～19cmで、暗色帯の可能性はある。

第Ⅵ層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈するハードローム層である。ブロック状に凝固したロームを中量含む。また、黒色粒子を微量に、赤色粒子を極微量に含む。粘性は普通で、締まりはやや強い。層厚は16～21cmである。

第Ⅶ層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈するハードローム層である。赤色粒子を微量に、黒色粒子を極微量に含む。粘性はやや強く、締まりは強い。層厚は7～14cmである。

第Ⅷ層は褐色(10YR4/4)を呈するハードローム層である。黒色粒子を極微量に含み、粘性と締まりはやや強い。層厚は15～25cmである。

第Ⅸ層は褐色(10YR4/6)を呈するハードローム層である。黒色粒子を極微量に含み、粘性・締まりは共にやや強い。層厚は15～22cmである。

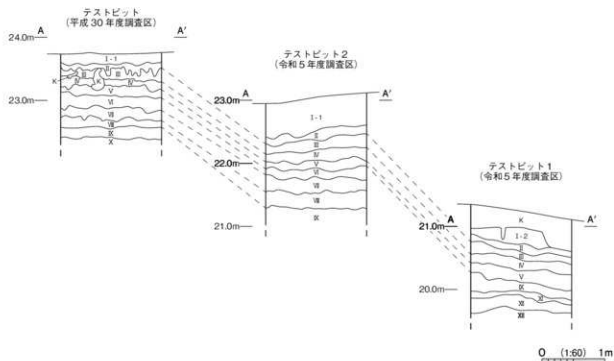
第Ⅹ層は褐色(10YR4/6)を呈するハードローム層である。第Ⅸ層よりもシルト質が強い。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は11cmまで確認した。

第Ⅺ層は明黄褐色(10YR6/6)を呈するハードローム層である。砂粒を少量含み、粘性と締まりは強い。層厚は5～15cmである。

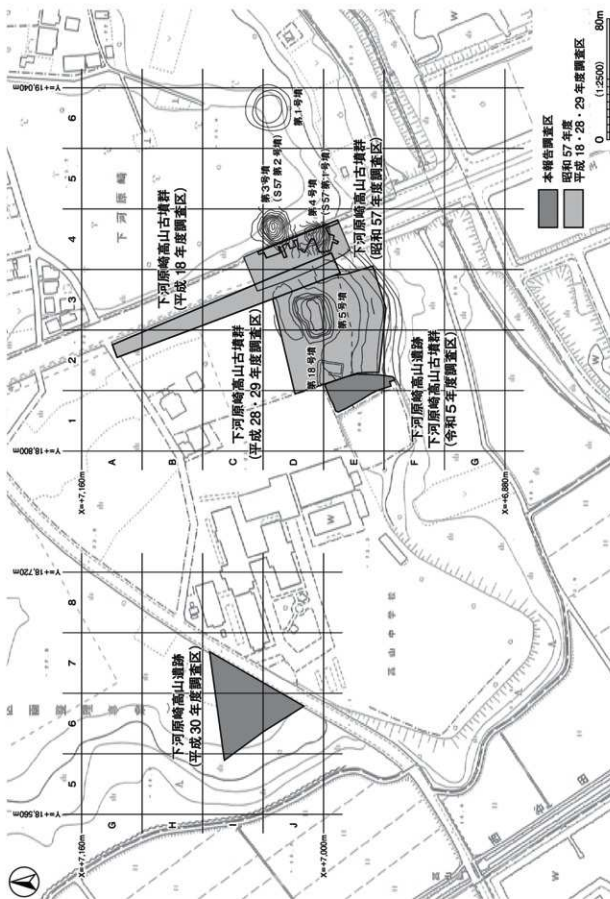
第Ⅻ層は灰黄褐色(10YR6/2)を呈する粘土層である。砂粒を多量に含み粘性は極めて強く、締まりは強い。層厚は12～24cmである。

第Ⅼ層は、にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する粘土層である。砂粒を少量含み、粘性・締まりは共に強い。層厚は13cmまで確認した。

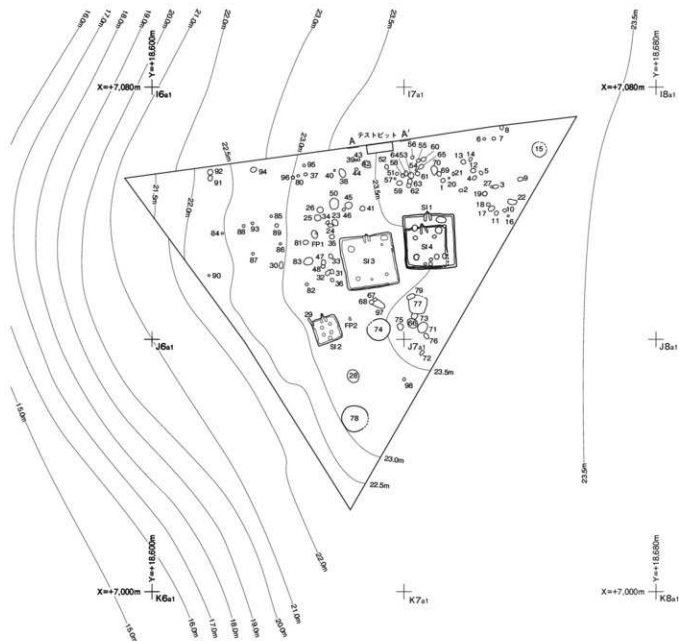
遺構は第Ⅱ層上面で確認した。



第372図 基本土層図



第 373 図 下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群調査区設定図（つくば市都市計画図 2,500 分の 1 を改変）



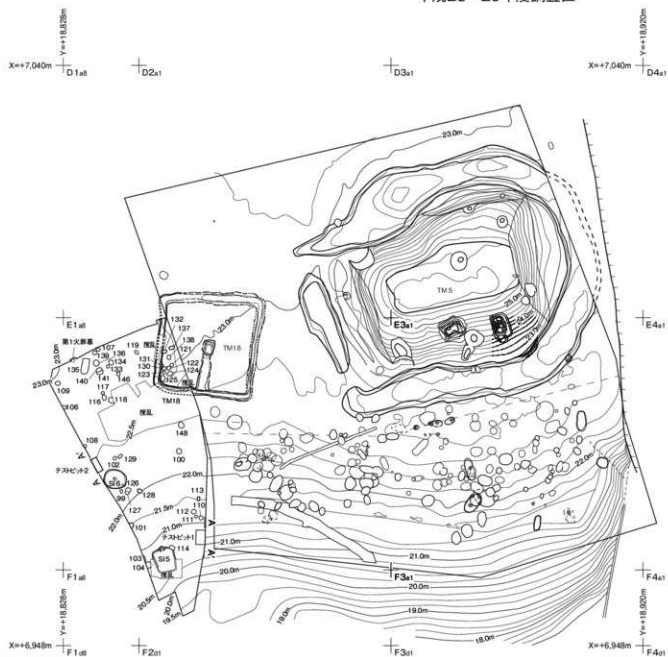
平成30年度調査区

0 (1:600) 20m

第 374 図 下河原崎高山遺跡 (平成 30 年度調査区) 遺構全体図



平成28・29年度調査区



令和5年度調査区

第 375 図 下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群（令和5年度調査区）遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

竪穴建物跡1棟、炉穴2基、土坑1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第6号竪穴建物跡（第376図 第133表 PL63・67）

位置 調査区西部のE1g0区、標高22mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径3.62m、短径3.14mの楕円形で、長径方向はN-53°-Wである。壁は高さ9～20cmで、外傾している。

床 ほは平坦で、中央部が硬化している。

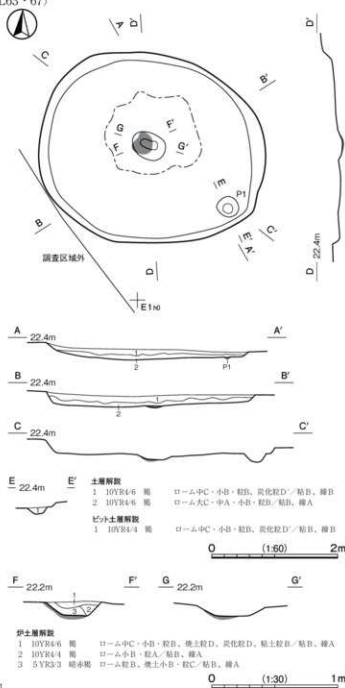
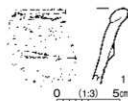
炉 中央部に位置している。長径55cm、短径42cmの楕円形で、深さ8cmほどの皿状を呈する地床炉である。炉床面は北西側が赤変硬化している。

ピット 1か所。径34cm、深さ15cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを比較的多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片3点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第376図 第6号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第133表 第6号竪穴建物跡出土遺物一覧（第376図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(60)	-	長石・石英・細礫	にぶい	普通	成坑口縁、胴部隆起・沈線による区内内準銘文施、筋文	覆土	5% PL67 中期後葉 (加曾利EⅢ式)

(2) 炉穴

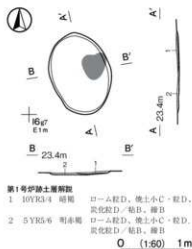
第1号炉穴 (第377図)

位置 調査区北部のI6f7区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.31m、短径0.96mの楕円形で、長径方向はN-12°-Wである。深さは最大4cmで、壁は外傾している。炉床面の位置から北東部が燃焼部で、南西部が足場である。炉床面は北東壁寄りの底面から壁面にかけて位置しており、長径0.40mの不整形を呈し、被熱により赤変硬化している。

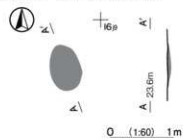
覆土 2層に分層できる。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

所見 遺物は出土していないが、形状から、早期の炉穴と考えられる。



第1号炉穴土層解説
1 10YR3-4 暗褐色 ローム粒D、焼土小C・粒D、炭化粒D/粘B、粘B
2 5YR5-6 暗赤褐色 ローム粒D、焼土小C・粒D、炭化粒D/粘B、粘B

第377図 第1号炉穴実測図



第378図 第2号炉穴実測図

第2号炉穴 (第378図)

位置 調査区北部のI6j8区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

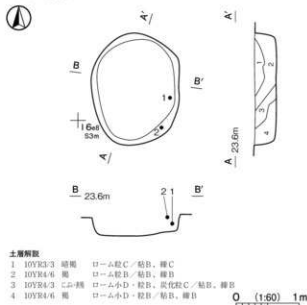
規模と形状 燃焼部の炉床面のみを確認した。長径0.74m、短径0.49mの楕円形を呈し、被熱により赤変硬化している。

所見 遺物は出土していないが、北部に隣接する下河原崎谷中台遺跡から類似する形状の炉穴が確認できることから、時期は縄文時代と考えられる。

第134表 縄文時代炉穴一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		燃焼部	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (cm)	深さ (cm)					
1	I6f7	N-12°-W	楕円形	1.31 × 0.96	4	平坦	外傾	不明	-	
2	I6j8	N-13°-W	楕円形	0.74 × 0.49	-	平坦	-	-	-	

(3) 土坑



土層解説
1 10YR3-3 暗褐色 ローム粒C/粘B、粘B
2 10YR4-6 黄褐色 ローム粒B/粘B、粘B
3 10YR4-3 赤褐色 ローム小D・粒B、炭化粒C/粘B、粘B
4 10YR4-6 黄褐色 ローム小D・粒B/粘B、粘B

第379図 第50号土坑実測図

第50号土坑 (第379・380図 第135表 PL63・67)

位置 調査区北部のI6e8区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.75m、短径1.37mの楕円形で、長径方向はN-3°-Wである。深さは32cmで、壁は外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 4層に分層できる。第1層は含有物の少ない黒色土であることから、自然堆積である。第2～4層は各層にロームブロックを含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片13点が出土している。

1は東部の覆土中層から、2は南東部の覆土上層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉（堀之内2式期）と考えられる。



第380図 第50号土坑出土遺物実測図

第135表 第50号土坑出土遺物一覧（第380図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(62)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄	普通	単筋縄文 RL 施文 手載竹管によるU字文・横 位花模文	覆土中層	5% PL67
2	縄文土器	深鉢	-	(99)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	手載竹管による三角区画文	覆土上層	5% PL67 堀之内2式

2 古墳時代の遺構と遺物

竪穴建物跡4棟、土坑4基、古墳1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第381～385図 第136表 PL64・67）

調査年度 平成30年度

位置 調査区中央部のI7fl区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

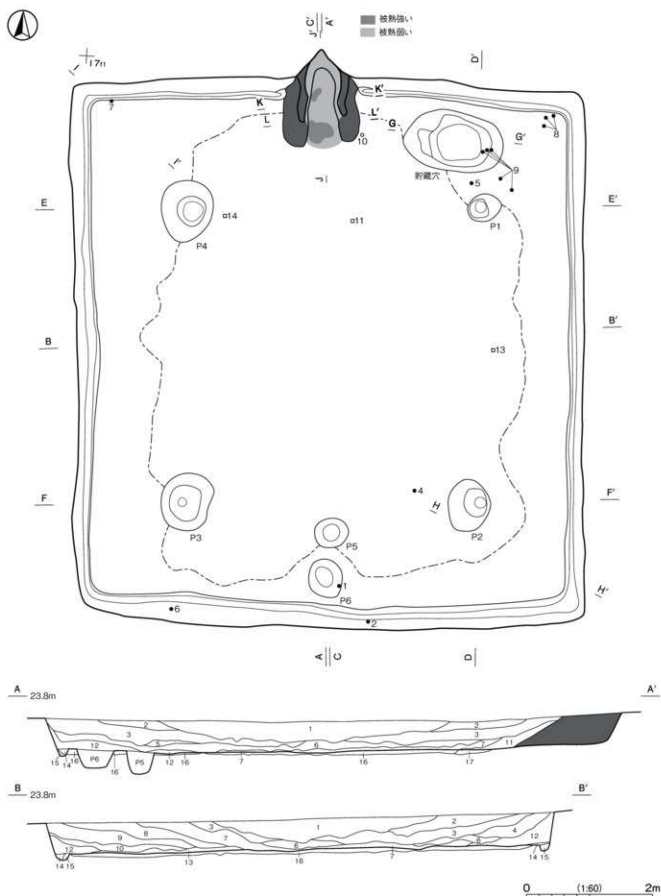
重複関係 第4号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸8.74m、短軸8.08mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁は高さ45～60cmで、外傾している。

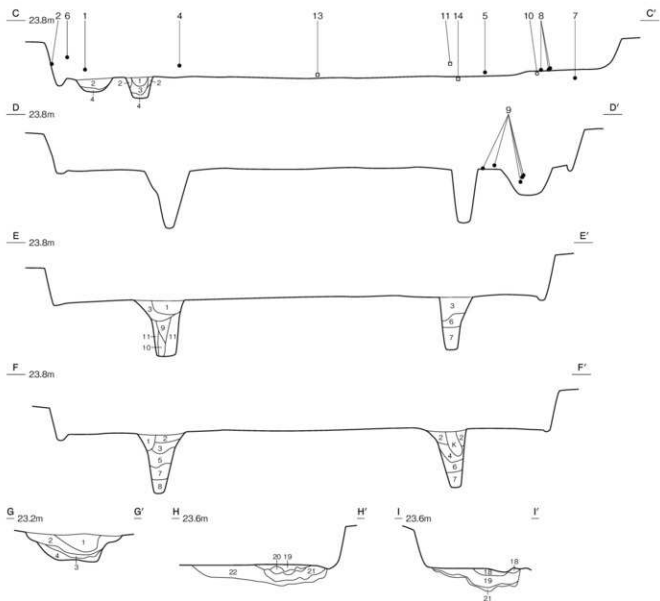
床 はほぼ平坦で、壁際を除いて硬化している。壁溝は、全周している。全面が貼床で、全体を3～8cm、四隅を30～35cm掘り下げ、ロームブロックを含む第16～22層を埋土して構築されている。

竈 北壁の中央部に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで160cmで、燃焼部幅は53cmである。地山を3～22cmほど掘りくぼめ、第18～20、25～27層を埋土している。軸は、粘土ブロックを含む第21～24層を積み上げて構築されている。燃焼部の内壁と火床面の第18層は、被熱により赤変硬化しており、焚口側の左袖寄りの一部は硬化が強い。煙道部は、壁から42cmほど張り出し、外傾している。第1～3層は流入土で、第4～17層は焼土ブロック・粘土ブロックを含む天井部や内壁の崩落土である。

ピット 6か所。P1～P4は深さ88～96cmで、規模と配置から主柱穴である。P5・P6は深さ35cm・26cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。



第381図 第1号堅穴建物跡実測図(1)



土層解説

1 10YR2/2 黒褐色	ローム小C・粒C、焼土小D・粒D、炭化粒D/粘B、雜B	13 10YR3/3 暗褐色	ローム小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
2 10YR3/2 黒褐色	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化物D・粒D/粘B、雜B	14 10YR3/2 黒褐色	ローム粒D、炭化粒D/粘B、雜B
3 10YR3/3 暗褐色	ローム中D・小D・粒C、炭化粒D/粘B、雜B	15 10YR4/3 二色褐色	ローム小C・粒C/粘B、雜B
4 10YR3/4 暗褐色	ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B	16 10YR3/4 暗褐色	ローム中C・小C・粒D、焼土粒D、炭化粒D/粒C、雜A
5 10YR4/4 褐色	ローム小C・粒C、炭化粒D/粘B、雜B	17 10YR3/4 暗褐色	ローム中C・小C・粒D、焼土粒D、炭化粒D、粘土小C/粒C、雜A
6 10YR3/4 暗褐色	ローム中D・小C・粒C、焼土大D・小D・粒D、炭化粒D/粘B、雜B	18 10YR5/4 二色褐色	ローム中C・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
7 10YR3/3 暗褐色	ローム小C・粒C、炭化粒D/粒D/粘B、雜B	19 10YR3/3 暗褐色	ローム中D・小B・粒B、炭化物D・粒D/粘B、雜B
8 10YR3/2 黒褐色	ローム中D・小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B	20 10YR3/4 暗褐色	ローム中B・小B・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
9 10YR2/3 黒褐色	ローム中C・小C・粒C、炭化粒D/粘B、雜B	21 10YR4/3 二色褐色	ローム小C・粒B/粘B、雜B
10 10YR3/2 暗褐色	ローム小C・粒C、炭化粒D、粘B、雜B	22 10YR4/4 褐色	ローム大C・中B・小B・粒B/粘B、雜B
11 10YR3/3 暗褐色	ローム小D・粒C、焼土小D・粒C、炭化粒D、粘土小C/粘B、雜B		
12 10YR3/3 暗褐色	ローム小C・粒B、炭化物D・粒D/粘B、雜B		

貯蔵穴土層解説

1 10YR3/2 黒褐色	ローム小C・粒C、焼土小D・粒D、炭化粒D/粘B、雜B
2 10YR3/3 暗褐色	ローム小D・粒B、焼土粒D、炭化物D・粒D/粘B、雜B
3 10YR4/3 二色褐色	ローム小C・粒B、炭化粒D、炭化物D・粒D/粘B、雜B
4 10YR4/4 褐色	ローム粒B、炭化物D・粒D/粘B、雜B

ビツ土層解説(赤ビツ井通)

1 10YR3/3 暗褐色	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B
2 10YR4/3 二色褐色	ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化物D・粒D/粘B、雜B
3 10YR3/4 暗褐色	ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化物D・粒D/粘B、雜B
4 10YR4/3 二色褐色	ローム小C・粒B/粘B、雜B
5 10YR3/4 暗褐色	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化物D・粒D/粘B、雜B
6 10YR3/4 暗褐色	ローム中D・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
7 10YR3/4 暗褐色	ローム中D・小C・粒C、炭化物D・粒D/粘B、雜B
8 10YR4/4 褐色	ローム粒B、炭化粒D/粘B、雜B
9 10YR4/3 二色褐色	ローム小C・粒C、炭化粒D/粘B、雜C
10 10YR5/3 二色褐色	ローム小D・粒B/粘B、雜C
11 10YR4/4 褐色	ローム粒B、炭化粒D/粘B、雜B

0 (1:80) 2m

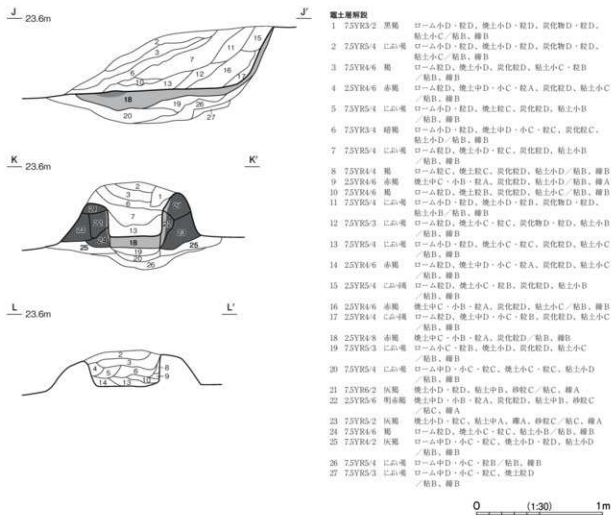
第 382 図 第 1 号堅穴建物跡実測図 (2)

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径160cm、短径95cmの楕円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は段を有して外傾している。覆土は、各層にロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

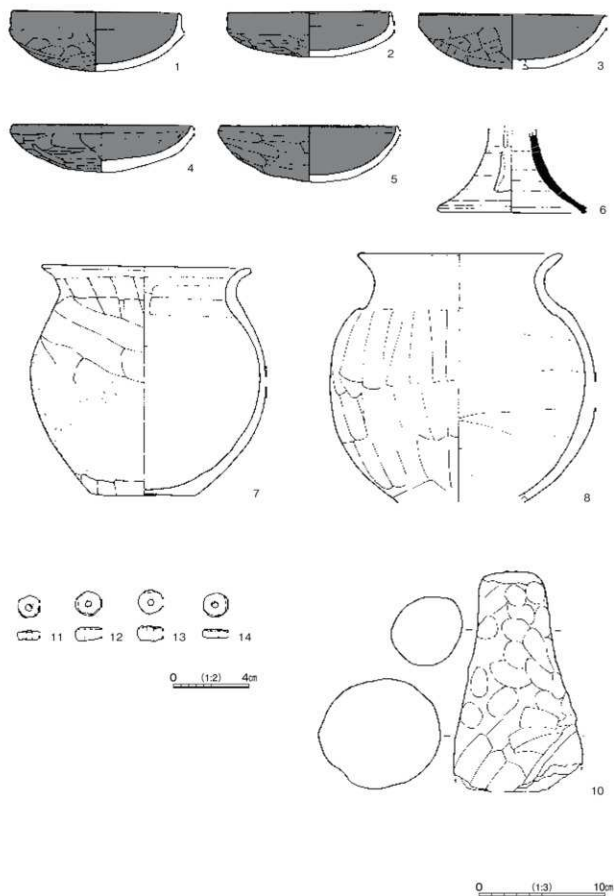
覆土 15層に分層できる。第1・2層は黒褐色を呈し、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第3～15層は各層にロームブロック・焼土ブロック・炭化物を含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片315点（坏96、高坏9、甕210）、須恵器片1点（高坏）、土製品8点（支脚6、不明土製品2）、石製品4点（滑石製白玉）が出土している。ほかに混入した縄文土器片19点、陶器1点が出土している。遺物は、貯蔵穴周辺の床面から覆土下層にかけてと、南壁際中央の覆土中層から多く出土している。1・2は南壁際中央の覆土下層～中層から、7は北西コーナー部、8は北東コーナー部の床面から、それぞれ斜位の状態で出土している。9は床面と貯蔵穴の覆土上層から出土した破片が接合している。10の支脚は竈形袖脇の床面から横位の状態で出土している。11～14は床面付近から出土している。壁際から斜位に流れ込むように出土している遺物が多い。

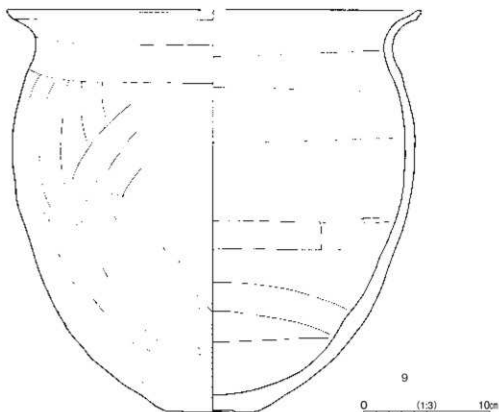
所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。本跡は、下位で確認した第4号竪穴建物跡の西壁と南壁を利用しながら、北と東側に拡張して建て替えが行われたと考えられる。また、本跡のP3は第4号竪穴建物跡の南西部のP3と共有していたと考えられる。



第383図 第1号竪穴建物跡実測図(3)



第 384 图 第 1 号窑穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 385 図 第 1 号堅穴建物跡出土遺物実測図 (2)

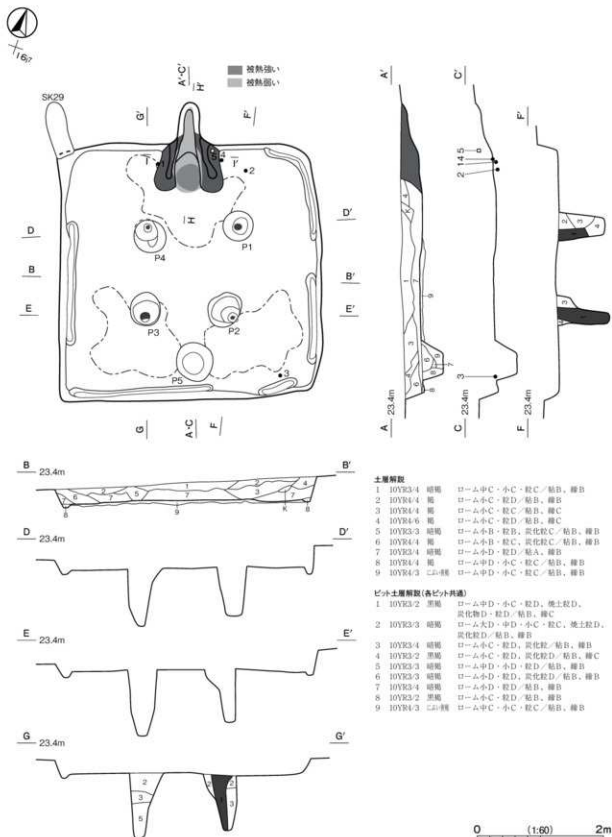
第 136 表 第 1 号堅穴建物跡出土遺物一覧 (第 384・385 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	罎	132	48	丸底	長石・石英・赤色 粒子	黒褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土下層	90% PL.67
2	土師器	罎	130	36	丸底	長石・石英・赤色 粒子	褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・ヘラ内リ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土中層	70% PL.67
3	土師器	罎	[146]	(44)	丸底	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・ヘラ内リ 内面ナデ 内外面黒色処理	粉蔵穴覆土	40%
4	土師器	罎	142	38	丸底	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ後へ タ磨き 内外面黒色処理	覆土下層	70% PL.67
5	土師器	罎	140	44	丸底	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土下層	80% PL.67
6	須恵器	高杯	-	(66)	[114]	長石	灰黄褐色	良好	外面クロコナデ 二枚の透かし	覆土中層	5% PL.67
7	土師器	甕	164	182	84	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部ナデ 肩部・体部外面上半部ヘラナデ 体部外面下半部ヘラ磨き 下底ヘラナデ 体部 内面ヘラナデ 底部ヘラナデ	床面	95% PL.67
8	土師器	甕	156	(196)	-	長石・石英・赤色 粒子	褐色	普通	口縁部・肩部横ナデ 体部ヘラナデ	床面	70% PL.67
9	土師器	甕	[322]	318	(70)	長石・石英・赤色 粒子	褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面上半部ヘラナデ 下半 部ヘラ磨き 内面ヘラナデ・輪縁部 底部ナデ	床面 右側古層土層	50%
番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	色調	特 徴	出土位置	備 考	
10	支脚	48	(10.3)	(17.6)	31.0g	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	全面ナデ 下端指頭状 焼熱により剥落	床面	PL.67	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考		
11	白玉	1.2	1.2	0.5	1.15	滑石	全面研磨 一方向からの磨孔 孔径 0.3cm	覆土中層	PL.67		
12	白玉	1.3	1.4	0.7	1.85	滑石	全面研磨 一方向からの磨孔 孔径 0.3cm	覆土下層	PL.67		
13	白玉	1.3	1.4	0.7	1.73	滑石	全面研磨 一方向からの磨孔 孔径 0.4cm	覆土下層	PL.67		
14	白玉	1.3	1.4	0.4	1.25	滑石	全面研磨 一方向からの磨孔 孔径 0.4cm	床面	PL.67		

第2号竪穴建物跡 (第386～388図 第137表 PL64・67・68)

位置 調査区中央部のI 6 J 区、標高23 mほどの台地縁部に位置している。

重複関係 第29号土坑に掘り込まれている。



第386図 第2号竪穴建物跡実測図(1)

規模と形状 長軸 413 m、短軸 410 m の方で、主軸方向は N-20°-W である。壁は高さ 30～50 cm で、外傾している。

床 ほぼ平坦で、竈の焚口前方部、P2 の南東部、P3 の南西部が硬化している。壁溝は、北西コーナー部を除いて断続的に巡っている。ほぼ全面が貼床で、全体を 3～8 cm ほど掘り下げ、ロームブロックを含む第 9 層を埋土して構築されている。

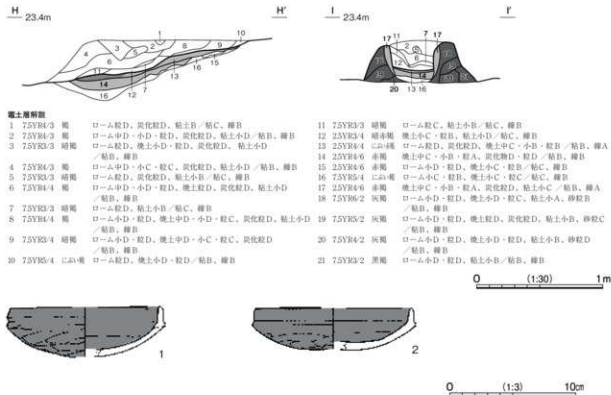
竈 北壁の中央部に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで 142 cm で、燃焼部幅は 54 cm である。地山を 3～21 cm 掘りくぼめ、第 13～16 層を埋土している。軸は、粘土ブロックを含む第 17～21 層を積み上げて構築されている。燃焼部の内壁及び火床面の第 13・14・17 層は、被熱により赤変硬化しており、焚口側中央部は硬化が強い。煙道部は、壁から 66 cm ほど張り出し、外傾している。第 1～5 層は不規則な堆積状況から、天井部崩落後の人為堆積で、第 6～12 層は焼土ブロック、粘土ブロックを含む天井部や内壁の崩落土である。

ピット 5 か所。P1～P4 は深さ 77～106 cm で、規模と配置から主柱穴である。いずれの底面にも柱当たりと考えられる硬化部分を確認した。P5 は深さ 27 cm で、配置から出入口施設に伴うピットである。P1・P2・P4 は、第 1 層が柱痕跡で、第 2～4 層は埋土である。P3 の第 1～5 層と P5 の第 6～9 層は、抜き取り後の流入土である。

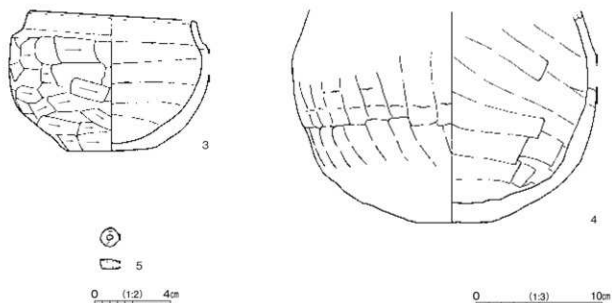
覆土 8 層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況を示すことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 50 点（坏 10、高坏 1、甕 31、甌 8）、石製品 1 点（滑石製白玉）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 2 点が出土している。遺物は竈周辺の床面から多く出土している。1 は竈左脇脇、2・4 は右脇脇の床面から、斜位の状態で、3 は南東壁際から逆位で潰れた状態で、5 は竈右脇の覆土上層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。



第 387 図 第 2 号堅穴建物跡・出土遺物実測図(1)



第388図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第137表 第2号竪穴建物跡出土遺物一覧(第387・388図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[118]	(39)	丸底	灰石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・輪轢痕 内面ナデ 内外面黒色処理	床面	20%
2	土師器	坏	[122]	(33)	丸底	灰石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内外面黒色処理 底部ヘラナデ	内面ナデ 床面	20%
3	土師器	鉢	130	11.1	7.0	灰石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・輪轢痕 底部ヘラナデ	内面ナデ 床面	90% PL68
4	土師器	甕	-	(16.8)	5.8	灰石・石英・赤色粒子・黒色粒子・黒炭	灰黄褐色	普通	体部内外面ヘラナデ・輪轢痕 底部ナデ	床面	50% PL68
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
5	白土	1.0	1.0	0.5	0.68	滑石	全面研磨	1方向からの穿孔	孔径0.3cm	覆土上層	PL67

第3号竪穴建物跡(第389～392図 第138表 PL64・65・68・69)

位置 調査区中央部のI 6g8区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

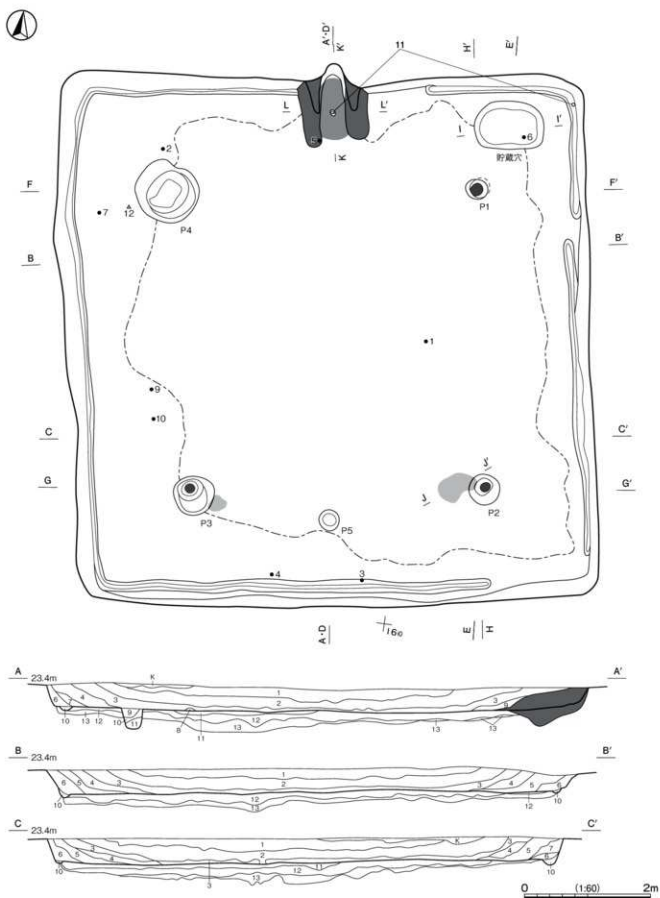
規模と形状 長軸8.34m、短軸8.32mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁は高さ20～50cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦で、壁際を除いて硬化している。壁溝は、一部を除きほぼ全周している。全面が貼床で、全体を中央部に向かって7～34cm深く掘りくぼめ、ロームブロックを含む第11～13層を埋土して構築されている。

竈 北壁の中央部に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで126cmで、燃焼部幅は40cmである。地山を17cmほど掘りくぼめ、第10・15層を埋土している。袖は、粘土ブロックを含む第11～14層を積み上げて構築されている。燃焼部の内壁及び火床面の第10層は、被熱により赤変硬化している。煙道部は、壁から30cmほど張り出し、外傾している。第1～3層は流入土で、第4～9層は焼土ブロック・粘土ブロックを含む天井部や内壁の崩落土である。

ピット 5か所。P1～4は深さ34～75cmで、規模と配置から主柱穴である。P1・P2・P3の底面に柱当たりと考えられる硬化部分を確認した。P5は深さ33cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 北東コーナ部に位置している。長径109cm、短径74cmの楕円形で、深さは21cmである。底面は平坦で、



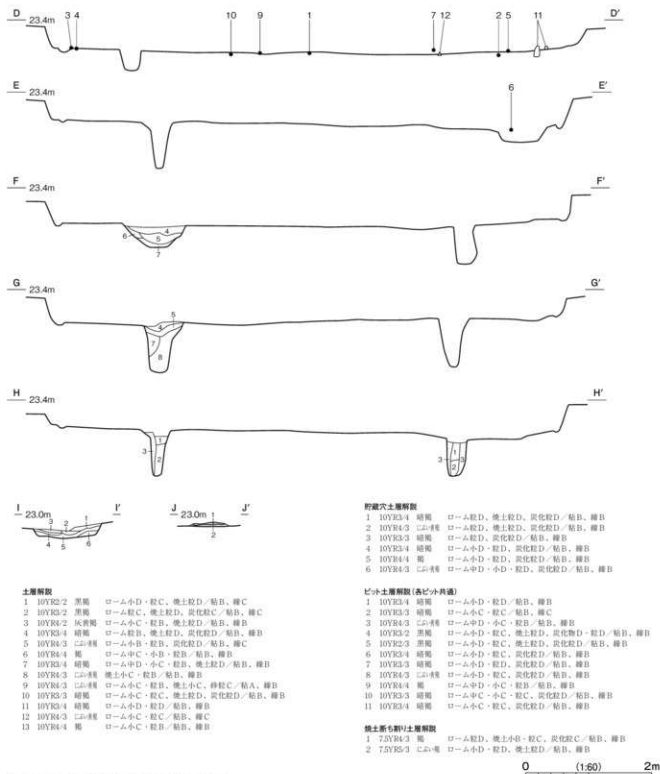
第 389 図 第 3 号堅穴建物跡実測図 (1)

壁は外傾している。覆土は不規則な堆積状況を示すことから、人為堆積である。

覆土 10層に分層できる。第1・2層は黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

第3～10層は各層にロームブロック・焼土ブロック・炭化物を含むことから、人為堆積である。

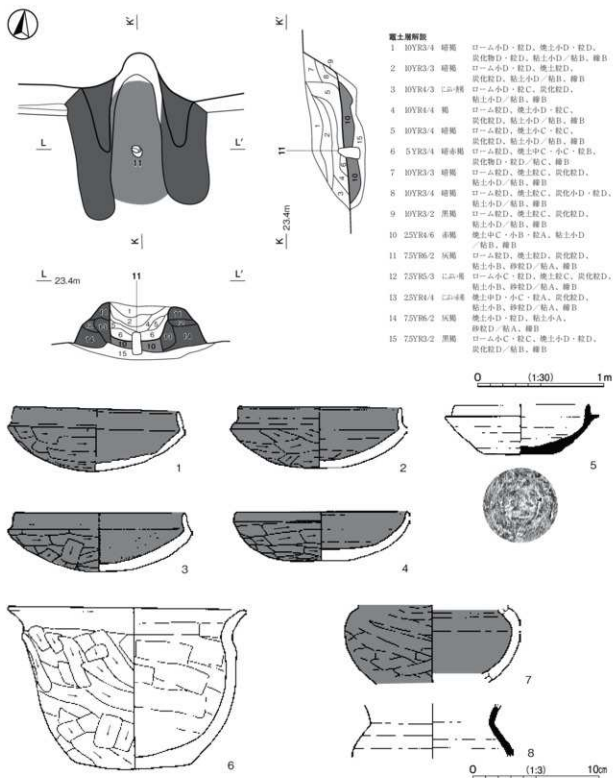
遺物出土状況 土師器片 277点（坏58、高坏29、鉢1、甕165、甌24）、須恵器片1点（甕）、土製品2点（支脚）、金属製品1点（鉄鎌）が出土している。ほかに混入した縄文土器片54点、石器1点が出土している。1～3は正位の状態、4は逆位の状態で床面から、それぞれ出土している。5は竈左袖の上部から正位の状態



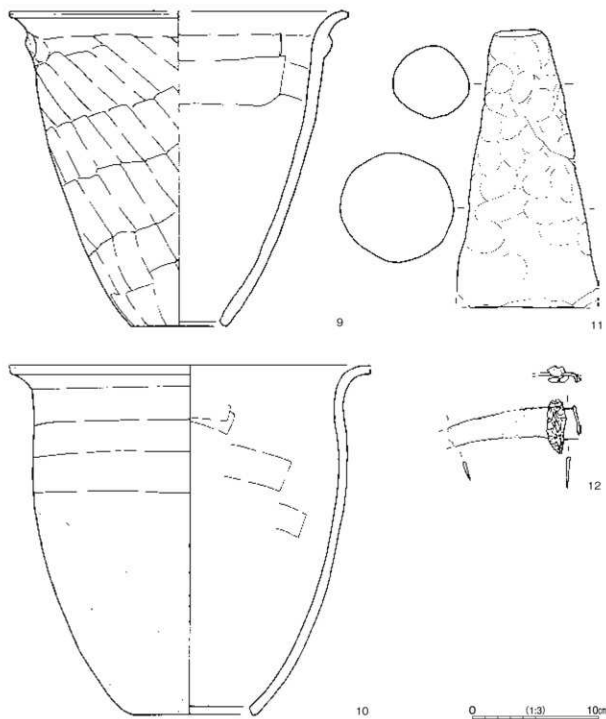
第390図 第3号堅穴建物跡実測図(2)

で、6は貯蔵穴の覆土上層から横位の状態で、9・10は南西壁寄り中央部の床面から、それぞれ出土している。
11の支脚は、下部は火床面に据えられた状態で、上部は北東コーナー壁際から出土している。12はP4南西側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第391図 第3号堅穴建物跡・出土遺物実測図(1)



第392図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第138表 第3号竪穴建物跡出土遺物一覧(第391・392図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	130	5.0	丸底	灰石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内外面黒色処理	内面ナデ	床面 100% PL68
2	土師器	坏	127	5.0	丸底	灰石・石英・赤母・ 赤色粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り ナデ・ナデ 内外面黒色処理	内面ヘラナ デ	床面 90% PL68
3	土師器	坏	135	4.8	丸底	灰石・石英・赤母・ 赤色粘土	明褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り ナデ 内外面黒色処理	内面ヘラ削 り	床面 70% PL68
4	土師器	坏	136	4.9	丸底	灰石・石英・赤母・ 赤色粘土	明黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り ナデ 内外面黒色処理	内面ナデ	床面 60%
5	須恵器	坏	104	4.0	6.0	灰石・黒色粘土	灰	良好	口縁部横ナデ 底部回転ヘラ削り		蔵左箱 100% PL68

番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼 成	特 徴	出土位置	備 考
6	土師器	鉢	18.5	13.0	8.9	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ 底部ヘラナデ	貯蔵穴 覆土上層	90% PL68
7	土師器	壺	—	(62)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい黄緑	普通	体部外面ヘラナデ 内面ナデ 外面黒色処理	覆土下層	20% PL68
8	須恵器	壺	—	(41)	—	長石・石英	黄灰	良好	口縁ナデ	覆土中層	5% PL68
9	土師器	瓶	[266]	25.1	[7.5]	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部横ナデ 体部内外面ヘラナデ 突起貼り付け3か所	床面	80% PL68
10	土師器	瓶	28.6	27.8	9.3	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい黄緑	普通	口縁部横ナデ 体部外面上半部ナデ 下半部ヘラナデ 内面ヘラナデ	床面	70% PL69

番号	器 種	最小径	最大径	高さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
11	支脚	4.0	(11.2)	22.1	(176)	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	全面ナデ 下縁部直板 被熱により剥落	遺穴床面 床面	PL69

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
12	鎌	(10.6)	2.7	0.3	(20.88)	鉄	曲刃直角鎌 柄部木質付着 茎部折り曲げ 刃部断面三角形 刃先・刃部端欠損	床面	PL69

第4号竪穴建物跡（第393～395図 第139表 PL65・69）

位置 調査区中央部のI7区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第1号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 上部が第1号竪穴建物に掘り込まれているため、確認できた規模は長軸6.60m、短軸6.45mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。

床 ほは平坦で、竈前方から中央部にかけて硬化している。壁溝は、ほは全周している。

竈 北壁のやや西寄りに位置している。規模は、焚口部から煙道部まで156cmで、燃焼部幅は59cmである。地山を16cmほど掘りくぼめ、第4～8層を埋土している。袖は、粘土ブロックを含む第3層を積み上げて構築されている。火床面の第4層は、被熱により赤変硬化している。煙道部は、壁から50cmほど張り出し、外傾している。第1層は流入土で、第2層は焼土ブロックを含む天井部や内壁の崩落土である。

ピット 5か所。P1～4は深さ80～100cmで、規模と配置から主柱穴である。いずれの底面にも柱当たりと考えられる硬化部分を確認した。P5は深さ28cmで、配置から出入口施設に伴うピットである。P3は、第1号竪穴建物跡のP3と共有していたものと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径110cm、短径108cmの円形で、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含むことから、人為堆積である。

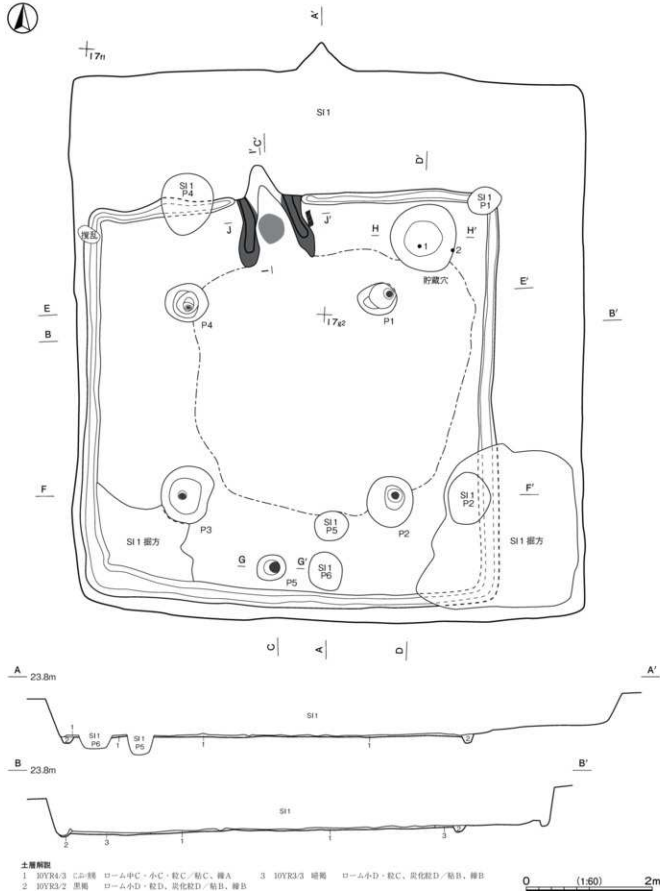
覆土 3層に分層できる。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片16点（坏4、甕12）が出土している。1・2は貯蔵穴の覆土下層から出土している。

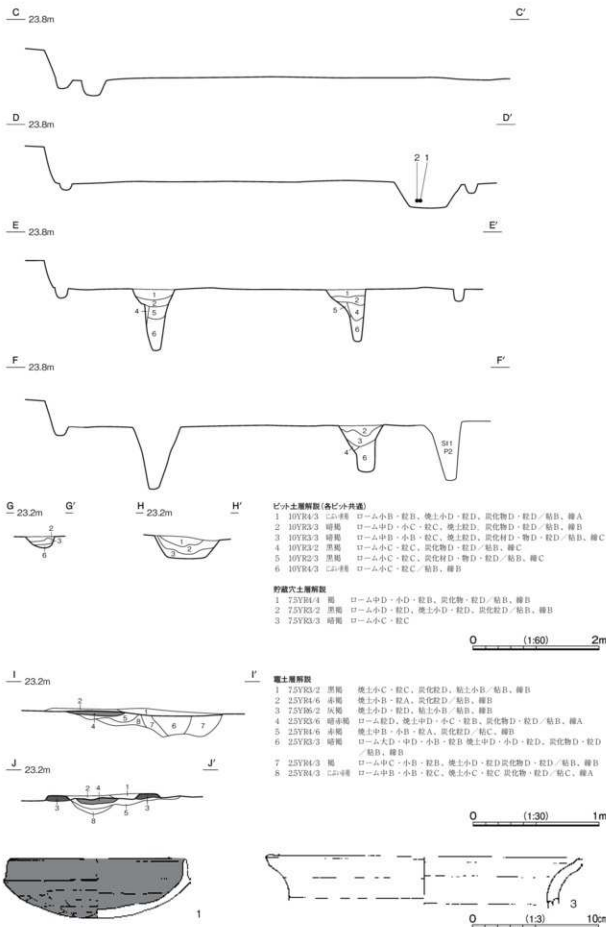
所見 時期は、6世紀後葉と考えられる。本跡は、ピットと南・西壁の一部共有していることから、上位で確認した第1号竪穴建物の建て替え前の建物と考えられる。

第139表 第4号竪穴建物跡出土遺物一覧（第394・395図）

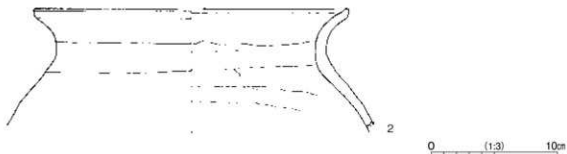
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[138]	4.7	丸底	長石・石英・赤色 粘土	黄灰	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	貯蔵穴 覆土下層	50% PL69
2	土師器	甕	[244]	(98)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	貯蔵穴 覆土中層	10% PL69
3	土師器	甕	[246]	(40)	—	長石・石英	にぶい赤黄	普通	口縁部横ナデ	P2覆土	5%



第393図 第4号堅穴建物跡実測図 (1)



第394図 第4号竪穴建物跡・出土遺物実測図(1)



第395図 第4号竪穴建物跡実測図(2)

第140表 古墳時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	主な出土遺物	時 期	備 考
				長軸×短軸 (m)				上柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴	貯蔵坑				
1	17区	N-5°-W	方形	8.74 × 8.08	45~60	平坦	全周	4	2	-	北壁	1	-	自然土	土師器 煎茶器 土製品 石製品	7世紀前半	SI 4→本跡
2	16区	N-20°-W	方形	4.13 × 4.10	30~50	平坦	一部	4	1	-	北壁	-	-	人為	土師器 石製品	6世紀後半	本跡→SK29
3	16区	N-6°-W	方形	8.34 × 8.32	20~50	平坦	ほぼ全周	4	1	-	北壁	1	-	人為	土師器 瓦器 土製品 金属製品	7世紀前半	
4	17区	N-5°-W	方形	6.60 × 6.65	-	平坦	ほぼ全周	4	1	-	北壁	1	-	人為	土師器	6世紀後半	本跡→SI

(2) 土坑

第42号土坑 (第396図 第141表 PL65・69)

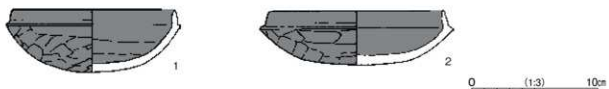
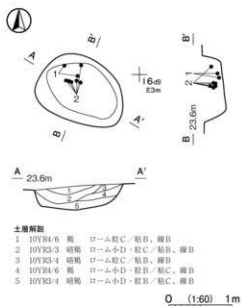
位置 調査区北部の16d9区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.42m、短径1.04mの楕円形で、長径方向はN-59°-Wである。深さは36cmで、壁は外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 5層に分層できる。各層の含有物は少ないが、覆土下層から上層にかけて出土した遺物が接合することから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片8点(坏)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点が出土している。1は覆土下層から出土した破片が、2は覆土中層から上層にかけて出土した破片が、それぞれ接合したものである。

所見 時期は、出土土器から6世紀後半である。



第396図 第42号土坑・出土遺物実測図

第141表 第42号土坑跡出土遺物一覧(第396図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	便底	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	128	50	九底	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ 外内面黒色処理	体部外面ヘナデ 内面ナデ	覆土下層 80% PL69
2	土師器	坏	138	43	九底	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部横ナデ 内外面黒色処理	体部外面ヘナデ 内面潤滑	覆土中層～上層 60% PL69

第74号土坑 (第397図 第142表 PL65・69)

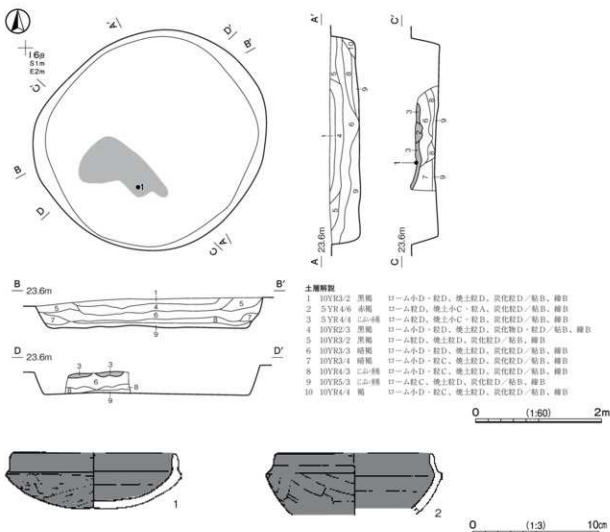
位置 調査区中央部のI 6j0区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径3.62m、短径3.23mの楕円形で、長径方向はN-46°-Eである。深さは45cmで、壁は直立している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 10層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不自然な水平堆積が認められることから、人為堆積である。覆土上層の第2・3層は焼土層である。

遺物出土状況 土師器片56点(坏25、甕31)が出土している。ほかに、混入した縄文土器片5点が出土している。1は覆土上層の焼土層中から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第397図 第74号土坑・出土遺物実測図

第142表 第74号土坑出土遺物一覧(第397図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[13.0]	4.4	丸底	長石・石英	褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・ヘラ削り 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土上層 第1層	50% PL69
2	土師器	杯	[12.2]	(4.9)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土上層	20%

第77号土坑(第397・398図 第143表 PL65・69)

位置 調査区中央部のI 7 il区、標高23 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第73号土坑を掘り込み、79号土坑に掘り込まれている。

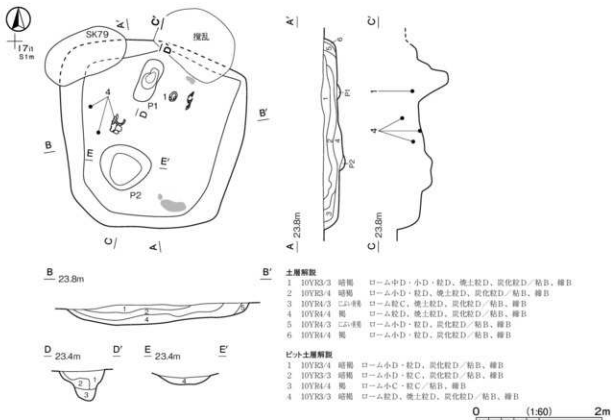
規模と形状 確認できた規模は、長軸2.95m、短軸2.95 mである。不整形で、長軸方向はN-2°-Eである。深さは35cmで、壁は外傾している。底面は、凹凸である。

ピット 2か所。P1は深さ50cmで、P2は深さ13cmで、性格は不明である。覆土は、ロームブロックを含む不規則な堆積状況から埋め戻されている。

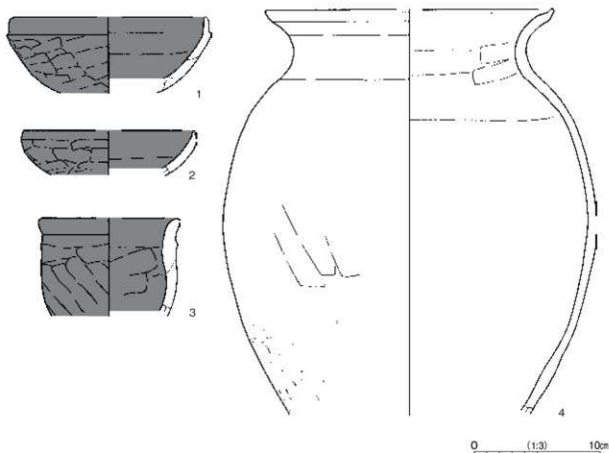
覆土 6層に分類できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片202点(杯67、高杯8、鉢1、甕125、飯1)、土製品1点(管状土鍾)が出土している。ほかに混入した縄文土器片12点が出土している。1は北部の覆土下層から正位の状態出土している。4は西部の底面から覆土上層にかけて出土した破片が接合している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第398図 第77号土坑実測図



第399図 第77号土坑出土遺物実測図

第143表 第77号土坑跡出土遺物一覧(第399図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	154	(61)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄緑	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土下層	70% PL609
2	土師器	坏	[136]	3.6	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい緑色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・ヘラ削り 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土下層～ 上層	20%
3	土師器	鉢	[108]	(78)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ・ ヘラナデ・輪轆面 内外面黒色処理	覆土下層	20%
4	土師器	甕	[226]	(32.1)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ・ヘラ削き 内面ナデ・ヘラナデ	底面～覆土 上層	40%

第78号土坑(第400図 第144表)

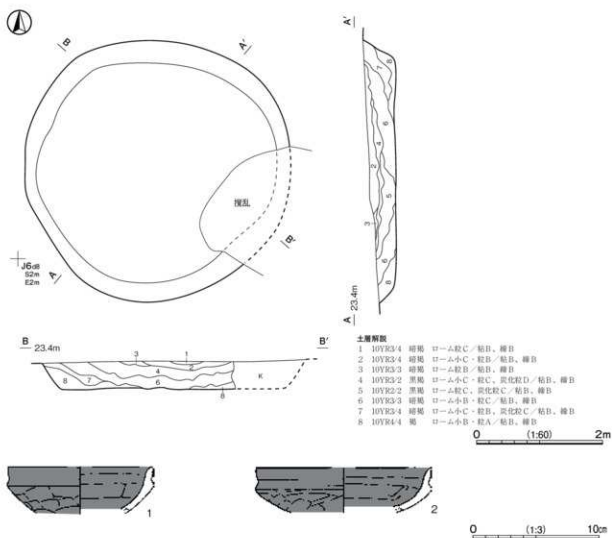
位置 調査区南部のJ 6d9区、標高23mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸4.21m、短軸4.18mの円形である。深さは48cmで、壁は外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片19点(坏13, 甕6)が出土している。ほかに混入した縄文土器片10点が出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第 400 図 第 78 号土坑・出土遺物実測図

第 144 表 第 78 号土坑跡出土遺物一覧 (第 400 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	坏	[104]	(37)	-	長石・石英・赤色 粘土	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 内外面黒色処理	覆土上層	20%
2	土師器	坏	[138]	(35)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	黒	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ・ ヘラナデ 内外面黒色処理	覆土上層	20%

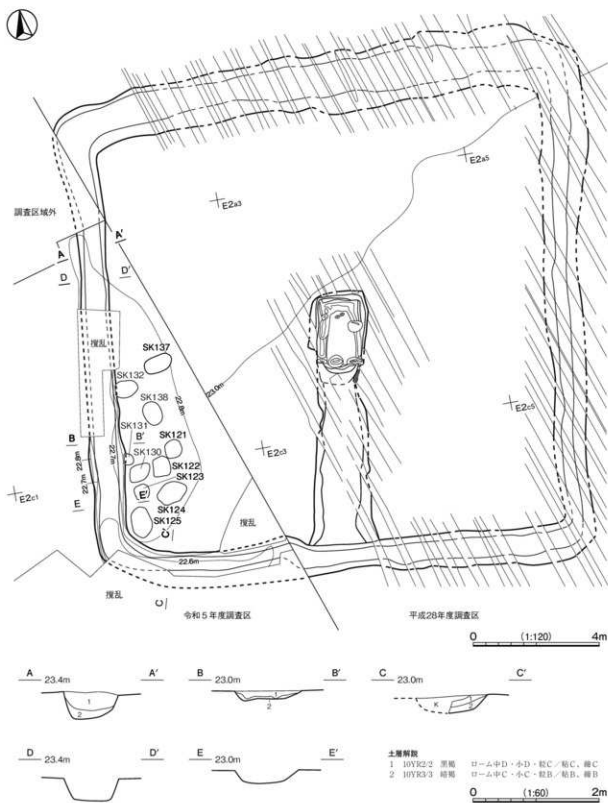
第 145 表 古墳時代土坑一覧

番号	位 置	長径方向	平面形	規 模			壁 面	底 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	時 期	備 考
				長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)						
42	I 6d9	N - 50° - W	楕円形	1.42	×	1.04	36	外傾	平坦	人為 土師器	6世紀後半	
74	I 6j0	N - 46° - E	楕円形	3.62	×	3.23	45	直立	平坦	人為 土師器	6世紀後半	
77	I 7i1	N - 2° - E	不整形方形	2.95	×	2.95	35	外傾	凹凸	人為 土師器、土製品	6世紀後半	SK73 → 本跡 → SK79
78	I 6j9	-	円形	4.21	×	4.18	48	外傾	平坦	人為 土師器	6世紀後半	

(3) 古墳

第18号墳 (第401図 PL66)

位置 調査区北部のE 2a1～E 2c2区、標高23 mほどの台地縁辺部に位置している。



第401図 第18号墳実測図

重複関係 第121～125、130～132、137、138号土坑と重複している。

確認状況 平成28年度の調査で確認した第18号墳の周溝の一部を確認した。

規模と形状 上層及び、西・南部の一部が削平されている。確認した周溝は、南西コーナー部を含む西辺と南辺の一部である。南西角はほぼ直角で、各辺は周溝外側で、西辺132m、南辺5.7m、周溝内側で、西辺10.4m、南辺4.1mである。上幅0.78m～1.16m、下幅0.58m～0.72m、深さ13～40cmで、壁は外傾している。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。各辺の長さは周溝外側で、東辺16.9m、北辺16.6m、南辺15.5m、西辺15.1mと推測され、形状はやや北東が張り出した方形である。南辺内側は13.6mで、その中央部に墓道が位置している。

覆土 2層に分層できる。第1層は黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から自然堆積である。第2層はロームブロックが含まれる暗褐色土で、周溝を掘削した時、もしくは築造後に墳丘に盛土したものが自然崩落したものと考えられる。

遺物出土状況 周溝覆土から遺物は出土していない。周溝を掘り込む攪乱から10cmほどの加工痕の認められる雲母片岩片が3点出土している。

所見 調査報告第446集で、当古墳の時期は7世紀後葉と報告されている。攪乱から出土した加工痕の認められる雲母片岩片は埋葬施設に使用された石材の一部と推測される。

3 平安時代の遺構と遺物

竪穴建物跡1棟、火葬墓1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第5号竪穴建物跡（第402・403図 第146表 PL66・70）

位置 調査区南部のE2j1区、標高21mほどの斜面部に位置している。

重複関係 第114号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた規模は、長軸4.19m、短軸3.38mの隅丸長方形である。主軸方向はN-18°-Wで、壁は高さ54～63cmで、外傾している。

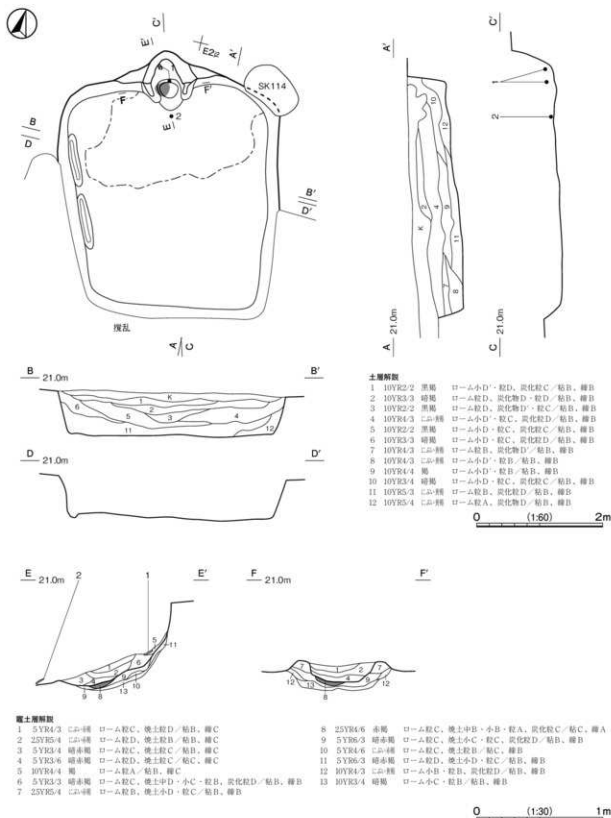
床 ほぼ平坦で、竪前方から北部が硬化している。壁溝は、西壁際の一部で確認できた。

竈 北壁の中央部に位置している。規模は、焚口部から煙道部まで95cmで、燃焼部幅は45cmである。燃焼部は地山を10cmほど掘りくぼめ、第8～13層を埋土して整地している。袖部は、第7層を積み上げて構築されている。火床面は第8層上面で、被熱により赤変硬化している。煙道部は、壁から20cmほど張り出し、外傾している。第1～6層は不規則な堆積状況を示すことから、天井部や内壁の崩落土と考えられる。

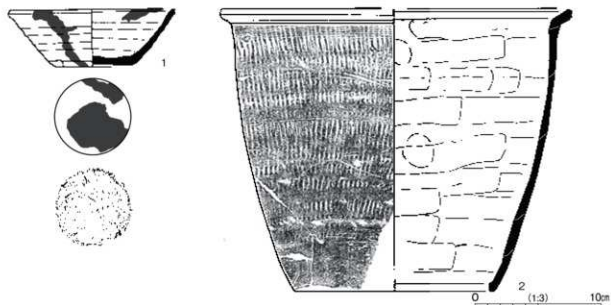
覆土 12層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片1点（坏）、須恵器片7点（坏1・甕5・瓶1）が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点が出土している。1は竈燃焼部の覆土下層から、2は竈手前の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第402図 第5号堅穴建物跡実測図



第 403 図 第 5 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 146 表 第 5 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 403 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	130	45	60	長石・石英・雲母	灰白	良好	体部ロタリナデ 体部外面下層手持ちヘリ周リ 底面胎へり切リ後一方向のヘリ周リ 口縁部・体部内面・底面・底面直上・底面直下 俣明	覆土下層	60% PL70 新直置
2	須恵器	瓶	[277]	224	[158]	長石・石英・雲母・赤色粒子・細粒	にぶい褐	良好	口縁部ナデ 体部外面底面位の平行向き 下層ヘリ周リ 内面ヘリナデ 輪轡直	覆土下層	20% PL70 新直置

(2) 火葬墓

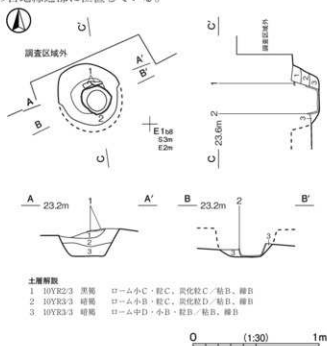
第 1 号火葬墓 (第 404・405 図 第 147 表 PL66・70)

位置 調査区北部の E 1b8 区、標高 23 m ほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南半分が削平されているため、確認できた規模は、長径 0.52m、短径 0.48 m である。楕円形と推定でき、長径方向は N-30°-W である。深さは 22cm で、壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックを含む土で埋め戻されている。

遺物出土状況 須恵器片 2 点 (鉢・甕) が出土している。1 は覆土上層から逆位の状態で、2 は正位で底面に据えられた状態で、それぞれ出土している。2 の内部からは、焼成人骨が出土していることから、1 は蓋、2 は甕器と考えられる。焼成人骨の出土総重量は 1421 g で、頭蓋冠、上顎または

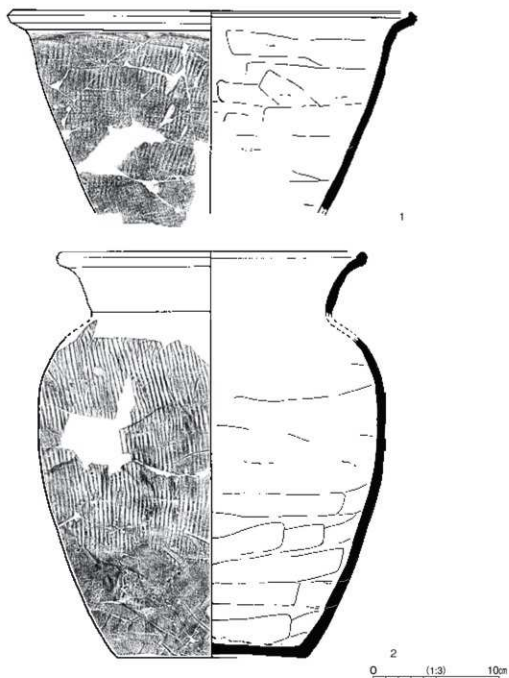


第 404 図 第 1 号火葬墓・出土遺物実測図

下顎の歯槽骨、肋骨、四肢骨が確認されている。最小個体数は1個体で、死亡年齢・性別はともに不明である。

(詳細は付章参照)

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第 405 図 第 1 号火葬墓出土遺物実測図

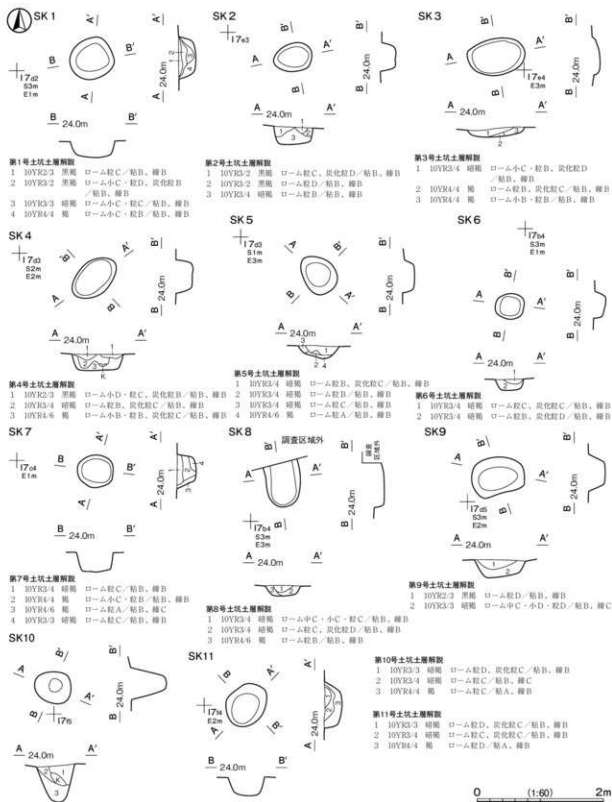
第 147 表 第 1 号火葬墓出土遺物一覧 (第 405 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	煎煮器	鉢	[31.6]	[16.2]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部ナデ 体部外面縦位平行明き 下縁ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪轆車	覆土上層	30% PL70 新治産*
2	煎煮器	甕	[23.8]	[32.3]	15.0	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	にぶい黄褐	普通	口縁部ナデ 体部外面縦位平行明き 下縁ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪轆車	底面	70% PL70 新治産*

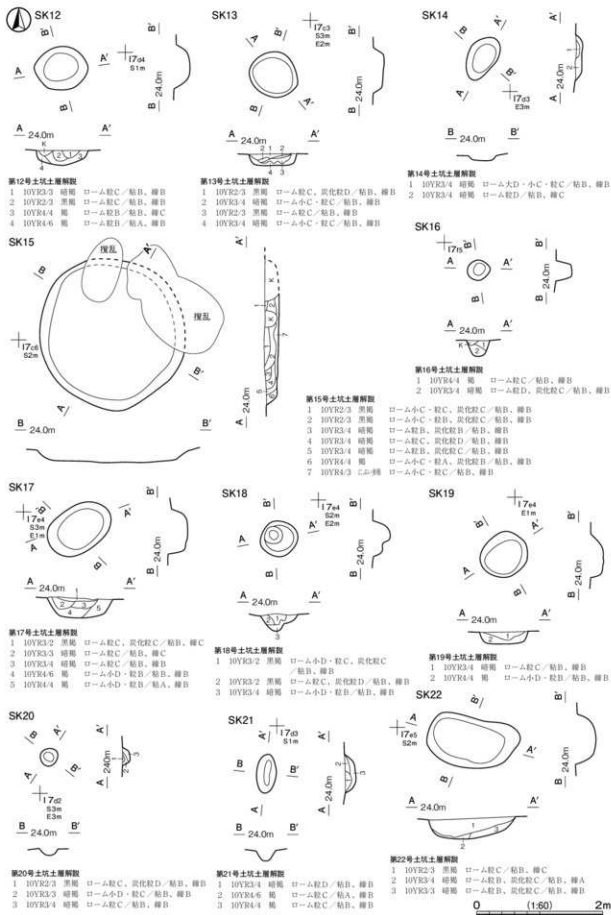
4 その他の遺構と遺物

土坑 134 基を確認した。以下、実測図と一覧表で記載する。

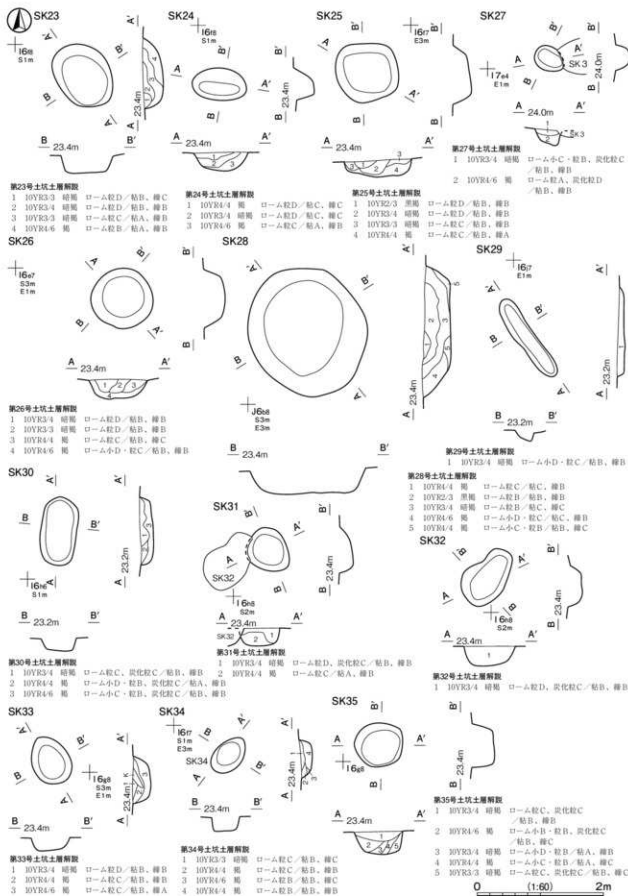
(1) 土坑 (第 406 ~ 417 図 第 148 表)



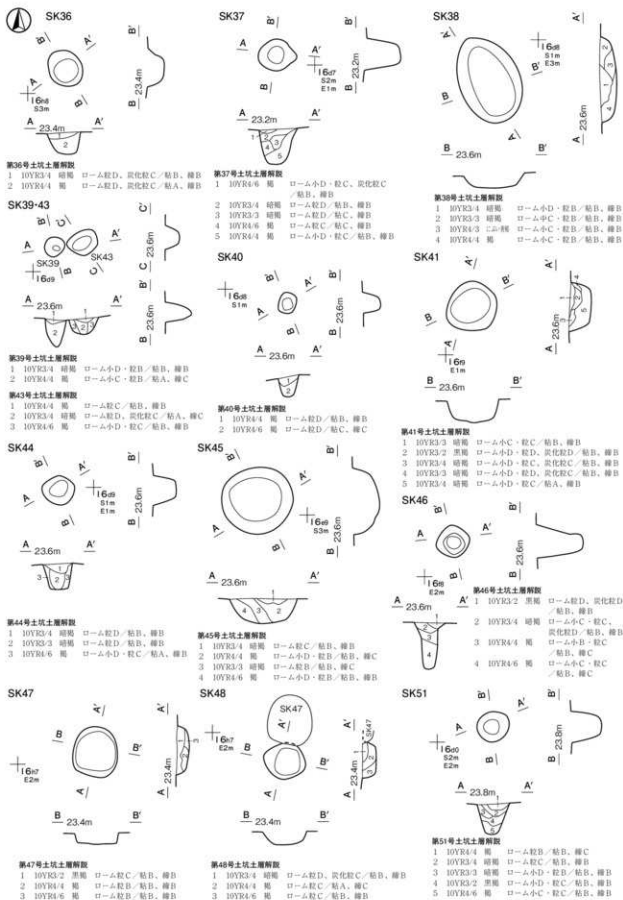
第 406 図 その他の土坑実測図 (1)



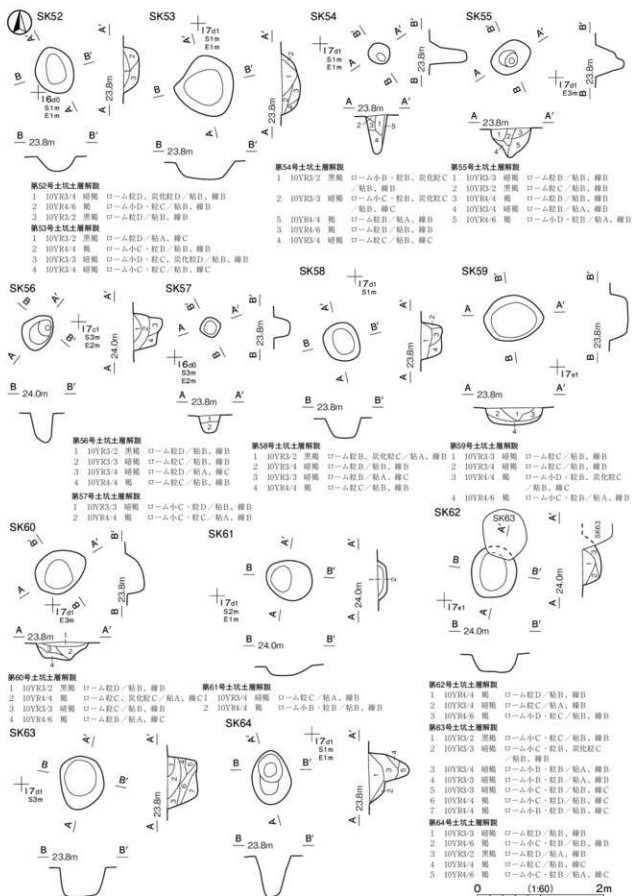
第407図 その他の土坑測図(2)



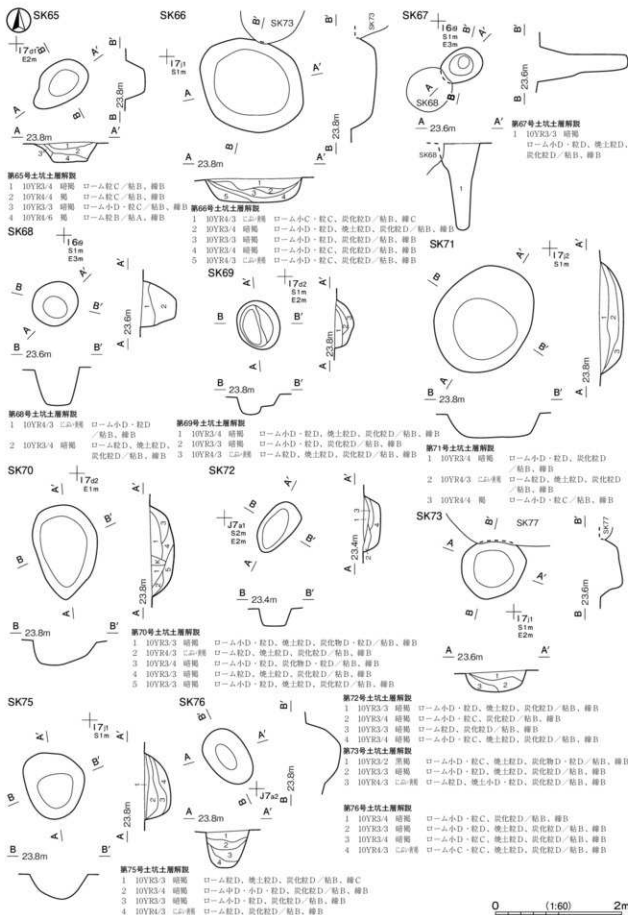
第 408 図 その他の土坑実測図 (3)



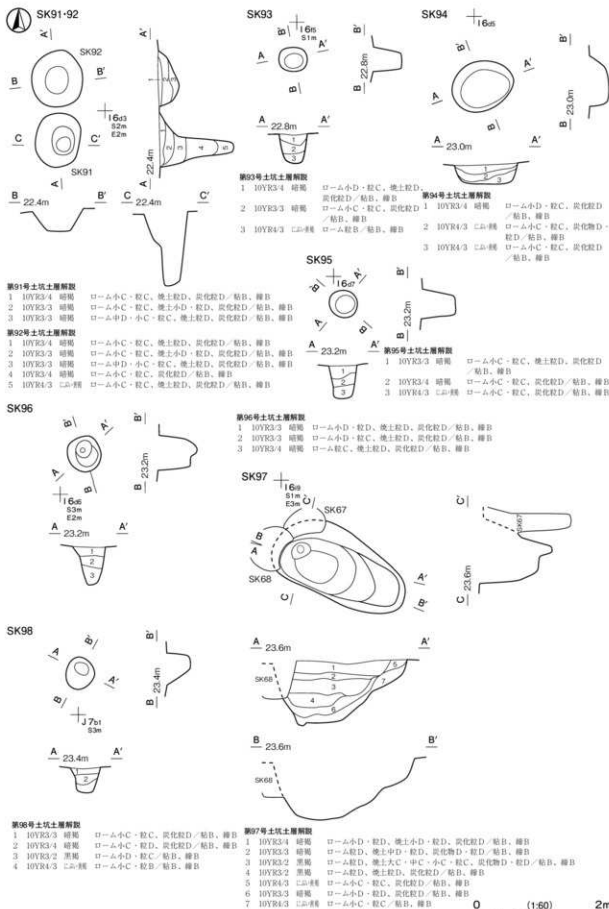
第409図 その他の土坑実測図(4)



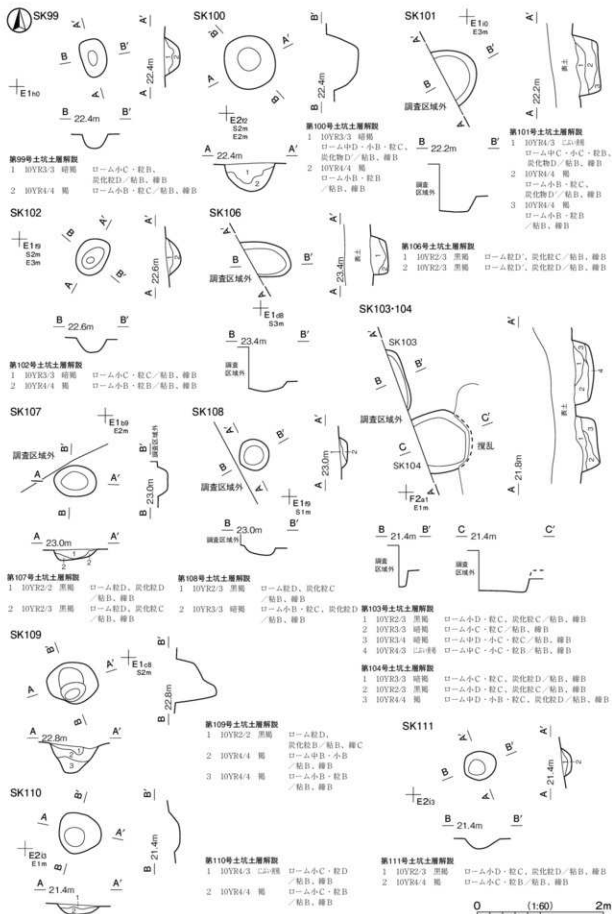
第410図 その他の土坑実測図(5)



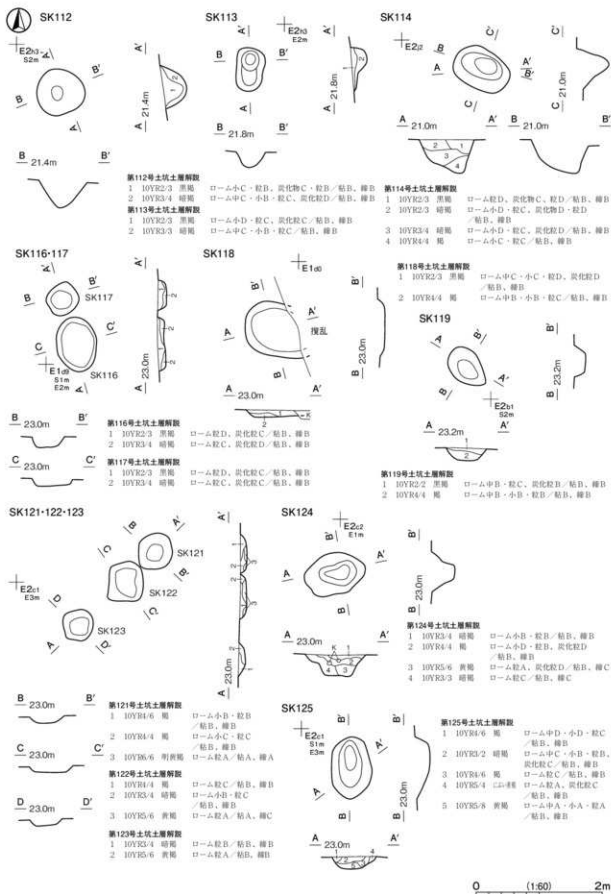




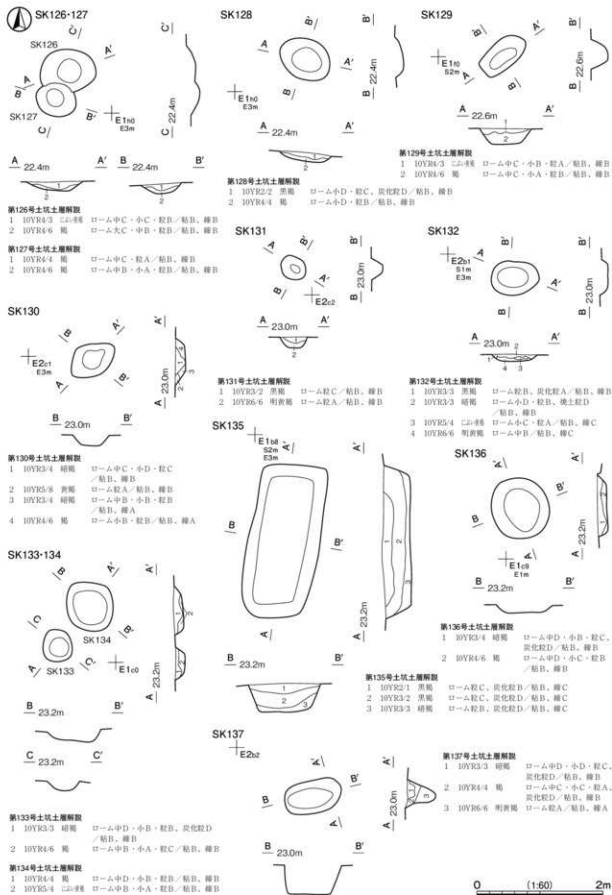
第 413 図 その他の土坑実測図 (8)



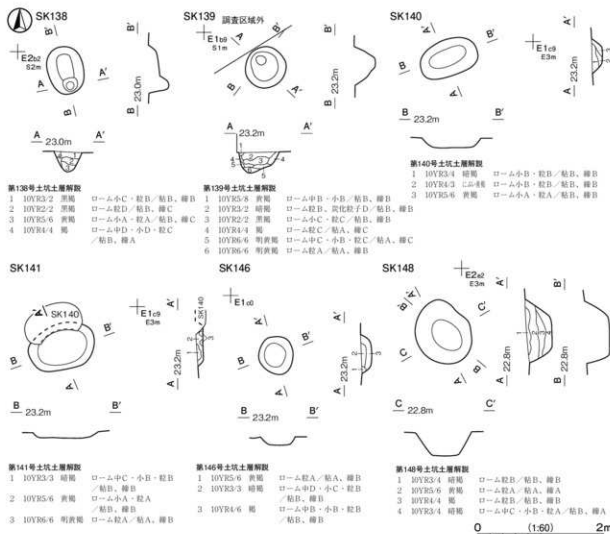
第414図 その他の土坑実測図(9)



第415図 その他の土坑実測図 (10)



第 416 図 その他の土坑実測図 (11)



第147図 その他の土坑実測図 (12)

第148表 その他の土坑一覧

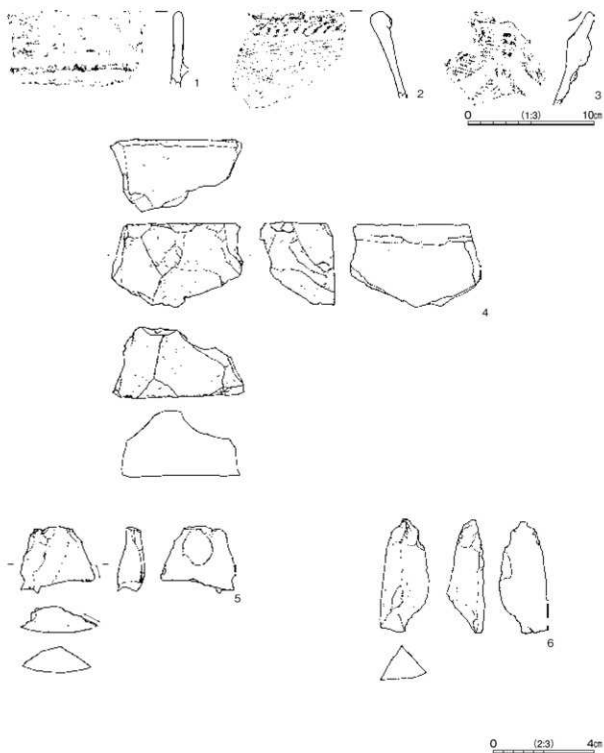
番号	位置	長径方向	平面形	規模		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	17d2	-	円形	0.70 × 0.64	25	外傾	平坦	人為		
2	17e3	N-77°-E	楕円形	0.63 × 0.42	23	外傾	平坦	人為		
3	17d4	N-77°-E	楕円形	0.88 × 0.57	10	外傾	平坦	人為		SK27 → 本跡
4	17d3	N-43°-E	楕円形	0.80 × 0.51	25	外傾	平坦	人為		
5	17d4	N-44°-W	楕円形	0.65 × 0.53	18	外傾	平坦	人為		
6	17e4	-	円形	0.44 × 0.41	18	外傾	平坦	自然		
7	17e4	-	円形	0.56 × 0.52	30	外傾	平坦	人為		
8	17a4	N-7°-W	[楕円形]	(0.69) × 0.54	18	外傾	平坦	人為	縄文土器	
9	17d5	N-76°-E	楕円形	0.84 × 0.58	26	外傾	平坦	自然		
10	17e4	N-77°-W	楕円形	0.59 × 0.50	56	外傾	重状	人為		
11	17e4	N-36°-E	楕円形	0.75 × 0.59	29	外傾	平坦	自然		
12	17d3	N-76°-E	楕円形	0.81 × 0.70	24	外傾	平坦	人為		
13	17c3	N-48°-W	楕円形	0.76 × 0.68	18	外傾	平坦	自然		
14	17c3	N-30°-E	楕円形	0.75 × 0.45	8	外傾	平坦	人為		
15	17e6	-	円形	2.32 × 2.31	19	外傾	平坦	人為		
16	17d5	-	円形	0.34 × 0.32	25	外傾	平坦	自然		
17	17e4	N-59°-E	楕円形	1.05 × 0.71	28	外傾	平坦	人為		
18	17e4	-	円形	0.60 × 0.55	15~27	外傾	有段	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
19	17e4	N-43°-E	楕円形	0.74 × 0.67	39	外植	平坦	自然		
20	17d2	N-39°-E	楕円形	0.30 × 0.27	10	外植	平坦	自然		
21	17d2	N-5°-W	楕円形	0.61 × 0.31	15	外植	平坦	自然		
22	17e5	N-80°-W	楕円形	1.44 × 0.80	31	外植	平坦	自然		
23	16b8	N-34°-W	楕円形	1.10 × 0.85	28	外植	平坦	自然	縄文土器	
24	16b8	N-85°-W	楕円形	0.87 × 0.50	30	外植	平坦	自然	縄文土器	
25	16f7	-	円形	0.99 × 0.93	27	外植	平坦	人為	土師器	
26	16e7	-	円形	0.95 × 0.95	34	外植	平坦	人為	土師器	
27	17d4	N-59°-W	楕円形	0.50 × 0.38	20	外植	平坦	自然		本跡→SK3
28	16b8	N-31°-W	楕円形	2.08 × 1.83	37	外植	平坦	人為	縄文土器、土師器	
29	16j7	N-33°-W	楕円形	1.46 × 0.32	15	外植	平坦	自然		SI2→本跡
30	16b6	N-6°-E	楕円形	1.09 × 0.56	20	外植	平坦	人為	縄文土器、土師器	
31	16b8	N-29°-W	楕円形	0.75 × 0.63	22	外植	平坦	人為		本跡→SK32
32	16b7	N-32°-E	楕円形	1.00 × 0.66	22	外植	平坦	自然	縄文土器、土師器	SK31→本跡
33	16g8	N-29°-W	楕円形	0.79 × 0.61	22	外植	平坦	自然		
34	16f7	N-39°-E	楕円形	0.65 × 0.45	22	外植	平坦	自然	縄文土器	
35	16b8	-	円形	0.76 × 0.72	37	外植	平坦	自然		
36	16b8	N-36°-W	楕円形	0.63 × 0.51	25	外植	平坦	自然		
37	16d7	N-84°-W	楕円形	0.60 × 0.49	55	外植	皿状	自然		
38	16d8	N-24°-W	楕円形	1.45 × 0.97	22	外植	平坦	人為		
39	16e9	N-37°-E	楕円形	0.34 × 0.29	43	外植	皿状	自然		
40	16b8	N-11°-E	楕円形	0.34 × 0.28	29	外植	皿状	自然		
41	16e9	-	円形	0.82 × 0.78	35	外植	皿状	人為		
43	16c9	N-55°-E	楕円形	0.49 × 0.38	23	外植	平坦	人為		
44	16d9	-	円形	0.47 × 0.46	38	外植	平坦	人為		
45	16e8	-	円形	1.13 × 1.05	42	外植	皿状	自然	縄文土器	
46	16e8	-	円形	0.48 × 0.47	74	外植	皿状	人為	縄文土器	
47	16g7	N-8°-E	楕円形	0.77 × 0.70	17	外植	平坦	自然	縄文土器	SK48→本跡
48	16b7	N-78°-W	楕円形	0.68 × 0.56	20	外植	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK47
51	16d0	-	円形	0.51 × 0.48	48	外植	皿状	自然		
52	16d0	N-21°-W	楕円形	0.75 × 0.60	23	外植	皿状	自然		
53	17d1	N-20°-E	不整楕円形	0.91 × 0.80	28	外植	平坦	人為		
54	17d1	-	円形	0.35 × 0.34	60	外植	皿状	人為		
55	17c1	N-59°-E	楕円形	0.65 × 0.48	32~46	外植	有段	人為		
56	17c1	N-37°-E	楕円形	0.59 × 0.46	46	外植	皿状	人為		
57	16d0	-	円形	0.31 × 0.31	26	外植	平坦	自然		
58	16d0	N-14°-W	楕円形	0.61 × 0.55	33	外植	平坦	人為		
59	16d0	N-82°-E	楕円形	0.93 × 0.72	30	外植	平坦	人為	縄文土器	
60	17c1	N-58°-E	楕円形	0.87 × 0.66	29	外植	平坦	人為		
61	17d1	N-55°-W	楕円形	0.73 × 0.62	13	外植	平坦	自然		
62	17d1	N-2°-W	楕円形	0.77 × 0.70	28	外植	平坦	自然		本跡→SK53
63	17d1	N-5°-W	楕円形	0.83 × 0.67	45	直立・外植	平坦	人為		SK62→本跡
64	17d1	N-2°-W	楕円形	0.85 × 0.60	63	直立	皿状	人為		
65	17d1	N-53°-E	楕円形	1.00 × 0.62	30	外植	平坦	人為		
66	17j1	N-57°-W	楕円形	1.75 × 1.45	35	外植	平坦	自然	縄文土器、土師器	本跡→SK73
67	16b9	N-57°-E	楕円形	[0.64] × 0.50	137	直立	皿状	自然		SK97→本跡→SK68
68	16b9	N-55°-E	楕円形	0.75 × 0.68	54	外植	平坦	自然	土師器	SK67・97→本跡
69	17d2	N-26°-W	楕円形	0.80 × 0.68	15~30	外植	有段	自然		
70	17d2	N-2°-W	楕円形	1.50 × 0.97	39	外植	平坦	人為		
71	17j1	N-32°-E	楕円形	1.78 × 1.46	38	外植	平坦	自然	土師器	
72	17a1	N-34°-E	楕円形	0.89 × 0.50	27	外植	平坦	人為	銭貨	中量の可能性あり
73	17j1	N-67°-E	楕円形	1.03 × (0.90)	32	外植	平坦	自然	土師器	SK66→本跡→SK77
75	16d9	N-36°-W	楕円形	1.08 × 0.94	39	外植	平坦	人為	土師器	
76	17j1	N-32°-W	楕円形	0.96 × 0.62	42	外植	平坦	自然		
79	17j1	N-62°-E	楕円形	1.35 × 0.70	15	外植	平坦	自然		SK77→本跡
80	16d6	N-82°-W	楕円形	0.46 × 0.35	47	直立・外植	皿状	自然		
81	16g7	N-78°-W	楕円形	0.87 × 0.66	42	外植	皿状	自然		
82	16b7	-	円形	0.50 × 0.46	25	外植	平坦	自然	縄文土器	

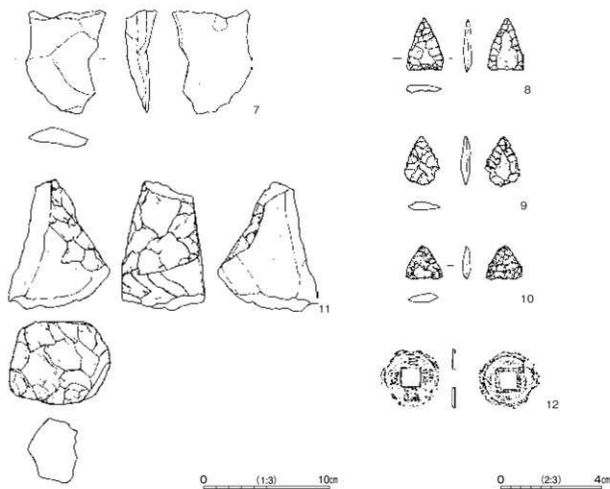
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
83	I 6g7	N-69°-E	楕円形	1.51 × 1.14	50～86	外傾	有段	自然	縄文土器	
84	I 6g3	N-52°-E	楕円形	0.40 × 0.35	29	直立、外傾	平坦	自然		
85	I 6g5	-	円形	0.42 × 0.40	71	外傾	圓状	自然		
86	I 6g6	-	円形	0.40 × 0.39	110	直立	圓状	自然	土師器	
87	I 6g5	-	円形	0.41 × 0.40	94	直立	圓状	自然		
88	I 6g4	-	円形	0.46 × 0.45	90	外傾	圓状	人為		
89	I 6g5	-	円形	0.56 × 0.55	50	外傾	圓状	自然		
90	I 6h3	-	円形	0.36 × 0.35	70	直立	圓状	自然		
91	I 6g3	N-7°-E	楕円形	0.85 × 0.58	115	直立	圓状	自然		
92	I 6g3	N-7°-E	楕円形	0.90 × 0.80	33	外傾	平坦	人為		
93	I 6g4	N-88°-E	楕円形	0.46 × 0.37	45	外傾	圓状	自然		
94	I 6g5	N-76°-E	楕円形	1.00 × 0.80	30	外傾	平坦	自然		
95	I 6g7	-	円形	0.45 × 0.42	52	直立	平坦	自然		
96	I 6g6	-	円形	0.51 × 0.51	60	直立	円凸	自然	土師器	
97	I 6g9	N-62°-W	楕円形	(2.00) × 1.05	90	外傾	平坦	人為		本跡→SK67・68・96・98
98	J 7a1	-	円形	0.49 × 0.45	36	直立、外傾	平坦	自然		
99	E 1g9	N-16°-W	楕円形	0.60 × 0.40	21	外傾	圓状	人為		
100	E 2g2	-	円形	0.88 × 0.83	46	外傾	圓状	人為		
101	E 1g0	N-27°-W	円形・楕円形	(0.97) × (0.57)	37	外傾	平坦	人為		
102	E 1g0	N-33°-E	楕円形	0.62 × 0.46	22	外傾	圓状	人為		
103	E 2j1	N-20°-W	円形・楕円形	(1.02) × (0.16)	30	外傾・直立	圓状・平坦	人為		
104	E 2j1	N-20°-W	円形・楕円形	0.98 × (0.79)	32	外傾	平坦	人為		
106	E 1g8	N-79°-W	[楕円形]	(0.69) × (0.54)	27	外傾	圓状	自然		
107	E 1g9	N-85°-W	楕円形	0.68 × 0.49	15	外傾	平坦	自然		
108	E 1g8	-	円形	0.50 × 0.48	13	外傾	圓状	人為		
109	E 1c7	N-82°-W	楕円形	0.83 × 0.65	38～64	外傾	有段	人為		
110	E 2h3	-	円形	0.69 × 0.65	14	外傾	圓状	人為		
111	E 2h3	N-68°-E	楕円形	0.53 × 0.45	16	外傾	圓状	人為		
112	E 2h3	-	円形	0.76 × 0.73	42	外傾	圓状	人為		
113	E 2h3	N-7°-E	楕円形	0.68 × 0.41	26	外傾	有段	人為	縄文土器	
114	E 2j2	N-51°-W	楕円形	0.91 × 0.63	44	外傾	圓状	人為		SI 5→本跡
116	E 1g9	N-13°-W	楕円形	0.80 × 0.64	11	外傾	平坦	人為		
117	E 1c9	-	円形	0.49 × 0.45	17	外傾	平坦	人為		
118	E 1g9	N-83°-W	[円形]	(0.88) × (0.85)	10	外傾	平坦	人為		
119	E 1b0	N-49°-W	楕円形	0.72 × 0.50	19	外傾	平坦	人為		
121	E 2b2	-	円形	0.56 × 0.53	11	外傾	平坦	人為	縄文土器	TM18と重複
122	E 2b2	N-0°	不整形円形	0.64 × 0.55	10	外傾	平坦	人為		TM18と重複
123	E 2c2	-	不整形円形	0.48 × 0.48	10	外傾	平坦	人為		TM18と重複
124	E 2c2	N-74°-E	楕円形	0.96 × 0.66	36	外傾	平坦	人為		TM18と重複
125	E 2c1	N-1°-W	楕円形	0.98 × 0.64	23	外傾	平坦	人為		TM18と重複
126	E 1g9	N-70°-E	[楕円形]	0.89 × (0.70)	15	外傾	平坦・圓状	人為	縄文土器	SK127と重複
127	E 1g9	-	[円形]	0.64 × [0.39]	16	外傾	圓状	人為		SK126と重複
128	E 2g1	N-61°-W	楕円形	0.85 × 0.64	15	外傾	圓状	自然	縄文土器	
129	E 1g0	N-55°-E	楕円形	0.80 × 0.42	27	外傾	平坦	人為		
130	E 2c2	N-55°-E	楕円形	0.80 × 0.54	17	外傾	平坦	人為		TM18と重複
131	E 2b1	N-61°-W	楕円形	0.42 × 0.36	18	外傾	圓状	自然		TM18→本跡
132	E 2b2	N-86°-W	楕円形	0.76 × 0.54	12	外傾	圓状	人為	縄文土器	TM18→本跡
133	E 1b9	-	円形	0.51 × 0.51	16	外傾	圓状・平坦	人為		
134	E 1b9	N-2°-W	楕円方形	0.76 × 0.73	20	外傾	平坦	人為		
135	E 1b8	N-9°-E	楕円九長方形	2.46 × 1.12	46	外傾	平坦	人為		PL06
136	E 1b9	-	円形	0.98 × 0.90	15	外傾	平坦	人為		
137	E 2b2	N-79°-E	楕円形	0.90 × 0.51	46	外傾	平坦	人為		TM18と重複
138	E 2b2	N-13°-W	楕円形	0.76 × 0.56	15～32	外傾	有段	人為		TM18と重複
139	E 1b9	-	円形	0.64 × 0.64	31	外傾	圓状	人為	土師器	
140	E 1c9	N-68°-E	楕円形	0.93 × 0.57	16	外傾	平坦	人為		SK141→本跡
141	E 1c9	N-70°-E	楕円形	1.08 × [0.74]	10	外傾	平坦	人為		本跡→SK140
146	E 1c9	-	円形	0.61 × 0.56	17	外傾	平坦	人為		
148	E 2c2	N-28°-W	楕円形	1.04 × 0.88	40	外傾	平坦	人為		

(2) 遺構外出土遺物 (第 418・419 図 第 149 表 PL70)

遺構に伴わない遺物や出土層位が不明な遺物のうち、特徴的なものについて、実測図及び出土遺物一覧で掲載する。



第 418 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第419図 遺構外出土遺物実測図(2)

第149表 遺構外出土遺物一覧(第418・419図)

番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼 成	特 徴	出土位置	備 考
1	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部隆帯貼り付け 4条単位のリム	16/4 表土	5% PL70 後期遺構
2	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部刻み 胴部横位の条線	16/6 表土	5% PL70 縄取式
3	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	波状口縁 口頭部隆帯と沈彫による三角形区画文 半筋縄文付し施文	SK41	5% PL70 安行3a式

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴		出土位置	備 考
4	石核	3.3	5.2	2.9	52.24	黒曜石	自然面打面	多方向からの剥離 小型な剥片を作出	SI2	PL70
5	磨製遺物の表面磨光	2.6	3.0	1.1	7.18	頁岩	左側縁部・下部に微細剥離痕有り		SI3	PL70
6	剥片	4.5	2.0	1.5	9.87	ガラス質黒色安山岩	縦長剥片 断面三角形 打面割れ		表土 Ipg6	PL70
7	剥片	4.1	3.2	1.3	10.95	アイサイト (トトロ石)	縦長剥片 表面風化激しい		表土	PL70
8	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.98	ガラス質黒色安山岩	平基無葉鏃 両面押圧剥離		表土 Ipg8	
9	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.80	チャート	未製品※ 両面押圧剥離		SI 1	
10	石鏃	1.3	1.5	0.3	0.50	黒曜石	平基無葉鏃 両面押圧剥離		表土	
11	三角磨石 白砂	10.3	8.0	6.6	562.17	石英質岩	両側縁の加工 底面周縁部からの加工により機能面を作出 表面自然面		表土 Ipg9	

番号	銭 種	径	孔距	厚さ	重量	材質	初周年	特 徴	出土位置	備 考
12	元祐通宝	(2.5)	0.7	0.1	2.65	銅	1086	篆書	SK72	

第5章 総 括

1 はじめに

下河原崎谷中台遺跡は、平成17・18・30年度と令和2年度の4次にわたって調査がなされ、平成17・18年度調査の成果は『茨城県教育財団調査報告』第282^h・292^h集としてすでに刊行されている。下河原崎高山古墳群は昭和57年度・平成18・28・29年度と令和5年度の4次にわたって調査がなされ、昭和57年・平成18・28・29年度調査の成果は『茨城県教育財団調査報告』第22^h・292^h・446集^hとしてすでに刊行されている。

平成30年度と令和2年度の下河原崎谷中台遺跡の調査では、旧石器時代の石器集中地点7か所、炭化物集中地点1か所、焼土集中地点1か所、縄文時代の竪穴建物跡4棟、陥し穴9基、炉穴60基、土坑37基、遺物包含層2か所、古墳時代の竪穴建物跡13棟、土坑4基、遺物集中地点1か所、平安時代の竪穴建物跡1棟、江戸時代の炭焼窯3基、土坑1基、溝跡2条、その他の土坑566基、溝跡2条を確認した。平成30年度・令和5年度の下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群の調査では、縄文時代の竪穴建物跡1棟、土坑1基、炉穴2基、古墳時代の竪穴建物跡4棟、土坑4基、古墳1基、平安時代の竪穴建物跡1棟、火葬墓1基を確認した。

下河原崎谷中台遺跡・下河原崎高山遺跡・下河原崎高山古墳群（以下谷中台遺跡、高山遺跡、高山古墳群と呼称する。）は同じ台地上に所在しており、隣接した関連のある遺跡と捉えられるため、今回はこれまでの調査成果を踏まえ、3遺跡を併せて各時代で概観し、集落変遷や遺構・遺物の特徴などについて述べる。

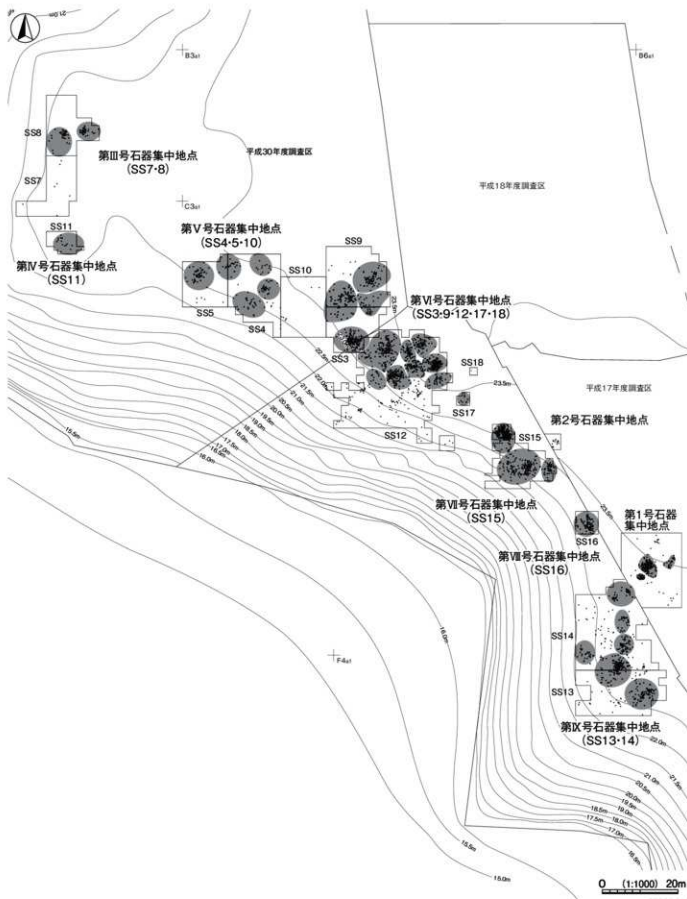
2 旧石器時代

谷中台遺跡の平成17年度調査では2か所の石器集中地点を、平成30年度と令和2年度の調査で7か所の石器集中地点を確認し、合計9か所の石器集中地点を確認したことになる。平成17年度調査の石器集中地点も含め、石器群の出土状況・出土石器・石材などについて再確認し、特徴を述べる。

(1) 出土状況

調査区の南北154m、東西174mの範囲から台地の縁辺部に沿って石器集中地点は分布しており、北部に比べ南部・中央部の集中地点の密集度が高く、出土量が多い。出土層位は、基本層序の第Ⅲ～Ⅴ層にかけてで、自然科学分析の結果、基本層序の第Ⅱd層（第Ⅲ層上部）から立川ローム最上部ガラス質火山灰（UG）が、第ⅤとⅥ層の境界付近から始良Tnテフラが確認されている（付査参照）。出土位置について、本文中で標高差を各密集域ごと述べているが、単純に石器の出土位置の標高差で計算をしているため、差が50cm以上と大きくなってしまっている。しかし、石器集中地点が台地縁辺部から斜面部に立地していることによるところが大きく、垂直分布図をみると斜面の傾斜に沿って出土していることから、実際はそれほど出土位置の差は大きくないものと捉えられる。

それぞれの石器集中地点では、いくつかの密集域と散在域が存在している。密集域は全部で34か所確認し、石器集中地点ごとの密集域数の内訳は、第1号石器集中地点（平成17年度調査区）でA・B・C区の3か所、第2号石器集中地点（平成17年度調査区）で1か所、第3号石器集中地点（SS7・8）でB2f3、B2f4区付近の2か所、第4号石器集中地点（SS11）でC2c2区付近の1か所、第5号石器集中地点（SS4・5・10）でC3e2区、C3e4区、C3e6区、C3f6区、C3g5区付近の5か所、第Ⅵ



第 420 図 下河原崎谷中台遺跡の旧石器時代石器集中地点石器分布図

号石器集中地点 (SS 3・9・12・17・18) で C 4 f3 区、C 4 g1～C 4 g2 区、C 4 h3 区、C 4 j2 区、C 4 j4 区、D 4 a6 区、C 4 j6 区、D 4 a7 区、D 4 b5 区、D 4 b6 区、D 4 c6 区付近の 12 か所、第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) で D 5 f2 区・D 5 h3・D 5 h5 区付近の 3 か所、第Ⅷ号石器集中地点 (SS16) で E 5 b7 区付近の 1 か所、第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) で E 5 f0～E 5 g9 区、E 5 h0 区、E 5 j0 区、E 5 j7 区、F 5 a9 区、F 6 c1 区付近の 5 か所である。それぞれの石器集中地点と密集域の範囲は第 420 図に示した。平面分布では、北部に比べ中央部から南部にかけての密集域の数が多く、その密度も濃くなっていることが確認できる。密集域の集中部はおおよそ直径 3～5m の単位で、密集域の外縁部や斜面下方に散在域が存在している。ナイフ形石器や角錐状石器、搔器などのツール類は、密集域の集中して出土する範囲からは若干離れた位置から出土する傾向がみられる。また、礫は密集域内で出土するものもあるが、その外縁部で出土しているものが多い。石材では、黒曜石は全域に密集域が認められるが、頁岩・ガラス質黒色安山岩・ガラス質黒色デイサイトなどは、中央部から南部にかけて、瑪瑙は北部で多く出土する傾向がみられる。

平成 30 年度と令和 2 年度調査区の緑辺部のほぼ全域から石器集中地点を確認していることや、同台地上の南先端部に位置する高山古墳群の平成 28・29 年度調査区からも旧石器が多数出土していることから、これらの石器集中地点は南北方向にさらに広がって行くことが推測される。

(2) 出土石器

主要器種は、ナイフ形石器、角錐状石器、搔器、円形搔器、削器、石錐、楔形石器、石刃である。谷中台遺跡全体の出土量は、ナイフ形石器 61 点、角錐状石器 22 点、搔器 52 点、円形搔器 5 点、削器 6 点、石錐 2 点、楔形石器 4 点、石刃 1 点で、主体を占めるのはナイフ形石器と搔器である。このほかの内訳としては、二次加工のある剥片 105 点、微細剥離痕のある剥片 111 点、石核 89 点、剥片 1,865 点、砕片 1,115 点、敲石 17 点、礫 134 点、礫片 270 点、素材礫 3 点となる。器種組成・石材組成は第 150・151 表に示した。以下、それぞれの器種の特徴について述べる。

① ナイフ形石器

石材は、黒曜石製 31 点、頁岩製 16 点、ガラス質黒色安山岩製 8 点、ガラス質黒色デイサイト製 2 点、瑪瑙製 3 点、チャート製 1 点で構成される。切出形のナイフ形石器が多く、小さいもので長さ 2.04cm、大きいもので 7.27cm と大きさに幅がみられる。長さ 3cm 以下の小型のナイフ形石器には黒曜石・頁岩が用いられ、長さ 6cm 以上の大型なものは黒曜石・黒色ガラス質安山岩・黒色ガラス質デイサイトが用いられている。厚さは薄いもので 0.3cm、厚いもので 2.15cm である。素材剥片は横長剥片と縦長剥片の両方が用いられ、1 側縁加工のものが 19 点、2 側縁加工のものが 42 点で、2 側縁加工が施されるものが多い。刃部には、微細剥離痕や先端部に欠けがみられるものが多く、使用によるものと考えられる。基部加工には、片面から調整加工が施されるものが多いが、第Ⅶ号石器集中地点の 2・87・94・95・115・225、第Ⅸ号石器集中地点の 9・30 のように両面から調整加工が見られるものも確認できる。また、基本的に細かな調整加工が施されるものが多いが、角錐状石器の調整加工に類似する粗い加工のものも確認できる。

② 角錐状石器

石材は、黒曜石 8 点、頁岩 1 点、ガラス質黒色安山岩 3 点、ガラス質黒色デイサイト 9 点、瑪瑙 1 点で構成される。大きさは 4cm 以上のものが多く、大きいもので 9.02cm である。比較的厚さのある剥片 (1cm 以上) を素材に、両側縁部に腹面側から急角度の加工を施されて製作されており、断面が三

角形または台形を呈している。加工にはナイフ形石器の調整加工に通じる細かな調整加工が施されるものと、単位の大きな粗い剥離による加工が施されるものとが確認できる。また、第Ⅷ号石器集中地点の8・9、第Ⅸ号石器集中地点の32のように稜上調整が施される例も見られる。関東の角錐状石器については亀田直美氏などにより形態分類や形態変遷が示されている⁶⁾。形態分類は、尖頭部をあまり意識せずブランティング加工を併用しないことが多いものを〈A類〉に、先鋭な尖頭部を有するもので、二次加工にブランティングを併用するものを〈B類〉に分類し、さらに〈B類〉は左右対称なものを〈B1類〉、非対称のものを〈B2類〉に分類している。この点を踏まえると、A類に分類されるものは第Ⅵ号石器集中地点の20・21・98、第Ⅶ号石器集中地点の28、第Ⅷ号石器集中地点の7～11、第Ⅸ号石器集中地点の14・15・31で、B1類に分類されるものは第2号石器集中地点の235、第Ⅵ号石器集中地点の27・126、第Ⅶ号石器集中地点の8・17、第Ⅸ号石器集中地点の26・32で、B2類に分類されるものは第2号石器集中地点の236と捉えることができる。ただし、ガラス質黒色デイスサイトで製作されたものについては、表面の風化が著しく、ブランティング加工が捉えられなかった可能性もある。また、亀田氏は、形態変遷では、第Ⅰ～Ⅲ期の3段階で捉えている。中でも、第Ⅱ期の特徴として指摘されている①遺跡内で製作の痕跡が認められるものがある、②石器群の組成の主体をなすことがある、③形態が多様であるA類・B1類・B2類ともに認められる、④縦に長い形状を呈するものが多い、⑤各形態に大型品と小型品がある、⑥黒曜石、ガラス質安山岩を含む多様な石材を用いるという点は、当遺跡の特徴に共通する点が多く、当遺跡の角錐状石器は第Ⅱ期に分類されるものと考えられる。

③ 搔器・円形搔器

搔器の石材は黒曜石30点、頁岩9点、ガラス質黒色安山岩3点、瑪瑙9点、チャート1点で構成され、黒曜石が圧倒的に多い。また、円形搔器はすべて黒曜石製である。大きさは3cm以下の小型なものが半数を占め、黒曜石製の割合が高い。比較的厚さのある剥片が素材に選択され、縁辺部の一部に連続する加工を施し刃部を作出している。刃部角は60～70°程度のものが多く、中には直角に近いものも確認できる。また、第Ⅵ号石器集中地点の接合資料8は刃部再生が見られる例で、遺跡内でも刃部再生をしながら搔器が使用されていたことを示している。小型の搔器が多いことも、刃部再生をしながら使用した結果の可能性とも考えられる。円形搔器は、この時期に相模野台地、多摩丘陵、武蔵野台地で発達するが、大宮台地、下総台地での出土量は少ないことが示されており、要因の可能性として影響する水系との関わりの中で形態的な地域差が生じたことが指摘されている⁷⁾。当遺跡でも搔器の出土量はナイフ形石器に次いで多いが、円形搔器は5点と少量にとどまっており、その特徴に当てはまる。

④ 削器

石材は、頁岩製4点、黄色碧玉1点、黒雲母流紋岩1点で構成される。大きさは5～7cmほどの大きさで、厚さは1.5cm以下のものが多い。第Ⅵ号石器集中地点の102を除き2個縁加工が施される。第Ⅵ号石器集中地点の102・104、第Ⅸ号石器集中地点の16には刃部に微細剥離痕がみられ、使用痕跡と考えられる。また、第Ⅵ号石器集中地点の104と第Ⅸ号石器集中地点の16は同一母岩の剥片が確認できないことや在地石材ではないことから、製品として持ち込まれたものと考えられる。

⑤ 石錐

石材はホルンフェルス製1点、頁岩製1点で構成される。ホルンフェルス製の第Ⅴ号石器集中地点の2は、先端部が擦れて摩耗している痕跡が確認できる。形態・製作技法に共通性は見られない。

第150表 石器集中地点全体の出土石器 器種・石材組成

器種 石材	ナイフ形石器	角磨片石器	鎌石	円形鎌石	磨石	石鏃	磨石石器	石刀	二次加工のある磨片	微細磨片のある磨片	石核	磨片	砕片	組石	礫	礫片	素材種	点数	点比率	重量(g)	重量比
黒曜石	31	8	30	5				50	68	41	974	891						2098	54.32%	7,262.24	9.84%
頁岩	16	1	9		4	1	1	21	37	6	339	139			1			576	14.91%	2,809.87	3.81%
黒色頁岩											4							4	0.10%	19.22	0.15%
ガラス質黒色 安山岩	8	3	3					22		26	327	40					3	432	11.19%	9,127.74	12.35%
ガラス質黒色 デイサイト (トトロ石)	2	9						2			30	8						51	1.32%	447.63	0.61%
馬蹄・玉髄	3	1	9					4	3	14	104	15						133	3.96%	1,626.34	2.20%
玉髄質岩								1	1									2	0.05%	77.75	0.11%
黄色碧玉					1													1	0.03%	16.42	0.02%
チャート	1		1			3		3	1	1	62	11			5	14		102	2.64%	1,005.94	1.36%
石英												5			1			6	0.16%	96.85	0.13%
黒雲母流紋岩					1													1	0.03%	38.70	0.05%
流紋岩								1	1		2	1	2	4	33			44	1.14%	1,995.96	2.71%
安山岩												1	10	82	92			185	4.79%	34,159.19	46.29%
多孔質安山岩													1	8	16			25	0.63%	2,916.38	3.95%
ホルンフェル ス						1					14		1	2	2			20	0.52%	869.92	1.18%
石英質岩													3	10	76			89	2.30%	6,965.58	9.22%
砂岩								1			4			19	35			59	1.53%	4,751.14	6.44%
粘板岩												4				1		5	0.13%	5.96	0.01%
デイサイト															1			1	0.03%	55.01	0.07%
凝灰岩										1	5					1		7	0.18%	89.44	0.12%
点数																					
重量	61	22	52	5	6	2	4	1	105	111	89	1,865	1,115	17	134	270	3	3,862			
	114.07	272.68	919.89	41.67	163.00	7.92	29.11	19.10	1,916.54	1,009.09	3,846.75	10,607.19	155.48	3,434.78	35,668.61	12,070.43	1,150.07	73,786.38		73,786.38	

第151表 石器集中地点別出土石器 器種組成

石器集中地点	SS名	ナイフ形石器	角磨片石器	鎌石	円形鎌石	磨石	石鏃	磨石石器	石刀	二次加工のある磨片	微細磨片のある磨片	石核	磨片	砕片	組石	礫	礫片	素材種	点数	重量
I	SS 1			1					1	1		15	133	54		8			233	3,883.40
II	SS 2		2						2			1	16	5		5			31	1,621.50
	SS 7	1									3		3						7	58.01
	SS 8	1		3							5	5	65	30			1		110	583.39
	小計	2	0	3	0	0	0	0	0	8	5	68	30	0	0	1	0		117	641.40
III	SS11		2							4	1		5	3					15	122.17
	SS 4	1		2						5	8	5	74	14		4	9		122	3,055.27
	SS 5	1					1			3	4	5	35	16		7	11		83	3,088.36
	小計												9						9	20.41
IV	SS20	2	0	2	0	0	1	0		8	12	10	118	30	0	11	20	0	214	6,163.94
V	SS 3	3	1	5				1		8	8	5	127	81		3	5	1	248	3,610.07
	SS 9	4	2	1			1			12	9	7	105	51	4	9	11		216	6,732.40
	SS12	27	2	29	4	5		1		36	36	19	566	431	2	31	62		1,251	15,605.81
	SS17												9						9	25.59
	SS18			1															1	4.77
	小計	34	5	36	4	5	0	3		56	53	31	807	563	6	43	78	1	1,725	25,978.64
VI	SS15	10	3	2	1					11	19	9	382	333	1	28	74		873	13,538.45
VII	SS16	6	7	2						4	1	1	46	12	1	7	6	1	94	2,531.66
VIII	SS13	3	2	1		1				5	3	11	82	16	2	5	52		183	5,528.67
	SS14	4	3	3			1	1		11	14	8	189	69	7	27	39	1	377	13,776.55
	小計	7	5	4	0	1	1	1		16	17	19	271	85	9	32	91	1	560	19,305.22
合計		61	29	51	5	6	2	4		99	111	75	1,697	1,056	17	121	270	3	3,847	125,875.58

ナイフ形石器

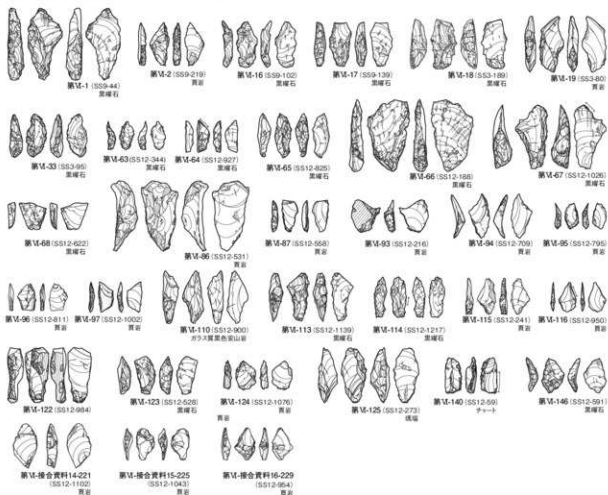
第Ⅱ号石器集中地点 (SS7・8)



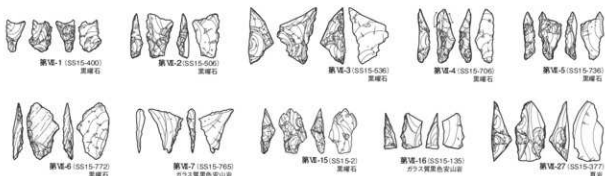
第Ⅴ号石器集中地点 (SS4・5・10)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15)



0 (1:3) 5cm

第 421 図 下河原崎谷中台遺跡出土ナイフ形石器

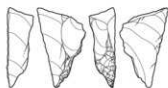
第Ⅲ号石器集中地点 (SS16)



第Ⅲ-1 (SS16-45)
黒曜石



第Ⅲ-3 (SS16-69)
黒曜石



第Ⅲ-5 (SS16-93)
ガラス質黒色火山岩



第Ⅲ-2 (SS16-46)
黒曜石



第Ⅲ-4 (SS16-22)
ガラス質黒色火山岩



第Ⅲ-6 (SS16-36)
ガラス質黒色デイサイト

第Ⅴ号石器集中地点 (SS13・14)



第Ⅴ-8 (SS13-89)
黒曜石



第Ⅴ-12 (SS14-14)
黒曜石



第Ⅴ-30 (SS14-251)
黒曜石



第Ⅴ-9 (SS14-29)
ガラス質黒色火山岩



第Ⅴ-13 (SS14-329)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅴ-10 (SS13-100)
ガラス質黒色火山岩

角錐状石器

第Ⅱ号石器集中地点 (SS2)



SS2-Q235
黒曜石



SS2-Q236
黒曜石

第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18)



第Ⅵ-20 (SS9-192)
ガラス質黒色火山岩



第Ⅵ-21 (SS9-99)
ガラス質黒色火山岩



第Ⅵ-27 (SS3-216)
黒曜石



第Ⅵ-28 (SS12-46)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅵ-126 (SS12-274)
燧石

第Ⅶ号石器集中地点 (SS15)



第Ⅶ-8 (SS15-191)
黒曜石



第Ⅶ-17 (SS15-416)
黒曜石



第Ⅶ-28 (SS15-221)
ガラス質黒色デイサイト

第Ⅳ号石器集中地点 (SS16)



第Ⅳ-7 (SS16-57)
黒曜石



第Ⅳ-11 (SS16-12)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅳ-8 (SS16-37)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅳ-9 (SS16-79)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅳ-10 (SS16-43)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅳ-2 (SS16-58)
ガラス質黒色デイサイト

第Ⅹ号石器集中地点 (SS13・14)



第Ⅹ-14 (SS13-80)
ガラス質黒色デイサイト



第Ⅹ-15 (SS14-264)
ガラス質黒色火山岩



第Ⅹ-26 (SS13-20)
黒曜石



第Ⅹ-31 (SS14-4)
黒曜石



第Ⅹ-32 (SS14-43)
黒曜石

0 (1:3) 5cm

第 422 図 下河原崎谷中台遺跡出土ナイフ形石器・角錐状石器

搔器

第Ⅰ号石器集中地点 (SS1)



第Ⅲ号石器集中地点 (SS7・8)



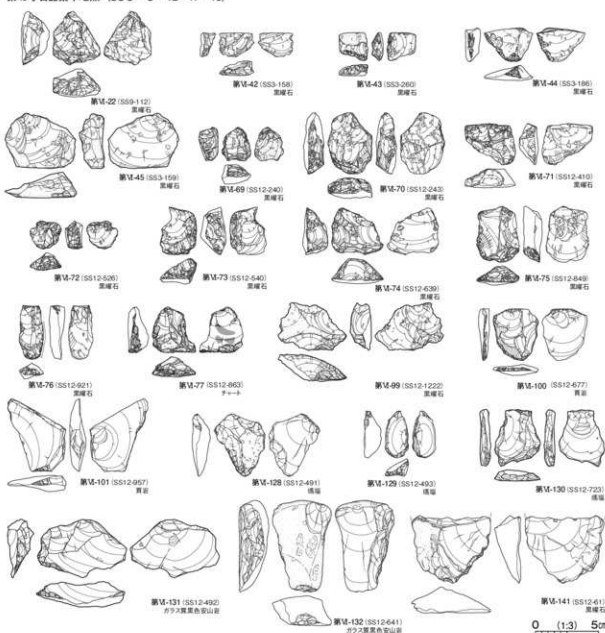
第Ⅳ号石器集中地点 (SS11)



第Ⅴ号石器集中地点 (SS4・5・10)

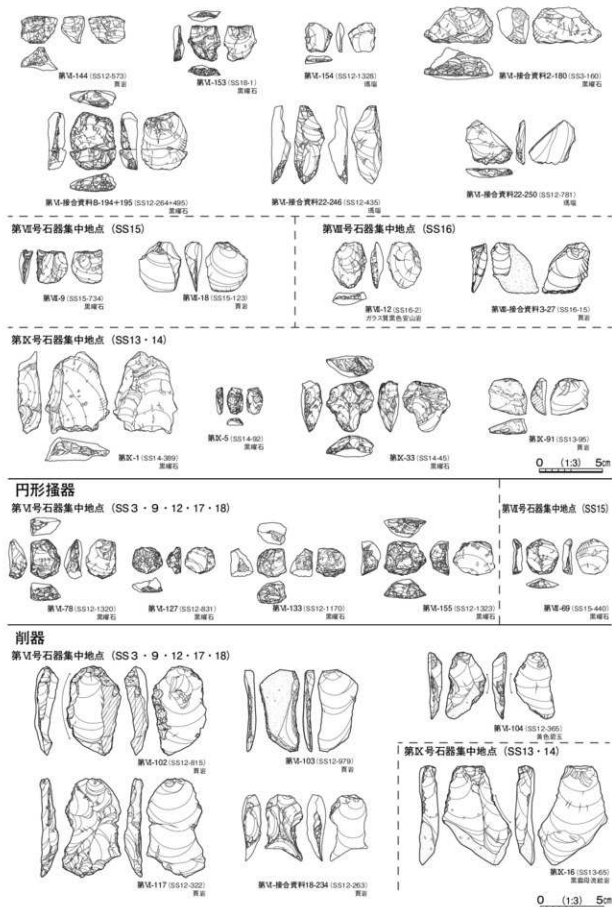


第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18)

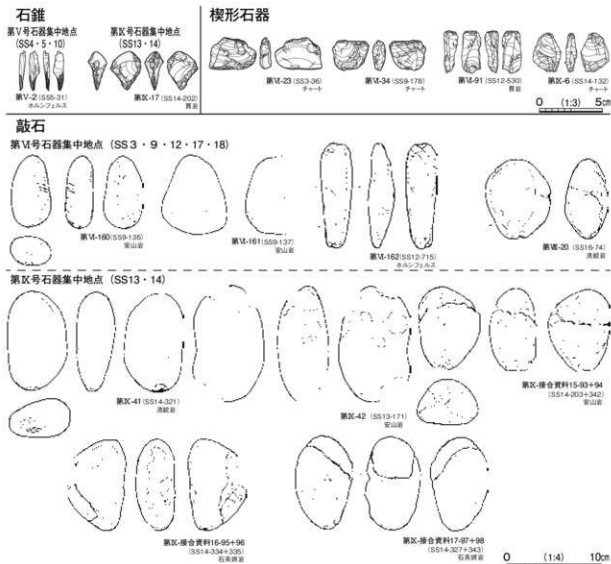


0 (1:3) 5cm

第 423 図 下河原崎谷中台遺跡出土搔器



第 424 図 下河原崎谷中台遺跡出土撚器・円形撚器・削器



第 425 図 下河原崎谷中台遺跡出土石錐・楔形石器・敲石

⑥ 楔形石器

石材は、頁岩 1 点、チャート 3 点で構成される。形状は台形または長方形を呈し、両極からの加撃痕跡が認められる。

⑦ 敲石・礫

石材は、流紋岩製 2 点、安山岩製 10 点、多孔質安山岩製 1 点、ホルンフェルス製 1 点、石英斑岩製 3 点で構成され、安山岩が多く用いられている。礫の一部に敲打痕が確認でき、被熱痕が認められるものもある。また、華大の安山岩・多孔質安山岩製の円礫も出土しており、明確な磨面が確認できなかったため礫として分類したが、磨石として使用されていたことが想定される⁸⁾。礫石器・礫には被熱痕が認められるものが多数確認できる。また、黒色付着物の確認できるもの（第Ⅶ号石器集中地点の 29 など）もあるが今回は分析ができなかったため、付着物の詳細は不明である。

⑧ 接合資料

総数 195 点の接合資料が確認できた。ツールと調整剥片の接合資料は少ないが、小型剥片剥離の過程を示す接合資料や自然面除去剥片の接合資料が多く確認できた。特筆されるのは第Ⅶ号石器集中地点の接合資料 1 で、ナイフ形石器もしくは角錐状石器の素材剥片の剥離工程・加工を示す資料である。

平坦な分割面を打面として不定形の剥片を剥離しており、打面調整の痕跡はみられない。素材剥片の加工時に折れが生じて製作を放棄している例で、当遺跡で石器製作の過程を最も復元できる資料である。剥片剥離技術では、石刃技法のような剥片剥離技術はみられず、臨機に多様な角度から打撃を加えて不揃いの大きさの剥片剥離が行われている。

これらの器種組成から、ナイフ形石器・掻器を主として製作していたことが分かる。また、そのほか二次加工のある剥片も多く出土しており、ナイフ形石器もしくは角錐状石器の製作を目的としているような例も多くみられる。石核は、小型で多方向からの剥離痕跡が認められるものが多く出土しており、二次加工剥片と区別できないものがある。素材礫と考えられる円礫が出土していることや、自然面除去剥片やその接合資料も多く確認できることから、石材によっては原産地から拳大程度の大きさの原石を持ち込んで石器製作が行われていたことが推測される。

(3) 石材について

石材については、考古石材研究所の柴田徹氏による鑑定結果を参考にした。谷中台遺跡の旧石器に使用された主な石材の特徴などについて述べる。

①黒曜石

2098点(7.26224 g)が出土しており、点数比では1番多く出土している石材である。肉眼観察の結果、ほぼ栃木県高原山の黒曜石で、若干ではあるが信州系のものが混じることが分かった。第Ⅸ号石器集中地点で赤褐色の黒曜石が確認されているが、球顆・黒色の輝石が含有される特徴から高原山と推測される。球顆などの不純物が多く含まれる特徴から、剥片剥離時に砕けが起こり石器製作が放棄されている例が多数みられる。平成17年度調査区で出土した黒曜石や遺構外出土の黒曜石については、窪田恵一氏らが産地分析を行っており⁹⁾、高原山産がほとんどであり、蓼科冷山産、諏訪星ヶ台産のものが少量確認できるという結果が得られている。

②頁岩

576点(2809.87 g)が出土しており、点数比では2番目に多い石材である。産地は東北地方のものが多くと思われるが、基質が玉髄に近いものと泥質に近いものが見られ、明確な産地は不明である。自然面が残る剥片も多く、自然面には衝突痕跡が見られるものがあり、河川・海岸から礫の状態を持ち込まれていることが想定される。また、第Ⅵ号石器集中地点から出土した頁岩の中には栃木県高原山北麓の鹿沢層で産出される珪質頁岩に類似するものが見られる。また、県内でも頁岩が産出することから、在地の頁岩が使用されている可能性もあるため、頁岩の産地については今後さらなる検討が必要である。

③ガラス質黒色安山岩

432点(9.12774 g)が出土しており、点数比では3番目に多い石材である。茨城県大洗海岸で産出するものと、栃木県の姿川・武子川産のものが含まれる。比重測定を同一母岩ごとで行った結果、ほぼ半数ずつ含まれる結果が得られた。中には灰色を呈する剥片(第Ⅸ号石器集中地点の接合資料8など)が見られるが、被熱による変質なのか風化による変質なのか判定が難しく、産地は不明である。

④瑪瑙・玉髄

153点(1.62634 g)が出土している。県内で産出する石材で、久慈川・玉川などで採取できる。白色・灰色みがかった特徴から、諸沢・山方地域産のものの可能性がある。第Ⅸ号石器集中地点の接合資料10の玉髄の産地は不明である。

⑤ ガラス質デイスaito (トトロ石)

51点(447.63 g)が出土している。主に第Ⅷ号石器集中地点から出土し、茨城県北部の男体山で

産出する石材である。表面の風化が著しく、加工や剥離工程の判断が難しい特徴がある。谷中台遺跡では大型の角錐状石器やナイフ形石器の製作に主に用いられている。

⑥ 黒雲母流紋岩・黄色碧玉

それぞれ1点ずつ出土している。搬入品の割製の石材として用いられ、黒雲母流紋岩は福島県いわき市で産出する石材で、黄色碧玉は栃木県茂木町の入郷地域で産出するものと考えられる¹⁰⁰⁾。

谷中台遺跡の旧石器に使用された主な石材の特徴について述べてきたが、県内の下総編年Ⅱb期の石材利用と移動生活については、柴田氏¹⁰¹⁾や石川太郎氏¹⁰²⁾が検討を行っており、谷中台遺跡の石材は下総台地の旧石器時代に見られる石材とはほぼ同じ傾向であると言える。近傍の石材を用いるというより、黒曜石・頁岩などの遠隔地の石材と、瑪瑙・ガラス質黒色安山岩・ガラス質黒色デイサイトなどの県北部で採取可能な石材を持ち込み、多様な石材により石器製作を行っていることが判明した。

(4) 礫群について

第Ⅴ号石器集中地点から1か所、第Ⅵ号石器集中地点から3か所、第Ⅷ号石器集中地点から1か所、第Ⅸ号石器集中地点から1か所の、合計6か所で小規模な礫群と考えられる被熱礫・礫の出土を確認した。いわゆる調理場としての礫群のような多量にまとまった礫の出土みられず、少量の礫が点在、または小規模なまとまりとして捉えられるような出土をしているのが特徴である。礫は安山岩が主体で石英斑岩・砂岩などで、被熱により赤色化しているものが多い。黒色の付着物がみられるものも少量出土している。また、礫は破砕しているものも多いが、被熱による破砕なのか、破砕後に被熱したのかは不明である。

(5) 炭化物集中地点・焼土集中地点について

第Ⅵ号石器集中地点からは、炭化物集中地点と焼土集中地点が1か所ずつ確認できた。炭化物集中地点から出土した炭化材を分析した結果、年代値を暦年でみると、25,000～26,000年前に相当することが判明した。この時期は最終氷期の中でも最も寒冷な時期で、現在の本州では標高2,000m付近に生育する亜高山帯針葉樹林が低地に分布していたことが、花粉分析の結果などによって明らかになっている。分析した炭化材もマツ属という結果が得られ、当遺跡周辺でも亜高山帯針葉樹が生育していた環境であったと考えられる。焼土集中地点では東西0.7m、南北0.7mの楕円形の範囲から焼土を確認した。周囲からは被熱礫・礫片が散在して出土していることから、小規模な礫群に伴う郊跡の可能性が考えられる。炭化物集中地点とそれほど離れずに分布していることからその関連性がうかがえる。

以上、谷中台遺跡の石器集中地点の特徴などについて述べてきた。当地域では、武蔵野台地・相模野台地などに比べ、ローム層の堆積が薄いため、文化層として石器群を捉えることが困難であるが、出土層位や、角錐状石器を伴う器種組成などから、大きくは下総編年Ⅱb期¹⁰³⁾、武蔵野ロームⅣ層中部～Ⅴ層にかけての石器群に位置付けられる。当遺跡周辺の谷田川上流域や西谷田川上流域、小貝川流域の遺跡からは石器集中地点の確認例が増えている。谷田川上流域では島名境松遺跡、平北田遺跡で下総編年Ⅱc～Ⅲa期並行の石器群が、西谷田川上流域では元中北東藤四郎遺跡、上河原崎前山遺跡、元宮前山遺跡で下総編年Ⅱb～Ⅱc期並行の石器群が、小貝川流域では高須賀中台東遺跡から下総編年Ⅱb～Ⅱc期並行の石器群が、それぞれ小規模であるが確認できる。これらのことから、周辺の各流域で下総編年のⅡb～Ⅲc期にかけて狩猟採集活動とそれに伴う石器製作の痕跡が確認でき、当遺跡との関連性や移動領域などを考える上で重要な資料である。Ⅳ層・Ⅴ層段階は南関東の各台地で遺跡数が増加し、資料も豊富に得られている時期であるのに対し、北関東地方では徐々に資料数は増加しているものの、比較して遺跡数・資料数が少ないのが現状である。今回は石器集中地点に加え、小規模な礫群、炭化物集中地点、焼土集中地点も確認できたことから、当時の植生や生活痕跡について検討する上でも貴重な資料である。

2 縄文時代

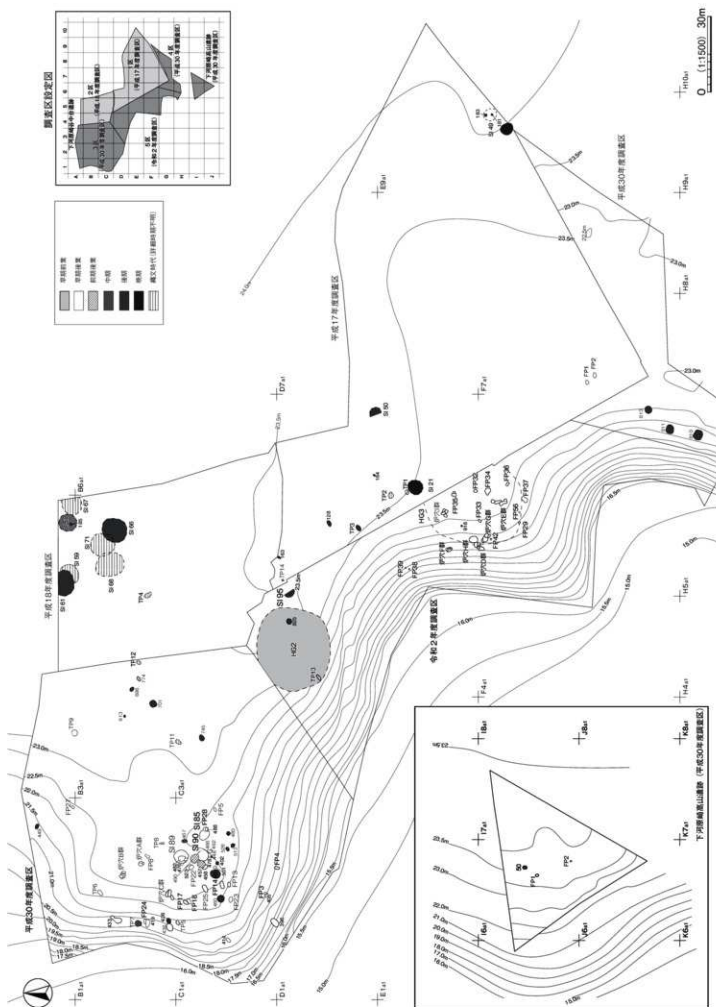
既報告分を含め縄文時代の遺構は、谷中台遺跡で堅穴建物跡16棟（早期後葉3、中期後葉1棟、後期前葉1棟、後期後葉3棟、晩期前葉4、時期不明4棟）、炉穴62基（早期後葉）、土坑43基（早期前葉1、早期後葉10、早期後葉以前3、前期後葉2基、前期後葉以前1、中期初頭1、中期後葉2、後期前葉20、後期中葉1、後期後葉1、晩期前葉1）、陥し穴13基（早期後葉2、中期後葉1、後期中葉1、時期不明9）、遺物包含層2か所（早期前葉1、早期後葉～後期1）、高山遺跡で堅穴建物跡1棟（中期後葉）、炉穴2基（早期後葉）、土坑1基（後期前葉）である。高山古墳群で炉穴17基（早期中葉1、早期後葉16）、土坑152基（早期後葉41、前期2、後期5、後・晩基1、晩期2、詳細時期不明101）である。遺跡の立地する台地上では、縄文時代早期前葉から土地利用が始まり、晩期前葉まで断続的に集落が営まれたり、狩猟の場として利用されていたことが明らかとなった。今回の報告では、特に台地縁辺部から斜面部にかけて良好な資料が得られた早期の遺構・遺物の特徴について述べる。

(1) 早期前葉

当該期の遺構は、土坑1基、遺物包含層2か所である。遺構は調査区の北部と中央部に分布している。中央部の台地縁辺部から斜面部にかけて遺物包含層が形成されており、夏島式～稲荷台式の土器が多く出土している。出土土器の割合は、夏島式が一番多く、次いで稲荷台式と稲荷原式が出土している。集中して土器片が出土している範囲には、遺構があったことも想定されるが、形状などを捉えることができなかった。特筆されるのは熱糸文土系土器群に伴う石器で、扁平な小型の楕円礫を素材にした石錘、少量のスタンプ形石器、石英斑岩製の三角錐形石器とその調整剥片が多く出土している点である。三角錐形石器は直接打撃で持ち手部分を加工した三角錐形の大形の石器であり¹⁴⁾、持ち手に対して底部が斜めになるのが特徴である。スタンプ形石器と三角錐形石器は熱糸文土系土器群に伴う石器として知られ、スタンプ形石器の分布の中心は南関東、三角錐形石器の分布の中心は北関東とされ¹⁵⁾、その形態差・分布差を集団差として解釈されている¹⁶⁾。今回、谷中台遺跡からは石英斑岩製の三角錐形石器8点とその調整剥片93点が出土していることから、三角錐形石器の製作が行われていたと考えられる。茨城県では、古河市の香取東遺跡からは、土坑と遺構外から出土した遺物として50点以上の三角錐形石器とその調整剥片が多量に出土しており、谷中台遺跡の様相と類似している¹⁷⁾。

(2) 早期後葉

当該期の遺構は、谷中台遺跡で堅穴建物跡3棟、陥し穴2基、炉穴62基、土坑13基（早期後葉以前も含む）、遺物包含層1か所、高山遺跡で炉穴2基である。遺構は標高22mほどの台地縁辺部から斜面部に立地し、北部と中央部に集中して分布し、堅穴建物跡は北部の炉穴群に西側を囲まれるように密集している。炉穴は、浅い谷が入り若干突出する台地の縁辺部から斜面部にかけて形成されており、同台地南先端部に位置する高山古墳群の平成28・29年度調査区からも炉穴17基が確認されていることから、台地の西部から先端部の縁辺部から斜面部にかけて、広く分布していると考えられる。炉穴の残存状況は炉床面が露出していたり、天井部が残存していなかったりと良好ではない。形状は平均長軸2m、短軸1mほどの楕円形で、深さは掘り込みのあるもので平均24cmほど、深いもので58cmである。また、重複している炉穴は、その形状から足場の位置を固定し、燃焼部を新しく作り変えながら繰り返し使用されていたものと考えられる。同様な例は、当遺跡の約1km北に位置するつくば市の元宮本前山遺跡¹⁸⁾や谷田川右岸に位置する谷田部第六天下遺跡¹⁹⁾、牛久市山王前遺跡²⁰⁾でも確認されている。炉穴の重複形態については、風向きの変化や集団適応形態、崩落・人為的埋土によって新たに構築するためということが指摘されており²¹⁾、当遺跡についても同様な要因が想定される。また、平成30年度調査区で確認した堅穴建物跡3棟



第 427 図 縄文時代遺構配置図

のうち2棟は炉を有しておらず、確認されている1棟の炉跡も若干の赤変がみられるのみで、使用頻度は低かったことが想定される。このことから、煮炊きの場と居住の場が分かれていたと考えられ、当該時期の集落構造としての特徴に当てはまる^{22・23)}。

出土遺物は条痕文土器（茅山下層式）の土器片が大半を占めており、特に第22・51号炉穴から出土したものはほぼ完全な状態に復元でき、県内でも貴重な出土例である。出土土器の特徴としては、FP 9・25・32・47からは縄ヶ島台式の名残の見られるものや、隆帯の刺突工具が大きいなどの特徴を持つ古手の様相もみられるが、中段階以降の特徴²⁴⁾を示すものも多くみられる。また、第47号炉穴出土の1の土器のように胎土に雲母・石英・長石を多く含むものも複数みられる。第22号炉穴から出土したほぼ完形の土器は、胴部には貝殻条痕文が施され、口唇部に貝殻背面圧痕と半截竹管の刺突による施文を施している。また、土器以外にも竪穴建物跡からは条痕文系土器に伴う石器である片刃石器が多数出土している。扁平な楕円礫を素材として、片面からの加工により刃部を作出している石器で、石斧・搔器の機能が想定されている²⁵⁾。第90号竪穴建物跡から出土した片刃石器も、加工が全周するものと基部を残して加工が施されるものがみられ、これらの機能差が想定される例と考えられる。

3 古墳時代

谷中台遺跡と高山遺跡の古墳時代の集落は、5世紀前葉から7世紀前葉にかけて変遷し、竪穴建物跡は谷中台遺跡で80棟、高山遺跡で4棟確認している。両遺跡を合わせた時期別の竪穴建物跡の内訳は、5世紀前葉・前半21棟、5世紀中葉23棟、5世紀後葉3棟、6世紀前葉3棟、6世紀中葉7棟、6世紀後葉・後半16棟、7世紀前葉7棟、5世紀代2棟、6世紀代1棟、古墳時代1棟である。古墳時代の集落は、第282・292集で大部分が報告され、詳細な分析が行われている。

ここでは、両遺跡全体の集落変遷や特徴的な遺構、遺物などについて概観してみたい。集落変遷については、第282集で設定されたものを参考に第1～7期までを再設定した。第1期は5世紀前葉、第2期は5世紀中葉、第3期は5世紀後葉、第4期は6世紀前葉、第5期は6世紀中葉、第6期は6世紀後葉、第7期は7世紀前葉である。5世紀前半と6世紀後半とされた遺構はそれぞれ第1期と第6期に含め、5・6世紀代・古墳時代とした遺構は除外した。

(1) 集落変遷

① 第1期（5世紀前葉・前半）

谷中台遺跡の第1・16・20・22～24・26～28・30・31・34～36・44・46・47・51・70・72・80号竪穴建物跡の21棟、第49・167号土坑の2基が該当する。当期の遺構は調査区の中央部に密集して分布しており、第1・80・51号が南部と北部の離れた所に位置していることから、北部と南部にも別集団の竪穴建物跡が続く可能性が考えられる。第27・36・47・80号竪穴建物跡が大型、第1・16・20・28・36・31・51号竪穴建物跡が中型、第22～24・26・34・35・44・46・70・72号竪穴建物跡が小型に分類される。第282集では、主軸方向・内部施設の配置・出土土器の様相などから、大型・中型・小型²⁶⁾の竪穴建物跡の組み合わせで4組の単位集団を想定している。第292集で報告された第35・63・70・72号竪穴建物跡も同様の集団ととらえることができ、当期には2～4棟ずつの集落構成集団が5組想定される。

② 第2期（5世紀中葉）

古墳時代の中で最も遺構数が多い時期にあたり、谷中台遺跡の第38・39・41・53・55～57・63～

65・69・73・75～78・86～88・92～94・95号堅穴建物跡23棟と第40・50・63・237・250・266・290・291・821・823・836・837号土坑の12基が該当する。分布は北部に偏って見られる。第55・77・93号堅穴建物跡が大型、第55・63～65・73・78・86・88号堅穴建物跡が中型、38・39・41・56・57・69・75・76・87・92・94・96号堅穴建物跡が小型に分類される。前期と同様、主軸方向と内部施設の配置・出土土器の様相、堅穴建物跡の大きさの組み合わせで、第27・41号、第55～57・75号、第53・63～65・69・73号、第76～78号、第86～88号、第37～39・92・93・96号堅穴建物跡の6組の集落構成集団が想定される。また、第292集では、間仕切り溝のある大型の第55号堅穴建物跡とそれに伴う物理的な使用が想定される第57号堅穴建物跡の関係性が指摘されているが、令和2年度調査区で確認した第93号堅穴建物跡と第92号堅穴建物跡も同様な関係性が考えられる。

③ 第3期（5世紀後葉）

谷中台遺跡の第33・79・82号堅穴建物跡の3棟が5世紀後葉に該当する。前期に比べて建物数が一気に減少し、分布は北部から中央部にかけてみられる。第79号堅穴建物跡が大型、第82号堅穴建物跡が中型、第33号堅穴建物跡が小型に分類される。

④ 第4期（6世紀前葉）

第11・29号堅穴建物跡の2棟が該当する。古墳時代では最も遺構数が少ない時期で、前期に比べ格段に建物数が減少する。中央部と南部に、ある程度離れて分布している。大きさはすべて中型に分類される。

⑤ 第5期（6世紀中葉）

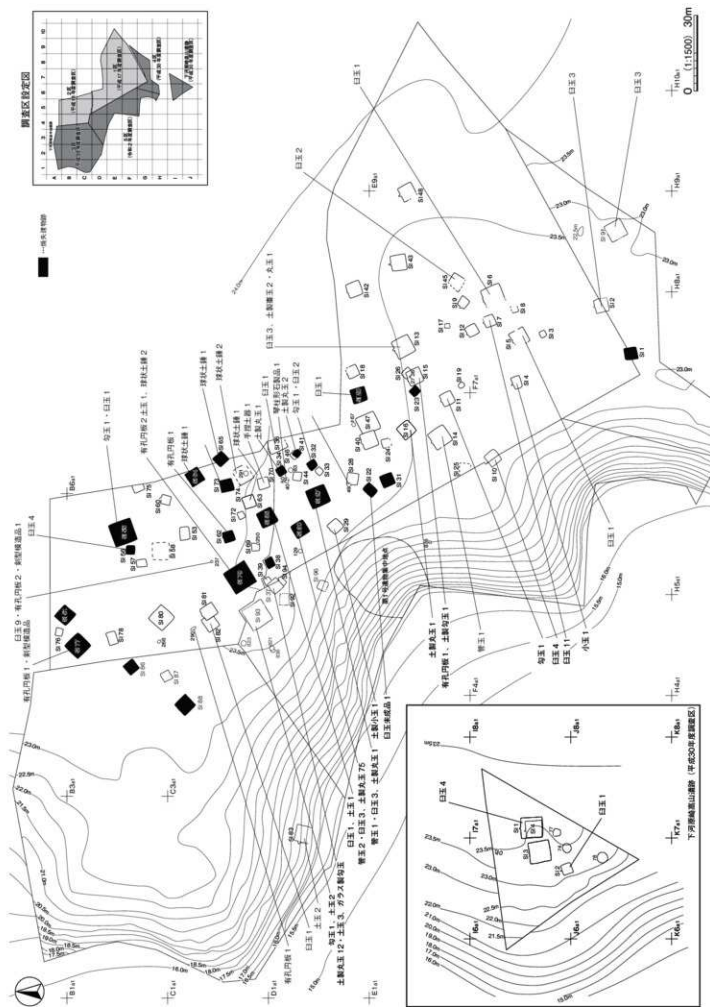
谷中台遺跡の第12・15・18・40・81号堅穴建物跡の7棟が該当する。北部に第81号堅穴建物跡が1棟離れている以外は、南部の中央寄りに分布している。主軸方向はN-20°-30°-Wではほぼ揃っている。第13・14号堅穴建物跡が大型、第15・18・40・81号堅穴建物跡が中型、第12号堅穴建物跡が小型に分類される。

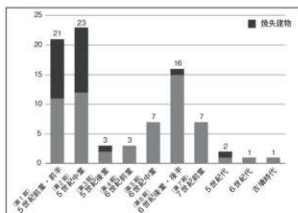
⑥ 第6期（6世紀後葉・後半）

谷中台遺跡の第3・5～8・17・19・37・42・60・62・74・83・91号堅穴建物跡の14棟と第26・27号土坑の2基、高山遺跡の第2・4号堅穴建物跡の2棟と第42・74・77・78号土坑の4基が6世紀後葉・後半に該当する。また、谷中台遺跡の第45号堅穴建物跡の1棟が6世紀後半に該当する。5世紀後葉から減少していた建物数が再度増加する時期である。第6号堅穴建物跡が大型、第5・37・42・45・74・83・91号堅穴建物跡が中型、第3・7・8・17・19・60・62号堅穴建物跡が小型に分類される。5世紀代の建物に比べ大型のもが減少し、中型と小型が中心である。南部に分布の中心があり、高山遺跡の平成30年度調査区からも確認されていることから、さらに南へ集落が広がっていることが想定される。また、北部斜面下側の離れたところに第83号堅穴建物跡が位置しており、分布が特徴的である。

⑦ 第7期（7世紀前葉）

谷中台遺跡の第2・4・10・43・48号堅穴建物跡の5棟、高山遺跡の第1・3号堅穴建物跡の2棟が該当する。谷中台遺跡の2・10・43・48号堅穴建物跡が中型、第4号堅穴建物跡が小型、高山遺跡の第1・3号堅穴建物跡は大型に分類される。さらに南部へ分布がみられ、高山遺跡の平成30年度調査区からも確認されていることから、前期と同様に集落がさらに南部へ広がっていることが想定される。高山遺跡の第1号堅穴建物跡と第4号堅穴建物跡は、柱穴や壁の一部を共有しながら拡張しており、前期から当期にかけて建て替えが想定できる。





第 430 図 古墳時代竪穴建物跡時期別棟数

谷中台遺跡と高山遺跡では、5世紀前半に集落の構築が始まり、5世紀中葉にピークがあり、5世紀後半からは急激に建物数が減少する。6世紀中葉に若干増加し、6世紀後半に再度増加がみられ、第7期でまた減少する。全体の分布の傾向としては、第1～3期までは北部から中央部に分布の中心があり、第4～7期は中央部から南部に分布が移行し、第6・7期の集落はさらに南部へ広がっていた可能性が想定できる。

(2) 焼失建物跡と石製品

谷中台遺跡では、床面付近などから炭化材や焼土が出土する焼失建物跡が24棟確認できた。時期別の割合は、第1期が21棟中10棟で47%、第2期が23棟中11棟で47%、第3期が3棟中1棟で33%、第6期が16棟中1棟で6%である。第1期と第2期が、それぞれ同時期の建物の約半数を占めており、5世紀代は焼失建物跡の割合が高い。第282集では、土器と炭化材・焼土の出土状況を分析し、多くの高坏や埴などの土器が焼土塊や炭化材と接したことによる煤付着や二次焼成痕が確認でき、建物の焼却と同時に土器を投棄したことを裏付けるものであるとしている。

石製品・石製模造品は、谷中台遺跡で第1期は6棟（うち焼失5棟）、第2期は4棟（うち焼失3棟）、第3期は2棟（うち焼失1棟）、第4期は1棟、第5期は3棟、第6期は6棟、第7期は3棟から、高山遺跡でも第6期が1棟と第7期の1棟から出土している。併せて土製品の出土も各期でみられる。第37号竪穴建物跡からは、ガラス製の勾玉が床面から出土しており、特筆される。石製品・石製模造品・土製品については、古墳時代を通じて竪穴建物跡から出土しており、建物もしくは集落の廃絶に際して祭祀が行われたことが想定される。

(3) 遺物集中地点について

令和2年度調査区の中央部で確認された第1号遺物集中地点からは、5世紀前半～中葉にかけての遺物がまとまって出土した。土器は赤彩された土師器の坏・碗・高坏が多く、残存状況は悪いが第○図の13は高坏状装飾器台の脚部と考えられる。これらの赤彩された土器とともに、有孔円板・剣形模造品・白玉が多量にまとまって出土しており、出土遺物・出土状況から、祭祀の痕跡と考えられる。古墳時代の集落の祭祀については、特定祭祀場で行われたと考えられるケースと竪穴建物跡で行われたと考えられるケースがある²⁷⁾。谷中台遺跡の第1号遺物集中地点は、5世紀前半から中葉における特定の祭祀場として、赤彩された土器と石製品・石製模造品を一括して斜面部へ廃棄した痕跡と考えられる。

4 平安時代

谷中台遺跡では、既報告分を含め竪穴建物跡1棟（8世紀後半）と火葬墓1基（9世紀前半）を、高山遺跡では、竪穴建物跡1棟（9世紀中葉）と火葬墓1基（9世紀中葉）を確認した。谷中台遺跡の第84号竪穴建物跡は、竪穴の両脇と南西壁に棚状施設を付設した特徴的な形状をしており、鉄鉢形土器・墨書土器が出土している。また、高山遺跡の第6号竪穴建物跡は、斜面部のかかなり下方に位置しており、灯明として使用された須恵器の坏が出土している。どちらも周辺に同時期の竪穴建物跡は確認できず、集落から離れて単独で分布している。火葬墓については、既報告分として谷中台遺跡の1基と、今回報告した高山遺跡の1基のほか、つくば市では谷田川右岸の谷田部第六天下遺跡で第1号骨蔵器（9世紀後半）として報告されている例があ

るのみである²⁹⁾。県内の火葬墓は、水戸市を中心とする那珂川流域と、土浦・石岡市を中心とする霞ヶ浦沿岸域に分布の中心が見られ、9世紀に入り急激に増加する。那珂川流域の火葬墓では蔵骨器を逆位で埋葬する例が多く、蔵骨器は須恵器の使用率が高く、壺や甕に坏・盤で蓋をする器種構成がとられることが多いのに対し、霞ヶ浦沿岸域で正位で埋葬する方法が多く、蔵骨器は須恵器と土師器を併用し、甕には須恵器鉢や土師器坏・皿・碗などの多様な器種を採用していることが指摘されている³⁰⁾。谷中台遺跡の第1号火葬墓は須恵器の甕の底部を破壊し、逆位で埋設し、須恵器の坏・盤で蓋がされていることから、那珂川流域の特徴と類似するのに対し、今回報告した高山遺跡の第1号火葬墓は、須恵器の甕を正位で埋設し、須恵器の鉢で蓋がされていたことから、霞ヶ浦沿岸域の特徴と考えられる。谷田部第六天下遺跡では、蓋は確認されなかったが土師器の甕を正位で埋設していることから、霞ヶ浦沿岸域の特徴をもつ火葬墓と考えられる。これらの例から、谷田川・西谷田川流域の台地縁辺部にも点在して火葬墓が分布し、また火葬墓の近くには同時期または近い時期の堅穴建物跡が集落跡から離れて存在している特徴が見られる。今回、墓域として土地利用されていたことが分かったが、異なる系譜の火葬墓が隣接して見られることや、近くに存在する堅穴建物跡の意味などの検討については、今後の課題である。

5 江戸時代

江戸時代の遺構は、谷中台遺跡の炭焼窯4基、土坑1基、溝跡2条である。遺構は調査区北部から中央部の台地平坦部から斜面部にかけて分布が見られる。出土遺物などを再検討した結果、第1号炭焼窯跡が18世紀前半、第2・3号炭焼窯跡は18世紀中葉～19世紀前葉、第4号炭焼窯跡は18世紀前葉と考えられる。第828号土坑は出土遺物や配置から第2・3号炭焼窯の作業場としての性格が考えられる。炭焼窯の構造は土窯で炭化室と前庭部を持ち、炭化室には補強材として瓦や石などを使用する同様の構築方法が見られることから、18世紀代を中心に窯を作り変えながら連続的に操業されていたものと考えられる。炭焼窯については、村田文夫氏が多摩丘陵の近世・近現代の発掘事例から形態分類を行っている³¹⁾。それによると炭化室の形状は円形系のE型・F型に分類される。この形態は多摩丘陵での事例数は少ないが、江戸時代末に操業されていたことが推測されており、時間的にも当遺跡との相違はない。また、つくば市では、前野東遺跡と明石遺跡でも同様な形態の近世・近代と報告されている炭焼窯が確認されており、近世以降は各地域で炭焼窯が点在して構築され、操業していたと考えられる。

6 おわりに

以上、谷中台遺跡・高山遺跡・高山古墳群の時期別の土地利用や、集落変遷・構造について概観した。特に大きな成果として挙げられるのは、後期旧石器時代の石器製作跡が台地の縁辺部に広く確認できたことである。それらの石器群は県内でも屈指の規模であり、県内はもとより、近隣地域を含めた石器群の様相を考える上で貴重な資料と言える。土地利用のあり方としては、縄文時代早期前葉から生活の痕跡が認められ、早期後葉以降になると集落が営まれ、狩猟場としても利用されている。弥生時代の土地利用の痕跡は認められず、古墳時代以降断続的に集落が営まれる。5世紀前葉から営まれ始めた集落は、盛衰はみられるが7世紀前葉まで続き、集落は台地の北から南へと時期が下るにつれて分布が変化していく。さらに分布は南へ広がっていることが想定できる。台地の南先端部には6世紀末から7世紀前葉の古墳群が築造されており、これ以降8世紀後葉から9世紀中葉までは墓域として利用されている。江戸時代になると製炭活動の痕跡が見られるにとどまる。

今回は既報告分の調査成果を踏まえ、3遺跡の断続的な土地利用の状況を明らかにすることができた。さらに周辺遺跡との関係や出土遺物の詳細な比較研究については、今後の課題としたい。

註

- 1) 高野裕隆 2008 年「下河原崎谷中台遺跡 鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第282集
- 2) 齋藤真弥 2008 年「下河原崎谷中台遺跡 下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」『茨城県教育財団文化財調査報告』第292集
- 3) 佐野正 1983 年「科学博園連絡道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ツバタ遺跡・高山古墳群」茨城県教育財団文化財調査報告第22集
- 4) 註2に同じ
- 5) 内堀田 2020 年「下河原崎高山古墳群2 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書6」『茨城県教育財団文化財調査報告』第446集
- 6) a 亀田直美 2011 年「関東地方の角錐状石器について」『九州旧石器』第15号 九州旧石器文化研究会
b 亀田直美 1996 年「角錐状石器」『石器文化研究』第5号 石器文化研究会
- 7) 比田井民子 1996 年「第Ⅳ・Ⅴ層の段階の搔器・削器・彫器」『石器文化研究』第5号 石器文化研究会
- 8) 堤 隆 2000 年「皮鞭しの場合-搔器の分布と場の機能-」『MICROBLADE』創刊号 ハッポ田石器研究グループ
- 9) 窪田恵一・望月明彦 2024「茨城県つくば市下河原崎谷中台遺跡の旧石器時代資料の研究-茨城県県南部におけるⅤ-Ⅷ層下部段階石器群の検討と国生産地地推定作業の成果報告-」『茨城県考古学協会誌』第36号 茨城県考古学協会
- 10) 茂木町史編さん委員会 2001 年「茂木町史」
- 11) a 柴田徹 2002 年「使用石材からみた下総台地ないの地域区分と石材の供給」『日本考古学協会第68会総会 研究発表要旨』日本考古学協会
b 柴田徹 2002 年「茨城県内において剥片石器に使用された石材について」『茨城県における旧石器時代研究の到達点-その現状と課題-発表要旨・資料集』茨城県考古学協会
- 12) 石川太郎 2005 年「茨城県における旧石器時代Ⅱb期の石材利用と移動生活」『歴史哲学者館岡勝成先生追悼論文集』
- 13) 橋本勝雄 2002 年「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点-その現状と課題-発表要旨・資料集』茨城県考古学協会
- 14) 大工原豊 2020 年「縄文石器提要 考古調査ハンドブック20」
- 15) 石坂 茂・岩崎泰一 1988 年「熱余文土器文化における石器群の一様相-スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として-」『研究紀要』第5号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 16) 大工原豊 2023 年「縄文時代における情報伝達と物質流通システムに関する基礎的研究(科研報告書)」
- 17) 郡山雅友ほか 2001 年「香取東遺跡・釈迦才仏遺跡」『茨城県県島部能和町 都市計画道路東牛谷・釈迦線道路(町道9号線)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』株式会社 武蔵文化財研究所
- 18) a 高野裕隆 2007 年「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第265集
b 海老沢稔 2015 年「元宮本前山遺跡2 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5」『茨城県教育財団文化財調査報告』第404集
- 19) 有山径世ほか 2023 年「谷田部第六天下道跡-造成工事に伴う発掘調査報告書-」有限会社毛野考古学研究所 茨城文所
- 20) 獅子内一成 2020 年「小馬塚台遺跡 山王前遺跡 一般国道6号牛久土浦バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第441集
- 21) 小林謙一 1991 年「縄文時代早期後葉の南関東における居住活動」『縄文時代』第2号 縄文時代文化研究
- 22) 小林義典 1999 年「遺構研究 如穴」『縄文時代』第10号 縄文時代研究会
- 23) 宮崎朝雄・金子直行 2015 年「縄文時代早期後葉文期の堅穴住居と如穴の関係-千葉県市原市天神台遺跡を中心にして-」『縄文時代』第26号
- 24) 野内秀明 2001 年「縄文時代早期後葉の諸段階-茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群-」『考古論叢 神奈河』第9集 神奈川県考古学会
- 25) 註14に同じ
- 26) 第282集で高野氏は、菊池芳朗氏の分類を使用し、堅穴建物跡の面積50㎡以上を「大型住居」、20㎡未満を「小型住居」その間を「中型住居」に分類しており、今もその分類方法を踏襲している。
- 27) 藤丸亮介 2022 年「石製模造品からみた古墳時代のまづり」『遺跡・遺物が語るいのり』令和4年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナーレジュメ
- 28) 註19に同じ
- 29) 古澤信 1996 年「常陸国における古代灰葬墓の分布とその背景」『考古学雑誌 西野元先生退官記念論文集』
- 30) 村田文夫 1991 年「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55 物質文化研究会

付 章 自 然 科 学 分 析

I 下河原崎谷中台遺跡のローム層の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

つくば市下河原崎に所在する下河原崎谷中台遺跡は、常陸台地の南西部を構成する筑波稲敷台地の北西部の台地平坦面上に位置する。調査区の位置する台地は、上位台地Cに区分される台地であり、その形成年代は酸素同位体ステージ5a(約8万年前)とされている(貝塚ほか編 2000)。これまでの発掘調査により、ローム層の上部からは、石器群が検出されており、その検出層位の確定が課題とされている。本報告では、ローム層の重鉱物組成と火山ガラス質テフラの層位的な産状を明らかにすることにより、他箇所および他地域のローム層との対比可能な指標を獲得し、下河原崎谷中台遺跡におけるローム層の層序を検討する。

1 試料

試料は、当社技師1名が2019年1月18日に発掘調査現場に赴き、採取した。現地調査所見により、断面の最上部は黒ボク土層からローム層への漸移層に相当するⅡd層とされ、それより下位のローム層は、武蔵野台地の立川ローム層標準層序に準ずる層位名であるⅢ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ、Ⅻ、ⅩⅢの各層名が付された。各層の層厚は、分析結果を呈示した図1に柱状図として併記する。

試料はⅡd層上端から、厚さ5cmで連続に、上位より試料番号1～30までの30点が採取された。分析には、石器群の検出された層位を含むローム層上部の試料番号1～18の全点とその下位の層位のⅨ層とⅩ層から各1点ずつの試料番号20と22の合計20点を選択した。

2 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとす。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

3 結果

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、試料番号10以上の上半部と試料番号11以下の下半部とで大きく異なっている。上半部では斜方輝石が多く、60～70%を占め、他に10数%程度の不透明鉱物と数～10%程度のカンラン石および単斜輝石を含む。その中でカンラン石は試料番号4で上位と下位に比べてやや

多く含まれ、試料番号 10 では 20% ほどとなる。下半部では、カンラン石と斜方輝石の 2 者が同量程度で主体を占める。その中で量比の層位的な変化を見ると、試料番号 13 と試料番号 16～18 にカンラン石の極大（直上と直下の両試料に比べて量比が高い）が認められ、試料番号 15 にカンラン石の極小（極大とは逆）が認められる。また、試料番号 18 から 22 に向かってはカンラン石の減少と斜方輝石の増加傾向が窺える。火山ガラス比では、試料番号 7～12 に無色透明のバブル型火山ガラスの少量含まれる層準が認められる。また、試料番号 3～6 に微量ながらも無色透明の中間型火山ガラスが特徴的に含まれる。

4 考察

(1) 指標テフラの降灰層準

火山ガラス比分析により試料番号 7～12 で比較的多く検出された火山ガラスは、その形態と産出層位から始良 Tn テフラ（AT: 町田・新井 1976）に由来する。このように土壤中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致するとされている（早津 1988）。したがって、本地点における AT の降灰層準は試料番号 12 すなわち V 層と VI 層の層界付近に推定される。

なお、AT の噴出年代については、町田・新井（1976）が示した 2.1～2.2 万年前という年代以来、今日に至るまで数多くの年代測定例が報告され、それらの事例から噴出年代も少しずつ変わってきている。80 年代後半から 90 年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）など）や 2000 年代に行われた放射性炭素年代測定（宮入ほか（2001）、Miyairi et al（2004））からは、放射性炭素年代ではおよそ 2.5 万年前頃にまとまる傾向にあるとされた。一方、海底コアにおける AT の発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ 2 と 3 との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は 2.5～3.2 万年前におよぶとされている（町田・新井 2003）。また、青木ほか（2008）も同様に、上述した村山ほか（1993）の放射性炭素年代と海底コアにおける酸素同位体ステージ上の層位とから、約 2.86 万年前という暦年代を提示している。さらに、最近では Smith et al.（2013）が、福井県の水月湖のボーリングコアの年縞堆積物の研究事例に基づき、AT の噴出年代は暦年で 30,000 年前であるとしている。

試料番号 3～6 に微量含まれる中間型火山ガラスは、その形態とローム層最上部という産出層位から、立川ローム層上部ガラス質テフラ（UG: 山崎 1978）に由来する可能性が高い。本地点における産状からは、詳細な降灰層準を特定することはできないが、後述する重鉱物組成との層位関係も考慮すれば、試料番号 3 付近の III 層上部に推定することができる。

UG の噴出年代については、町田・新井（1992）などでは 1.2 万年前とされてきたが、町田・新井（2003）では、その噴出年代は明記されていない。ただし、UG の由来と考えられている浅間火山の軽石流期のテフラの年代は、放射性炭素年代では 1.3～1.4 万年前（町田・新井 1992）、層位的な年代も加味した暦年代では 1.5～1.6 万年前とされている（町田・新井 2003）

表 1. 重鉱物・火山ガラス比分析結果

層名	試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明重鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	斜方輝石火山ガラス	その他	合計
II	1	16	166	23	1	35	9	250	2	2	0	246	250
	d 2	6	157	26	2	47	12	250	5	2	0	243	250
III	3	6	185	10	1	36	12	250	3	5	1	241	250
	4	25	179	13	3	25	5	250	4	4	0	242	250
	5	10	181	17	1	28	13	250	2	5	2	241	250
IV	6	12	168	3	0	55	12	250	1	5	3	241	250
	7	11	165	9	0	43	22	250	10	6	0	234	250
	8	15	162	11	0	52	10	250	10	3	1	236	250
V	9	20	154	23	0	46	7	250	9	3	1	237	250
	10	47	144	11	0	38	10	250	12	0	1	237	250
	11	88	107	13	0	27	15	250	19	2	0	229	250
VI	12	83	106	16	0	29	16	250	13	4	0	233	250
	13	116	80	8	0	29	17	250	6	0	0	244	250
	14	103	100	6	0	16	25	250	6	1	1	242	250
VII	15	88	87	11	2	30	32	250	2	4	0	244	250
	16	123	80	2	6	18	21	250	2	0	0	248	250
	17	120	82	8	8	9	23	250	1	2	0	247	250
VIII	18	128	71	2	4	30	15	250	0	0	0	250	250
	20	86	61	3	1	22	75	248	0	0	0	250	250
IX	22	72	110	9	3	16	40	250	0	1	0	249	250

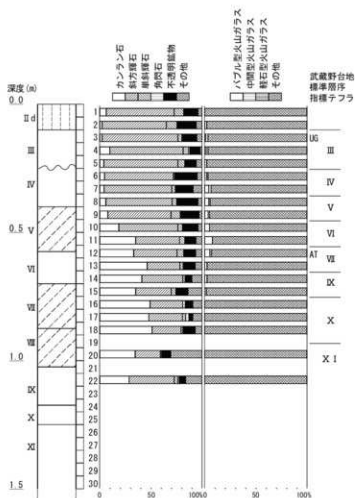


図1. 平成30年度テストピット断面の重鉱物組成および火山ガラス比

から、これらをUGの年代と考えて良い。

(2) 層序対比

関東地方に分布する立川ローム層は、火山噴出物（テフラ）が積み重なってきたというような単純な累積性の土壌ではなく、テフラとその再堆積物およびテフラには由来しない砕屑物などが、主に風によって運ばれ、それらが積み重なって形成された複雑な累積性の土壌であると考えられている（例えば鈴木（1995）など）。ただし、ローム層の母材の主な給源である富士山や関東平野周縁の火山の活動の変化は、ローム層の重鉱物組成の層位的な変化として表されると考えられる。関東ローム層の重鉱物組成の中で、カンラン石は富士山のテフラに由来し、斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、富士山、箱根火山そして北関東の浅間火山の3者のテフラに由来する。これらの火山の活動の変化およびその地域への影響度の変化によって、重鉱物組成が変化すると考えられる。

これまでの当社における関東地方の台地上のローム層の分析事例からは、武蔵野台地、大宮台地、相模野台地というスケールの区分では各台地内での重鉱物組成はほぼ共通するが、各台地間では異なる組成であることがわかっている。特に重鉱物組成においてその違いは顕著である。例えば富士山に最も近い相模野台地では、カンラン石の量比が全体的に高く、浅間火山の影響が強い大宮台地では、浅間火山の活動が活発となる立川ローム層上半部以上では斜方輝石の量比が高くなる。本報告でも、試料番号10以上のローム層に斜方輝石の多い重鉱物組成が認められるが、これは調査地の位置するつくば稲敷台地の火山との地理的位置関係が大宮台地と共通することによると考えることができる。すなわち、ATよりも上位の立川ローム層上半部の形成時期には、浅間火山の噴出物の影響が相対的に高くなったことを示していると考

えられるのである。

重鉱物組成の層位的変化による立川ローム層の層序対比は、多数の分析事例のある武蔵野台地において詳細な対比が可能となった(矢作・橋本 2013)。つくば稲敷台地では分析事例は少ないものの、カンラン石の多い立川ローム層下半部では、武蔵野台地の重鉱物組成とほぼ共通する傾向が認められ、斜方輝石の多い上半部でもカンラン石の量比の変化は、少ないながらも共通した傾向が見出せる。これは、ATやUGといった武蔵野台地の対比指標と共通する指標が得られていることにより確認できる。

矢作・橋本(2012)が示した、武蔵野台地の立川ローム層における重鉱物組成による対比指標は、上位より順に、Ⅲ層下部～Ⅳ層上部のカンラン石の極大層準、Ⅴ層直上および直下の輝石の極大層準、Ⅶ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅸ層中部～下部のカンラン石の極小層準、Ⅹ層における斜方輝石と単斜輝石の量比の近似およびⅩ層のカンラン石の極大層準、ⅩⅠ層のカンラン石の極小層準となる。これらのうち、Ⅴ層上限の輝石の極大層準は、小林ほか(1971)における羽島の分析例以来多くの分析例で指摘されている。

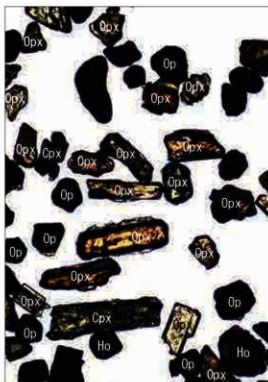
本地点では、上述したATおよびUGの降灰層準による標準層位との対比を考慮すると、以下の対比が考えられる。試料番号4のカンラン石のやや高い量比を示す層準は、武蔵野台地のⅢ層下部～Ⅳ層上部のカンラン石の極大層準に対比され、両輝石を合わせた割合の最も高い試料番号7は武蔵野台地のⅤ層直上の輝石の極大層準に対比される。また、試料番号13のカンラン石の極大層準は武蔵野台地のⅦ層下部のカンラン石の極大層準に対比され、試料番号15のカンラン石の極小層準は武蔵野台地のⅨ層中部～下部のカンラン石の極小層準に対比される。さらに試料番号22のカンラン石が少なく、斜方輝石の多い重鉱物組成は、武蔵野台地のⅩⅠ層のカンラン石の極小層準に対比される可能性がある。

以上に述べた各指標の対比から、本地点の各層と武蔵野台地の標準層序との対比関係をまとめると以下の通りになる。本地点のⅢ層は、武蔵野台地のⅢ層にほぼ対比され(以下「本地点の」と「武蔵野台地の」は省略)、Ⅳ層の上部と中部までがⅣ層に、Ⅳ層下部とⅤ層上部がⅤ層に、Ⅴ層中部と下部がⅥ層に、Ⅵ層上部と中部がⅦ層に、Ⅶ層下部からⅦ層上部がⅧ層に、Ⅶ層中部からⅦ層中部がⅩ層に、Ⅶ層下部以下がⅩ層にそれぞれ対比されると考えられる。

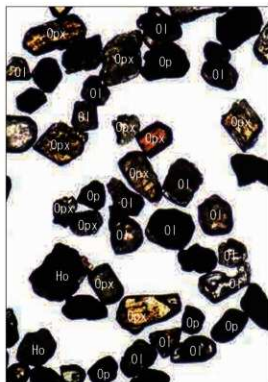
引用文献

- 青木おこり・入野智久・大場忠通 2008. 鹿島沖海底コア M001-2421 の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究, 47, 391-407.
- 早津賢治 1988. テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー-AT にまつわる議論に際して. 考古学研究, 24, 18-32.
- 池田見子・奥野 光・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995. 南九州. 給食カルデラ起源の大規模下層石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による 14 C 年代. 第四紀研究, 34, 377-379.
- 貝塚典平・小池一之・遠藤雅博・山崎晴雄・鈴木毅彦 2000. 日本の地形 4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会 349p.
- 小林建雄・小田勝久・羽島謙三・鈴木正男 1971. 野川先史時代遺跡の研究. 第四紀研究, 10, 231-252.
- 町田 洋・新井房夫 1976. 広域に分布する火山灰-給食 Tn 火山灰の発見とその意義-. 科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井 房夫 1992. 火山灰アトラス. 東京大学出版会 276p.
- 町田 洋・新井房夫 2003. 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会 206p.
- 松本英二・前田保夫・竹村慶二・西田史朗 1987. 給食 Tn 火山灰の 14C 年代. 第四紀研究, 26, 79-83.
- 宮入隆介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡 部 2001. 給食 Tn 火山灰の C-14 年代のクロスチェック (演習). 地球惑星科学関連学会合同大会予集編 (CD-ROM) 2001, Qm01.01.
- Miyairi, Y., Yoshida, K., Miyazaki, Y., Matsuzaki, H., Kaneoka, L. 2004. Improved 14C dating of a tephra layer (AT tephra, Japan) using AMS on selected organic fractions. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224, 555-559.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 俊彦 1993. 西国沖ピストンコア試料を用いた A T 火山灰噴出年代の再検討-タンデントロン加速器質量分析法による浮遊性火山灰の 14C 年代-. 地質学雑誌, 99, 787-798.
- Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Ramsey, C.B., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K., Danbara, T., Suigetsu 2006 Project Members. 2013. Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive. Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific paleoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews, 67, 121-137.
- 鈴木毅彦 1995. いわゆる火山灰土(ローム)の成因に関する一考察-中部・関東に分布する火山灰土の層序分布-. 火山, 40, 167-176.
- 矢作健二・橋本真紀夫 2012. 重鉱物組成と火山ガラス比による武蔵野台地の立川ローム層序対比. 新西部文化, 27, 18.
- 山崎晴雄 1978. 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, 231-246.

図版1 重鉱物・火山ガラス



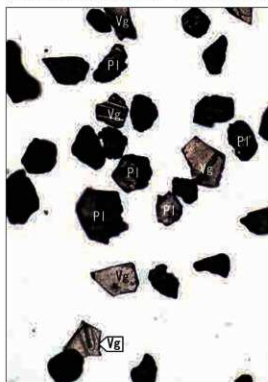
1. 重鉱物(平成30年度テストビットⅢ層:3)



2. 重鉱物(平成30年度テストビットⅦ層:18)



3. U6の火山ガラス(平成30年度テストビットⅢ層:3)



4. ATの火山ガラス(平成30年度テストビットⅤ層:11)

Ol: カンラン石. Opx: 斜方輝石. Cpx: 単斜輝石. Ho: 角閃石. Op: 不透明鉱物.
Vg: 火山ガラス. Pl: 斜長石

II 下河原崎谷中台遺跡炭化物集中地点出土炭化材の樹種と年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は、旧石器時代と思われる炭化物 5 点である。試料の詳細は樹種同定結果に示す。年代測定は No.1 と No.2 について実施する。樹種同定は 5 点全てについて行った。

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材の周囲を削り落として土などの不純物を取り除き、50mg 程度に調整する。削り落とした残渣は、樹種同定に用いる。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、鉄粉を触媒としたグラファイト化を行なったあと、鉄粉とグラファイトの混合物を使ってターゲットを作成し、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) を測定する。AMS 測定時に、米国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX- II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。 $\delta^{13}C$ は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.2020) である。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて木口 (横断面)・柃目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 割断面を作成する。双眼実体顕微鏡、電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表 1、図 1 に示す。保存状態は比較的良く、全ての試料で測定に必要なグラファイトが得られている。

同位体補正を行った値は、No.1 が $20670 \pm 80BP$ 、No.2 が $22260 \pm 70BP$ である。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (14C の半減期 5730 $\pm$ 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データベースは、IntCal20 (Reimer et al.2020) を用いる。2 σ の値は、No.1 が 25148 ~ 24645calBP、No.2 が 26911 ~ 26339calBP、である。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料 番号	性状	分析 方法	測定年代 BP	暦年校正 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正年代			Code	No.
						年代値		確率 %		
No.1	炭化材 マツ属	AAA (1M)	20670 $\pm$ 80	20667 $\pm$ 75	-27.91 $\pm$ 0.24	σ	25065 - 24785	calBP 68.3	pal- 14086	YU- 16038
						2σ	25148 - 24645	calBP 95.4		
						σ	26851 - 26672	calBP 38.4		
						2σ	26500 - 26373	calBP 29.8		
No.2	炭化材 広葉樹?	AAA (1M)	22260 $\pm$ 70	22259 $\pm$ 70	-30.13 $\pm$ 0.40	σ	26911 - 26580	calBP 55.5	pal- 14087	YU- 16039
						2σ	26562 - 26339	calBP 40.0		
						σ	26500 - 26373	calBP 29.8		
						2σ	26911 - 26580	calBP 55.5		

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。
 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。
 4) AAA は酸-アルカリ-酸処理を示す。
 5) 暦年の計算には、Oxcal4.4、校正曲線は IntCal20 を使用。
 6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
 7) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である。

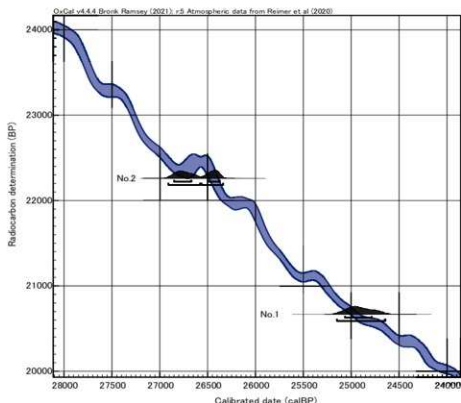


図1. 暦年校正結果

(2) 樹種同定

結果は、No.1、No.3、No.5 がマツ属、No.2 はほぼ同定不能だが広葉樹の可能性あり、No.4 は木材組織がほとんどみられず同定不能である (表2)。以下に検出された種類の木材解剖学的特徴を記す。

・マツ属 (Pinus) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂

表2. 樹種同定結果

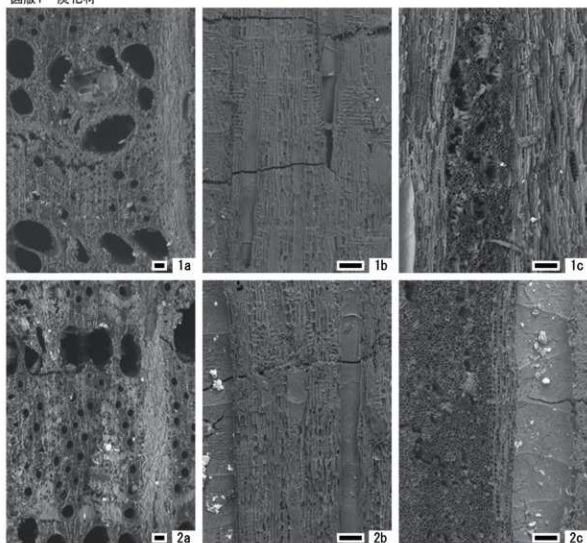
番号	遺構番号	遺物番号	樹種
1	第12号石器集中地点	サンプル9	マツ属
2	第12号石器集中地点	サンプル13	広葉樹?
3		サンプル2	マツ属
4		サンプル5	同定不能
5		サンプル6	マツ属

道が晩材部に認められる。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～15細胞高。放射組織の中にエビセリウム細胞に囲まれた樹脂道がみられる。

4 考察

炭化材の年代値を暦年でみると、25,000～26,000年前に相当する。この時期は最終氷期の中でも最も寒冷な時期で、現在の本州では標高2,000m付近に生育する亜高山帯針葉樹林が低地に分布していたことが、花粉分析の結果などによってわかっている。今回マツ属が多いが、マツ属は亜高山帯針葉樹林を構成する植物の一つであることから、当時生育していたものに由来すると思われる。

図版1 炭化材



1. コナラ亜属クスギ節 (SI-86 No. 21)
2. コナラ亜属クスギ節 (SI-86 No. 56)

a: 木口 b: 柃目 c: 板目
スケールは100 μ m

1 試料

SI37 より出土した No26 勾玉 1 点である。肉眼では緑色を呈する。

2 分析方法

(1) 蛍光 X 線分析

蛍光 X 線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であり、エネルギー分散型装置は、試料を破壊せずに元素情報を引き出せるため多用される調査法である。表面分析法であるために、遺物表面の状況によって結果が大きく左右されるが、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は遺物の材質に関する情報を得るための有効な手法となる。

調査には、日本電子（株）製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（JSX-1000S）を利用した。測定条件は管電圧 50kV、管電流（自動）、測定時間 240 秒（live time）、コリメーター 2mm φ、真空雰囲気とした。

取得した特性 X 線スペクトルは元素定性を実施した後、成分形態を酸化物とした条件で FP 法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いたスタンダードレス分析によって相対含有率（質量%）を求めたが、算出された結果はあくまでも半定量的なものであることに留意されたい。

(2) 顕微鏡観察

全長、全幅、厚さ、孔径をデジタルノギスで計測し、電子天秤で重量を計測する。

カルツァイスマイクロスコピー株式会社製ズーム式実体顕微鏡 Stemi2000C を使用し、透過照明と落射照明で表面および内部の構造について観察および写真撮影を行った。撮影した写真を図版 1 に示す。

勾玉の部位名称は、瀧音（2019）にしたがう。勾玉の左右は、挟りが施されている面を正面として、孔が空けられている面を側面とする。孔に紐を通して実際に身に着けている状態を基準として設定する。

3 結果

(1) 蛍光 X 線分析

蛍光 X 線分析結果を図 2 に示す。なお、本調査では網目形成酸化物である SiO_2 や、修飾酸化物となり得る Na_2O 、 MgO 、 K_2O 、 CaO 、また中間酸化物となり得る Al_2O_3 等について一応の定量化は行っているものの、基本的に表面風化層の除去を行っていないことから、本来の材質を反映した結果とは成り得ていないことに注意する必要がある。

FP 定量による化学組成によれば、勾玉は主に SiO_2 、 Al_2O_3 、 CaO 、 MgO 、 Na_2O 、 K_2O などの酸化物によって構成される。網目形成酸化物の SiO_2 は約 73%、中間酸化物の Al_2O_3 は約 3% で、修飾酸化物である CaO は約 10%、 MgO 、 Na_2O 、 K_2O は 3～4% である。 Fe_2O_3 は 1% 程度で、 CuO も認められるが 0.02% と極微量である。

(2) 顕微鏡観察

全長 18.41mm、全幅 10.32mm、厚さ 5.38mm、孔径 1.55mm、重量 1.09g を計る。

勾玉表面に突起はなく、C 字状を示す勾玉である。実体顕微鏡写真撮影を行った箇所を赤枠で示す（図版 2）。

左側面および右側面には風化による凹凸やパーカッションマークが認められる。パーカッションマークは、三日月状～貝殻断口状を示す。全体的に透明度は低く、勾玉内部の気泡には、観察できない。

勾玉右側面は、頭の孔周辺に多数の気泡が集中している箇所が観察される。気泡の径は概ね揃っているが、まれに大径を示す（図版14）。これらの気泡は円磨により断ち切られているものが多く、凹状を示す。気泡は円状を示し、引き伸ばされた形状を示すものや、配列するものは認められない。勾玉左側面には、挟れ部の尾付近に、引き伸ばされた気泡、もしくは連結状の気泡と推定される構造が確認される。頭の孔周辺には右側面のような気泡が集中して分布する状況は認められない。

4 考察

(1) ガラス成分

ガラスは珪酸原料に融剤および着色剤を調合し、溶融・冷却という過程を経て製品となる。山崎（1990）によれば古代のガラス製品は融剤に主として鉛を用いた鉛ガラスとナトリウム・カリウム等アルカリ元素を用いたアリカリ石灰ガラスに大別される。また、近年では肥塚（1995, 1999, 2001）による詳細な検討がなされており、融剤の種類によってアルカリ珪酸塩ガラス、鉛珪酸塩ガラス、アルカリ鉛珪酸塩ガラスに大別しているほか、構成酸化物の種類と量によってアルカリ珪酸塩ガラスを K_2O-SiO_2 系、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系、 $K_2O-CaO-SiO_2$ 系、 $Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系、 $(Na_2O/K_2O)-CaO-SiO_2$ 系に、鉛珪酸塩ガラスを $PbO-SiO_2$ 系、 $PbO-BaO-SiO_2$ 系に、アルカリ鉛珪酸塩ガラスを $K_2O-PbO-SiO_2$ 系としている。肥塚（1999）はさらに、ガラスの風化表面と内部新鮮面を調査することで風化による成分変動を検討し、 K_2O-SiO_2 系や $K_2O-PbO-SiO_2$ 系では風化表面で K_2O が減少し、 SiO_2 、 Al_2O_3 の増加（ K_2O-SiO_2 系）ないし PbO の増加（ $K_2O-PbO-SiO_2$ 系）する傾向が、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系や $Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系では風化表面で Na_2O が減少し、 SiO_2 、 Al_2O_3 が増加する傾向があることを指摘した。蛍光 X 線分析による非破壊表面分析では、構成酸化物の定量値が半定量的な値であることに加え、ガラス表面の風化変質による化学組成の変化も無視できないために詳細な分類まで言及することは難しいが、勾玉の基礎ガラスの材質はアルカリ珪酸塩ガラスであることが確認される。風化によるためか、分類の鍵となる修飾酸化物の Na_2O と K_2O のどちらもが約 4% と低値であるが、 MgO が約 3% 認められていることを踏まえれば、アルカリ源に植物灰を用いたソーダ石灰ガラス（ $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系）である可能性がある。一方、勾玉の淡緑色の発色に関しては、 CuO は 0.02% と極微量で、 Co については不検出であることを踏まえると、鉄の還元発色の可能性が挙げられよう。風化の影響を受けている場合でも外観上の変化をあまり伴わないアルカリ珪酸塩ガラスでは、風化による侵食をどの程度受けているのか推し量ることは難しい。材質の詳細について確証を得るには内部の新鮮面における化学組成の把握が要となる。

(2) 制作技法

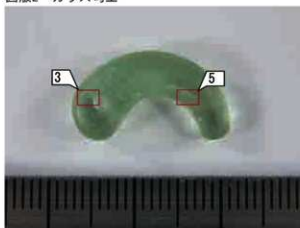
ガラス製勾玉は、その製作技法の違いから、古墳時代のガラス勾玉を鑄型技法による第Ⅰ群、方法の不分明な第Ⅱ群、巻き技法の第Ⅲ群に分類されている（福島 2006）。

Ⅰ群：鑄型技法。ガラス製勾玉の特徴は、内部に含まれる微小気泡が充溢して、いかなる方向にも引っ張られていない。また、表面は平滑な光沢面で、気泡が断ち切られた痕跡がない。

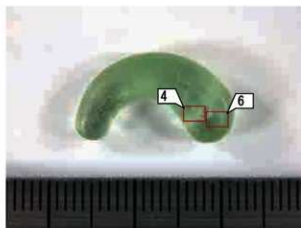
Ⅱ群：方法不明。頭部から尻部に至る気泡列に特徴があり、微小気泡が直線状に連鎖している。引き伸ばしの痕跡と推定されている。圧痕あり。ガラスを加熱させて軟化させて加工する方法と円磨という攻玉の方法を合わせて作られている。

Ⅲ群：巻き技法。気泡や脈理が孔の周囲を取り巻いている。勾玉の頭部となる丸玉を作り、この一部を引き伸ばして尾が作られた。円磨による仕上げは施されていない。

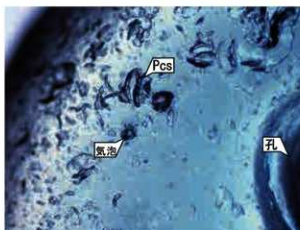
図版2 ガラス勾玉



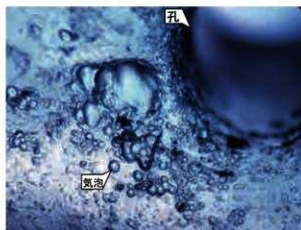
1. SI37 No.26 勾玉 左側面



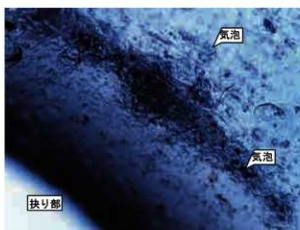
2. SI37 No.26 勾玉 右側面



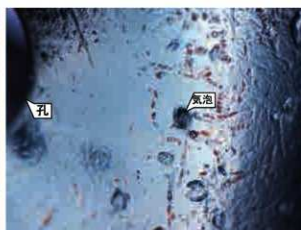
3. 左側面 孔 気泡とパーカッションマーク(Pcs)



4. 右側面 孔周囲に集中する気泡



5. 左側面 胴から尾の挟り部側 連結した気泡
写真撮影を行った箇所を赤枠で示す。



6. 右側面 孔 気泡

1-3~6
0.5mm
×4.0

勾玉左側面に観察される内部の気泡は、挟り部付近に直線状に連結している箇所が認められる。引き伸ばしの痕跡と推測される。勾玉右側面の孔周辺には気泡が断ち切られて凹状を示し、研磨された痕跡とみ

られる。勾玉内部の微小気泡の充満するⅠ群の特徴や、孔の周囲を気泡や脈理が取り巻くⅢ群の特徴が、いずれも認められないことも考慮すると、Ⅱ群の方法不明の製作技法で作られた可能性が高い。

引用文献

- Bronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51:307-360.
- 福島雅夫. 2006. 古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡. *考古学と自然科学*, 54, 53-68.
- 林 昭三. 1991. 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学本質科学研究所.
- 伊東隆夫. 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. *木材研究・資料* 31. 京都大学本質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫. 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. *木材研究・資料* 32. 京都大学本質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫. 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. *木材研究・資料* 33. 京都大学本質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫. 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. *木材研究・資料* 34. 京都大学本質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫. 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. *木材研究・資料* 35. 京都大学本質科学研究所 17-216.
- 肥塚隆保. 1995. 古代ガラスの材質. 古代に挑戦する自然科学. タバプロ, 94-108.
- 肥塚隆保. 1999. 出土遺物の材質調査 - 日本で出土した古代ガラスの研究 -. *理学電気ジャーナル*, 30, 1. 理学電気工業, 33-40.
- 肥塚隆保. 2001. 古代ガラスの材質と同位体比. 同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究. 国立歴史民俗博物館研究報告. 第86集. 財団法人歴史民俗博物館振興会, 233-268.
- Reimer P, Austin W, Bard E, Bayliss A, Blackwell P, Bronk Ramsey C, Bunz M, Cheng H, Edwards R, Friedrich M, Grootes P, Guilderson T, Hajdas L, Heaton T, Hogg A, Hughes K, Kromer B, Manning S, Muscheler R, Palmer J, Pearson C, van der Plicht J, Reimer R, Richards D, Scott E, Southon J, Turney C, Wacker L, Adolphi F, Barnetson U, Capasso M, Fahrni S, Fogtmann-Schulz A, Friedrich R, Koehler P, Kudsk S, Miyake F, Olsen J, Reinig F, Sakamoto M, Sookdeo A, & Talamo S. 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kyr BP). *Radiocarbon*, 62:1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinzl I. and Gasson P.E. (編) 2006. 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野達三・安部 久・内海幸弘 (日本語版監修). 海青社. 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinzl I. and Gasson P.E. (2006) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫. 1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.
- Stuiver M., & Polach A.H. 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 蔵書 大. 2019. 原始・古代日本における勾玉の研究. 早稲田大学査読学位論文. 222p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998. 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修). 海青社. 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1998) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山崎一雄. 1990. 日本出土のガラスの化学的研究. 古文化財の科学. 思文閣出版, 274-300.

Ⅳ 下河原崎谷中台遺跡出土炭化材の樹種同定

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、古墳時代の竪穴建物跡から出土した炭化材の樹種同定を行い、当時の木材利用について検討する。

1 試料

分析試料は、古墳時代の竪穴建物跡 (SI86) から出土した炭化材 20 点である。いずれも炭化により小片の割材となっているが、元は 1 個体であった可能性が高い。

2 分析方法

各試料を観察した結果、各試料の小片の割材は、基本的に同一の樹種であった。そこで、保存状態の良い試料を一片選択し、剃刀を用いて木口 (横断面)・柁目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面を作成する。双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料で観察された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を、日本産木材の組織配列については、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

3 結果

結果を表 1 に示す。試料はすべてコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。以下に同定された樹種の特徴を述べる。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1～3 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって

て径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

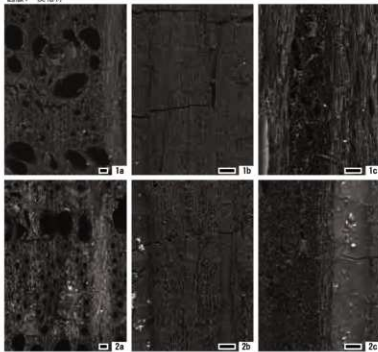
4 考察

試料はすべてコナラ属コナラ亜属クスギ節である。木材の性質は、やや重硬で強度があるため、建築材や器具材に用いられる。一方、良質な薪炭材としても利用される。クスギは里山林の主要な構成種であるほか、河川沿いにも多く分布する。河川沿いの台地に立地する本遺跡では、近くで入手しやすい樹種であったと考えられ、建築材等様々な用途で使われたことが推測される。さらに、クスギは成長が早く、萌芽による再生も早いので、継続的に木材を得ることができる点も、多く使われた理由の一つと思われる。伊東・山田編 (2012) の木材データベースによると、茨城県内では古墳時代以降の住居跡から多くのクスギ節の炭化材が出土している。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学本質科学研究所。
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学本質科学研究所, 81-181。
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学本質科学研究所, 66-176。
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学本質科学研究所, 83-201。
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学本質科学研究所, 30-166。
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学本質科学研究所, 47-216。
伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海育社, A49p。
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 雄三・安部 久・内海 孝弘 (日本語版監修), 海育社, 70p。[Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]。
島地 謙・伊東隆夫, 1982, 国産木材組織, 地球社, 176p。
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1908, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海育社, 122p。[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]。

図版1 炭化材



1. コナラ属クスギ節 (SI-86 No. 21)
2. コナラ属クスギ節 (SI-86 No. 56)

a: 木口 b: 板目 c: 板目
スケールは100 μm

茨城県つくば市下河原崎高山遺跡第1号火葬墓では、平安時代の焼より焼成人骨が出土した。焼は、上部が破損した状態で検出され、内部には暗褐色土と焼成人骨が混在して堆積していた。焼の内容物は一括して取り上げられ、暗褐色土と焼成人骨が混在した状態で当館へ搬入された。

内容物は、9.5mm、4.0mm、2.0mmの篩を用い、「大破片」（9.5mm以上）、「中破片」（4.0mm～9.5mm）、「小破片」（2.0～4.0mm）と暗褐色土に分別した後、重品の測定と残存部位の同定・記録を行った。なお20mmの篩を通過した焼成人骨片は、暗褐色土と選り分けることが困難であったため、重量の測定は行っていない。以下、焼成人骨の観察所見を記す。

総重量は142.1gで、その内訳は大破片29.3g、中破片52.1g、小破片60.7gである。焼成を受けた成人骨1個体分は、概ね約900gから約4,000gとされるが（Ubelaker2009）、今回出土した焼成人骨はこの1個体分の重量を大きく下回る。もっとも、前述のように遺構検出時には焼の上部が破損しており、埋葬時に焼内に納められた焼成人骨の全てが残存しているかどうかは不明である。

最も大きな破片は長さ3.5cm程度で、大破片は2～3cmの破片が主体である。頭蓋冠、上顎または下顎の歯槽骨、肋骨、四肢骨と思しき破片が、それぞれ数点ずつ確認された。明らかな部位の重複は認められず、最小個体数は1個体と推定される。死亡年齢と性別は、同定可能な部位が少なく不明である。

骨片の色調は、概ね白色ないしは灰白色を呈するが、暗灰色もごく一部で認められる。骨の色調は、焼成の進行とともに変化し、初期段階では黄色、有機物の炭化が進む段階（600度程度）では黒色ないしは暗灰色、炭化物の燃焼が進む段階（800～1,000度程度）では明灰色ないしは白色を呈する傾向がある（Walker et al. 2008）。したがって本個体は、全体としては骨に含まれる有機物が炭化を経て十分に燃焼する程度にまで、比較的高温で焼成を受けたと推定される。

なお焼成人骨は、国立科学博物館人類研究部が保管している。

参考文献

- Ubelaker, D. H. 2009. The forensic evaluation of burned skeletal remains: A synthesis. *Forensic Science International*, 183 (1-3) : pp.1-5.
Walker, P. L., Miller, K. W. P., & Richman, R. 2008. Time, temperature, and oxygen availability: An experimental study of the effects of environmental conditions on the color and organic content of cremated bone. In C. W. Schmidt & S. A. Symes (Eds.), *The Analysis of Burned Human Remains*. San Diego: Academic Press, pp.129-135.

写 真 図 版

下河原崎谷中台遺跡

下河原崎高山遺跡

下河原崎高山古墳群



下河原崎谷中台遺跡 平成30年度石器集中地点調査状況

PL1



遺跡遠景（南から）



平成30年度北部調査区全景（北から）



平成30年度南部調査区全景（北東から）



令和2年度調査区全景（南西から）

PL3



第Ⅵ号石器集中地点 (SS12) 石器出土状況 (南東から)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 石器出土状況 (東から)

PL4



第1号テストピット



第2号テストピット



第Ⅲ号石器集中地点 (SS8) 石器出土状況



第Ⅳ号石器集中地点 (SS11) 石器出土状況



第Ⅴ号石器集中地点 (SS4) 石器出土状況



第Ⅴ号石器集中地点 (SS5) 石器出土状況



第Ⅴ号石器集中地点 (SS4) 土層



第Ⅴ号石器集中地点 (SS5) 土層

PL5



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9) 石器出土状況



第Ⅵ号石器集中地点 (SS12) 石器出土状況 (1)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS12) 石器出土状況 (2)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS12) 石器出土状況 (3)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9) 土層 (1)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9) 土層 (2)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS12) 土層 (1)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS12) 土層 (2)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 石器出土状况 (1)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 石器出土状况 (2)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 石器出土状况 (3)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 石器出土状况 (4)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 土层 (1)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 土层 (2)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS16) 石器出土状况 (1)



第Ⅶ号石器集中地点 (SS16) 石器出土状况 (2)

PL7



第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 石器出土状況 (1)



第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 石器出土状況 (2)



第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 石器出土状況 (3)



第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 石器出土状況 (4)



第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 石器出土状況 (5)



第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 土層



第1号炭化物集中 (第Ⅵ号石器集中地点内)



第1号焼土集中地点 (第Ⅵ号石器集中地点内)



第85号竪穴建物跡 遺物出土状況



第85号竪穴建物跡



第89号竪穴建物跡



第90号竪穴建物跡 遺物出土状況(1)



第90号竪穴建物跡 遺物出土状況(2)



第95号竪穴建物跡



第7号陥し穴



第8号陥し穴

PL9



第12号陥し穴



第14号陥し穴



第8号炉穴



第19号炉穴 遺物出土状況



第21号炉穴



第22号炉穴 遺物出土状況(1)



第22号炉穴 遺物出土状況(2)



第22号炉穴 遺物出土状況(3)

PL10



第22号炉穴



第31号炉穴



第33号炉穴



第34号炉穴



第41号炉穴



第51号炉穴 遗物出土状况



第51・52号炉穴



第57号炉穴

PL11



炉穴F群



炉穴H群



炉穴I群



第448号土坑 遗物出土状况



第457号土坑



第460号土坑 遗物出土状况



第482号土坑 遗物出土状况



第484号土坑 遗物出土状况



第918号土坑



第918号土坑 遗物出土状况



第918号土坑

PL13



第1号竖穴建物跡 遺物出土状況



第1号竖穴建物跡



第2号竖穴建物跡



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況



第10号竖穴建物跡



第37号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第37号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第37号竖穴建物跡



第83号竖穴建物跡 遺物出土状況



第83号竖穴建物跡 貯蔵穴 遺物出土状況



第83号竖穴建物跡



第86号竖穴建物跡 遺物出土状況



第86号竖穴建物跡



第87号竖穴建物跡 遺物出土状況



第88号竖穴建物跡



第91号竖穴建物跡 遺物出土状況

PL15



第91号竖穴建物跡 竈 遺物出土状況(1)



第91号竖穴建物跡 竈 遺物出土状況(2)



第91号竖穴建物跡



第91号竖穴建物跡 竈



第92号竖穴建物跡 遺物出土状況



第93号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第93号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第93号竖穴建物跡 遺物出土状況(3)

PL16



第93号竖穴建物跡 貯蔵穴 遺物出土状況



第93号竖穴建物跡



第94号竖穴建物跡



第821号土坑



第823号竖土坑



第876号土坑 遺物出土状況



第1号遺物集中地点 遺物出土状況(1)



第1号遺物集中地点 遺物出土状況(2)

PL17



第84号竪穴建物跡 遺物出土状況



第84号竪穴建物跡



第84号竪穴建物跡 竈



第2・3号炭焼窯跡



第2号炭焼窯跡 煙道部 土層断面



第3号炭焼窯跡 炭化室



第826号土坑



第1・4号溝跡



第Ⅲ号石器集中地点（SS7・8）出土石器

PL19



第Ⅳ号石器集中地点



第Ⅴ号石器集中地点

第Ⅳ号石器集中地点 (SS11)・第Ⅴ号石器集中地点 (SS4・5・10) 出土石器

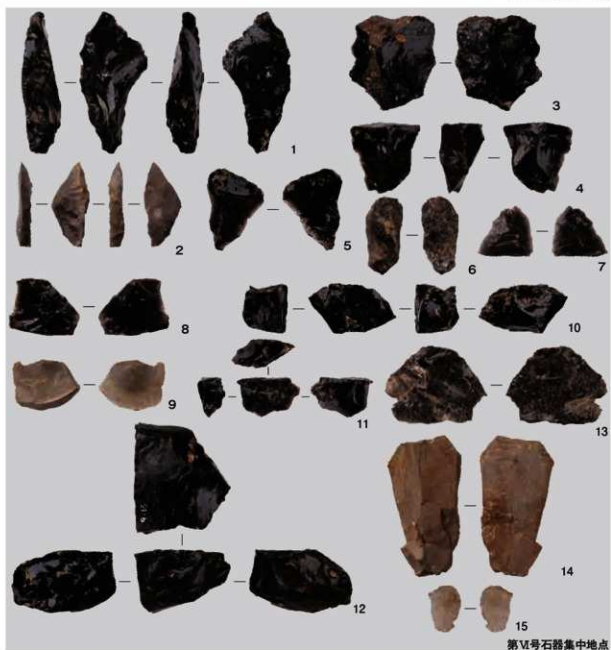


第V号石器集中地点 (SS4·5·10) 出土石器 (1)

PL21

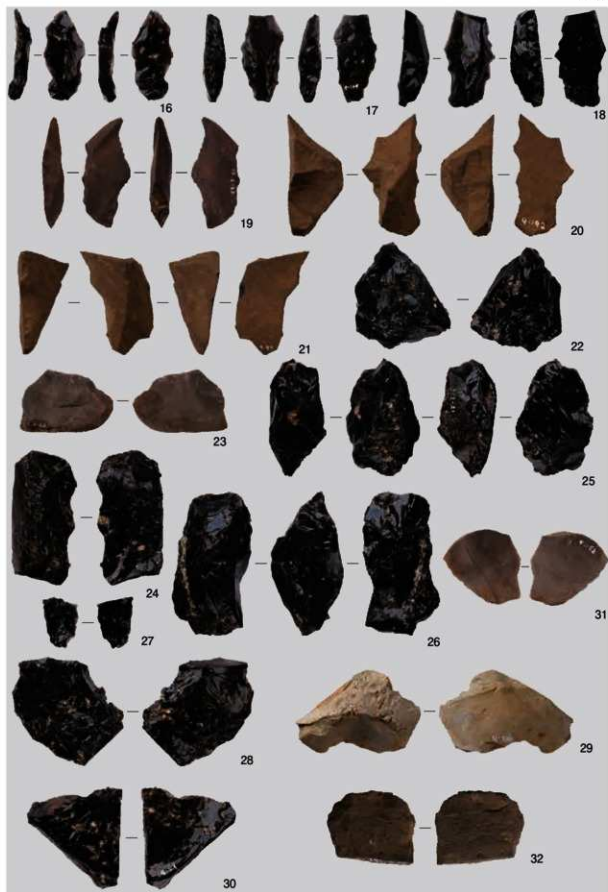


第V号石器集中地点 (SS4・5・10) 出土石器 (2)



第V号集中地点 (SS4・5・10) 出土石器・第VI号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器

PL23



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (1)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (2)

PL25



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (3)



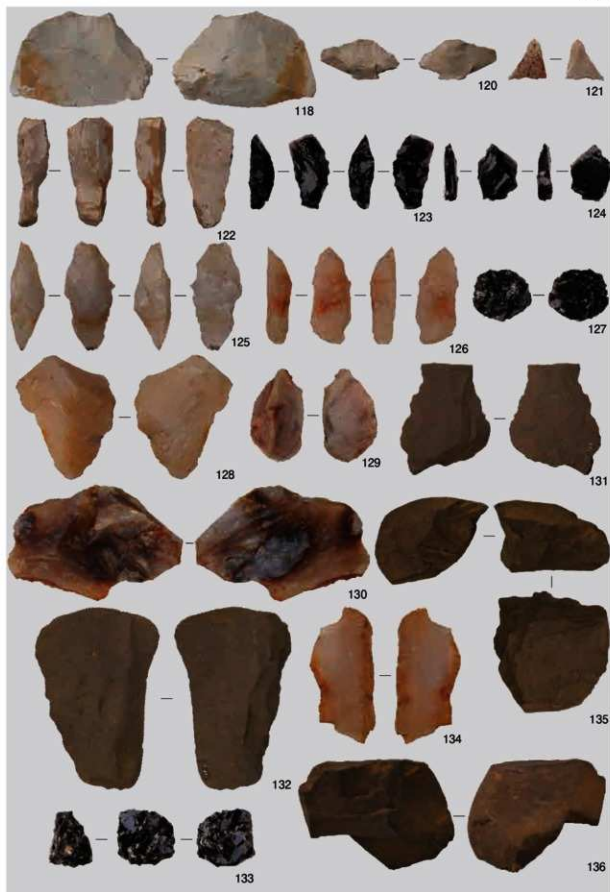
第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (4)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (5)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3 · 9 · 12 · 17 · 18) 出土石器 (6)

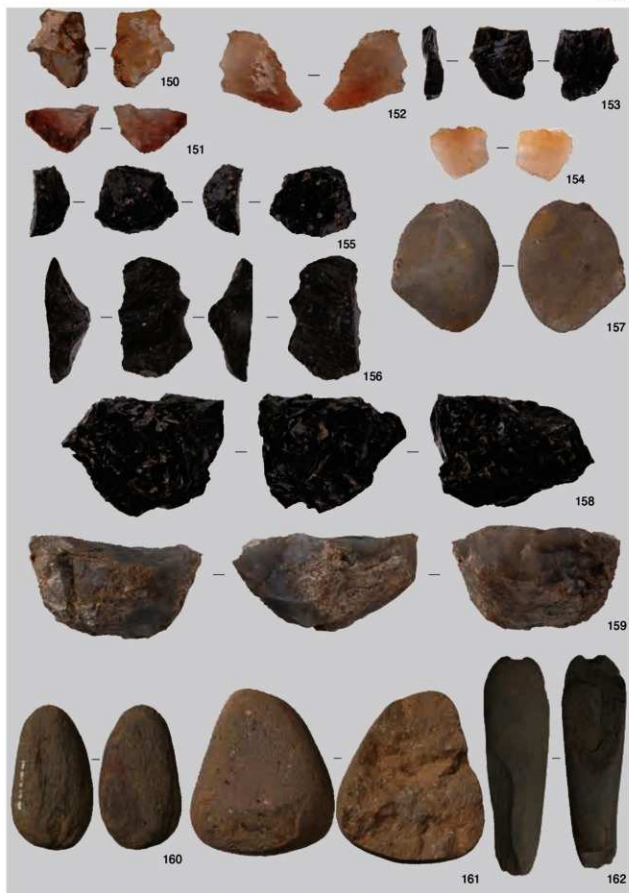


第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (7)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (8)

PL31



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (9)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (10)



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (11)

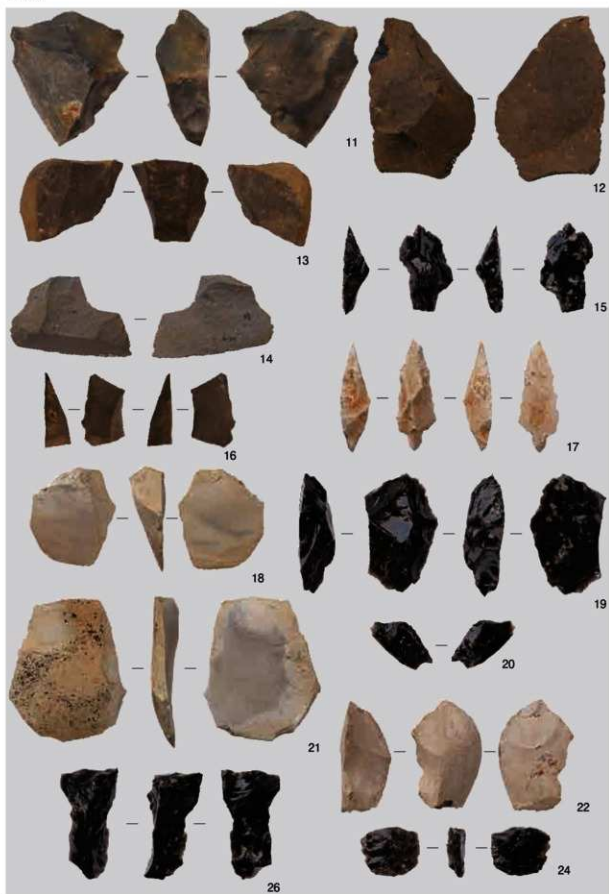


第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18) 出土石器 (12)

PL35



第Ⅵ号石器集中地点 (SS3・9・12・17・18)・第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 出土石器

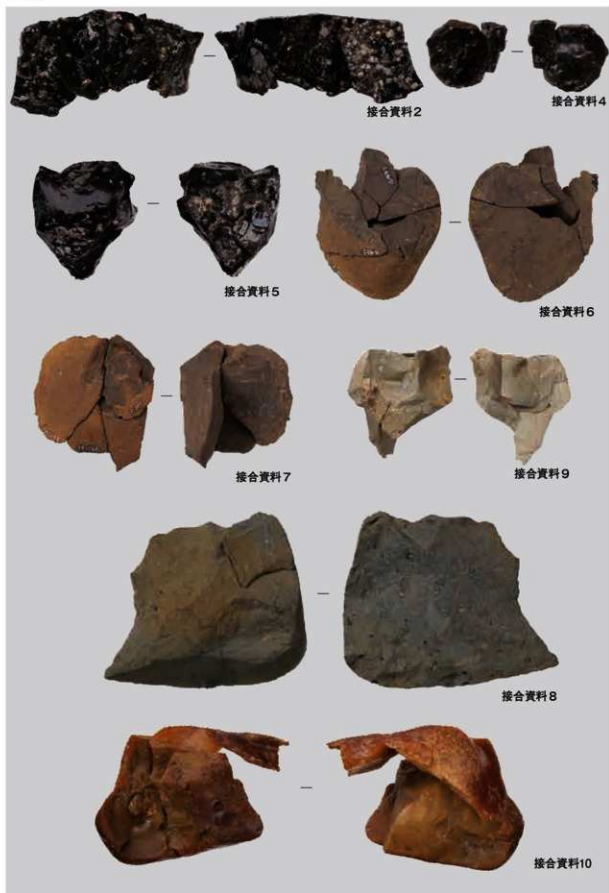


第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 出土石器 (1)

PL37



第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 出土石器 (2)

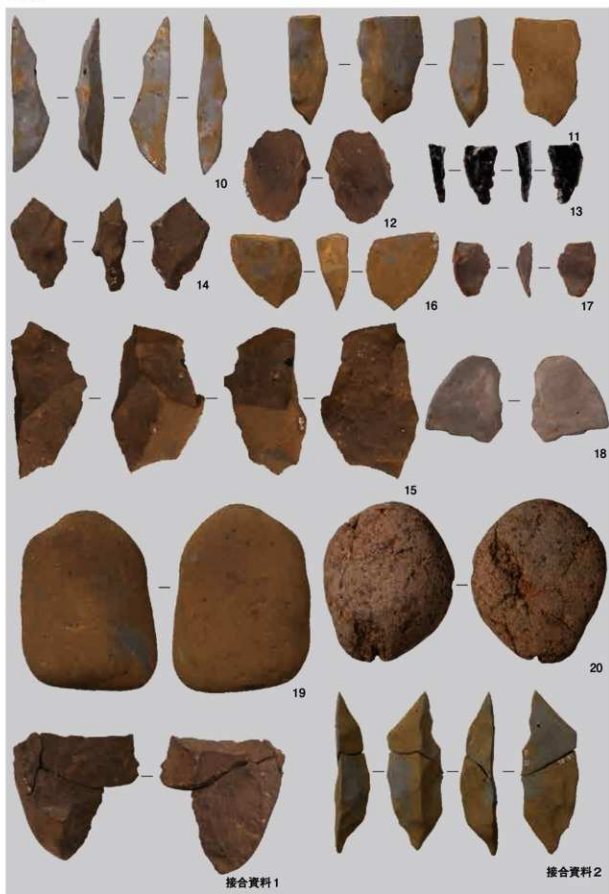


第Ⅶ号石器集中地点 (SS15) 出土石器 (3)

PL39

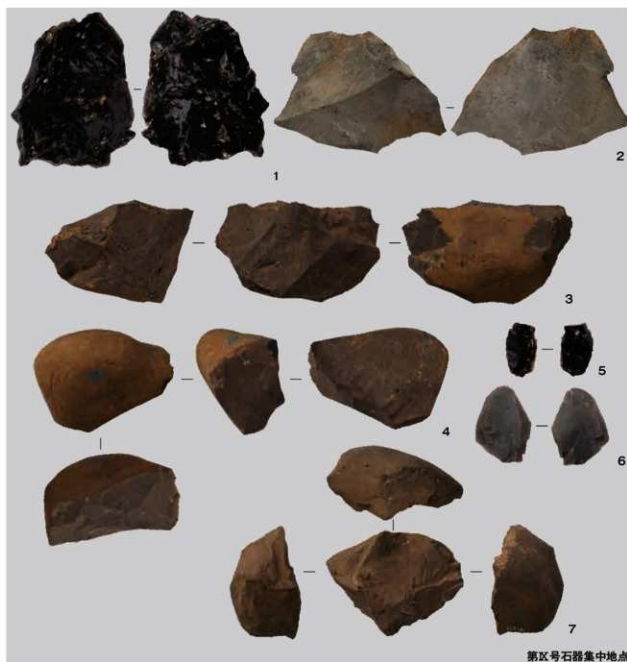


第Ⅷ号石器集中地点 (SS16) 出土石器 (1)

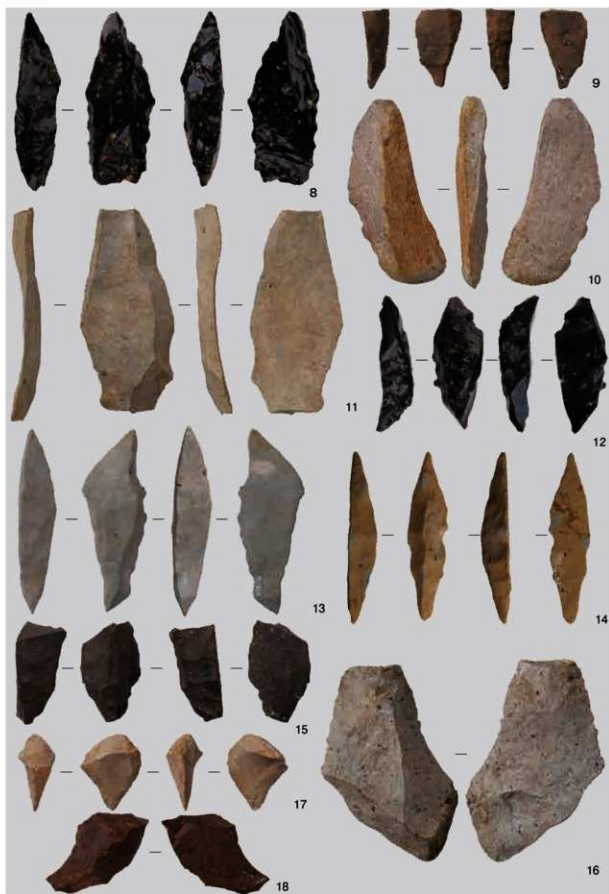


第Ⅷ号石器集中地点 (SS16) 出土石器 (2)

PL41

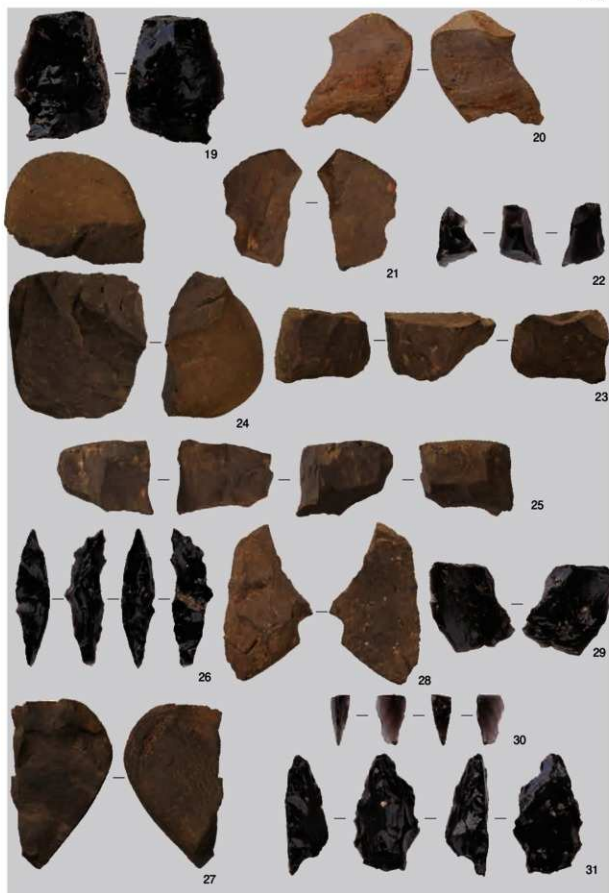


第Ⅷ号石器集中地点 (SS16)・第Ⅸ号石器集中地点 (SS13・14) 出土石器



第Ⅺ号石器集中地点 (SS13・14) 出土石器 (1)

PL43



第Ⅹ号石器集中地点 (SS13・14) 出土石器 (2)



第Ⅷ号石器集中地点 (SS13・14) 出土石器 (3)

PL45

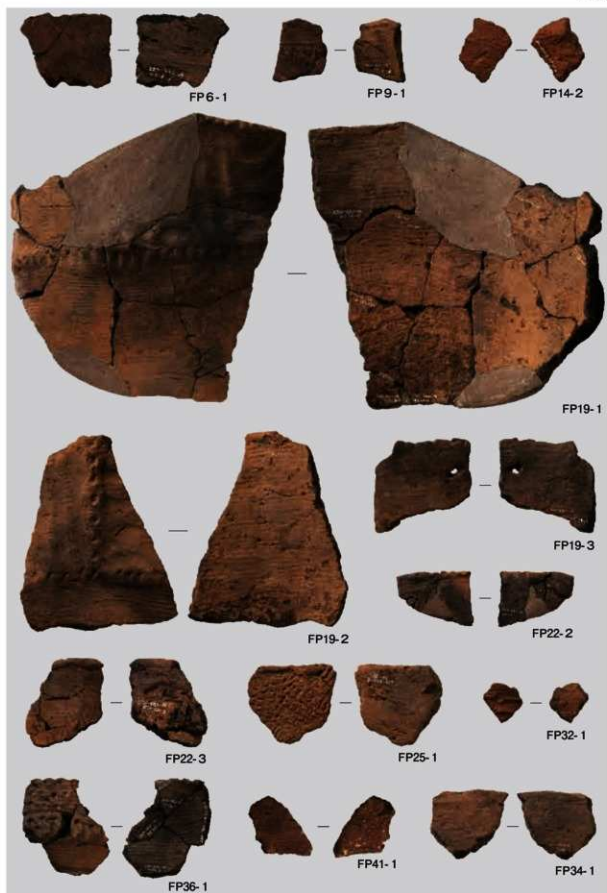


第Ⅹ号石器集中地点 (SS13・14) 出土石器 (4)

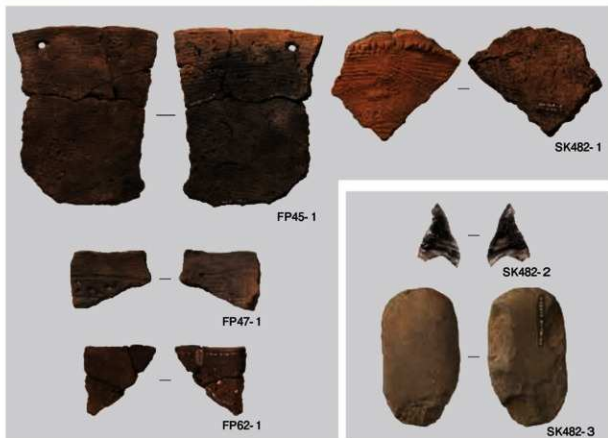


第85・89・90・95号竪穴建物跡、第7号陥し穴出土遺物

PL47

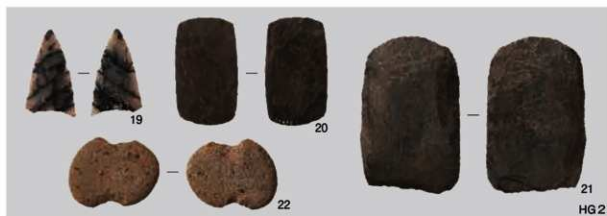
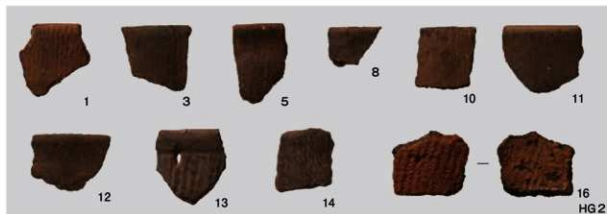
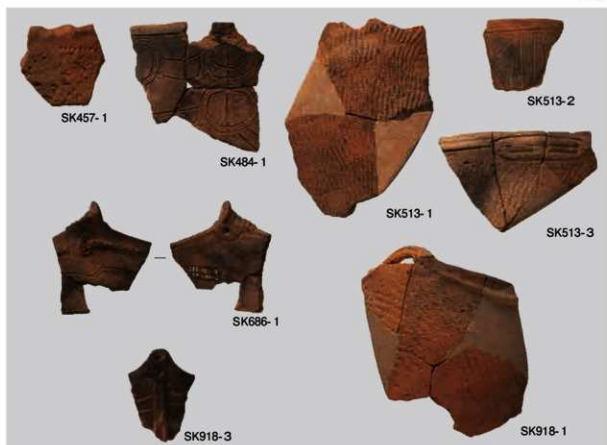


第6・9・14・19・22・25・32・34・36・41号炉穴跡出土遺物



第22・45・47・51・62号炉穴跡、第482号土坑出土遺物

PL49



第457・484・513・686・918号土坑、第2号遺物包含層出土遺物



第2・3号遺物包含層出土遺物

PL51



第1号竖穴建物跡出土土器



第10・37・83号竖穴建物跡出土遺物

PL53



第83・86・87号竪穴建物跡出土土器



第88・91号竖穴建物跡出土遺物

PL55

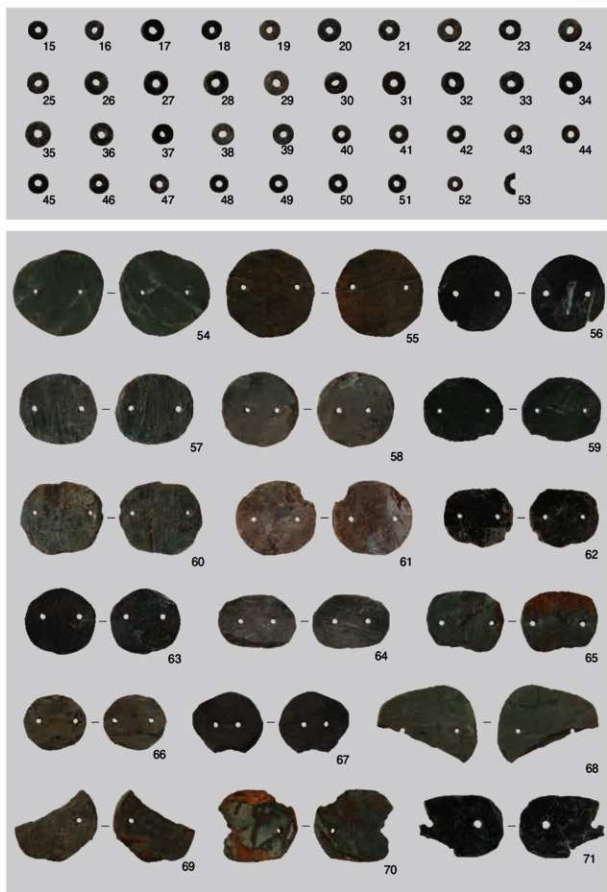


第91・92号竪穴建物跡出土遺物



第93号竖穴建物跡、第1号遺物集中地点出土遺物

PL57



第1号遺物集中地点出土遺物 (1)



第1号遺物集中地点出土遺物 (2)

PL59



SI 84-1



SI 84-2



SI 84-3



SY3-1



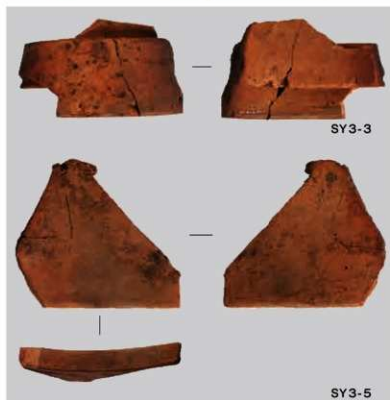
SI 84-4



SI 84-5



SY3-2



SY3-3

SY3-5



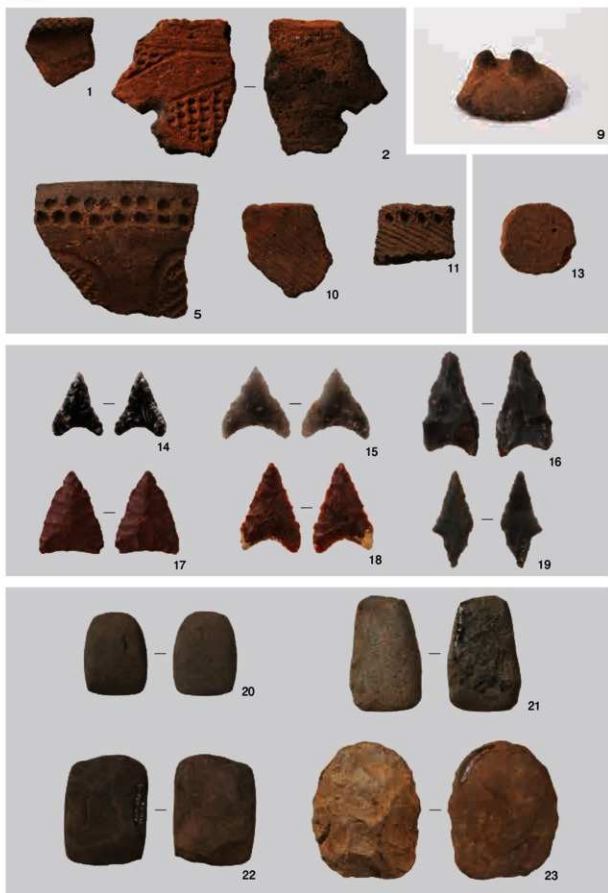
SY2-2



SD4-1

第84号竪穴建物跡、第3号炭焼窯跡、第4号溝跡出土遺物

PL60



遺構外出土遺物 (1)

PL61



遺構外出土遺物 (2)



平成30年度調査区遠景（南西から）



平成30年度調査区全景（北から）

PL63



令和5年度調査区全景（北東から）



第6号竪穴建物跡



第6号竪穴建物跡 炉



第50号土坑 遺物出土状況



第50号土坑

PL64



第1号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第1号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第1号竖穴建物跡



第1号竖穴建物跡 竈



第2号竖穴建物跡 遺物出土状況



第2号竖穴建物跡 竈 遺物出土状況



第2号竖穴建物跡 掘方



第3号竖穴建物跡 竈 遺物出土状況

PL65



第3号竖穴建物跡



第4号竖穴建物跡



第42号土坑 遺物出土状況



第42号土坑



第74号土坑 遺物出土状況



第74号土坑



第77号土坑 遺物出土状況



第77号土坑



第18号坑 周溝土層断面



第18号坑



第5号竖穴建物跡 遺物出土状況



第5号竖穴建物跡



第5号竖穴建物跡 竈



第1号火葬墓 遺物出土状況(1)



第1号火葬墓 遺物出土状況(2)



第135号土坑

PL67



第1・2・6号竪穴建物跡、第50号土坑出土遺物



第2・3号竖穴建物跡出土遺物

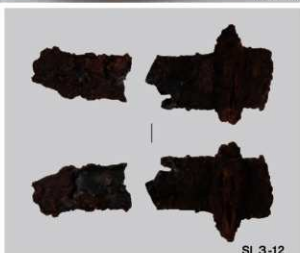
PL69



SI 3-10



SI 3-11



SI 3-12



SI 4-1



SK42-1



SK42-2



SI 4-2



SK74-1



SK77-1

第3・4号竪穴建物跡、第42・74・77号土坑出土遺物



SI 5-1



SI 5-2



第1号火葬墓-1



第1号火葬墓-2



遺構外



遺構外



遺構外

第5号竖穴建物跡、第1号火葬墓、遺構外出土遺物

録

[illegible]

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 11 Pro
	編集	Adobe InDesign 2024
	図版作成	Adobe Illustrator 2024
	写真調整	Adobe Photoshop 2024
	Scanning	EPSON DS-G20000
使用Font	OpenType	リュウミンPro L-KL、太ゴB101 Pro Bold 中ゴシックBBB Pro Medium
写真	線数	カラー210線以上
印刷	印刷所へは、Adobe InDesign 2024 でデータ入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第478集

つくば市

下河原崎谷中台遺跡3

下河原崎高山遺跡

下河原崎高山古墳群3

上河原崎・中西特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書8

下巻

令和7（2025）年 1月23日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅市1丁目2号11番

TEL 029-227-5505

